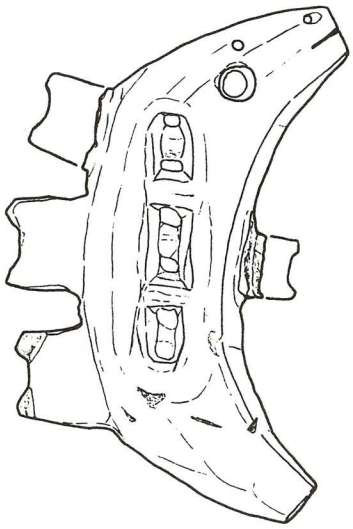
寝屋川市文化財資料　19

長保寺遺跡

ちょうぼじ

―（株）伊藤喜工作所開発に伴う埋蔵文化財発掘調査概要報告書―



1993・3

寝屋川市教育委員会

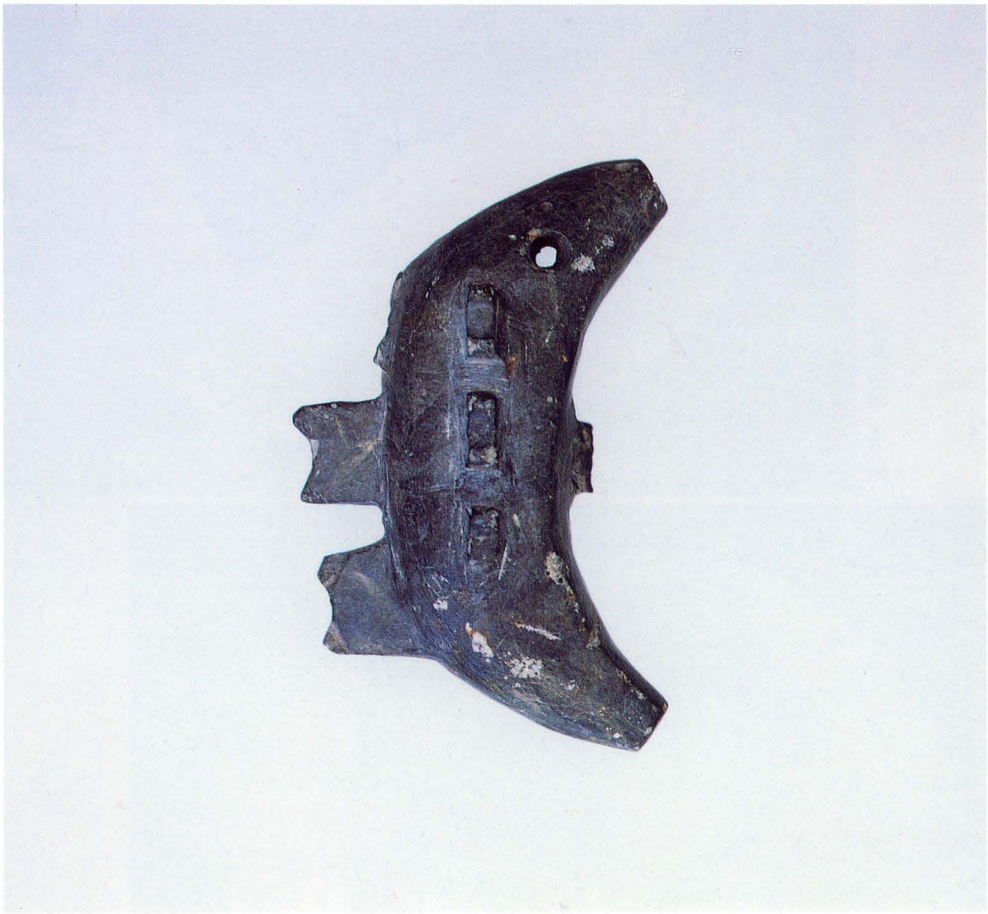
長保寺遺跡

ちょうぼじ

―（株）伊藤喜工作所開発に伴う埋蔵文化財発掘調査概要報告書―

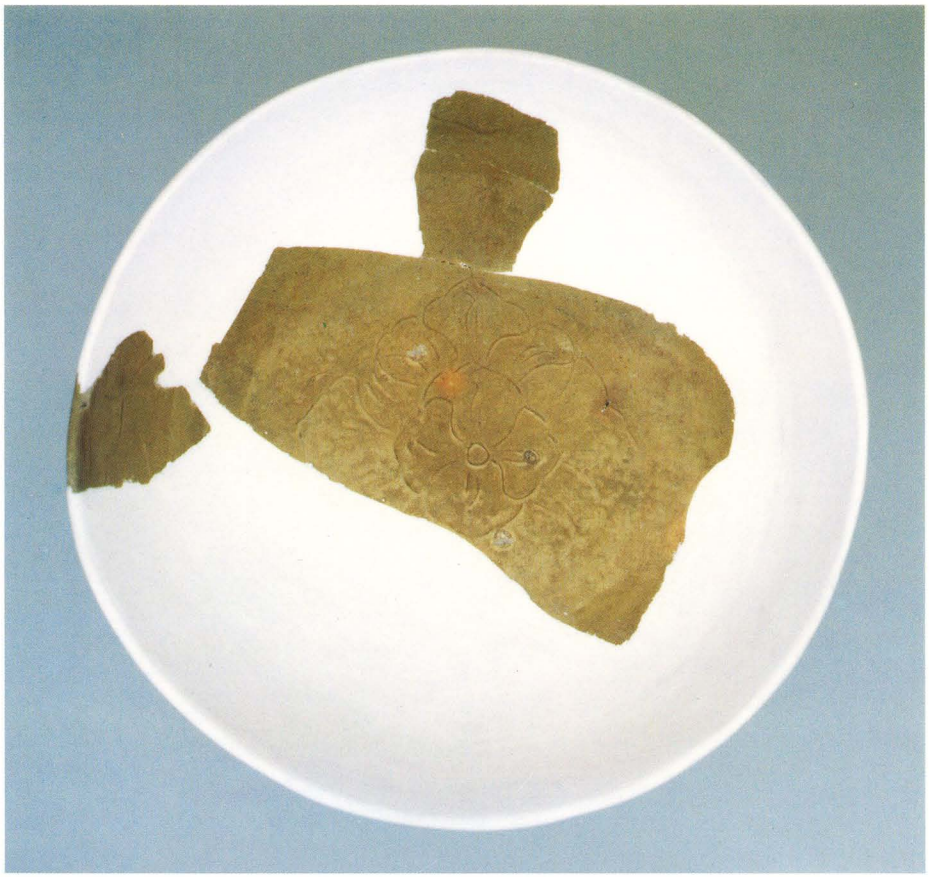
1993・3

寝屋川市教育委員会

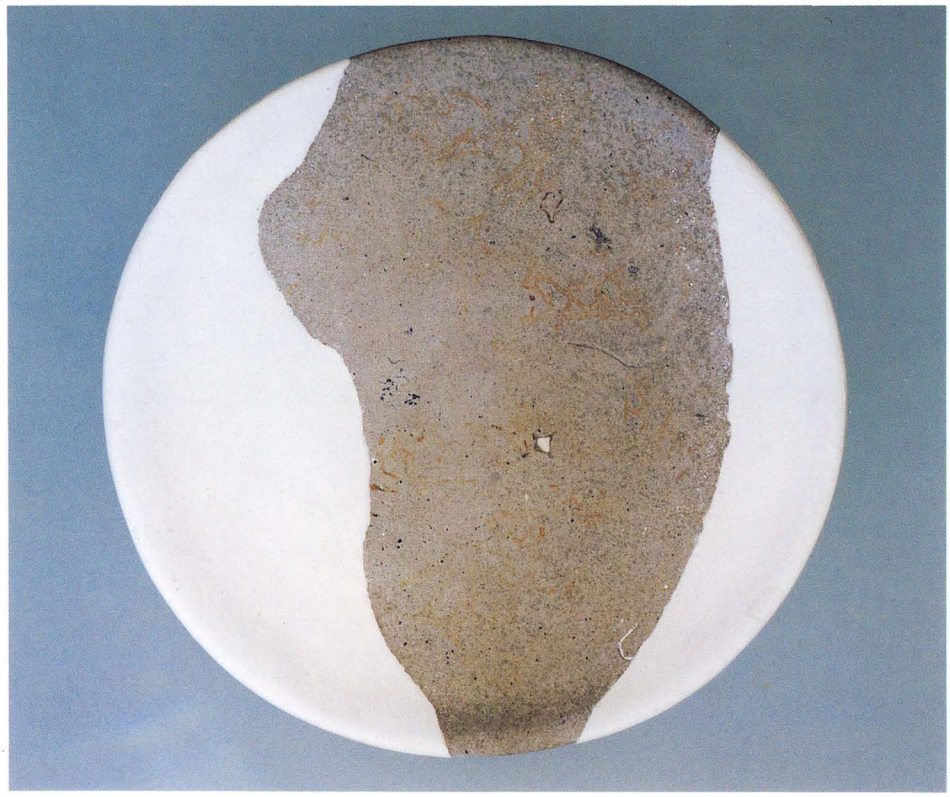


子持勾玉

巻頭図版2



緑釉陶器 花文椀



灰釉陶器 皿

用途不明土製品

南調査区第4遺構面土坑3

序

長保寺遺跡は、寝屋川市の昭栄町・出雲町に所在する縄文時代～室町時代の複合遺跡です。昭和63～平成２年の府道国守・黒原線建設に伴う大阪府教育委員会による発掘調査で古墳時代および平安時代末～室町時代の集落跡が見つかりました。特に、古代船の船体を再利用した古墳時代の井戸が発見され、大きな話題となりました。

今回の発掘調査は、大阪府教育委員会調査地の南東に隣接する株式会社伊藤喜工作所工場敷地内で行いました。平成３年５月～平成４年３月の発掘調査によってこれまでわかっていた古墳時代および中世以外に奈良時代・平安時代の集落が存在することが判明しました。また、子持勾玉・緑釉陶器花文椀といった珍しい遺物をはじめ古墳時代初頭の土器・最古級の移動式かまど・古墳時代および奈良時代の製塩土器など本市の歴史や当遺跡を解明するうえで重要な資料を得ることができました。

この報告書は平成３年度に実施した発掘調査と、引き続き平成４年度に実施した遺物整理の概要をまとめたものです。本書が寝屋川市の歴史を明らかにする基礎資料として活用され、歴史や文化財に対する理解を深める一助となれば望外のよろこびです。

なお、調査の実施にあたりましては発掘調査および遺物整理の費用負担をはじめ多大のご協力を賜わりました株式会社伊藤喜工作所をはじめ、関係機関・関係各位に厚くお礼申し上げます。また、発掘調査・遺物整理に携わった方々に深く感謝の意を表します。

寝屋川市教育委員会では、私達の祖先が残しあるいは受け継いできた様々な文化財の保存をはかり、私達の子供達に伝えていく所存ですので、今後とも本市の文化財保護行政にご理解・ご協力賜わりますようお願い申し上げます。

平成５年３月

寝屋川市教育委員会
教育長　　今　道　昭　次

例　言

1．本書は株式会社伊藤喜工作所（現・株式会社イトーキクレビオ）が計画した開発工事にともなって実施した、寝屋川市昭栄町所在の長保寺遺跡の発掘調査概要報告書である。

2．発掘調査および遺物整理は、株式会社伊藤喜工作所の依頼を受けて寝屋川市教育委員会が実施したものである。

3．現地調査および遺物整理に要した費用は、すべて株式会社伊藤喜工作所が負担した。

4．現地調査は、平成3年5月1日から開始し、平成4年3月31日に終了した。また、現地調査と併行して出土遺物の基礎的整理作業を実施した。

5．本書作成にかかる遺物等の整理作業は、平成4年5月17日から平成5年3月31日までの間、実施した。

6．現地調査・遺物整理は、寝屋川市教育委員会文化振興課文化財保護係濱田延充が担当した。調査の実施にあたっては文化財保護係塩山則之の協力を得たほか、調査事務等については文化財保護係職員のほか文化振興課企画係職員の協力を得た。

7．本書の編集・執筆は濱田が行った。また、本書に掲載した図面の作成・浄書は、濱田のほか調査補助員があたった。

8．現地調査および遺物整理にあたり、下記の方々にご指導・ご教示を賜わった。記して謝意を表します。（順不同・敬称略）

西口陽一・岡戸哲紀（財団法人大阪府埋蔵文化財協会）、大野薫・宮崎泰史（大阪府教育委員会）、橋本久和・宮崎康雄（高槻市立埋蔵文化財調査センター）、積山洋（財団法人大阪市文化財協会）、山中章（財団法人向日市埋蔵文化財調査センター）、奥田尚（八尾市立曙川小学校）、亀田修一（岡山理科大学）、中西克宏（財団法人東大阪市文化財協会）、野島稔（四條畷市教育委員会）、宇治田和生（財団法人枚方市文化財研究調査会）、真鍋成史（交野市教育委員会）、杉井健（大阪大学）

9．調査に参加したのは下記の方々である。（五十音順・敬称略）

［調査補助員］浅野弘美、大西朝子、樫原清美、白岩勉、高井佐代、竹田操、谷本由紀、林美穂、山本敬子、山本裕子

［作業員］石田久美子、上野山邑子、北山文子、楠沢朝日、笹井千代子、田中広子、土居広知、松本和子、役山卓、山本喜子、

10．本書に掲載した土器の実測図は、断面黒塗りで須恵器を示し、それ以外は断面白抜きとした。

目　　次

第１章　調査の経過 …… 1
第２章　遺跡の地理的・歴史的環境 …… 5
第３章　調査の成果 …… 11
　第１節　基本層序 …… 11
　第２節　検出された遺構 …… 13
　　１．第１遺構面 …… 13
　　２．第２遺構面 …… 13
　　３．第３遺構面 …… 16
　　４．第４遺構面 …… 17
　第３節　出土遺物 …… 20
　　１．土器 …… 20
　　２．玉類 …… 30
　　３．紡錘車 …… 31
　　４．有孔円盤 …… 31
　　５．用途不明石製品 …… 32
　　６．砥石 …… 32
　　７．軽石 …… 33
　　８．金属製品 …… 33
　　９．木製品 …… 33
　　10．窯体片（？） …… 34
第４章　まとめ …… 36

挿　図　目　次

第１図　調査地位置図 …… 1
第２図　調査区配置図 …… 3
第３図　周辺遺跡位置図 …… 6
第４図　堆積土層柱状模式図 …… 11
第５図　北調査区第２遺構面検出遺構断面実測図 …… 15
第６図　古墳時代中～後期遺構配置図 …… 37
第７図　奈良時代遺構配置図 …… 40
第８図　平安時代遺構配置図 …… 42

表　目　次

第１表　滑石製臼玉法量表 …… 30
第２表　有孔円盤法量表 …… 31

図　版　目　次

図版１　検出遺構　ａ．調査地遠景（西から）
ｂ．同上（東から）
図版２　検出遺構　ａ．北調査区第１遺構面（北東から）
ｂ．同上（北から）
図版３　検出遺構　ａ．北調査区第２遺構面（北から）
ｂ．北調査区第２遺構面柱穴群（東から）
図版４　検出遺構　ａ．北調査区第２遺構面土坑１検出状況（南から）
ｂ．同遺構完掘状況（南から）
図版５　検出遺構　ａ．北調査区第２遺構面井戸２底部遺物出土状況
ｂ．北調査区第２遺構面井戸１土師器羽釜出土状況（東から）
図版６　検出遺構　ａ．北調査区第２遺構面土坑７（西から）
ｂ．同土坑３（西から）
ｃ．同土坑４（西から）
ｄ．同土坑６（西から）
図版７　検出遺構　ａ．南調査区第２遺構面東側全景（北から）
ｂ．同西側全景（北から）
図版８　検出遺構　ａ．南調査区第２遺構面土坑1（西から）
ｂ．同遺構土層堆積状況
図版９　検出遺構　ａ．北調査区第３遺構面上層全景（北から）
ｂ．同南大溝（東から）
ｃ．同北大溝（東から）
図版10　検出遺構　ａ．北調査区第３遺構面全景（南から）
ｂ．同上（西から）
図版11　検出遺構　ａ．北調査区第３遺構面全景（北から）
ｂ．同上（東から）
図版12　検出遺構　ａ．南調査区第３遺構面全景（西から）
ｂ．同上（南から）

図版13　検出遺構　a．南調査区第3遺構面東側全景（北から）
b．同西側全景（北から）
図版14　検出遺構　a．南調査区第3遺構面井戸1（南から）
b．同上（東から）
図版15　検出遺構　a．南調査区第3遺構面井戸1井戸枠（東から）
b．同上（北西から）
図版16　検出遺構　a．南調査区第3遺構面井戸1井戸枠（南東から）
b．同上（北西から）
図版17　検出遺構　a．南調査区第3遺構面祭祀遺構土師器杯検出状況
b．同須恵器瓶子検出状況
図版18　検出遺構　a．北調査区第4遺構面全景（南から）
b．同上（西から）
図版19　検出遺構　a．北調査区第4遺構面東側全景（北から）
b．同西側全景（北から）
図版20　検出遺構　a．北調査区第4遺構面自然河川検出状況（東から）
b．同上（西から）
図版21　検出遺構　a．北調査区第4遺構面土坑1完掘状況（南から）
b．同上（東から）
図版22　検出遺構　a．北調査区第4遺構面井戸1南側掘削状況（南から）
b．同井戸枠内掘削状況（南から）
図版23　検出遺構　a．北調査区第4遺構面井戸1井戸枠内（西から）
b．同井戸枠南東隅（東から）
図版24　検出遺構　a．南調査区第4遺構面全景（東から）
b．同上（北から）
図版25　検出遺構　a．南調査区第4遺構面東側全景（北から）
b．同西側全景（北から）
図版26　検出遺構　a．南調査区第4遺構面土坑3南側半掘状況（南から）
b．同上完掘状況（南から）
図版27　検出遺構　a．南調査区第4遺構面土坑3遺物出土状況（南東から）
b．同上（西から）
図版28　検出遺構　a．南調査区第4遺構面掘立柱建物（北から）
b．南調査区第4遺構面掘立柱建物（北から）
図版29　検出遺構　a．南調査区第Ⅳ層緑釉陶器花文椀出土状況
b．南調査区第Ⅳ層灰釉陶器皿出土状況

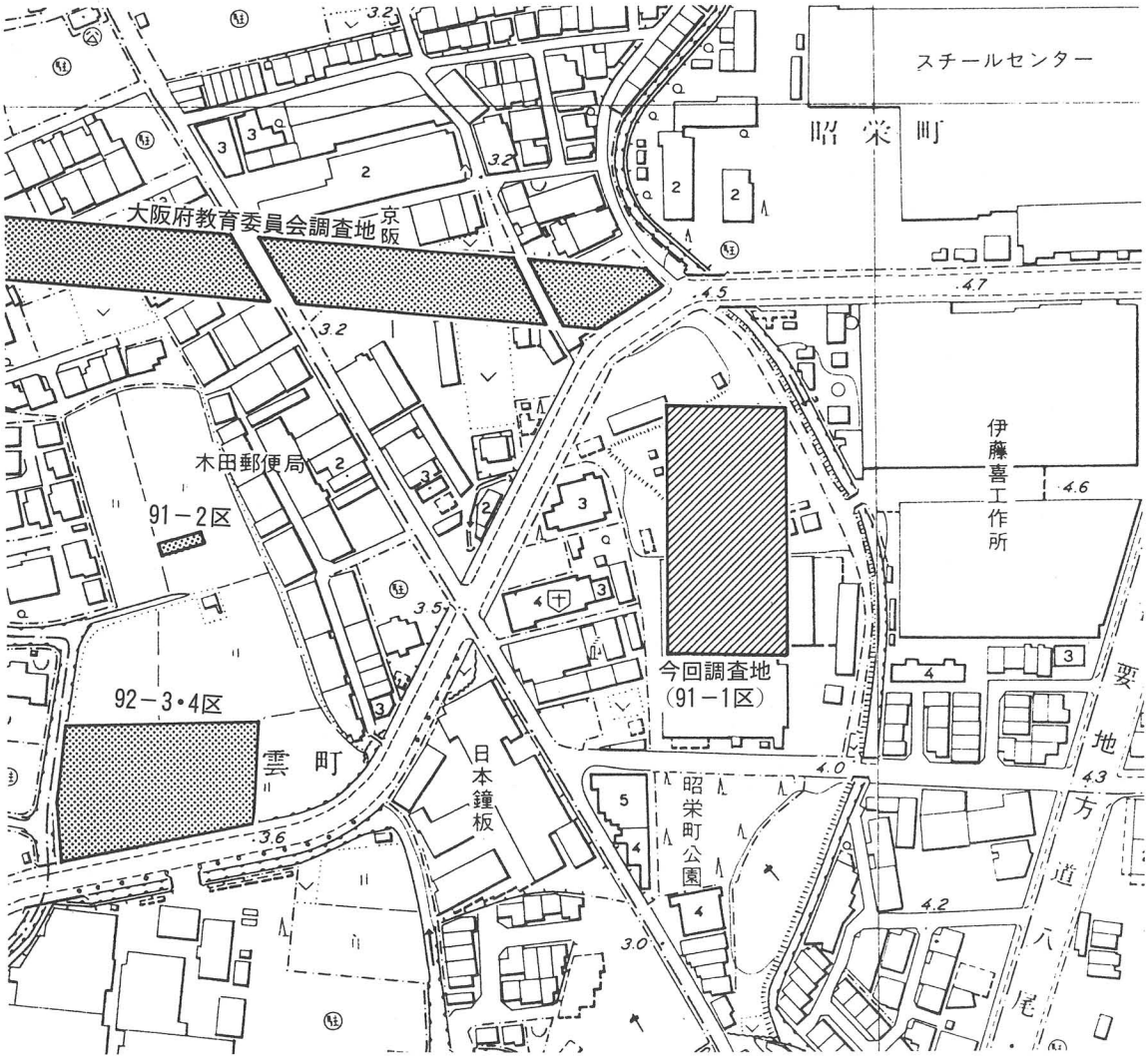
c．南調査区第Ⅳ層灰釉陶器壺出土状況
d．南調査区第Ⅴ層用途不明土製品出土状況
図版30　出土土器（1）　古墳時代初頭・中期
図版31　出土土器（2）　古墳時代中期
図版32　出土土器（3）　古墳時代中期・後期
図版33　出土土器（4）　古墳時代中期
図版34　出土土器（5）　古墳時代中期
図版35　出土土器（6）　古墳時代中期
図版36　出土土器（7）　古墳時代後期
図版37　出土土器（8）　奈良時代
図版38　出土土器（9）　平安時代・中世
図版39　出土土器（10）　中世
図版40　出土土器（11）　墨書土器
図版41　出土土器（12）　古墳時代製塩土器　a．外面タタキ目
b．外面ナデ調整
図版42　出土土器（13）　奈良時代製塩土器　a．南調査区第3遺構面自然河川肩部土器群
b．同上（内面）
図版43　出土土器（14）　奈良時代製塩土器　a．南調査区第3遺構面自然河川肩部土器群
b．同上（内面）
図版44　出土土器（15）　奈良時代製塩土器　a．南調査区第3遺構面自然河川肩部土器群
b．同上（内面）
図版45　出土土器（16）　奈良時代製塩土器　a．北調査区出土
b．同上（内面）
図版46　出土土器（17）　移動式かまど
図版47　出土土器（18）　移動式かまど
図版48　出土土器（19）　用途不明土製品
図版49　出土土器（20）　用途不明土製品
図版50　出土石製品　子持勾玉
図版51　出土石製品ほか　a．臼玉・土玉・金環・勾玉・管玉・用途不明石製品
b．有孔円盤・用途不明石製品
図版52　出土石製品・木製品　a．紡錘車
b．櫛
図版53　出土石製品　砥石・軽石
図版54　出土木製品　扉材

図版55　出土窯体片（？）
図版56　検出遺構実測図（1）　北調査区西壁断面実測図
図版57　検出遺構実測図（2）　第２遺構面遺構配置図
図版58　検出遺構実測図（3）　第３遺構面遺構配置図
図版59　検出遺構実測図（4）　第４遺構面遺構配置図
図版60　検出遺構実測図（5）　南調査区第２遺構面土坑1実測図
図版61　検出遺構実測図（6）　第２遺構面自然河川断面実測図
図版62　検出遺構実測図（7）　南調査区第３遺構面井戸1実測図
図版63　検出遺構実測図（8）　南調査区第３遺構面遺構実測図
図版64　検出遺構実測図（9）　北調査区第４遺構面自然河川断面実測図
図版65　検出遺構実測図（10）　北調査区第４遺構面井戸１実測図
図版66　検出遺構実測図（11）　北調査区第４遺構面土坑１実測図
図版67　検出遺構実測図（12）　南調査区第４遺構面土坑３実測図
図版68　出土土器実測図（1）　古墳時代初頭
図版69　出土土器実測図（2）　古墳時代中期
図版70　出土土器実測図（3）　古墳時代中期
図版71　出土土器実測図（4）　古墳時代中期
図版72　出土土器実測図（5）　古墳時代中期・後期
図版73　出土土器実測図（6）　古墳時代中期・後期
図版74　出土土器実測図（7）　奈良時代
図版75　出土土器実測図（8）　平安時代
図版76　出土土器実測図（9）　中世
図版77　出土土器実測図（10）　奈良時代製塩土器
図版78　出土土器実測図（11）　移動式かまど
図版79　出土土器実測図（12）　用途不明土製品
図版80　出土石製品実測図（1）子持勾玉
図版81　出土石製品ほか実測図（2）　勾玉・管玉・土玉・臼玉・紡錘車・不明石製品
図版82　出土石製品ほか実測図（3）　有孔円盤・金環・櫛
図版83　出土木製品実測図　扉材

第１章　調査の経過

長保寺遺跡は、寝屋川市のほぼ中央部に位置する。遺跡は、市域の南西部に広がる讃良郡条里遺跡の一角に位置するが、近年まで周辺で遺構・遺物の出土が知られていない地域であった。

この地に府道国守・黒原線の建設が計画され、大阪府教育委員会では周知の讃良郡条里遺跡の範囲に該当することから工事に先だって1987年（昭和62年）に試掘調査を実施した。その結果、古墳時代と中世の２時期の遺構面が検出され、集落遺跡が存在することが明らかとなった。このため、大阪府教育委員会では、1988～1990年（昭和63～平成２年）に発掘調査を実施した。その結果、古墳時代中期～後期と中世（平安時代後期～南北朝時代）の柱穴・溝・井戸・土坑・自然河川等の多数の遺構が検出された。特に、古墳時代中期と後期の井戸



第１図　調査地位置図（Ｓ＝1／2500）

枠に再利用されていた古代船の船体の一部の発見は大きな話題となった。このほか、井戸枠に再利用されていた扉材・韓式系土器・ガラス玉鋳型・製塩土器・木製鞍をはじめとする様々な木製品など古墳時代の豊富な遺物が出土し、重要な遺跡であることが判明した。また、中世においても土器類を中心に多様な遺物が出土しており、寝屋川市における両時期の代表的な遺跡と認識されるに至った。寝屋川市教育委員会では遺跡の広がりが想定される昭栄町・出雲町にまたがる区域について讃良郡条里遺跡から独立した遺跡とし、遺跡の発見された調査地の小字名より長保寺（ちょうぼじ）遺跡と命名した。

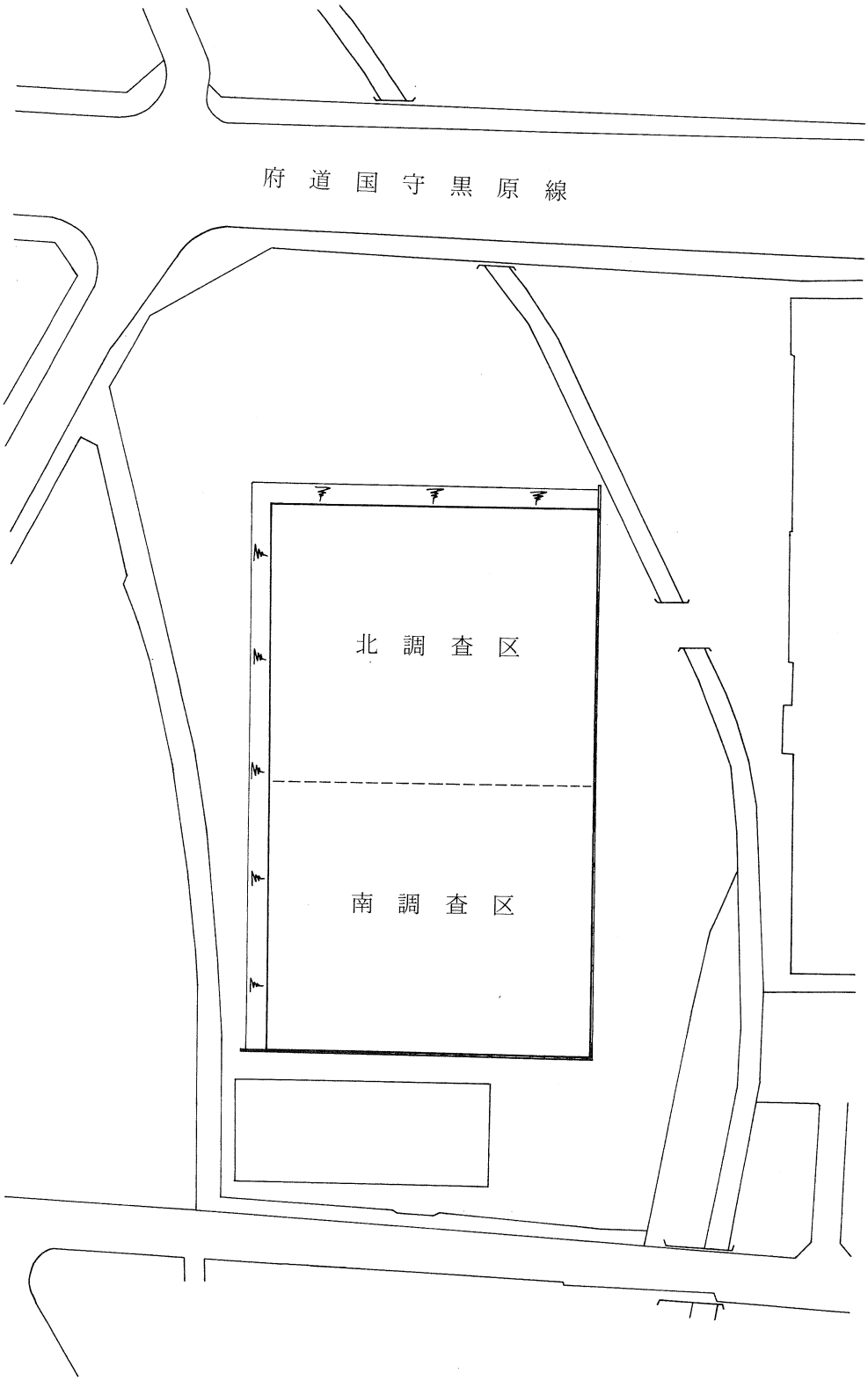
1989年（平成元年）、寝屋川市教育委員会に株式会社伊藤喜工作所より昭栄町17―5に所在する同社敷地内で開発を行いたいとの事前協議があった。教育委員会文化振興課文化財保護係では開発対象地が周知の長保寺遺跡の範囲内であり、同社に対して開発に際しては文化財保護法第57条２にもとづく届出の提出を指示し、遺構・遺物の有無を確認するために試掘調査を実施する必要があることを説明した。

同社より、1990年（平成２年）３月29日付けで試掘調査依頼書が提出され、４月16日に開発対象地北側に1箇所の試掘坑を設定して調査を行った。その結果、現地表面下2.8mで0.5mの厚さの遺物包含層が検出され、古墳時代および中世の土器が出土し、遺跡の広がりが確認された。このため、計画建物の位置および基礎構造等について同社と協議を行ったが、同社から杭基礎構造の建物の計画の説明を受け、教育委員会では工事によって遺構の破壊が想定される部分について資料を得るための発掘調査の必要がある旨を伝えた。

同年８月31日付けで文化財保護法第57条２に基づく埋蔵文化財発掘の届出が提出され、教育委員会ではさらに計画地での遺構・遺物の広がりを把握し、調査範囲を確定するために、９月10・11日に計画地内に８箇所の試掘坑を設定して調査を行った。その結果、全ての調査箇所で遺物が出土し、さらに数箇所では溝・柱穴等の遺構が検出された。教育委員会では工事によって遺構の破壊が想定される3680㎡について発掘調査が必要と判断し、同社に通知するとともに、調査の実施について同社と協議を行った。

1991年（平成３年）４月１日付けで、同社より教育委員会に対して発掘調査についての依頼があり、教育委員会では４月22日付けで同社と埋蔵文化財調査に関する協定書を締結した。さらに、４月30日付けで発掘調査の受託について業務契約書を締結し、現地調査を実施することとなった。

発掘調査は、掘削した排土の仮置場の問題より調査地を南北に２分し、５月１日より南側調査区から調査を開始した。南側調査区では第３章で述べるように上下４枚の遺構面を検出した。このうち特に、第３・４遺構面については、柱穴・溝をはじめとする多数の遺構が検出された。このため、調査のスピードアップはかるためにヘリコプターによる空中写真測量を実施した。８月25日に南側調査区の調査を完了し、同調査区を埋め戻すとともに北側調査区の調査を開始した。北側の調査区も南側同様に上下４枚の遺構面を検出し、1992年（平成



第２図　調査区配置図（Ｓ＝1／1000）

4年）3月31日に現地調査を完了した。北側調査区でも第3・4遺構面で多数の遺構が検出され、南側調査区同様にヘリコプターによる空中写真測量を行った。また、第4遺構面では古墳時代の子持勾玉が出土し、同時期の多数の柱穴や井戸が検出されたため、調査の成果の概要を記者発表し、1992年（平成4年）2月29日に市民を対象に現地説明会を開催した。当日は、約200名の参加者を得た。また、発掘調査によって出土した櫛・柱根・井戸枠材の木製品については、株式会社吉田生物研究所に委託して樹脂含浸法による保存処理作業を行った。

出土遺物等については現地での発掘調査と並行して洗浄などの基礎的整理作業の一部を行ったが、本格的な整理作業については1992年（平成4年）5月12日付けで同社と業務契約書を締結し、5月18日より開始した。作業は同社の協力を得て、同社工場の一角の提供を受け、同所を整理事務所として実施した。出土遺物は遺物収納ケース約300箱にのぼり、遺物の洗浄・注記といった基礎的作業を行った後、概要報告書作成を目的にした主要な遺物の復元・図化を行った。遺物の整理作業は1993年（平成5年）3月31日に終了した。

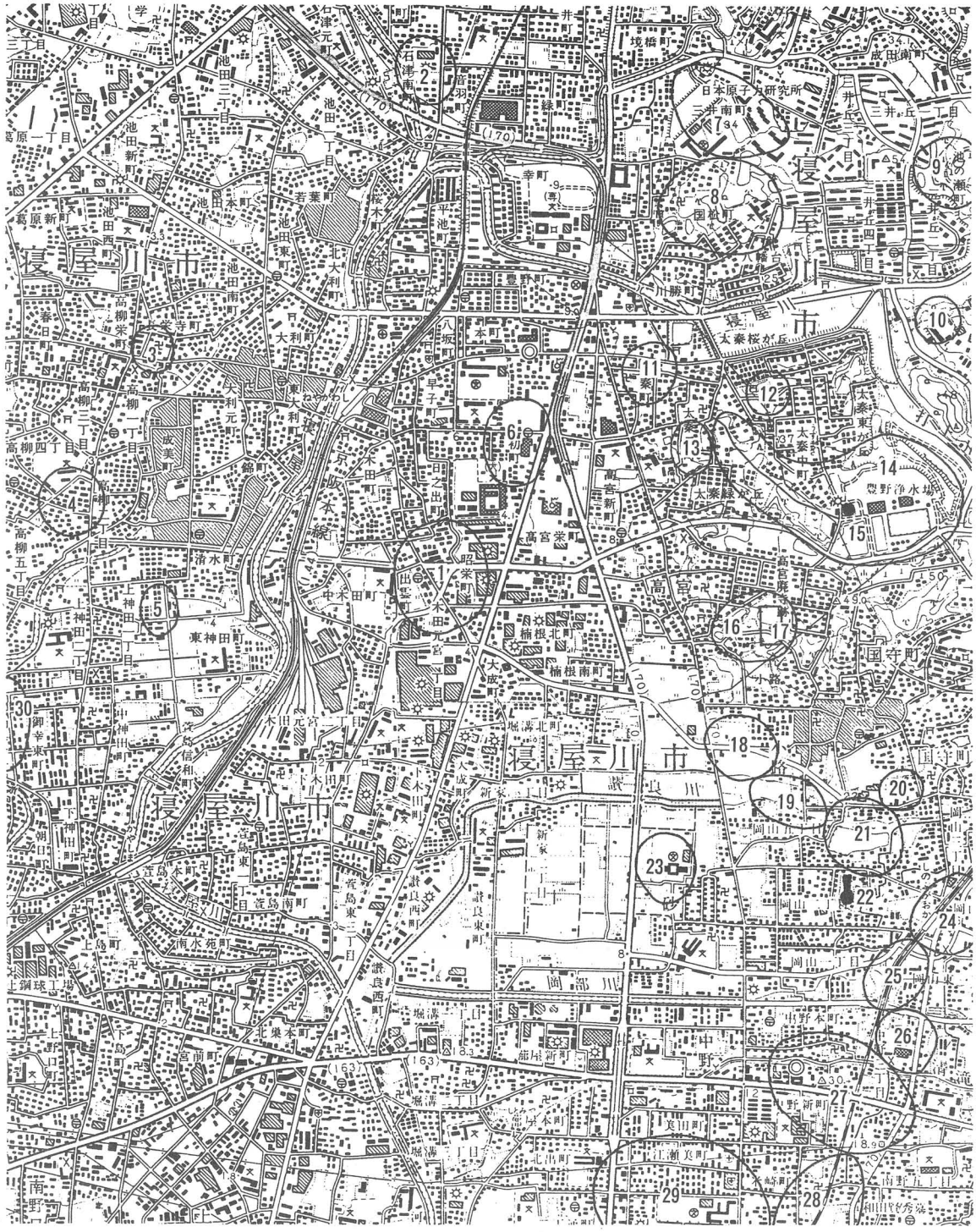
第２章　遺跡の地理的・歴史的環境

長保寺遺跡は寝屋川市のほぼ中央部に位置する。寝屋川市は市域の東側が生駒山地北部およびそこから派生する丘陵地からなる。また市域の西側は寝屋川・淀川およびその分流の古川が運搬した土砂を堆積して形成した低湿な土地が広がっている。寝屋川は香里丘陵と太秦丘陵の間を西流し、平野部に抜けた市域の中央部に扇状地を形成し、この扇端部で屈曲して南流している。長保寺遺跡は、この南流する寝屋川の左岸（東側）の三角州・自然堤防上に立地するものと考えられる。現在の河道は遺跡の西側を流れているが、この河道は江戸時代に付け替えられたもので、以前は現在のものより東側を流れていたという。遺跡内でも大阪府教育委員会調査地で南北方向に流れる自然河川が検出されており、寝屋川の一時期の流路ではないかと考えられる。遺跡の現在の標高は約４ｍであるが、調査の結果、現地表は１～２ｍの盛土が施された上にあることが判明した。古老の話では、かつてこの付近は湿地となっていたようである。河内平野については梶山彦太郎・市原実両氏によって古地形の復原が行われているが[1]、それによると遺跡の周辺は河内湾（湖）に寝屋川が縄文時代前期以降に土砂を堆積して形成した三角州と考えられる。

弥生時代以前の遺跡の状況については、大阪府教育委員会の調査[2]で縄文時代晩期の突帯文土器をはじめ、弥生時代の土器や太形蛤刃石斧が断片的に出土している。いずれも遺構に伴ったものでないため当時の遺跡の様相は不明であるが、この時期にすでに陸化していたようである。縄文晩期土器の出土層は黒色の腐植土層で、中河内地域の発掘調査で検出されている「黒色バンド」に対応する可能性がある。こうした地層の形成過程より、当時期に河内潟の汀線付近に位置していたと推測される。

集落の出現は古墳時代中期で、このころには陸化した土地も乾燥し、人々が住むのに適した環境となっていたものと思われる。一方、遺跡内では大阪府教育委員会の調査で古墳時代中期～後期、今回の調査で古墳時代初頭～前期および奈良時代以降の各時期の自然河川が検出されており、それぞれの河川内で大量の砂の堆積が認められることから遺跡も何度かの洪水に遭遇したものと考えられる。

次に、長保寺遺跡周辺の遺跡の動態を概観する。この地域に人々の生活の足跡が知られるのは、旧石器時代からである、遺跡の東側の丘陵にある寝屋川市高宮遺跡および高宮丘陵の南で近年発見された讃良川（さらがわ）遺跡で国府型ナイフ形石器が出土している[3]。また、四條畷市岡山南遺跡で木葉形尖頭器、同市南山下（みなみさげ）遺跡で有舌（有茎）尖頭器が見つかっている[4]。縄文時代草創期～前期の様相は不明である。縄文時代中期の集落では讃良川遺跡がある[5]。遺跡は中期初頭に出現し、船元Ⅱ・Ⅲ式を中心に中期末まで遺跡は存続しており、膨大な出土遺物から拠点的な集落として理解されよう。後期には讃良川遺跡が衰退するのと機を一にして、東側の四條畷市更良岡山（さらおかやま）遺跡が出現する[6]。同遺跡は晩期まで存続する。また、讃良川遺跡



第３図　周辺遺跡位置図（１／25000）

１．長保寺遺跡	２．楠遺跡	３．高柳廃寺跡	４．高柳遺跡	５．神田東後遺跡
６．高宮八丁遺跡	７．三井南遺跡	８．秦山遺跡	９．池の瀬遺跡	10．太秦北遺跡
11．神宮寺跡	12．太秦廃寺跡	13．太秦元町遺跡	14．太秦遺跡	15．高塚古墳
16．高宮遺跡	17．高宮廃寺跡	18．小路遺跡	19．讃良川遺跡	20．三味頭遺跡
21．更良岡山遺跡	22．忍岡古墳	23．砂遺跡	24．忍ケ丘駅前遺跡	25．奈良井遺跡
26．南山下遺跡	27．中野遺跡	28．南野米崎遺跡	29．雁屋遺跡	30．中神田遺跡

の西側の四條畷市砂遺跡[7]でも中期前半・後期後半・晩期後半の遺構・遺物が検出されているほか、北側の高宮遺跡[8]でも前期末の土器・石器が出土している。

長保寺遺跡でも晩期後半の突帯文土器（滋賀里Ⅳ式）が出土している。共伴した無文の深鉢には籾圧痕が観察されており、伊丹市口酒井遺跡[9]・東大阪市鬼塚遺跡出土の籾圧痕をもつ土器と並んで近畿地方最古の稲作関連資料として注目される。

弥生時代になると前期前葉に寝屋川市高宮八丁遺跡[10]が出現する。遺跡は北河内・淀川下流左岸平野部の拠点集落として中期前葉まで存続し、中期中葉以降は東側丘陵上の太秦遺跡[11]に集落の中心を移動させると考えられる。上記の長保寺遺跡出土の弥生土器等も、高宮八丁遺跡と関連づけて考えることが妥当であろう。後期には太秦遺跡のほか池の瀬・小路の両遺跡[12]で土器の出土が知られている。

古墳時代初頭～前葉では北河内地域の土器様相が未解明なため遺跡の様相も不明な点が多い。その帰属時代が問題となっている庄内式土器については、寝屋川市域では今回報告の長保寺遺跡の出土例が初めてである。北河内地域では、四條畷市南野米崎遺跡[13]・交野市森遺跡[14]で出土を聞く。前期（布留式）については、市域では讃良川遺跡で布留式古相、高宮八丁遺跡で中相の土器の出土が知られるが、遺構については未検出である。市域には前期古墳は存在しないが、讃良川遺跡の南側の四条畷市域には竪穴式石室を埋葬施設とする全長約90mの前方後円墳である忍岡古墳が存在する[15]。石室内はすでに盗掘を受けていたが、碧玉製腕飾類・鉄製武器・農具・工具が出土している。

長保寺遺跡に集落が出現する古墳時代中期には、東側の丘陵に太秦古墳群[16]が出現する。同古墳群は、戦後の開墾・土砂採取や宅地開発等によって未調査のうちに大部分の古墳が失われ、現存するのは高塚古墳の１基のみである。しかし、近年の発掘調査で削平を免れた周濠の一部が見つかるなど遺跡の状況は徐々に明らかになっている。採集資料を含めて出土した土器・埴輪等により、中期以降に造墓が開始され後期まで継続して古墳の築造が行われたと考えられる。横穴式石室の石材となるような石の出土を聞かないことから、埋葬施設は大部分が木棺直葬であったと推定される。

市域の古墳時代中期の集落としては近年石津南町で発見された楠（くすのき）遺跡がある。同遺跡は淀川・古川流域の低湿地に所在し、古墳時代中期～後期の掘立柱建物・井戸・土坑等が検出され、初期須恵器・韓式系土器の良好な資料が出土している。初期須恵器・韓式系土器については長保寺遺跡・楠遺跡のほか北河内地域では、枚方市交北城山（こうほくじょうのやま）[17]・茄子作（なすづくり）[18]・中野[19]・奈良井[20]・南野米崎[21]・大東市北新町[22]・宮谷古墳群[23]・堂山１号墳[24]等の遺跡で出土が報告されており、出土の集中する地域である。市域には、秦・太秦といった渡来系氏族と関連する地名があり、渡来人集団との関係が想定されている。また、こうした遺跡では馬の骨・歯や製塩土器の出土が知られ、馬飼い集団との関連が指摘されている[25]。

古墳時代後期には、東部丘陵に横穴式石室を埋葬施設とする寝屋古墳が築かれる。寝屋古

墳は直径22mの円墳で、全長約10mに復原される横穴式石室は北河内地域最大の規模をもつ[26]。また、打上には現存しないが江戸時代に書かれた『河内名所図会』に八十塚と呼ばれた群集墳が存在した[27]。付近には、横穴式石室の石材と思われる石を集積した場所があり、明光寺には凝灰岩製の刳り抜き式の家形石棺の棺身を再利用した「雷神石」と呼ばれる石碑が存在する。この打上地区には、花崗岩製の刳り抜き式横口式石槨を埋葬施設とする終末期古墳の石宝殿古墳が存在する[28]。

長保寺遺跡で古墳時代の集落が収束に向かう後期末に、東側の丘陵上に高宮遺跡出現する。高宮遺跡では飛鳥時代に豪族居館と考えられる大型の掘立柱建物跡が検出されている。この建物跡の東側に白鳳時代初期に創建された高宮廃寺跡[29]が所在する。式内社である大杜御祖神社（おおもりみおや）の境内を中心に広がり、薬師寺式の伽藍配置をとることが明らかになっている。高宮廃寺は発掘調査によって、白鳳時代初期に創建された後、数回の火災にあい奈良時代末～平安時代に廃絶し、さらに旧講堂跡を利用して鎌倉・室町時代に大杜御祖神社の神宮寺となっていたことが判明している。

奈良時代後半以降、長保寺遺跡では再び集落が出現するが、周辺では高宮廃寺跡を除くと遺跡の様相は不明である。平安時代には市域の西側の古川流域に高柳遺跡[30]・神田東後（かみだひがしご）遺跡[31]が出現する。このうち高柳遺跡は鎌倉時代まで遺跡が存続する。このほか、鎌倉～室町時代の中神田遺跡が発見されている。

長保寺遺跡では平安・鎌倉時代を通じて遺構・遺物の出土が見られる。1992～93年に行われた調査では中世の屋敷地（館）を囲む堀と考えられる大溝が検出されている[32]。この時期、周辺では高宮遺跡で平安時代末～鎌倉時代の集落が調査されている[33]。長保寺遺跡では南北朝～室町時代初期に集落が廃絶し、その後は耕作地などに利用されている。

注

1．梶山彦太郎・市原　実　『大阪平野のおいたち』　青木書店　1986

2．大阪府教育委員会　『讃良郡条里遺跡発掘調査概要・Ⅰ』　1989

　大阪府教育委員会　『讃良郡条里遺跡発掘調査概要・Ⅱ』　1991

3．寝屋川市教育委員会　『高宮廃寺・Ⅳ』　1983

4．四條畷市教育委員会　『岡山南遺跡発掘調査概要・Ⅰ』　1976

　野島　稔　「四條畷市・南山下遺跡」　『地域文化誌まんだ』第5号　1978

5．寝屋川市教育委員会　『讃良川遺跡現地説明会資料』　1991

　塩山則之　「讃良川遺跡の調査」　『歴史シンポジウム　縄文文化を考える』　寝屋川市教育委員会　1991

　塩山則之　「讃良川遺跡の調査」　『第9回近畿地方埋蔵文化財研究会資料』　（財）大阪文化財センター　1991

6．片山長三　「岡山遺跡」　『枚方市史』第１巻　枚方市役所　1967
大阪府教育委員会　『更良岡山遺跡発掘調査概要』　1992
7．宮野淳一　「縄文時代の大阪－中期を中心として－」　『歴史シンポジウム　縄文文化を考える』
寝屋川市教育委員会　1991
8．寝屋川市教育委員会　『寝屋川市文化財図録』Ⅰ　1984
9．浅岡俊夫　「伊丹市口酒井遺跡の凸帯文土器」　『歴史と考古学』　1988
10．寝屋川市教育委員会　『高宮八丁遺跡』　1987
『高宮八丁遺跡・石器編』　1988
『高宮八丁遺跡・木器編』　1989
『高宮八丁遺跡・Ⅱ』　1992
11．瀬川芳則　「太秦遺跡」　『寝屋川市の文化財』第Ⅰ集　寝屋川市教育委員会　1979
12．宇治田和生　「池の瀬遺跡」　『寝屋川市の文化財』第Ⅰ集　寝屋川市教育委員会　1979
宇治田和生　「大阪府寝屋川市小路発見の弥生土器」　『古代学研究』85号　1977
13．野島稔氏のご教示による。
14．交野市教育委員会　『森遺跡・Ⅰ』　1989
15．梅原末治　「河内四条畷村忍岡古墳」　『近畿地方古墳墓の調査』２　1938
四條畷市教育委員会　『忍ケ丘古墳』四條畷市文化財シリーズ２　1974
16．宇治田和生・西田敏秀　「太秦古墳群」　『寝屋川市の文化財』第Ⅰ集　1979
17．西田敏秀・大竹弘之　「交北城山遺跡」　『韓式系土器研究』Ⅰ　1987
桑原武志・西村健司　「交北城山遺跡」　『韓式系土器研究』Ⅱ　1989
18．西田敏秀・大竹弘之　「茄子作遺跡」　『韓式系土器研究』Ⅰ　1987
19．野島　稔　「中野遺跡」　『韓式系土器研究』Ⅰ　1987
20．野島　稔　「奈良井遺跡」　『韓式系土器研究』Ⅰ　1987
21．野島　稔　「南野米崎遺跡」　『韓式系土器研究』Ⅰ　1987
野島　稔　「南野米崎遺跡」　『韓式系土器研究』Ⅲ　1991
22．北新町遺跡調査会　『大東市北新町遺跡第１次発掘調査概要報告書』　1986
『北新町遺跡発掘調査（第２次）報告書』　1988
23．黒田　淳　「宮谷古墳群」　『韓式系土器研究』Ⅱ　1989
24．大阪府教育委員会　『堂山古墳群発掘調査概要』　1973
25．瀬川芳則　「馬飼集団の神まつり」　『古墳時代の研究』3　生活と祭祀　雄山閣　1991
野島　稔　「河内の馬飼」　『万葉集の考古学』　筑摩書房　1984
26．塩山則之・西田敏秀　「寝屋古墳」　『寝屋川市の文化財』第Ⅰ集　寝屋川市教育委員会　1979
1992年大阪府教育委員会が、寝屋川公園の整備にともなって範囲確認の調査を実施。
27．塩山則之　「打上古墳群」　『寝屋川市の文化財』第Ⅰ集　寝屋川市教育委員会　1979

28. 梅原末治　「河内打上村石寶殿」　『考古学雑誌』第4巻7号　1914
瀬川芳則　「石ノ宝殿古墳」　『寝屋川市の文化財』第Ⅰ集　1979
寝屋川市教育委員会　『石宝殿古墳』　1990
29. 平尾兵吾　「高宮廃寺」　『寝屋川市誌』　1966
寝屋川市教育委員会　『高宮廃寺』　1980
30. 寝屋川市教育委員会　『高柳遺跡』　1991
31. 寝屋川市教育委員会　『神田東後遺跡』　1989
32. 寝屋川市教育委員会　『長保寺遺跡現地説明会資料』　1993
33. 寝屋川市教育委員会　『高宮廃寺・Ⅴ』　1984

第３章　調査の成果

第１節　基本層序（図版56）

今回の調査地での堆積土層の概略は、次のとおりである。なお、調査区は地山と考える第Ⅵ層上面では中央部分が高く南北にゆるやかな傾斜をしている。このためか、中央部分では古墳時代の遺物包含層の第Ⅴ層が薄く、南北両端に行くにしたがって厚くなっている。

第Ⅰ層　工場建設時に行った２ｍ近い盛土である。

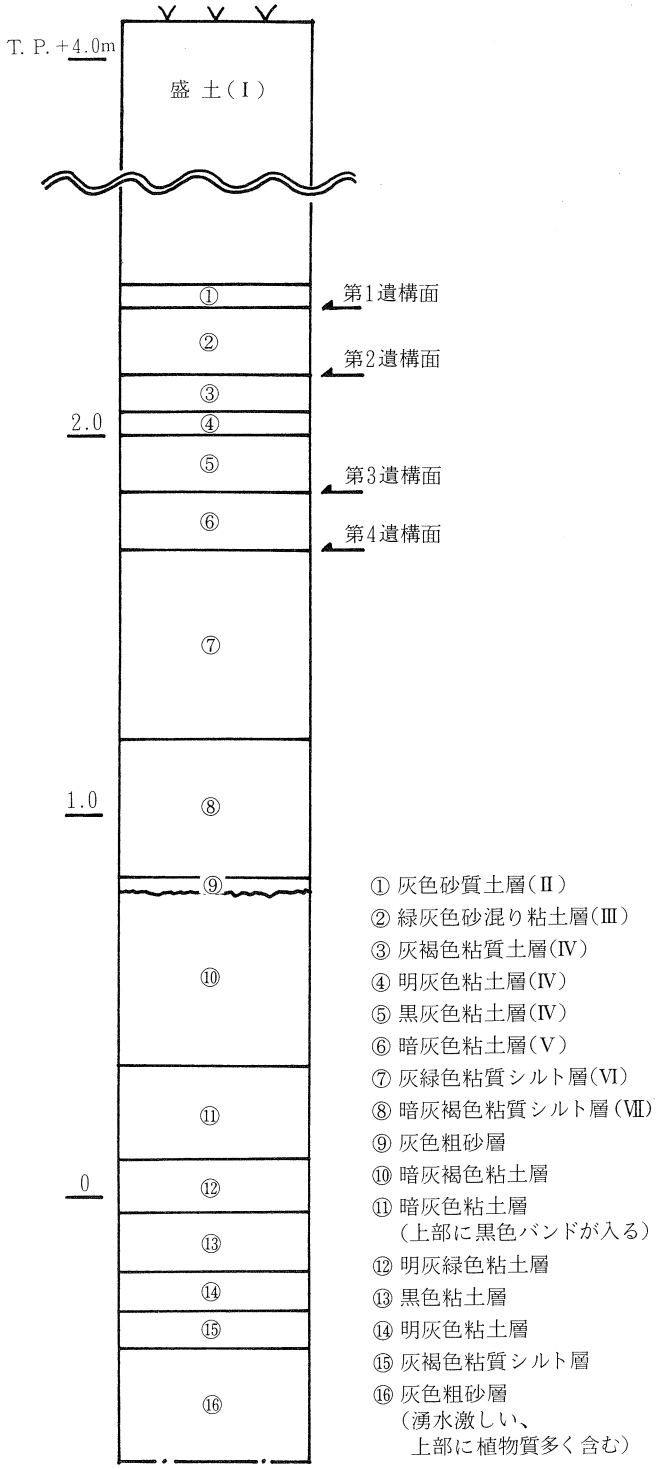
第Ⅱ層　灰色砂質土層。旧耕土層である。

第Ⅲ層　灰緑色砂混じり粘質土層。上面では近世以降の耕作溝が検出されている。この遺構面を第１遺構面とした。

第Ⅳ層　灰褐色粘質土層。古墳時代～平安時代の遺物が出土している。上面で平安時代末～鎌倉時代の井戸・柱穴等を検出している。この遺構面を第２遺構面とした。

第Ⅴ層　暗灰色粘土層。古墳時代の遺物が出土している。上面で奈良時代～平安時代前半の遺構を検出している。この遺構面を第３遺構面とした。

第Ⅵ層　灰緑色粘質シルト層。今回の調査では以下を地山としている。上面で古墳時代前期～後期の遺構を検出している。この遺構面を第４遺構面とした。



第４図　堆積土層柱状模式図

第Ⅶ層　以下は粘土および砂層が交互に堆積している。⑪層は、暗灰色粘土層で、中河内地域の調査で検出されている、いわゆる「黒色バンド」に対応する黒色粘土層が認められる。府教委調査地で縄文晩期の突帯文土器が出土したのは、この層の上面と推測される。また、⑯層は上部に植物質を多く含む灰色粗砂層で、激しい湧水が認められた。当調査地で検出された古墳時代～平安時代の井戸は、この層まで掘削を行っている。

第２節　検出された遺構

今回の発掘調査では上下４枚の遺構面が検出された。前節の基本層序で述べたとおり、第３遺構面と第４遺構面の間の遺物包含層（第Ⅴ層）は薄いところがあり、検出された柱穴を中心とする遺構の中にはどちらの遺構面に所属するものか現地調査時には判断のつかないものがあった。ここでは基本的に第４遺構面を古墳時代、第３遺構面を奈良～平安時代として説明を行う。なお、遺構名は、それぞれ北調査区、南調査区ごとに付けている。

１．第１遺構面（図版２）

第Ⅱ層の旧耕土層を除去後、第Ⅲ層上面で検出された遺構面である。南調査区では約30m間隔で並行に走る数本の東西溝が検出された。北調査区では東西方向の杭列および溝と南北方向の杭列に区画された部分で約２m南北方向に並行に走る浅い溝を検出した。区画の中の南北溝は幅20cm･深さ5～10cm程度のものである。杭列および30m間隔の溝は水田あるいは畑の区画を示すもので、南北方向の浅い溝は区画内での耕作に伴うものと理解される。なお、杭列および南北・東西溝とも正方位より約20～30°西にずれており、復原されている讃良郡条里に一致しない。溝内および遺構面を覆っている第Ⅱ層の出土遺物より近世以降のものと考えられる。

２．第２遺構面（図版３～８・57）

第Ⅲ層除去後第Ⅳ層上面で検出された遺構面である。調査区の東端で東に蛇行する南北方向の自然河川を検出した。北調査区では中央部で20cm程度台状に高くなり、この台状部の自然河川に近いところで柱穴群・井戸・土坑を検出している。台状部の北側および西側の低くなった部分では、東西および南北方向に並行に走る数本の溝が検出された。深さは、5～10cmと浅い。第１遺構面のものと同様に耕作に伴うものと考えられる。なお、台状部の南北では裾部に沿って走る溝（第３遺構面上層大溝）が検出されている。

南調査区では土坑１と数本の溝を検出したにとどまる。溝は北西から南東の自然河川に向けて流れており、北調査区で検出された耕作地からの排水を目的としたものであろう。

以下、主要な各遺構について説明を行う。

北調査区

井戸１（図版５ｂ）

柱穴群の南側の自然河川の西肩部に位置する。第２遺構面では検出できず、第４遺構面の古墳時代前期自然河川掘削中に検出した。深さ1.3m、底部径0.7mを測る。井戸底には暗灰

色の粘土が堆積しており、ここから底部を欠くほぼ完形の土師器羽釜が出土した。

井戸2（図版５ａ）

柱穴群の西側に位置する。この遺構も第２遺構面では検出できず第３遺構面で検出した。検出時の遺構は平面円形で、直径１ｍ、第２遺構面からの深さ1.3mを測る。井戸底は、方形の二段掘りになっており、本来は、井戸枠のような何らかの施設があったものと推定される。底部では暗灰色の粘土が堆積していた。底部で径20cm程度の石（花崗岩）と一緒にほぼ完形の瓦器椀が２点出土している。出土土器より12世紀前半の時期が与えられる。

土坑1（図版４）

柱穴群の南に隣接して検出された浅い土坑である。平面形は隅丸の三角形を呈し、東西2.5m、南北２ｍ、深さ0.18mを測る。埋土は２層に分れ、上層の炭・灰を含む黒灰色粘質土層より瓦器椀・土師器皿等の土器が出土している。ごみの廃棄あるいは焼却を目的に掘られたものであろう。出土土器より11世紀末～12世紀初頭の年代が与えられる。

土坑3（図版６ｂ）

柱穴群の北側の落ち込み部分で検出された。東西1.1m、南北0.7mの東西に主軸をもつ長円形の平面形を呈する。断面はＵ字形を呈し、深さ0.35mを測る。埋土は大きく２層に分れる。上層の灰色シルト層は上位の包含層が遺構内に落ち込んだものと推測される。埋土内より完形の土師器大皿・小皿各１枚と瓦器椀１個体が出土している。

土坑4（図版６ｃ）

柱穴群北側の落ち込みで検出された。東西1.7m、南北0.8mの東西に長い長円形の平面形を呈する。断面はＶ字形を呈し、深さ0.35mを測る。埋土の状況は土坑３と同じである。

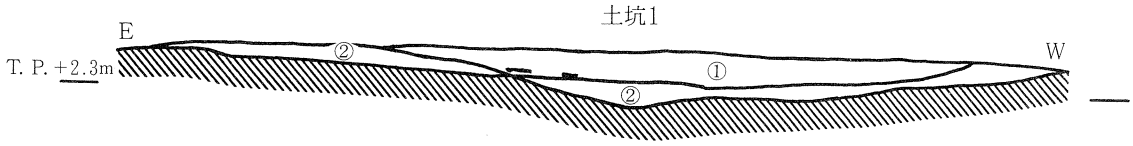
土坑6（図版６ｄ）

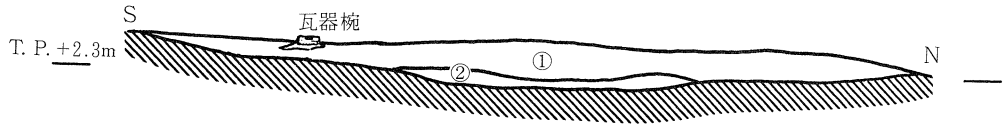
柱穴群北側の落ち込み部分で検出された。東西2.0m、南北1.0mの東西に主軸をもつ隅丸の長方形を呈する。断面はＵ字形を呈し、深さ0.4mを測る。埋土の状況は、土坑３と同じである。完形の瓦器小皿・土師器小皿が、各１枚出土している。

土坑7（図版６ａ）

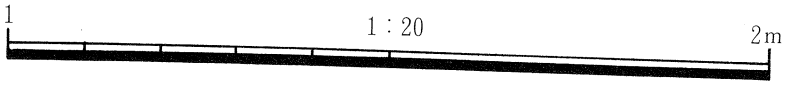
柱穴群北側の落ち込み部分で検出された。東西1.4m、南北0.7mの東西に主軸をもつ隅丸の長方形を呈する。断面はＵ字形を呈し、深さ0.3mを呈する。埋土の状況は、土坑３と同じである。

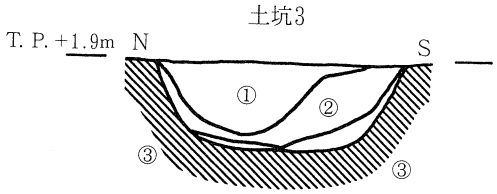
以上の土坑３・４・６・７はいずれも東西方向に主軸をそろえ、埋土の状況も同じであることから同じ用途をもったものと考えられる。また、土坑３・６から完形の椀・皿が出土している。他の遺跡では、こうした完形の椀・皿類が出土する土坑に人骨が遺存しているものがあり、墓として理解されている。今回の検出例についても人骨等は未検出であったものの、墓となる可能性が高いと考えられる。なお埋土の状況からは木棺等の埋葬施設はなかったものと考えられる。



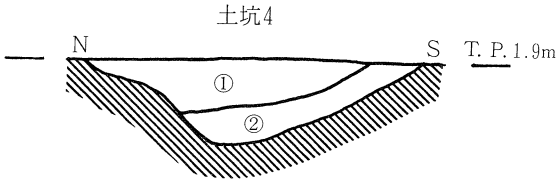


① 黒灰色粘質土層(炭•焼土混り)
② 暗灰色粘質土層

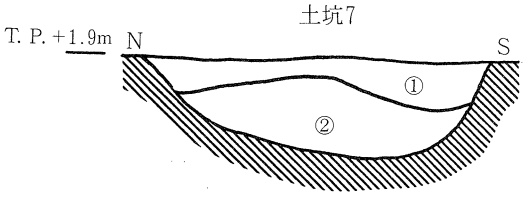




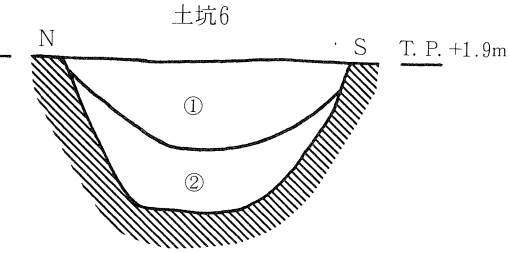
① 暗灰色シルト層(明灰色シルトを含む)
② 暗灰色シルト層
③ 暗青灰色粘質土層



① 灰色シルト層
② 灰色シルト層(暗灰色シルトを含む)



① 灰色シルト層
② 灰褐色シルト層



① 灰色シルト層
② 暗褐色シルト層(暗灰色粘土をブロックに含む)

第５図　北調査区第２遺構面遺構断面実測図（１／20）

柱穴群

調査区東側中央で検出された約70個の小ピットからなる遺構である。小ピットは直径20～30cm、深さ30～40cmを測り、柱穴と判断される。これらの柱穴はその広がりより、数回の建て替えを行った2間×3間に復元される掘立柱建物と付随する柵・塀などのものと考えられる。

南調査区

土坑1（図版8・60）

調査区北側で検出された東西方向に主軸をもつ長方形の土坑である。北側は北側調査区との間に設けた側溝によって切られており、上部は不明である。東西5m、南北約2.4m、深さ0.86mをはかる。埋土は下部に粘土層、上部に粘質土・砂質土が堆積している。出土遺物は少なく、ごみ穴よりむしろ水溜めのような用途をもつものであろう。出土土器は小片のものが大部分で時期を確定できるものがない。瓦器の破片が含まれていることより平安時代末以降のものであろう。

3．第3遺構面（図版9～17・58）

第Ⅳ層除去後、第Ⅴ層上面で検出された遺構面である。このうち南調査区北東部分では第Ⅲ・Ⅳ層が薄く、第2遺構面検出時に柱穴などすでに一部の遺構が見えていた。（図版7ａ）また、北調査区南側を中心に、この遺構面検出時に下層の第4遺構面に属すると考えられる遺構の一部も検出している。古墳時代の土器が出土した遺構については後述の「第4遺構面」で報告を行う。

検出した遺構は多数の柱穴と南北方向の浅い溝である。これらの遺構は北調査区では中央以南、南調査区では中央以北に密集している。北調査区では断続する東西方向の溝以北ではベースがやや軟質の粘土層となり遺構は希薄となる。南調査区では調査区を東西に「Ｚ」字に横切る大溝を境に南側で遺構が少なくなる。南北方向の多数の溝は形状から耕作に関連するものと理解される。溝の方向は第1・2遺構面の耕作溝と明らかに異なり、正方位よりわずかに東にずれる（Ｎ－５～10°－Ｅ）ものである。柱穴群との関係については北調査区での層位（図版9ａ）および遺構の切り合い関係から耕作溝の方が新しい。

第2遺構面で検出した調査区東側を流れる南北自然河川はこの遺構面でもほぼ同じ位置で流れている。南調査区南東部の自然河川肩部では、奈良時代の多数の土器がまとまって出土している。いずれも完形品はなく破損品で、こわれた土器を廃棄したものと理解される。ここから、多数の製塩土器が出土している。

以下、主要な遺構について説明を行う。

井戸1（図版14～16・62）

南調査区の自然河川肩部に近いところで検出された。直径1.7mの平面円形を呈する。深さは約3mをはかる。井戸底は湧水層の灰色細砂層に達しており、調査中も常時激しい湧水が認められた。中央部で板材を組み合わせた井戸枠が遺存していた。井戸枠は方形に長い板材を縦方向に打ち込んで、さらに四隅に柱材を打ち込んでこの柱材に上下2段の横桟がわたされて板材の倒壊を防ぐような構造となっていた。しかし、検出時には、西側の側板は内側に倒れており、この部分の上部の横桟の角材も失われていた。側板は北側で4枚、東側で3枚、南側で2枚、西側で1枚とまちまちで、他の建築材を再利用したことがわかる。

北側と南側では側板の上部に横方向の板材が立てられており、この部分が露出して井筒として機能していたと考えられる。また、上部では板材を敷いた上に柱材が立てられており、井戸の上部構造として覆屋が存在したと推定される。

井戸枠内および掘形からの出土遺物は多くない。特筆すべきものに井戸枠内出土の漆塗りの木製櫛・墨書土器・ひょうたんがある。出土土器より平安時代前半（9世紀後半）の年代が与えられる。

灰土坑（図版63）

南調査区の北東部で検出された平面が隅丸の長方形を呈する浅い土坑である。埋土中に灰・焼土を含んでいた。同じ形態のものが2基検出されている。長さ1m、幅0.6m、深さ0.3mを測る。遺物は土器の細片が出土したのみで、遺構の性格も不明である。

祭祀遺構（図版17・63）

南調査区の北西部で検出された。不明瞭な浅い堀込み内に須恵器瓶子を横倒しにおさめ、その上に土師器杯を伏せて置いている。須恵器瓶子内には、合計20個の黄色の小石が入っていた。小石はいずれもチャートと思われ、一個あたりの直径1～2cm、重さ約2gである。平安京内では埋納遺構内にメノウを入れた例があり、これを模倣して黄色い石を使用したのではないかと推定される。こうした埋納遺構は、多くが建物の建設に伴う地鎮に関連する祭祀に伴うものと考えられ、本遺構も同様なものと理解される。出土土器より平安時代前半（9世紀末）の時期のものである。

柱穴

第3遺構面では、約1000個の柱穴が検出されている。はじめに述べたとおり、この中には第4遺構面に属すると考えられる古墳時代のものを含んでいる。出土遺物より大型で方形に近い掘形をもつものが奈良時代、直径30cm程度の小型で円形の掘形のものは平安時代の柱穴に大別できるようである。いくつかの柱穴には、柱根が遺存していた。これらの柱穴を利用した掘立柱建物の復原については、次章で行う。

4．第4遺構面（図版18～28・59）

第Ⅴ層除去後第Ⅵ層上面で検出された遺構面である。古墳時代初頭～後期の遺構を検出している。第Ⅴ層は、北調査区の東西自然河川より南調査区の東西大溝（溝32）にかけての調査地の中央部では薄く、このため上層の第３遺構面の柱穴が重複して検出されたものがある。検出された遺構は、自然河川・井戸・土坑・溝と多数の柱穴がある。

北調査区・南調査区の順に代表的な遺構の説明を行う。

北調査区

自然河川（図版20・64）

北調査区の中央部を東西方向に大きく蛇行して流れる。断面逆台形を呈し、幅４ｍ、深さ1.5ｍを測る。埋土は大きく２層に分層されるが、大部分が灰白色の砂層で一気に埋められている。底のレベルから東から西に流れていたと考えられる。底部近くで土器・自然木が出土している。土器の出土状況は小破片が広範囲に出土するというのではなく、１個体分の破片がまとまって数箇所で出土している。自然河川埋没後上面から古墳時代中期以降の柱穴が掘削されていること、出土土器は大部分が古墳時代初頭のもので須恵器が認められないことから、古墳時代初頭～前期に埋没したと考えられる。

井戸１（図版22・23・65）

北調査区北側で検出された古墳時代の井戸である。直径2.5ｍのやや歪な円形の掘形内に板材・丸太材を組んだ井戸枠が設けられていた。深さは2.2ｍを測り、井戸底は灰色粗砂層に達しており現在でも湧水が認められる。

井戸枠は上部を長さ1.2ｍ、幅20cm程度の板材、下部は同じ長さで幅10～15cmの丸太および丸太を半截したものを使用している。井戸枠上部に使用されている板材の中には閂（かんぬき）受けおよび軸となる小突起をもつ扉材を再利用したものが２枚含まれていた。このことから他の井戸枠材についても掘立柱建物等の建築部材を再利用した可能性が高い。井戸枠材は両端から約20cmの部分を上下に欠いて、それを井桁に組んで積み上げている。遺構調査中に土圧で井戸枠が崩壊したため、下部の状況は不明な点があるがおおむね11段に復原される。

検出面下0.2ｍに井戸枠の周囲に幅20cmの板材が敷かれており、この部分から上部が本来地表面にでていた可能性が高い。井戸枠内から板材が数枚出土しており、検出された井戸枠のさらに上部に１段程度の井筒があったと考えられる。覆屋のような施設については支える柱材および柱穴が未検出のため、存在しなかったものと思われる。

井戸枠の内法は一辺0.8ｍを測る。井戸枠内には暗灰色粘土が堆積していた。検出面下0.4ｍで小型の土師器甕が１個体ほぼ完形で出土している。また、井戸底で完形の須恵器壷が３個体出土している。須恵器壷はいずれも口縁部の一部が欠失していた。井戸底部分は埋土をすべてとりあげて遺物の採集を行ったが、この３点の須恵器壷の口縁部の破片は含まれておらず、井戸内に放り込まれる際にはすでに口縁部が欠失していたと考えられる。こうした口縁部の打ち欠きは、弥生時代以降各地で類例が数多く報告されている。こうした事例につい

ては土器を故意に使用不能とし儀器とするもので、祭祀行為に使用されたと理解されている。今回の事例についても井戸機能時か、井戸廃棄時かは不明であるが、何らかの井戸祭祀が行われた証拠として理解しておきたい。

井戸枠内および井戸掘形の埋土内からの出土土器から、井戸の使用された時期については古墳時代後期後半（6世紀末）に推定される。

土坑1（図版21・66）

北調査区の北西部で検出した東西方向に長軸をもつ楕円形の土坑である。西側の一部が調査区外にのびており未調査である。長軸は検出長4.5m、短軸は4mをはかる。遺構の深さは0.6mで二段掘りとなっており、底部はほぼ平坦である。埋土は大きく3層に分れ、第1層より多量の土器が出土している。土器の多くは破片で、完形に復元されるものは少なく、破損品を投棄したと推定される。

滑石製品の出土が想定されたため、土坑埋土を全て取り上げて水洗作業を行った。その結果、滑石製小玉のほか、金環・動物骨・種子・細片となった多量の製塩土器を得ることができた。遺構は、最終的にごみ捨て穴として使用されたと考えられる。

出土土器から、古墳時代中期末～後期初頭（6世紀前葉）の時期が与えられる。

南調査区

土坑3（図版26・27・67）

南調査区北側で検出された平面円形の土坑である。直径2.5m、深さ1.1mをはかる。埋土は4層に分層される。第1層の黒色粘質土層内に完形品を多く含む土器・獣骨が、投棄されていた。獣骨は遺存状態が悪く取り上げることができず、種の同定を行うことができなかった。

第1層出土土器のうち完形に復元された土器は、須恵器杯身1・有蓋高杯蓋1・壺1、土師器小型鉢2・甕3・高杯2の合計10点である。このうち、土師器高杯および甕2点の合計3点の土器に、焼成後の口縁部の打ち欠きが認められた。また、椀状杯部をもつ土師器高杯は赤色の粘土を塗布し、杯部内面にヘラミガキを施すもので、ていねいな作りの土師器小型鉢2点を含めて特殊な土器と考えられる。

これらの土器から土坑を埋める最終段階で祭祀行為が行われたと推測される。また、土師器小型鉢は、破損・摩滅のような使用痕がほとんど認められず、祭祀用に特別に作られた可能性がある。このほかのものにも、同様な祭祀用に特別に作られた土器があるのかも知れない。

第３節　出土遺物

１．土器（図版30～49）

古墳時代前期以前の土器（図版30・68，１～８）

第４遺構面自然河川を中心に、庄内式併行期と考えられる土器が出土している。（３・８）以外が自然河川出土である。

（1）は、甕の口縁部。口縁端部に面をもち、凹線文を２条施す。体部は外面に縦方向のハケメ調整、内面にヘラケズリを施す。形態・調整等より吉備系の土器と考えられる。上東編年の鬼川市2式[1]に比定されよう。ただし、胎土は流紋岩起源の砂粒含んでおり、吉備産のものではない[2]。

（２～４）は平底の底部を持ち、体部外面に右上がりの太筋のタタキ目の残る第Ⅴ様式系の甕である。（２・３）はゆるやかに外反する口縁部をもつ。（４）の口縁部は、中ごろに膨らみをもつ。体部外面は連続らせんタタキを施し、内面はヘラケズリ状のナデ調整を行う。河内型庄内甕の影響を受けたものであろうか。（３）は北調査区第Ⅴ層出土。

（５）は、胎土中に雲母・角閃石を多量に含む庄内河内型甕の底部。尖底状の小さな平底を呈す。外面は右上がりの細筋のタタキ目の上から荒いハケメ調整を施している。内面はヘラケズリが行われ、器壁は非常に薄くなっている。

（６）は、壷の底部。小さな平底を有するもので、外面はタタキ目の上からタテヘラミガキ、内面はヘラケズリの上からヘラミガキを施す。胎土中には石英・長石・雲母を含み、淡黄灰褐色を呈する。

（７・８）は、手焙り形土器。（７）は無文のもの。覆部と底部を欠く。口縁部は外反し、端部をつまみあげて小さな面をもたせる。内面はヘラミガキ調整を施す。胎土中に石英・長石を含み、淡灰褐色を呈する。

（８）は、覆部～体部に加飾を行うもの。口縁部は近江系甕・鉢と同様に受口状を呈する。文様構成は覆部が上から直線文・波状文・組紐文・直線文・組紐文・直線文、体部が列点文・直線文（不連続）・列点文・キザミ目文（突帯上）となっている。胎土中には石英・長石・雲母を含み、明茶灰色を呈する。北調査区第Ⅴ層出土。

古墳時代中期～後期の土器

南調査区第４遺構面土坑３出土土器（図版31・32・69，９～24）

（９・13・17～24）はほぼ完形で、土坑を埋め戻す際の祭祀に使用されたと推定される一括資料である。これ以外に破片で出土した須恵器杯・蓋も同時期のものと考えられる。

須恵器（９～17）には、杯蓋（10～12）・杯身（13～16）・高杯蓋（９）・壷（17）・瑳

がある。杯身（13～16）は口径10～11cm、器高4.5～5.0cmで口縁端部に凹面を持つ。受け部はシャープに作っている。杯蓋（10～12）・高杯蓋（９）は口径12cmで稜を明瞭に作り出す。壷（17）は、直口のもの。底部は細筋の平行タタキ目が残っている。口縁部から体部にかけて沈線文・櫛描波状文が施される。

杯身・蓋の特徴から田辺昭三氏の編年[3]のＴＫ23型式、中村浩氏の編年[4]のＩ型式４段階に属する。

土師器（18～24）は、小型鉢（18・19）・甕（20～22）・高杯（23・24）がある。小型鉢（18・19）はいずれも精良な胎土をもつ。体部下半部にハケメ調整を施す。（20）は内彎気味の口縁部をもつ布留系の甕で理解できよう。口縁端部は面をもち、内側への肥厚はない。体部内面のヘラケズリも施されない。（21）は口縁部が外反する小型品。（22）は、器壁が厚く、平底上の底部をもつもの。韓式系土器の系譜で理解されるものであろう。

（23）は椀状の杯部をもつ高杯である。杯部内面には放射状の暗文が施される。胎土は雲母・角閃石を含み、暗褐色を呈する生駒西麓産のものであるが、上から赤色の精良な粘土を塗布している。（24）は屈曲して立ち上がる杯部をもつ布留系の高杯である。杯部内外面の調整はナデである。

初期須恵器（図版30・69，25～32）

大阪府教育委員会の調査では遺構および自然河川内の遺物包含層から韓式系土器・陶質土器・初期須恵器がまとまって出土している。今回の調査では、当該期と考えられる遺構は不明で、包含層等から少量の韓式系土器・初期須恵器が出土している。韓式系土器は格子叩き目を施す平底鉢底部の小片で図化していない。図化した初期須恵器の主要なものを掲載する。なお、初期須恵器については、定型化する以前のものとし、田辺編年ＴＫ216型式および中村編年Ｉ型式２段階以前のものとする。

（25）は、加飾された蓋。天井部に２帯の櫛描列点文、口縁部に櫛描波状文が施されるほか、稜部にも櫛原体による刺突文が施される。また、天井部にも縦に３孔の小刺突が施される。

（26）は口径11cm、器高4.3cmを測る小型の蓋。稜は丸みをもって上方に突出する。天井部は回転ヘラ削り調整。

（27）は、杯身。体部は厚みをもつもので、受け部は水平に突出する。田辺編年のＴＫ－216型式、中村編年のＩ型式２段階に属する。

（28）は、瓿。口縁部を欠失する。肩部に張りのある体部をもつ。肩部に櫛描波状文とヘラ描き沈線を施す。

（29）は、直口の壷形土器の口縁部。非常にシャープな作りで、鋭い突線間に櫛描波状文を施す。焼成は良好で、セピア色を呈する。

（30）は、口縁部を欠失する壷。短頸壺になるものと推測される。体部中位に４条の沈線

が巡り、沈線間に櫛描波状文が施される。底部は不整方向のナデ調整。

（31）は、大型の甕の口縁部。口縁部直下に鋭い突線が巡る。調整はていねいなナデである。

（32）は、高杯の脚部。脚端部は上方に突出し、面をもつ。3方向に三角形の透孔があけられる。

北調査区第4遺構面土坑1出土土器　（図版33～35・41・46・47・70～72・78）

土坑の埋土から遺物収納箱で5箱程度の土器が出土している。このうち大部分の土器は破片で出土しており、接合して完形になるものは少ない。また、土坑上面からは6世紀後半の土器が出土しており、取り上げ時に一部が土坑1埋土出土土器と分離できず、一緒になったものがある。

土師器（33～41）には、椀（33・34）・鉢（35）・甕（36～40）・甑（41）がある。

椀（33・34）は、器壁が厚く粗雑な作りである。（33）は手づくねで、（34）は外面に粘土の接合痕が残る。

鉢（35）は丸底の体部に短く外反する口縁部をもつ。口縁端部は内側に小さくつまみあげられる。器壁は薄く、内外面ていねいなナデ調整を施す。胎土は精良なもので、上から橙灰色の粘土を塗布している。

甕（36～40）は小型品（36～38）と長胴の大型品（39・40）がある。（36）は体部外面に細いハケメ、（37）は荒いハケメを施す。（38）は器壁が厚く、内面に粘土の接合痕が明瞭に残る。体部外面の調整は器表面の風化のため不明である。（39・40）は長胴の大型品である。口縁部は外反し、端部は丸くおさめられる。体部外面の調整は縦方向のハケメ、内面はナデ調整である。内面には一部に粘土の接合痕が認められる。

甑（41）は、外面ハケメ調整を施すもの。底部は丸底で、中央1孔、周辺5孔の蒸気孔を有する。把手は厚みのない扁平なものである。内面はナデ調整であるが、接合痕が残る部分がある。

須恵器には、杯蓋（42～48）、杯身（51～62）、高杯蓋（49・50）、瑞（63）、高杯（64～71）、甕（72・73）がある。

杯蓋・高杯蓋（42～50）は口径11～12.5cmにおさまる。稜の明瞭なもの（42～44・49）と稜が不明瞭なもの（48）や消失したもの（50）がある。天井部の形態もバラエテイが認められる。

杯身（51～62）には口径10～11cmのものが主体である。口縁端部は凹面を持つものが多いが、丸くおさめるもの（52）も認められる。これらは、杯蓋と対応するもので、田辺編年ＴＫ47～ＭＴ15型式・中村編年Ⅰ型式5段階～Ⅱ型式1段階に属する。（51）は田辺編年ＴＫ216～208型式・中村編年Ⅰ型式2～3段階のもので、混入品である。また、（60～62）は口径12cmを越えるもので、田辺編年ＴＫ10型式・中村編年Ⅱ型式2段階以降に比定される。

これらも後述する上面で検出された土器群からの混入品として理解すべきと考えられる。

瓻（63）は、口縁部を欠失する。体部下位の外面には細筋のタタキ目が残る。頸部に櫛描波状文が施される。

高杯（65～71）には無蓋のもの（64・65）と有蓋のもの（66～68）がある。（64）は加飾の行われる大型品で、突線と櫛描波状文が施される。突線は丸みをおび、シャープさを失っている。（65）は、杯蓋を反転したものを杯部とした小型品。脚部は端部に面をもつもので、中位に円形の透孔が3方向にあけられる。有蓋高杯（66～68）は口径10～11.5cmで、杯身に準じた法量である。脚部は、方形の透孔が3方向にあけられる。（70）は2条の突線が巡る脚部で、古い時期のものの混入品の可能性がある。

甕（72・73）には、口縁部に突線を持つもの（72）と口縁部を丸くおさめるもの（73）がある。（73）は体部上半部にカキメ調整が、内面には当て具痕の上からナデ調整が施される。

製塩土器（74～80）は、遺物収納箱に1箱程度の量が出土している。（74～80）は、高さ7～8cmのコップ形の形態で、底部は小平底を呈する広瀬和雄氏の分類[5]の丸底Ⅰ類に属するものである。器壁は非常に薄い。体部外面はタタキ目のものとナデ調整のものがある。両者の比率はおおむね1：1か外面タタキ目のものがわずかに多いぐらいである。

（80）は、口径10.8cm、器高4.7cmの小型の椀状のもので、丸底Ⅱ類に属する。丸底Ⅱ類と考えられる破片は極めて少ない。（60～62）同様に後述する上層土器群に伴う可能性がある。

移動式かまど（183・184）は、土師質で釜口部分がドーム形の天井部となるもの（183）と水平な天井部となるもの（184）が存在する。

ドーム形天井をもつもの（183）は、器壁が厚く天井部直下に埴輪のような突帯が巡る。ひさしは付けびさしの形態で裾部まで巡っているものと復原される。中位に1対の杓子状の把手が上向きに着けられている。把手は丁寧な調整が施されておらず、全体にごつごつした作りである。中央部に韓式系土器の甑・鍋の把手に見られるような切り込みが入れられている。体部外面は縦方向のハケメ調整。胎土中には赤色塊が含まれている。色調は橙灰色を呈する。

同様な形態のものとして、大阪府堺市伏尾遺跡[6]・福岡県八女市立山山埴輪窯跡[7]出土資料が知られている。伏尾遺跡出土のものは器壁が薄く、外面には細筋のタタキ目が観察される。共伴土器から5世紀後半のものと考えられ、今回出土のもの（6世紀初頭）より古い。今回出土のものは、胎土や調整・突帯の形状が埴輪に似ており、製作地・製作者を暗示させる資料である。

水平な天井部を持つもの（184）は、外面に細筋のタタキ目を施す。上位に1対の把手が下向きに付けられている。接合できなかったが上部のひさしの破片があり、水平に張りだす付けびさしが付けられていたものと推測される。胎土は雲母・角閃石を含み暗灰褐色を呈す

るいわゆる「生駒西麓産」のものである。同様な形態のものとして、大阪府東大阪市神並遺跡[8]・鬼虎川遺跡[9]出土のものがある。いずれもいわゆる「生駒西麓産」の胎土をもつもので、5世紀後半～末の土器と共伴している。

このほか、後述する用途不明土製品（図版49－190）が出土している。

北調査区第4遺構面土坑1上面出土土器（図版36・73，85～97）

土坑1上面検出時にまとまって出土した土器である。一部は、土坑1出土土器と混在しており、ここでは明らかに土坑1出土土器より新しい時期のものと理解される須恵器を抽出した。

杯蓋（85～88）は口径13cm以上のもの。稜は失われており、凹線が1条巡るだけとなっている。凹線の無いもの（87）もある。

杯身（89～96）は、杯蓋に対応する口径13cm以上のものと（96）のような口径10.5cm、器高3cmのものがある。後者は7世紀まで時期の下がるものである。

甕（97）は、口径30cmを越える大型品。頸部には2条1組の沈線文が2帯、ヘラ描きの斜め沈線が施されている。体部内面には同心円の当て具痕が明瞭に残っている。

北調査区第4遺構面井戸1出土土器（図版32・73，81～84）

井戸底より須恵器長頸壺3個体（81～83）、井戸枠内上層より土師器甕1個体（84）が完形品で出土している。須恵器長頸壺は、いずれも焼成後の打ち欠きが認められる。

（81）は本来、脚台の付くもの。脚台部が破損後、この部分を打ち欠いて整形して脚台部のない状態で使用されていたと考えられる。体部中央は、2条の沈線間を刻み目で充填する。体部下半は回転ヘラ削り調整。

（82・83）は肩部に2条の沈線を施す。（83）は頸部にも2条の沈線を施す。体部下半は、回転ヘラ削り調整。

（84）は、小型の土師器甕。直口の口縁部に平底状の体部をもつ。外面は細かいハケメ調整を施す。

包含層出土須恵器（図版36・73，98～100）

（98）は無蓋高杯。杯部には2条の突線と櫛描波状文が施される。脚部は端部を折り曲げて面を作るもので、3方向に長方形の透孔があけられる。田辺編年ＴＫ23型式・中村編年Ⅰ型式4段階に比定される。

（99）は有蓋高杯。脚端部は大きく下方に曲げられる。田辺編年ＭＴ15型式・中村編年Ⅱ型式1段階に属するものであろう。

（100）は提瓶。口縁部は外反し端部は面をもつ。把手は鈎状のものである。田辺編年ＴＫ10型式・中村編年Ⅱ型式2段階前後のものであろう。

用途不明土製品（図版48・49・79，185～189）

厚さ1～2cmの板状の土製品である。表・裏面ともに平滑に仕上げられており、側面も

平坦な面をもっている。表面と考えられる側には幅1.5～2cm・高さ1.5cmの突帯が平行して二帯貼り付けられており、突帯の上面も平坦な面をもっている。先の府道部分の大阪府教育委員会の調査でも、同様の土製品が出土しており、「用途不明土製品」として報告されている。今回の調査では、小片を合わせると15点出土しており、このうち5点を図化した。

(185)は、先端部と考えられる破片である。基部に近いところ(実測図では上部)で、緩やかにカーブしている。先端部の幅は5.5cmを測る。突帯は先端部で1.5cm、基部のほうで5.5cmの間隔で取り付けられている。内側の突帯は側面に接しているのに対し、外側のものは若干隙間をあけて取り付けている。裏面はナデ調整によって平滑に仕上げられている。基部に近い部分の内側を中心に二次的に火を受けたような変色部分が観察される。また、この外側には薄く煤の付着が認められる。南調査区第Ⅴ層出土(図版29d)。

(186)は、(185)の逆方向にカーブする破片である。基部に近い部分で7cm、先端に近い部分で5cmの間隔で突帯が取り付けられている。(185)同様に内側は側面に接して、外側は若干隙間をあけて取り付けられている。外縁部は突帯の取り付け時の調整のためか丸みをもっている。裏面には薄く煤の付着が認められる。(185)と同じ場所・層位で出土している。

(187)・(188)は、基部と考えられる破片である。(187)は右下端部が6×4cmに切り込まれている。抉られた部分は、突帯張り付け後に鋭利な工具で切り取られて成形されている。突帯は7cmの間隔で取り付けられているが、(185)・(186)の突帯の取り付け方を参考にすると、左側が内側、右側が外側と推定される。このことは裏面で内側と推定される部分が明茶褐色に変色していることからも裏付けられる。(188)は抉られた部分で折れた破片である。(187)同様に左側が内側で、外側に切り込みがされたものと復元される。表面には縦方向のナデ調整痕が明瞭に残っている。裏面から左側面(内面)にかけて淡赤褐色に変色している。(187)は(185)と一緒に出土しており、同一個体と考えられる。(188)は、南調査区第4遺構面土坑4出土。

(189)は、突帯をもたない板状の土製品である。実測図では上部が(188)のような切り込みをもつ基部と考えられる。図上では左側が表面、右側が裏面になると推定される。裏面の調整は縦方向のナデ調整の後、横方向のナデ調整が加えられる。裏面の中央部に薄く煤の付着が観察されるが、顕著な変色部分は認められない。南調査区第4遺構面土坑4出土。

以上の土製品は、いずれも胎土中に角閃石・雲母を多量に含む、いわゆる「生駒西麓産」の胎土をもつものである。

この土製品については未だ全体の形状が判明せず、その用途を確定することは困難である。ただし、これまでの出土品からいくつかの特徴をあげることができる。

1)南調査区第4遺構面土坑4出土のものがあることから、この土製品が古墳時代中～後期のものであることが判明した。

2）厚みが、1cm以上ある。同様の厚みをもつものは、古墳時代の土器には無く、移動式かまどあるいは埴輪をあげることができる。

3）片面（裏面）から火を受けた痕跡が認められ、そうした用途に用いられたものと推測される。火に当たった部分が全面で無く、カーブの内側の部分を中心に認められることも、使用法を考える上で示唆的である。

4）胎土が、すべていわゆる「生駒西麓産」のものである。長保寺遺跡では古墳時代中期以降に同様な胎土をもつ土器・土製品は、移動式かまど・羽釜にほぼ限定される。

以上の特徴から、この土製品は、移動式かまどと関連をもつもので、炊飯行為に利用されたものではないかと考えられる。想定されるものとしては、組立式の移動式かまど・かまどの焚き口あるいは釜口部分をあげておく。用途不明土製品は長保寺遺跡以外での出土を聞かず、このことが遺物の解明の最大の障壁となっている。今後、類例の増加を待って、再検討し用途の確定を試みたい。

奈良時代の土器

南調査区第3遺構面自然河川肩部土器群出土土器（図版37・74，101～136）

奈良時代の代表的な資料として、南調査区の自然河川の西肩部の第Ⅳ層で出土した土器をあげておく。出土量は遺物収納箱で10箱程度である。土器は完形に復元されるものが少なく、破損品を投棄したものと理解される。土器は古墳時代のものが若干混じるが、おおむね奈良時代のものとしてまとまりをもつものである。このうち椀・杯・皿類を中心に図化を行った。

須恵器（101～115）には杯、蓋、壷がある。杯（101～113）は平城分類[10]の杯A（101～108）、杯B（112・113）、杯E（109～111）がある。杯Aは、口径12cm前後のもの（平城分類の杯A－Ⅳ）と14cm前後のもの（杯A－Ⅲ）に分類される。（112）は、底部外面に爪形状圧痕が観察される。圧痕は、國下多美樹氏の分類[11]のHｓ類に属する。（111）は内面全体および外面上部に黒色物質が塗布されている。

土師器（116～136）には杯（116～125）、椀（126～133）、皿（134～136）がある。平城分類の杯A（120～125）、杯C（116～119）、椀C（126～130）がある。椀（131～133）は、椀Cに分類されるものであろうか。皿（134～136）は、口径20cmを越える皿A（135・136）と口径17cm程度の皿B（134）がある。杯・皿では内外面のヘラミガキ調整を施すものが減少する。一方、外面をヘラケズリ調整（平城ｃ手法）するものは見られない。

これらの土器は、土器の法量や調整手法より平城Ⅲ～Ⅳの時期[12]に比定される。

製塩土器（図版42～45・77，171～182）

今回の調査では、奈良時代の遺物収納ケース約5箱の製塩土器が出土した。製塩土器はすべて焼塩用と理解されるものである。このうち約3箱が自然河川肩部土器群出土で、他は第Ⅳ・Ⅴ層出土である。土器の大半は細片の形で出土しており、接合・図化できるものは少な

い。(171～179) が自然河川肩部土器群出土、(180～182) が包含層出土である。

図化したもののロ径より、15cm程度の大型品 (171～173・180)、12cm程度の中型品 (174・175)、9～10cm(176～179・181・182) の小型品に分類される。また、ロ縁部の形態より、端部を尖り気味にするもの (1類、171～176・180)、ナデ調整により上端部に面をもつ厚手のもの (2類、177・178・181)、未調整の外傾する面をもつもの (3類、179・182) に分類される。このうち3類は例外無く内面に布圧痕が認められる (図版43)。1・2類の器表面の調整は、ナデあるいは指オサエである。内面をハケメ調整するもの (図版44) は、ほとんど見られない。

胎土に含まれる砂礫より、角張った砂礫を含むもの、角の丸い砂礫を含むもの、砂粒をほとんど含まず籾・藁を含むもの (図版44) がある。また、砂礫の鉱物組成や大きさ・量にも違いが認められる。

こうした形態・調整・胎土の違いは製塩土器の生産地の違いを示すものであり、長保寺遺跡に運びこまれていた塩が複数の生産地から供給されていたことを、裏付けるものである。

平安時代の土器 (図版75)

南調査区第3遺構面井戸1出土土器 (図版75, 137～142)

井戸枠内より出土した土器は、遺物収納ケース1箱程度と小量で図化可能なものは提示したものぐらいである。

黒色土器杯 (140) は、内面黒化処理したA類で、有高台の杯B形態である。内面は細かいヘラミガキ調整が施される。外面はヘラ削り調整。ロ径14.8cm、器高4.3cmで、器高指数29である。

土師器杯 (137～139) には、深手の椀形態のもの (137) と浅手の皿に近いもの (138・139) がある。ロ縁部は横ナデ調整が施されている。(139) は底部外面に墨書が施されている。文字は欠失して完全ではなく、判読不明である。

土師器甕 (141) は、肩部に稜をもつものである。

土師器杯は平尾政幸氏の編年[13]の平安京Ⅱ期中に比定される。9世紀後半の年代観が得られる。

南調査区第3遺構面祭祀遺構出土土器 (図版38・75, 143・144)

土師器杯 (143) は無高台のもの。ロ径15cm、器高4cmをはかる。高柳遺跡90－2区土器群[14]の主体をなすもので、平安京Ⅱ期新に属すると考えられる。

須恵器瓶子 (144) は、京都篠窯産と考えられるもの。ロ縁端部は、折り曲げられ横ナデによって面を作る。伊野近富氏の編年[15]の篠G期 (西長尾3号窯) に属するものであろう。

包含層ほか出土土器 (図版38・75, 145～152)

今回の調査では包含層等から緑釉・灰釉陶器等がまとまって出土している。

（145）は、北調査区第３遺構面土坑１出土の土師器杯。（142）と同形態のものである。

（146）は、南調査区第Ⅳ層出土の回転台土師器あるいはロクロ土師器と呼ばれるもの。体部外面には回転ナデによる段が認められる。瀬戸内地域からの搬入品と考えられる。

（147）は、南調査区第３遺構面Ｐ－243出土の土師器甕。体部外面は指頭圧痕が残り、肩部に稜線を持つものである。類例は、中・南河内地域に出土例が多い。

（148）は、南調査区第Ⅳ層出土の灰釉陶器皿。高台は断面台形を呈する。内面に全面施釉を行う黒笹14号窯式[16]に比定されるものである。

（149・150）は、灰釉陶器手付瓶（小瓶）である。猿投窯・黒笹90号窯式のものであろう。いずれも南調査区第Ⅳ層出土。

（151）は、緑釉陶器椀である。底部は削り出しの蛇の目高台である。焼成は硬質で、底部外面まで全面に施釉がされている。釉薬は、黒灰緑色に変色している。京都洛西窯産のものと考えられる。南調査区第２遺構面土坑１出土。

（152）は、口縁部内面および見込み部に陰刻の花文が施された緑釉陶器である。口径18.8cm、器高6.2cmと大振りの器形に高い高台が貼り付けられる。体部は底部外面までていねいにヘラミガキが施された上から、全面に施釉が行われている。釉調は、ややくすんだ黄緑色を呈する。猿投窯・黒笹90号窯式[17]のものであろう。

墨書土器（図版40）

今回の調査では５点の墨書土器が出土している。

（１）は、奈良時代の須恵器杯底部に「道祖」と書かれたもの。南調査区包含層（第Ⅳ～Ⅴ層）出土。

（２）は、奈良時代の須恵器杯蓋底部に２ヶ所の墨書が観察される。判読不明。南調査区包含層（第Ⅳ～Ⅴ層）出土。

（３・４）は、土師器杯底部に書かれたもの。（４）は南調査区第３遺構面井戸１出土（図版75－139）、（３）は南調査区第３遺構面南北耕作溝出土。文字は部分のため判読不明であるが、字形から同一の文字が書かれたものと思われる。

（５）は、須恵器壺の底部に「一王」と書かれている。文字ではなく記号の可能性もある。北調査区包含層出土。

中世（平安時代後期～末）の土器（図版76）

北調査区第２遺構面土坑１出土土器（図版39・76，153～157）

土師器皿（153・154）は、口径9～9.5cm。口縁部は横ナデが施されるが、「て」の字状となるものはない。

瓦器椀（155～157）は、口径15.5cm、器高6.4cmで、器高指数は41である。口縁部内面

には沈線が巡る。体部内外面に密なヘラミガキを施す。見込み部のヘラミガキは格子のもの（155）、鋸歯状のもの（157）がある。川越俊一氏[18]の大和Ⅰ－B型式、近江俊秀氏[19]の大和型1－1～2期、橋本久和氏[20]の楠葉型Ⅰ－2期に比定できよう。

北調査区第2遺構面井戸1出土土器（図版39・76，158～161）

瓦器椀（158～161）のうち、（158・159）は井戸底で出土している。（158）は口径15.7cm、器高6.2cmで、器高指数39である。体部中位に右上がりの粘土接合痕が、認められる。外面の調整は土坑1よりやや雑になる。見込み部はジグザグのヘラミガキ。

（159）は、口径15.5cm、器高6.0cmで、器高指数は38.7である。口縁部は横ナデによって稜をもつ。底部外面には放射状のナデが観察される。外面のヘラミガキはさらに雑になる。見込み部のジグザグのヘラミガキも簡略化している。

（160・161）は底部の破片である。（160）にはジグザグの、（161）には格子のヘラミガキが見込み部に施される。（160）の内底面中央には、渦巻き状の工具痕が観察される。

以上の瓦器椀は、土坑1より新しい様相をもつものである。川越氏の大和Ⅰ－C～D型式、近江氏の大和型1－3期、橋本氏の楠葉型Ⅰ－3期で理解される。

土師器羽釜（162）は、口縁端部を内側に折り曲げる菅原正明氏の分類[21]の大和B型に属するものである。

その他の遺構・包含層出土土器（図版38・39・76，163～170）

以下の土器も、北調査区の第Ⅳ層上面（第2遺構面）の台状部の中世遺構群で出土している。

（163～165）は、土師器小皿。（163）は土坑3、（164）は柱穴P－7、（165）は土坑6からそれぞれ出土している。

（166）は、土坑3出土の土師器大皿である。口径14.5cm、器高2.5cmをはかる。

（167）は、土坑5出土の「て」の字状口縁の土師器小皿である。口径9.4cmをはかる。

（168）は、土坑6出土の瓦器小皿。口径9.5cm、2.8cm。内面にはジグザグのヘラミガキが密に施される。

（169）は、瓦器椀。口径15.5cm、器高6.0cmで台形の高台をもつ。外面のヘラミガキ調整は比較的荒い。見込み部のヘラミガキはらせん状を呈する。川越編年の大和Ⅱ－A型式、橋本編年の楠葉型Ⅱ－1～2期のものであろう。土坑3出土。

（170）は北調査区井戸2出土の土師器羽釜である。直口の口縁部の下に若干下がり気味に鍔が付く菅原分類の摂津E型に属するものである。口径27cmをはかる。内外面の調整はていねいなナデである。

2．玉類

子持勾玉（図版50・80）

北調査区北側の第Ⅴ層出土。全長10.2cm、本体部の幅3.1cm、厚さ3.5cm、重さ220ｇをはかる。材質は滑石である。頭・尾部の両端は面をもつ。背部に３個、腹部に１個、両側部に３対の頂部が山形の突起が作り出される。このうち背部と腹部の各１個が欠失している。大平茂氏の分類[22]のＡ型１類に属する。

頭部には、直径６mmの紐穴のほか、２対の直径２mmの小孔があけられている。また、頭頂部には横方向に沈線が刻まれている。これらの小孔と沈線は目・鼻・口等の顔の表現を行ったものと推測される。同様な表現を行った子持勾玉には京都府山開古墳[23]・岐阜県美濃加茂市大患寺[24]出土のものがある。

本例は、遺物包含層出土で明確な共伴土器が無いため、厳密な時期を比定することができない。本体断面の幅・厚さの比率は、1.0で大平氏の編年では０型式に属するもので、古墳時代中期以前にさかのぼる可能性がある。

勾玉（図版51ａ・81，１・2）

滑石製の扁平な板状のものが２点出土している。

（1）は、全長5.6cm、幅2.5cm、厚さ0.8cm、重さ22.5ｇをはかる。頭・尾部の両端部を欠失する。頭部に直径２ｍｍの紐孔があけられている。淡緑色を呈する。南調査区第４遺構面溝32出土。

（2）は、全長3.5cm、幅1.6cm、厚さ0.5cm、重さ7.4ｇの小型品である。頭部に直径２mmの紐孔があけられている。淡緑色を呈する。北調査区第Ⅳ～Ⅴ層出土。

管玉（図版51ａ・81，3）

直径0.9cm、長さ2.6cm、重さ4.7ｇをはかる。石材は碧玉で、濃緑色を呈する。直径３mmの紐孔が両面からあけられる。南調査区第Ⅴ層出土。

土玉（図版52ａ・81，4）

直径0.7cm、長さ0.65cm、重さ0.3ｇをはかる。直径0.3cmの紐孔があけられる。土製で黒灰色を呈する。北調査区第Ⅳ層出土。

臼玉（図版51ａ・81，5～21）

北調査区土坑１から17点が出土している。これらは全て遺構埋土を水洗して検出したものである。全て滑石製である。直径は3.0～5.5mmで平均4.5mm、厚さ1.5～4.0mmで平均2.8mm、重

No	直径(mm)	厚さ(mm)	重さ(g)
5	5.0	4.0	0.13
6	4.5	3.0	0.10
7	4.5	3.0	0.09
8	4.0	2.0	0.07
9	5.0	3.0	0.13
10	4.5	3.5	0.11
11	5.0	3.0	0.12
12	4.5	2.0	0.06
13	5.5	3.0	0.17
14	3.0	3.0	0.05
15	4.5	3.0	0.11
16	4.0	2.0	0.05
17	5.0	2.0	0.07
18	5.0	3.0	0.12
19	4.0	3.0	0.09
20	4.0	3.5	0.11
21	4.0	1.5	0.05

第２表　滑石製臼玉法量表

さ0.05ｇ～0.17ｇで平均0.1ｇをはかる。紐孔の直径は２ｍｍ程度である。両端部の切断部は研磨が加えられていない。

３．紡錘車（図版52ａ・81，22～25）

滑石製（22～24）と土製（25）の４点が出土している。

（22）は、扁平な円盤形を呈する。直径4.8cm、厚さ1.0cm、重さ32.2ｇをはかる。直径0.8cmの孔があけられている。両面ともていねいな研磨がおこなわれている。頂部の孔のまわりには幅0.3cmの摩滅した部分が観察される。濃緑色を呈する。北調査区第４遺構面上面出土。

（23・24）は、断面台形を呈する。（23）は、直径4.0cm、厚さ1.7cm、重さ31.6ｇをはかる。全体に風化しており、特に周縁部は破損が著しい。中心に直径0.7cmの孔があけられる。淡灰色を呈する。北調査区第Ⅳ層出土。（24）は、直径5.3cm、厚さ2.2cm、重さ78.8ｇをはかる。中心部に直径0.8cmの孔があけられる。外面は刀子状の工具で削って形を作った後、横方向に研磨を加えて仕上げている。濃緑色を呈する。北調査区第４遺構面上面出土。

（25）は、扁球形の土製品である。長径4.0cm、短径2.5cm、重さ34.0ｇをはかる。中心部に直径0.8cmの孔があけられる。胎土中に石英・長石を含み、淡灰褐色を呈する。北調査区第２遺構面北側小溝群出土。

４．有孔円盤（図版51ｂ・82，27～33）

双孔の滑石製品が、７点出土している。

（27～32）は、直径2.2cm程度の小型品である。周縁部は欠失しているものが多いが、（27・29・31）は研磨痕が認められる。

（33）は、直径3.5cm、重さ9.1ｇを測る大型品。

No	直径(cm)	厚さ(cm)	重さ(ｇ)	孔間距離(cm)	出土遺構
27	2.5	0.4	3.7	0.6	南調査区第３遺構面Ｐ－164
28	2.2	0.35	1.9	0.8	南調査区第３遺構面溝48
29	2.0	0.4	2.6	1.0	南調査区第４遺構面上面
30	2.0	0.2	1.5	0.7	南調査区第４遺構面落ち込み
31	2.4	0.3	3.8	0.9	北調査区第３遺構面溝34
32	2.1	0.4	2.6	1.2	北調査区第４遺構面上面
33	3.5	0.5	9.1	1.7	北調査区第４遺構面Ｐ－120

第２表　有孔円盤法量表

5．用途不明石製品（図版51・81・82，26・34）

（26）は先端部を尖らせ、20面体に面取りをした滑石製品。基部は欠失しており、全体の形状がどのようなものであるかは不明である。また、完成品であるか、未製品であるかも不明である。現存の長さ5.7cm、幅4.4cm、重さ97.4ｇをはかる。北調査区第４遺構面上面出土。

（34）は、一端を欠失する板状の石製品である。現存の長さ6.5cm、幅3.6cm、厚さ1.0cm、重さ40.1ｇをはかる。端部に直径４ｍｍの孔があけられる。石材は片岩系のものと思われる。北調査区第Ⅴ層出土。

6．砥石（図版53・１～９）

（１）は、表・裏面と上面の一部を除いて欠損している。現存長11cm、現存幅11cm、厚さ６cm、重さ102ｇをはかる。灰色の砂岩製である。南調査区第４遺構面土坑４出土（古墳時代）。

（２）は、上・下部を欠損する以外が、遺存している。側辺部分は研磨が加えられて角が無くなり、断面は不整な六角形となっている。現存長９cm、幅12cm、厚さ4.7cm、重さ953ｇをはかる。灰色の砂岩製である。北調査区第Ⅳ層出土。

（３）は、表・裏面および左側面が遺存している。裏面と左側面は未使用と思われる。現存長13.5cm、現存幅8.5cm、厚さ2.5cmで、厚みがない。重さは470ｇをはかる。灰緑色を呈する。石材は、変成岩と推定される。南調査区第Ⅳ層出土。

（４）は、上部のみが、欠損している。表・裏・両側面とも使用されている。特に表面は、凹みが著しい。現存長９cm、幅3.5cm、厚さ3.5cm、210ｇをはかる。白色の凝灰岩製である。北調査区第Ⅳ～Ⅴ層出土。

（５）は、下部が欠損している。両側面はほとんど使用されておらず、表面の凹みも著しくない。現存長8.5cm、幅４cm、厚さ4.7cm、重さ355ｇをはかる。黄白色の凝灰岩製である。南調査区第Ⅳ層出土。

（６）は、上・下部を欠損する。表・裏・両側面の４面が、ともに使用されているが、特に表・裏面の凹みが著しい。現存長7.9cm、幅4.5cm、厚さ3.5cm、重さ223ｇをはかる。灰色の砂岩製である。南調査区第Ⅳ層出土。

（７）は、小型の手持ち砥石である。断面は、平行四辺形状を呈する。裏面の大部分を欠損するが、各面とも部分的に遺存している。６面ともに研磨が加えられている。長さ5.2cm、幅４cm、厚さ2.3cm、重さ60ｇをはかる。黄灰白色の凝灰岩製である。南調査区第Ⅳ～Ⅴ層出土。

（8）も、小型の手持ち砥石である。下部が欠損している。表・裏・両側面ともに使用されているが、特に表面の凹みが著しい。現存長3.2cm、幅1.2cm、厚さ1.6cm、重さ15ｇをはかる。黄白色の凝灰岩製である。南調査区第４遺構面溝37出土（古墳時代）。

（9）は、薄い板状の小型品である。上部が欠損している。表面と右側面が研磨されているが、それ以外はあまり使用されていない。現存長４cm、幅３cm、厚さ0.6cm、重さ15ｇをはかる。灰白色の凝灰岩製である。南調査区第Ⅳ～Ⅴ層出土。

７．軽石（図版53・10～12）

（10）は、長さ5.0cm、幅4.5cm、厚さ2.5cm、重さ８ｇをはかる。下面は平滑で、上部は研磨を受けたためか丸みをおびている。北調査区第４遺構面Ｐ－129出土。

（11）は、長さ7.5cm、幅4.5cm、厚さ2.0cm、重さ19ｇをはかる。表・裏・右側面と下部が遺存している。下部は、丸みをおびる。北調査区第Ⅳ～Ⅴ層出土。

（12）は、長さ5.0cm、幅5.0cm、厚さ3.0cm、重さ10ｇをはかる。表面および下部が遺存しており、それ以外の部分は欠損しているものと推定される。表面には鋭い刻線が観察される。北調査区第Ⅳ～Ⅴ層出土。

これらの軽石は、使用方法が不明であるが、研磨されている面をもつことから、砥石のように使用された可能性がある。

８．金属製品（図版51ａ・82，35）

金環（35）は、北調査区第４遺構面土坑１出土である。埋土を水洗した際に検出した。大きさ1.9cm、厚さ0.4cm、重さ4.2ｇをはかる細身のものである。鍍金部分は大部分が剥落して、銅の芯の部分がむきだしとなっている。

９．木製品

木製品には、北調査区第４遺構面井戸１（古墳時代）・南調査区第３遺構面井戸１（平安時代）の井戸枠材・櫛、古墳時代～奈良時代の柱根がある。ここでは、櫛と北調査区井戸1の井戸枠材として再利用されていた扉を資料化した。

櫛（図版52・82，36）

南調査区第３遺構面井戸１の井戸底から出土した。長さ10.5cm、幅4.0cm、厚さ1.0cmをはかる。大きく２つに折れており、櫛歯も中央部を中心に失われている。櫛歯の本数は、本来88本であったと復元される。櫛歯は長さ3.4cm、最大幅0.9cmである。全面に黒漆が塗

布されている。井戸枠内出土の共伴土器から平安時代前半（９世紀後半）の時期があたえられる。

扉（図版54・83，１・２）

北調査区第４遺構面井戸１の井戸枠に再利用されていた。（１）は、全長120cm、残存幅20cm、厚さ5.0cmをはかる。上下の扉軸が遺存している。扉軸は直径6.0cmをはかる。中央に閂受けの部分を作り出している。閂受けの上部は欠損している。

（２）は、上下も切断されていて軸の部分は遺存していない。残存長104cm、残存幅15cm、厚さ５～６cmをはかる。中央部に閂受けが作り出されているが、上部は大部分が欠損している。

（１・２）ともに、他の井戸枠材同様に井戸枠として再利用する際に、組み合わすための抉りがほどこされている。

10．窯体片（？）（図版55）

南調査区第４遺構面で出土したものである。黒色のタール状の塊に須恵器甕の破片が付着している。長さ22cm、幅16cm、厚さ10cm、重さ2.5kgをはかる。成分の科学的分析を行っていないため、詳細は不明である。

注

１．柳瀬昭彦　「川入・上東遺跡の弥生土器及び古式土師器について」　『川入・上東』　岡山県教育委員会　1977

２．八尾市立曙川小学校　奥田　尚氏の鑑定による

３．田辺昭三　『陶邑古窯址群Ⅰ』　平安学園考古クラブ　1966

４．中村　浩　「和泉陶邑窯出土遺物の時期編年」　『陶邑Ⅲ』　大阪府教育委員会　1978

５．広瀬和雄　「近畿地方における土器製塩」　『考古学ジャーナル』298号　1988

６．岡戸哲紀　「陶邑・伏尾遺跡の検討」　『韓式系土器研究』Ⅲ　1991

（財）大阪府埋蔵文化財協会　『陶邑・伏尾遺跡　Ａ地区』　1990

７．八女古窯跡群調査団　『立山山窯跡群』　1972

８．（財）東大阪市文化財協会　『甦る河内の歴史』国道308号線関係遺跡発掘調査中間報告展図録　1984

中西克宏　「神並遺跡（市調査区）」　『古墳時代のかまどを考える』　埋蔵文化財研究会　1992

９．前掲注８文献

大阪府教育委員会宮崎泰史氏のご厚意で実見することができた

10．奈良国立文化財研究所　『平城Ⅶ』　1976

11. 國下多美樹「“爪形状圧痕”を有する須恵器」『京都考古』第67号　1992
12. 西　弘海　「平城宮出土土器の編年とその性格」　前掲注10文献所収　『土器様式の成立とその背景』再録
13. 平尾政幸　「平安時代前期の土器」『平安京右京三条三坊』（財）京都市埋蔵文化財研究所　1990
14. 寝屋川市教育委員会　『高柳遺跡』　1991
15. 伊野近富　「篠窯原型と陶邑窯原型の須恵器」『埋蔵文化財情報』37号（財）京都府埋蔵文化財調査研究センター　1990年
16. 楢崎彰一　「猿投窯の編年について」『愛知県古窯跡群分布調査報告（Ⅲ）』　愛知県教育委員会　1982
17. 吉田恵二　「陰刻花文私考」『坂本太郎博士頌寿記念日本史学論集』上　1983
18. 川越俊一　「大和地方出土の瓦器をめぐる二・三の問題」『文化財論叢』　1983
19. 近江俊秀　「大和地方出土の瓦器椀とその生産について」『考古学論攷』第14冊　1990
20. 橋本久和　「中世土器研究予察」『上牧遺跡発掘調査報告書』　高槻市教育委員会　1980
21. 菅原正明　「畿内における土釜の製作と流通」『文化財論叢』　1983
22. 大平　茂　「子持勾玉年代考」『古文化談叢』20号　1989
23. 平良泰久　「向日市森本町山開古墳とその出土遺物」『京都考古』第19号　1976
24. 大場磐雄　「子持勾玉私考」『上代文化』第15号　1937

第4章　まとめ

今回の発掘調査では、古墳時代～中世にかけて長保寺遺跡を解明するうえで重要な調査成果を得ることができた。以下、各時期ごとに調査成果をまとめる。

1．古墳時代中期以前

大阪府教育委員会の調査地では、縄文時代晩期および弥生時代中・後期の土器が出土していたが、古墳時代中期以前にさかのぼる遺構は未検出であった。今回の調査地で、庄内式期の土器が出土する自然河川を検出した。同時期の遺構については未検出であるが、周辺に同時期のムラが存在していることが判明した。本市では庄内式期のムラは見つかっておらず、古墳時代前期についても集落の様相は不明である。北河内地域においても同時期の土器様相については不明な点が多い。

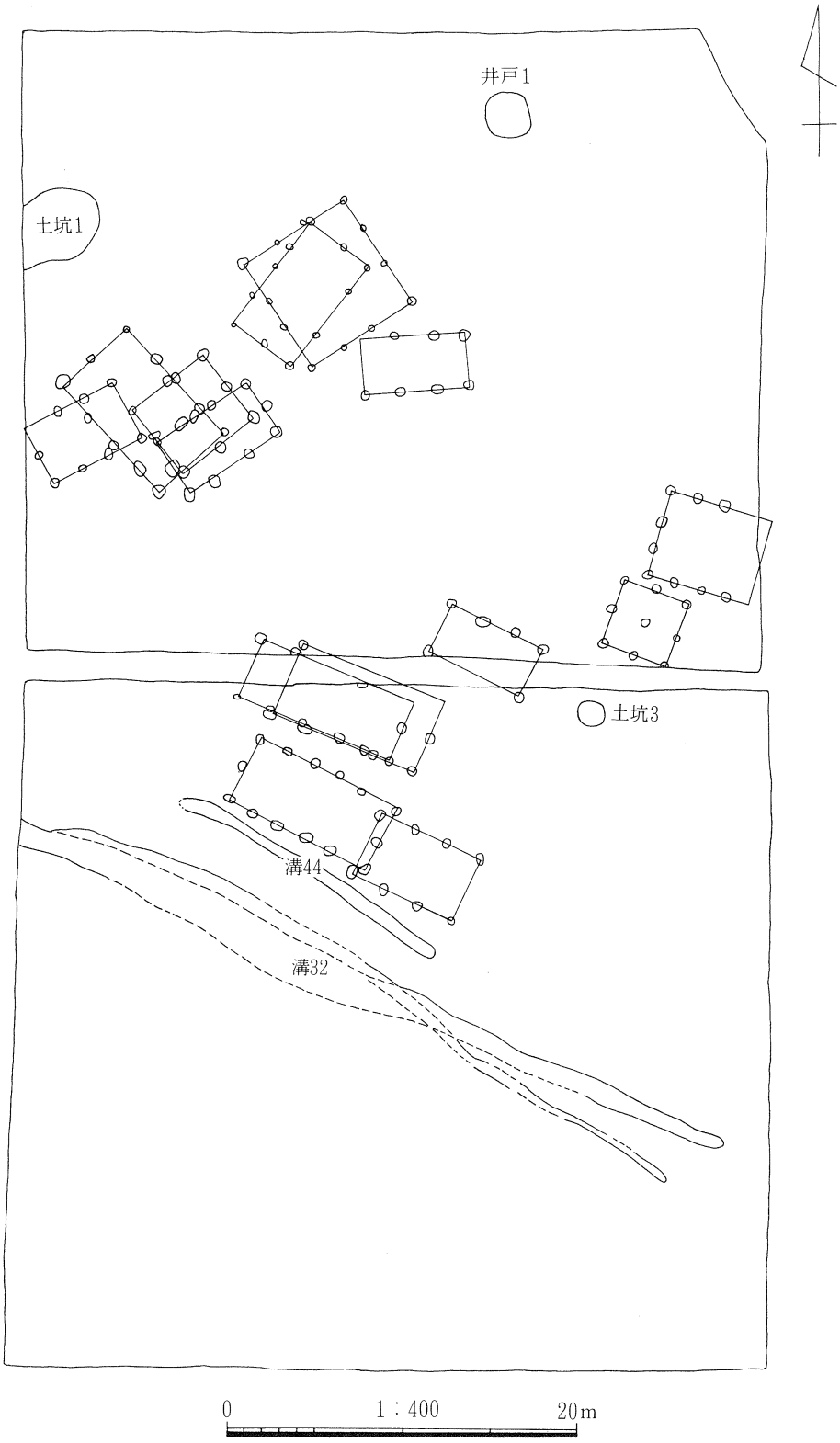
自然河川出土土器は庄内河内型甕を含んでおり、北河内地域では中河内地域の土器編年との接点をもつ数少ない資料である。庄内河内型甕は、米田敏幸氏の分類[1]のB類に属し、同氏の編年の庄内式期Ⅱに比定できよう[2]。共伴した土器には、弥生畿内第Ⅴ様式の影響が色濃いもので、北河内地域の庄内式期の土器様相を知るうえで重要な資料となろう。同様な土器様相は、茨木市東奈良遺跡[3]・泉大津市豊中・古池遺跡[4]ですでに指摘されており、庄内甕の出土量の多い奈良盆地東南部や中河内平野部以外の畿内地域ではこうした様相が普遍的であったと思われる。

手焙り形土器は無文のものと加飾が行われたものとの2種類が出土している。両者は、口縁部の形態にも違いがある。出現期よりこの2系統があったことが、京都府八幡市幣原遺跡出土例[5]等から知られている。このうち加飾されたものは、受け口状の口縁部をもち、近江系土器との関連で理解されるものである。長保寺遺跡出土例では、覆い部・体部にバラエティーに富んだ文様が施されている。特に覆い部に施されている組紐文は、古墳時代中期以降の須恵器に見られるが、古墳時代前期のものでは類例を知らず、最古例として理解できよう。吉備地域の弧帯文との関連も考えられ、今後、文様の成立・系譜を考える上で重要な資料となりうると考えられる。

2．古墳時代中期～後期

長保寺遺跡のピークを迎える時期である。今回の調査区では、井戸1基、土坑5基、多数の柱穴・溝を検出している。

柱穴より復原された建物は14棟になる。南調査区の建物の軸を正方位から大きく東に振る（N－15～30°－E）ものが多い。南調査区の大溝（溝32）も同様な方向に流れており、こうした溝に規制されているものと理解される。大溝から南側では、柱穴は少なくなり、性格



第６図　古墳時代中～後期遺構配置図

不明の土坑や溝が多くなる。この溝は、居住域を区画する意味をもつ可能性がある。北側の建物は、方位がN－5～50°－Eで、西側に振っている。

出土土器では、いくつかの良好な一括資料を得ることができた。南調査区土坑3は、中期後半の良好な一括資料で、祭祀に使われた土器の器種組成を考える上でも重要な資料である。いくつかの土器は、祭祀用として特別に扱われた可能性があると考えられる。

北調査区土坑1出土資料は、一部前後する時期を含むものも、古墳時代中期末～後期初頭の量的に豊富な資料である。須恵器では杯蓋に形態のバラエティーが認められ、中村編年1型式から2型式[6]の過渡期の様相を良く示している。土師器では高杯が認められず、甕・甑等の煮沸用途の器種が主体となっている。

2点の移動式かまどについては、いずれも出土例の少ない古式の形態のものである。両者の違いが、単なる製作地の違いによるものか、用途（かまどにかける土器）の違いによるものかは不明である。古墳時代後期以降、かまどは炊き口部のひさしの形状の違いで、付けびさし系と曲げびさし系に大きく分れる。両者は、それぞれ長胴甕（+甑）と羽釜とかける土器が異なっていたという考え[7]がある。本例はこの2者の祖形として理解することも可能であろう。

また、土坑埋土を全て取り上げて水洗作業を行った結果、滑石臼玉・金環・動物骨・種子類と多量の製塩土器を得ることができた。とくに、多量の製塩土器は遺物収納ケース1箱にのぼり、一遺構出土の量としては特筆すべきである。本市から四条畷～大東～東大阪市の生駒山地の西麓の地域では、同時期の製塩土器を大量に出土する遺跡が集中している[8]。また、これらの遺跡では、馬歯・馬骨が出土している遺跡が多い。本報告では資料化できなかったが、今回の調査で馬歯が出土している。こうした遺跡については、古事記・日本書紀に登場する河内馬飼氏と関連づけて考えられている[9]。本遺跡もこの河内馬飼氏等の馬飼集団と関係づけて考えることが妥当であろう。

古墳時代後期の井戸である北調査区井戸1からは井戸枠が検出されたが、井戸枠は上部を板材、下部を丸太材で構築されている。上部の板材の中には扉を再利用したものが含まれており、このほかの井戸枠材も他の建築材の再利用である可能性が高い。同様に扉を含む井戸枠が検出された井戸として、大阪府教育委員会調査地の2区井戸13[10]がある。同井戸には5枚もの扉が再利用されていた。この扉は分銅状に大きく削りだした閂受けを持つもので、今回の出土例のように突起状に閂受けを作り出すものと異なっている。今回の出土例と同型態のものには、大東市北新町遺跡出土[11]のもののほか古墳時代中期以前の時期のものが多い。今回の井戸1と府教委調査井戸13はいずれも古墳時代後期のものであり大きな時期差はない。両者の形態差が単なる時期差を反映したものか、使用建物の違いによるものかは、さらに検討を加えなくてはならない。

井戸1底部から出土した3点の須恵器長頸壺は、いずれも口縁部の打ち欠きが行われてい

た。府教委調査井戸13出土土器にも同様の打ち欠きが認められ、井戸祭祀の内容を示すものであろう。

出土遺物として特筆すべきものに、子持勾玉があげられる。子持勾玉は、本市では太秦古墳群で2点が出土しており[12]、本例が3点目となる。本例は、頭部に顔のような表現が線刻されている。同様な表現のある子持勾玉は普遍的に見られるものではないが、本例は形態的に古式のものと考えられ、古式のものとされる京都府山開古墳出土例にも同様な表現が見られる。子持勾玉については、大場磐雄氏の「勾玉に対する呪力を強化して同形の子を付着させたもの」という考え[13]が通説となっている。しかし、古式と考えられる勾玉に動物を模倣したものがあることは、子持勾玉の起源について再考をうながすものである。有孔円盤・剣形石製品など古墳時代の滑石製品が、現実の品物の模造品と理解されており、子持勾玉もこうした視点から考える必要があると思われる。

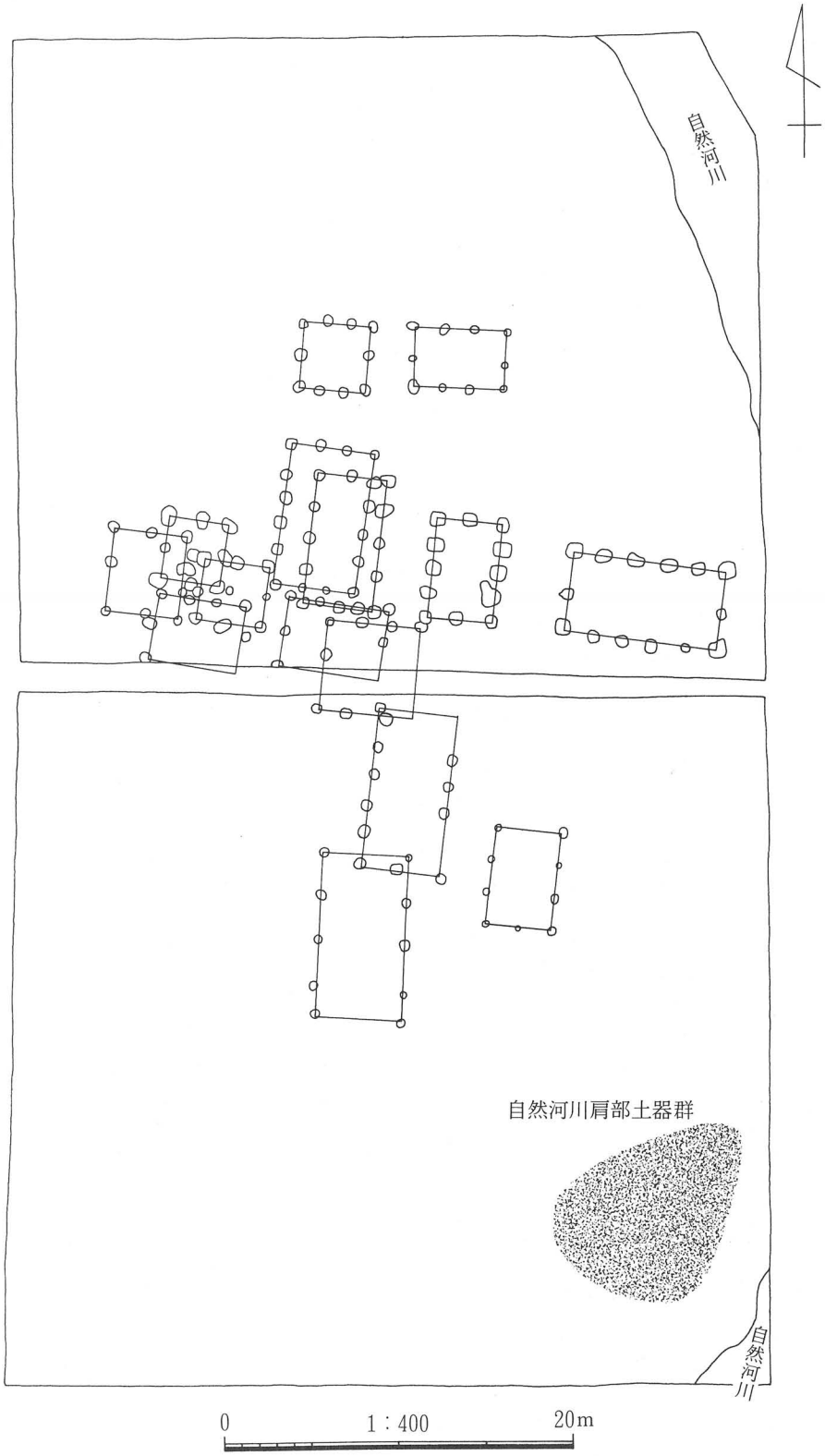
用途不明土製品については、前章で若干の検討を加えたが、未だ用途の特定のできない謎の遺物である。今回の調査では、全体の形態を考える上で有効な資料を得ることができた。この遺物の最大の問題点は、周辺地域さらには国内での出土例が知られていない点である。用途の不明な遺物として報告書類で取り上げられていない危惧も抱いている。形態等は、非常に特殊であり、遺物としての判別は容易と思われるので、今後の調査や再整理の中で類例の増加が切望される。

さて、本遺跡を考える上で遺跡の東側の丘陵部に所在する太秦古墳群と呼ばれる古墳群を見過ごすことはできない。この古墳群では、現存するのは高塚古墳（円墳・直径35m・高さ10m）のみであるが、付近の地籍図には「塚」の名前がある小字名がいくつか見られ、多数の古墳が存在したようである。太秦古墳群の各古墳の内容については発掘調査も行われないうちに大部分の古墳が消滅しているため不明な点が多いが、採集された遺物や近年調査によって削平を免れた周濠部分から出土した埴輪・土器から、大部分の古墳は古墳時代中期後半～後期の築造であることが判明している。この時期は、おおむね長保寺遺跡の古墳時代の集落の継続時期と一致する。両者は密接な関係をもつものと理解して良いと思われる。

3．奈良時代

調査地では、飛鳥～奈良時代前半の遺構・遺物の出土はなく、様相は不明である。再び集落が営まれるのは奈良時代後半以降である。長保寺遺跡では、今回の発掘調査で初めてこの時期のまとまった遺構・遺物が検出され、集落の存在が明らかとなった。

調査区の東側を南北方向に自然河川が流れ、掘立柱建物で構成される集落が出現している。復元された建物で、当時期のものと考えられるものは15棟である。建物は主軸を正方位からわずかに東に振る（N－3～10°－E）もので、復原される讃良郡条里の方位にほぼ一致するものである。



第７図　奈良時代遺構配置図

出土遺物は、南調査区の自然河川肩部で奈良時代後半の土器がまとまって出土した。土師器杯・皿類では内面の暗文を欠くものが増加しており、平城Ⅲ～Ⅳ期で理解される。

また、この土器群中より多量の製塩土器が出土している。奈良時代の製塩土器のまとまった資料は、北河内地域では初めてである。畿内地域の状況では、どの集落にも等質に製塩土器が搬入されているわけではなく、こうした多量の製塩土器の出土は遺跡の特殊な性格を示すものと考えられる。実際に製塩土器で運ばれた塩の用途の解明がこの問題を解く鍵となると考えられる。また、製塩土器は様々な型式のものが認められ、複数の生産地からの搬入が想定される。今後、生産地の比定とその流通の実体の解明が、大きな課題となろう。

4．平安時代

奈良時代後半に出現した集落は、平安時代前半期にかけて継続して営まれている。この時期の遺物を出土する柱穴は平均して小型化している。この柱穴から復原される建物は11棟（うち不確実のもの２棟）となる。建物の方位はN－８～15°－Eで奈良時代の建物よりわずかに東に振るものとなっている。建物は東西２群にまとまりをもっており、その間にクラの可能性がある総柱建物が位置する。

掘立柱建物群に伴う遺構として南調査区で検出された地鎮遺構がある。地鎮に伴う遺構には本市では高柳遺跡で検出されたものがあるが[14]、本例とは異なっている。久世康博氏の平安京跡での地鎮遺構と考えられる埋納遺構の集成[15]によると、多様な形態があるようである。

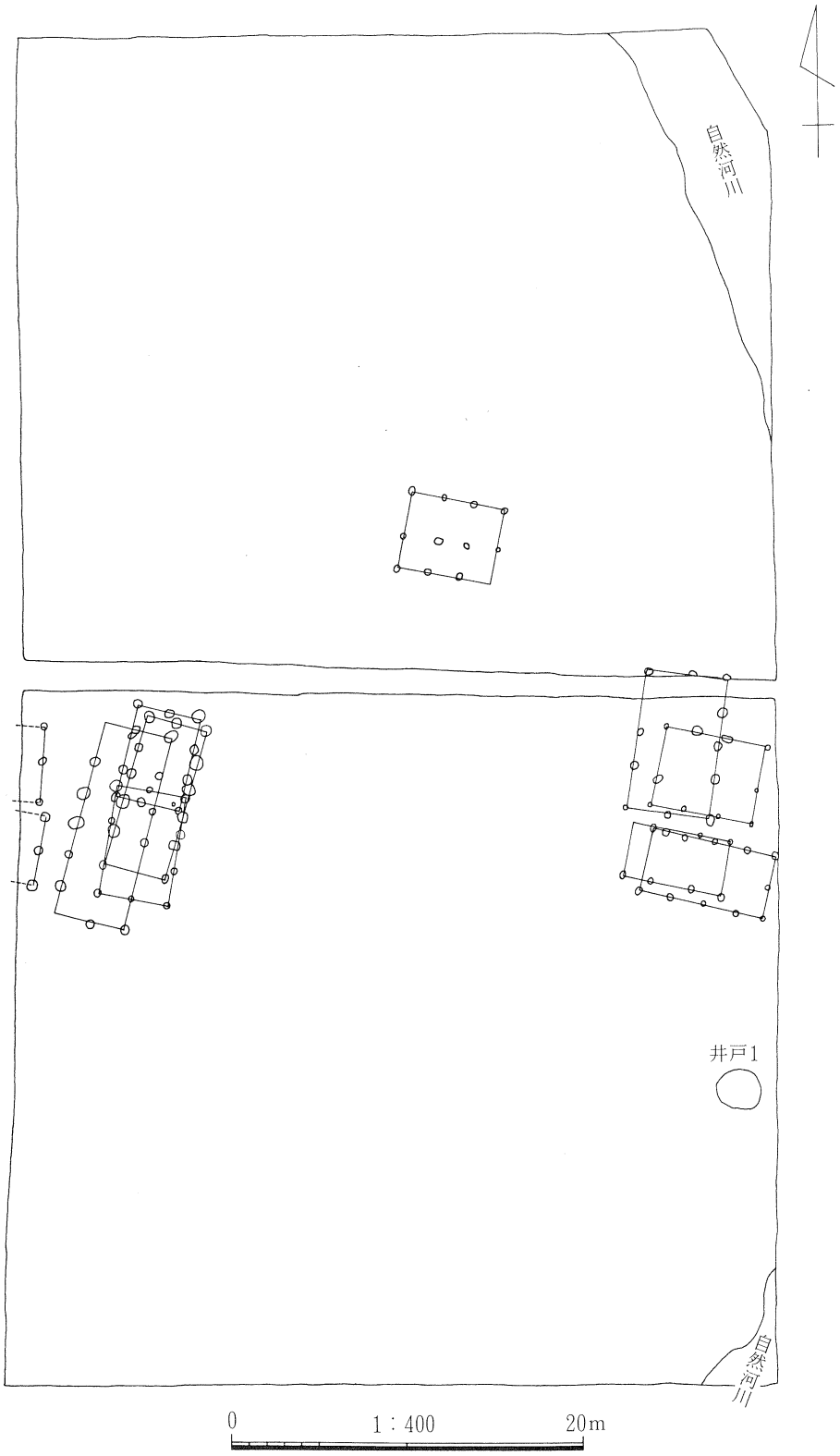
南調査区で検出した井戸１は、木製の井戸枠が良好に遺存するものである。井戸枠材は建築部材の再利用と推定されるが、本来調査区内で検出された掘立柱建物に使用されていたものであろう。個々の部材の本来の建築部材としての用途については、今後の課題としたい。

出土遺物として特筆すべきものに施釉陶器がある。灰釉陶器は黒笹14号窯式（９世紀前半）のもので、府下では出土例が極めて少ない。また、緑釉陶器花文椀も、府下では出土遺跡が極めて限定されるものである。同型式のものは、大阪市中央区釣鐘町[16]で出土している。こうした高級品の出土は、遺跡が一般集落でないことを裏付けるものである。

5．中世（平安時代後期～末）

第３遺構面では平安時代前半の遺構を切って、南北方向の小溝が多数検出されている。これらの小溝は耕作に伴うものと考えられる。調査地では10～11世紀に一時期耕地化したようである。再び、宅地が出現するのは11世紀後半で、北調査区の第２遺構面で、自然河川の肩部に１棟の掘立柱建物と付随する井戸・土坑が検出されている。建物は１～２回の建て替えを行っているようである。

調査地では北調査区の中央部が台状に高くなっており、ここが居住域として利用されてい



第８図　平安時代遺構配置図

る。一方、低い部分は耕作に伴う小溝が検出されており、当時の土地利用の実体を示すものである。建物や溝の方位は正方位より西に振っており、これまでのものと大きく異なっている。この方位は、東側を流れる自然河川に規制されたものと思われる。南調査区では自然河川に流れ込む排水溝以外は遺構はほとんど無く、集落域をはずれているものと考えられる。

6．近世以降

調査地は完全に耕地化しており、耕作に伴う溝・境界杭が検出されている。これらの方位は中世のものとほぼ同じで西に振ったものとなっている。調査地は天坊幸彦氏に復原された讃良郡の条里[17]に含まれているが、条里に一致する方位を持つものは無い。中～近世の遺構の方位は、調査地の東側を南北に流れる自然河川に規制されていると推定される。

以上、各時期について調査成果をまとめてみたが、今回の調査によって長保寺遺跡を考える上で様々な情報を得ることができた。従来の知見と合わせて考えると、遺跡は奈良時代前半（7世紀後半～8世紀前半）を除くと古墳時代～中世の長期にわたる集落跡であることが明らかになった。このような長期に継続する集落としては寝屋川市域で唯一であり、地域の中心集落として機能していたと考えられる。また、こうした個々の情報からはじまる個別の問題のいくつかについて、若干の検討を行ったが、今後、こうした問題を解明すると同時に、それらをふまえて遺跡を総合的に把握し、その実態の解明を進める必要があろう。

注

1．米田敏幸　「中河内の庄内式と搬入土器」　『考古学論集』　第1集　1985
2．米田敏幸　「土師器の編年・1　近畿」　『古墳時代の研究』6　土師器と須恵器　1991
3．東奈良遺跡調査会　『東奈良』　1979
4．酒井龍一　「和泉における伝統的第5様式に関する覚書」　『豊中・古池遺跡』　豊中古池遺跡調査会　1976
5．石井清司　「八幡市幣原遺跡出土の土器について」　『京都府埋蔵文化財論集』　第1集　1987
6．中村　浩　「和泉陶邑窯出土遺物の時期編年」　『陶邑』Ⅲ　大阪府教育委員会　1978
7．稲田孝司　「忌のかまどと王権」　『考古学研究』25巻1号　1978
　中西克宏　「生駒山西麓産の羽釜」　『東大阪市文化財協会ニュース』　Vol. 4　No. 1　1988
8．野島　稔　「大阪府下における製塩土器出土遺跡」　『ヒストリア』82号　1977
　才原金弘　「東大阪市内出土の製塩土器」　『東大阪市遺跡保護調査会年報』1979年度　1980
　才原金弘　「東大阪市内出土の製塩土器」Ⅱ　『財団法人東大阪市文化財協会紀要』Ⅰ　1985
9．瀬川芳則　「馬飼集団の神まつり」　『古墳時代の研究 』3　生活と祭祀　1991
　野島　稔　「河内の馬飼」　『万葉集の考古学』　筑摩書房　1984

10. 大阪府教育委員会　『讃良郡条里遺跡発掘調査概要・Ⅰ』　1989
11. 北新町遺跡調査会　『北新町遺跡（第２次）発掘調査概要報告書』　1992
12. 寝屋川市教育委員会　『寝屋川市文化財図録』Ⅰ　1984
13. 大場磐雄ほか　『武蔵伊興』　1962
14. 寝屋川市教育委員会　『高柳遺跡』　1991
15. 久世康博　「平安京の埋納遺構」　『考古学論集』第３集　1990
16. 伊藤　純　「緑釉陶器の優品」　『葦火』31号　1991
17. 天坊幸彦　『上代浪華の歴史地理的研究』　1947

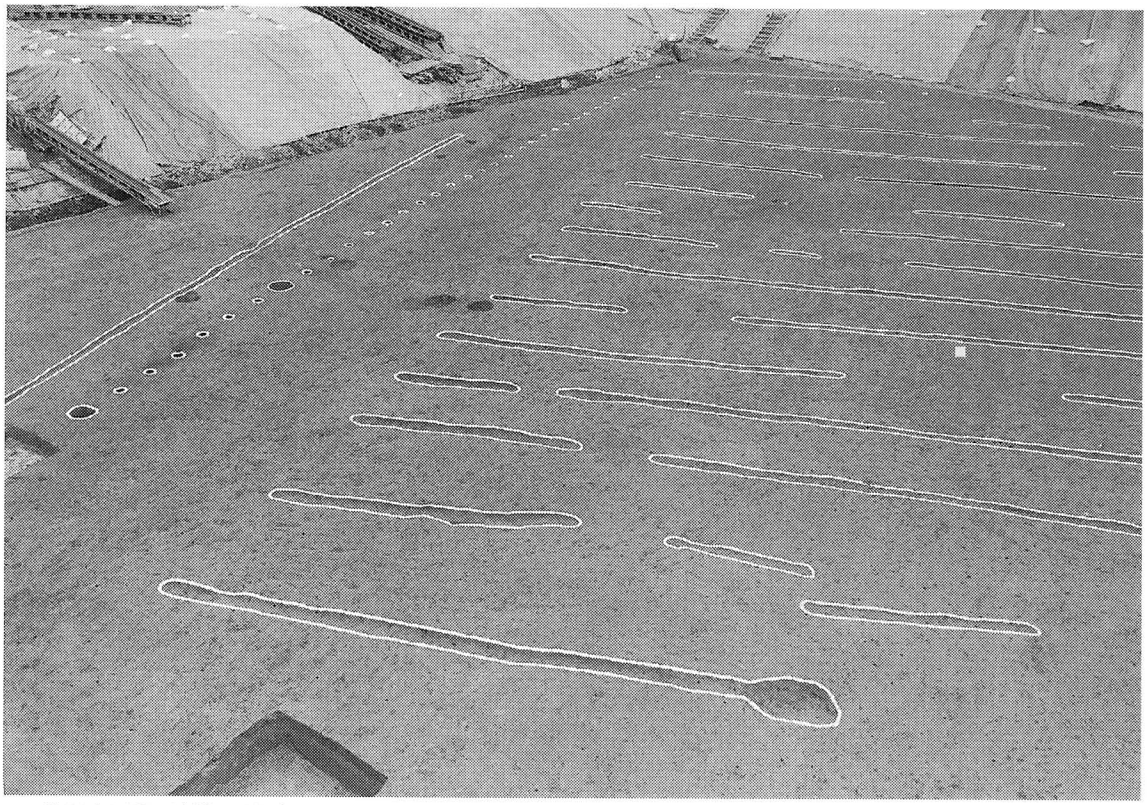
図　　版

図版1　検出遺構

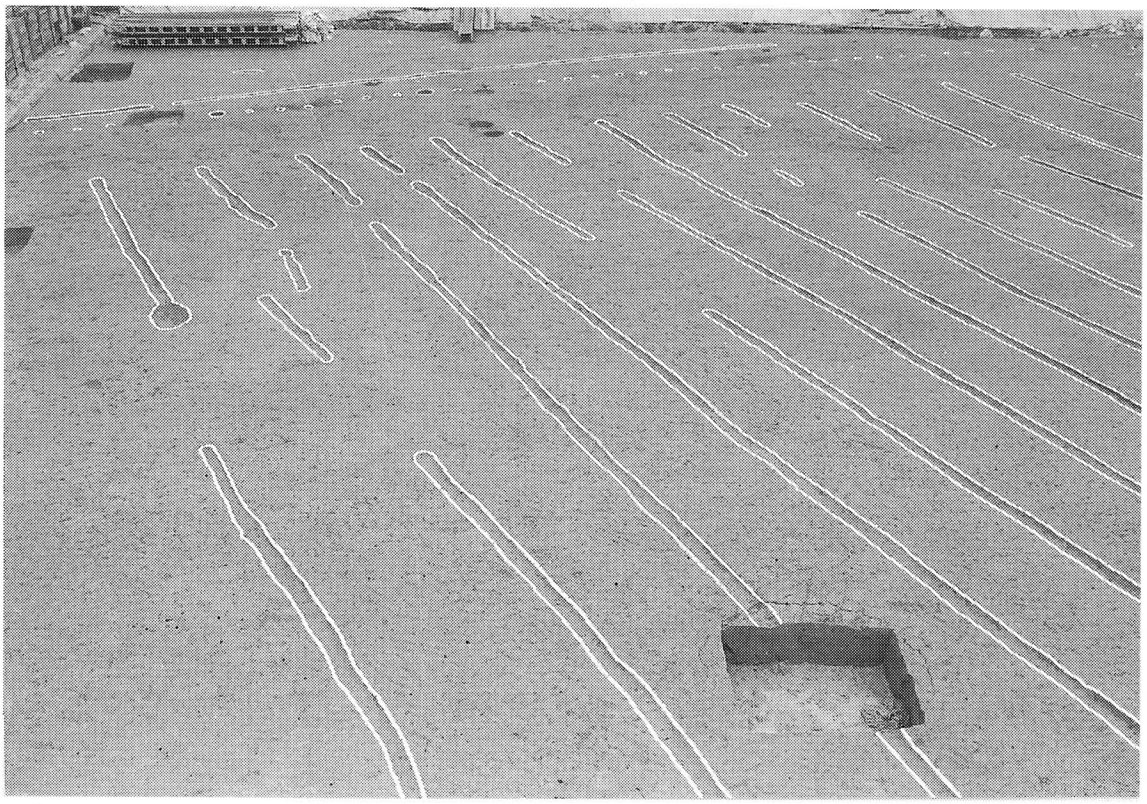
a．調査地遠景(西から)

b．同上(東から)

図版2　検出遺構

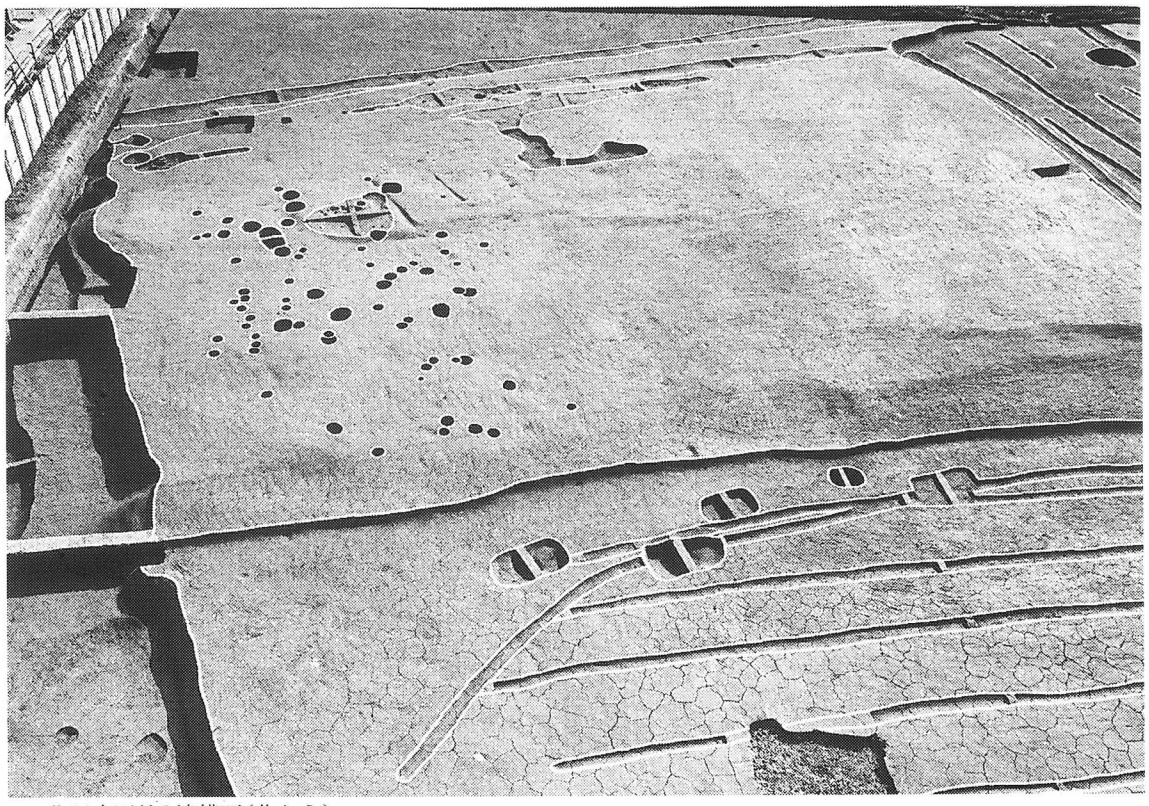


a．北調査区第1遺構面(北東から)

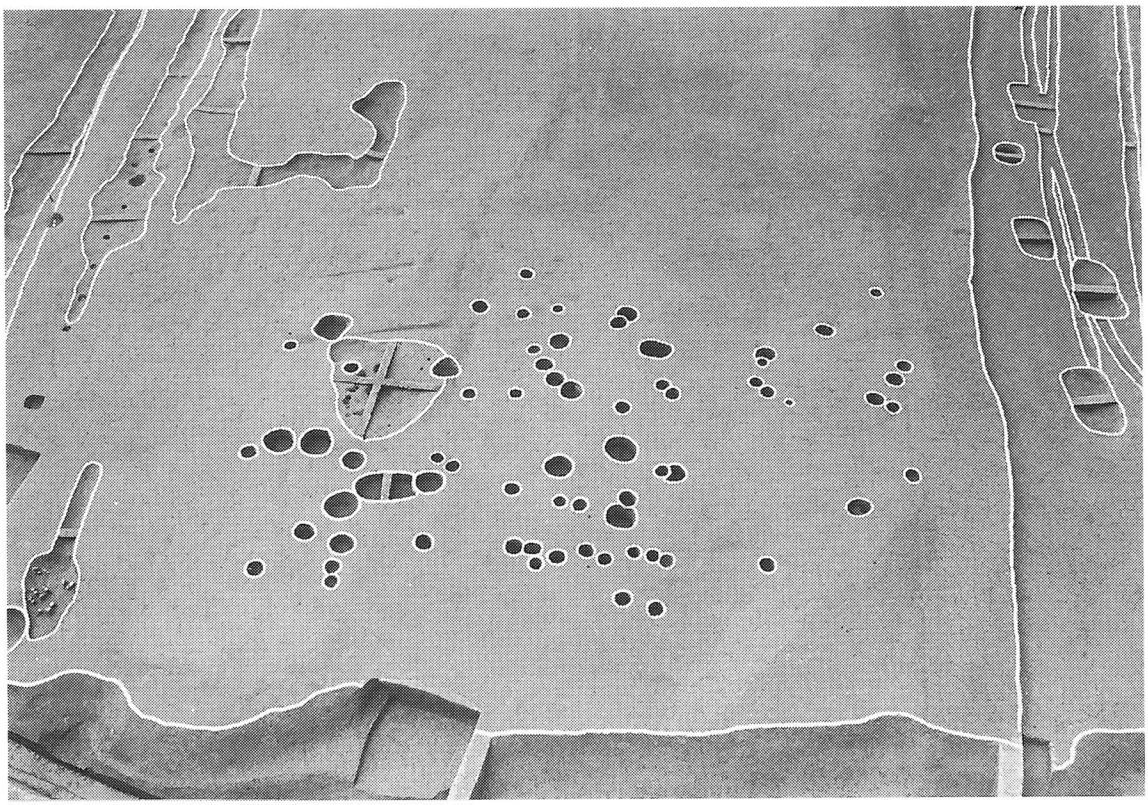


b．同上(北から)

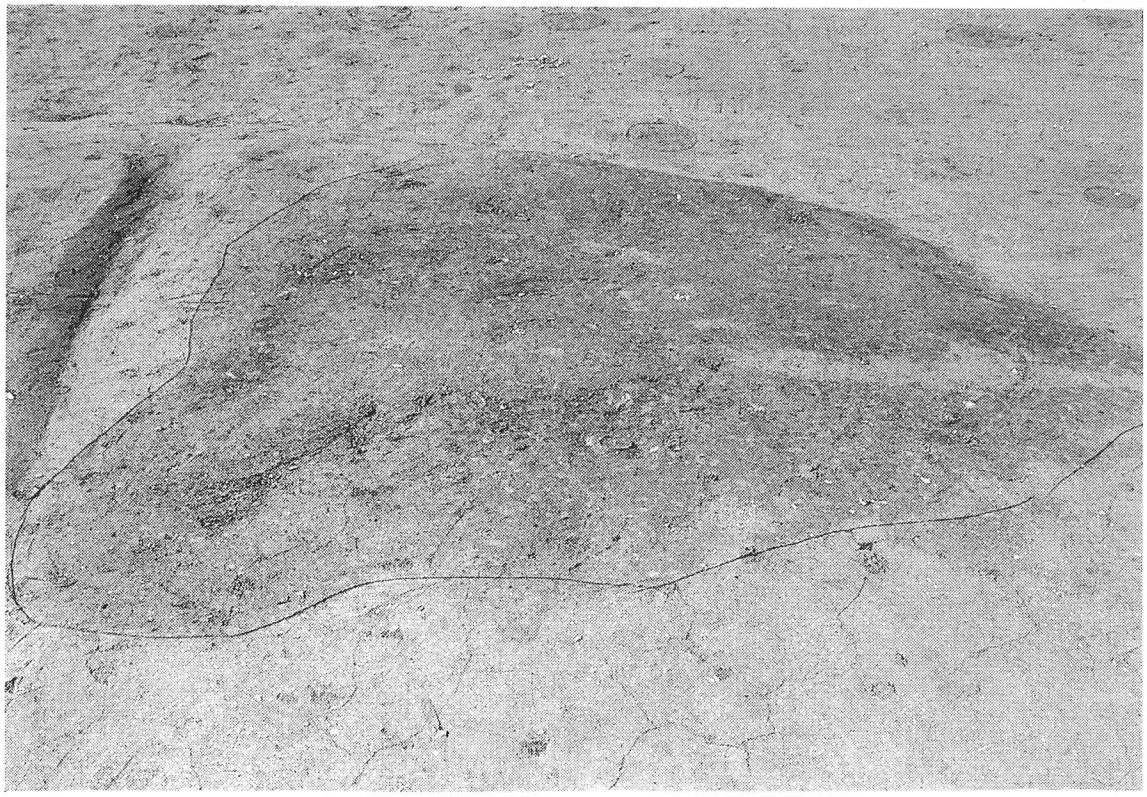
図版3　検出遺構



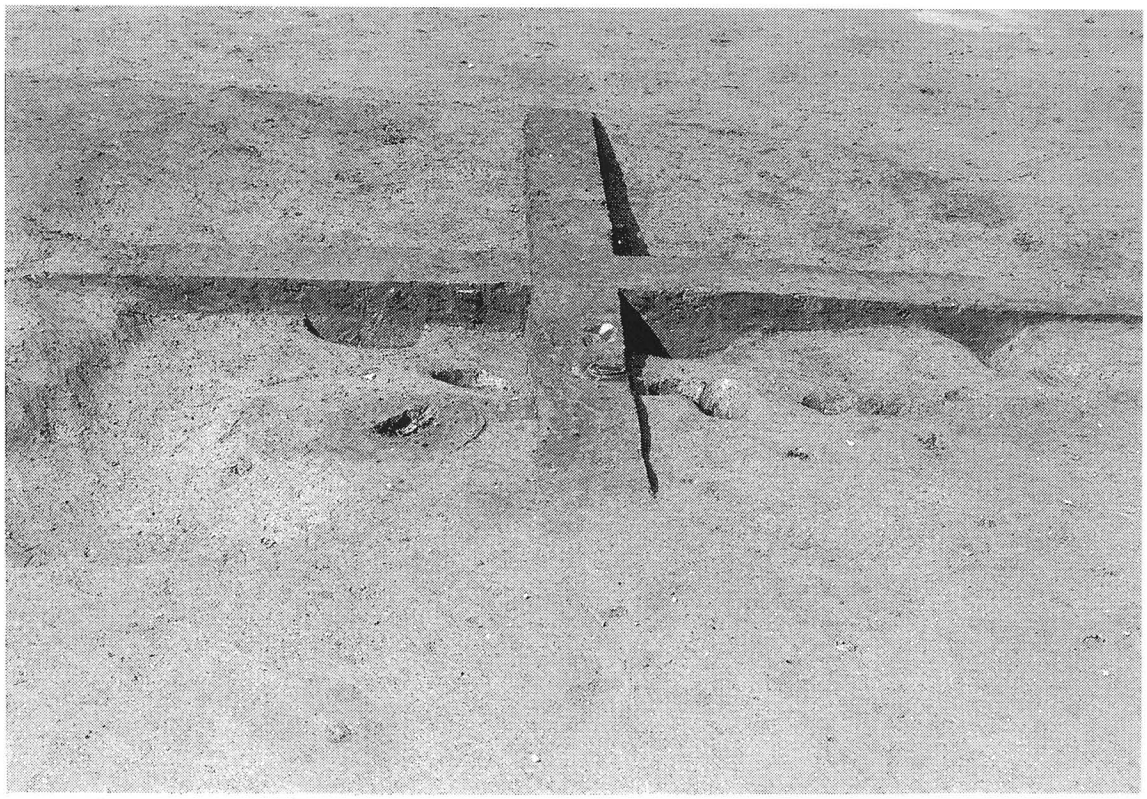
a．北調査区第2遺構面(北から)



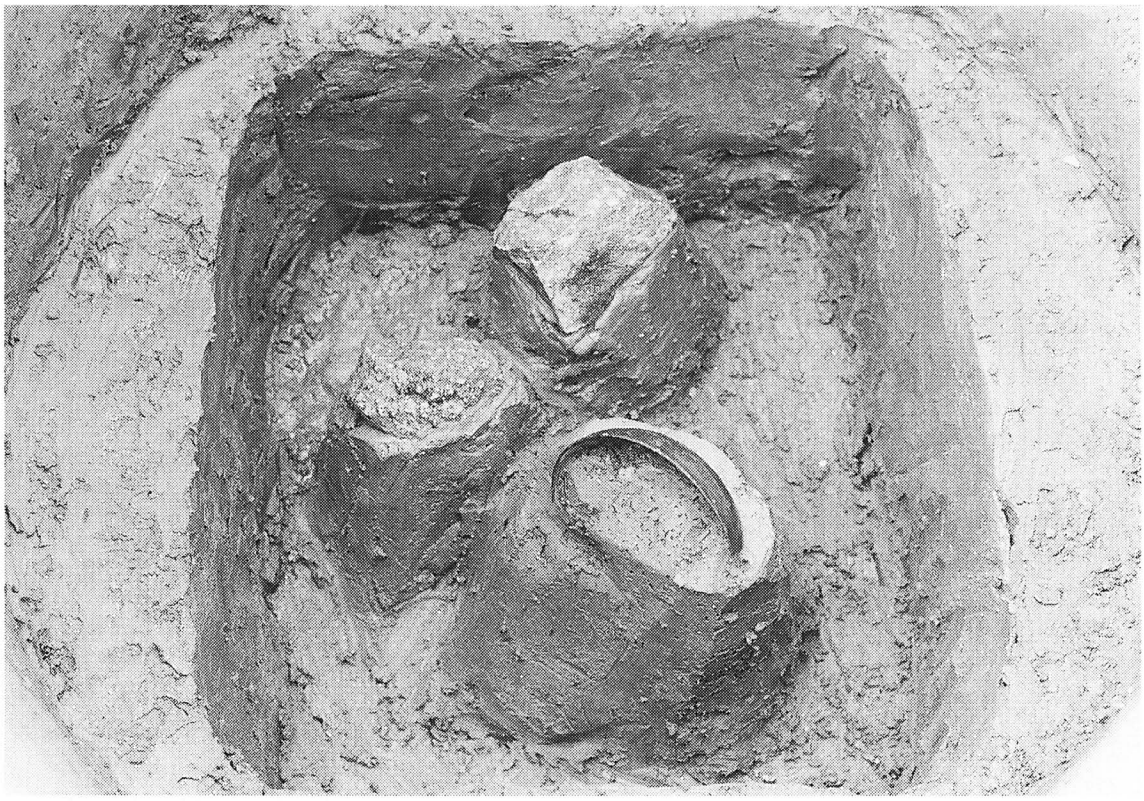
b．北調査区第2遺構面柱穴群(東から)



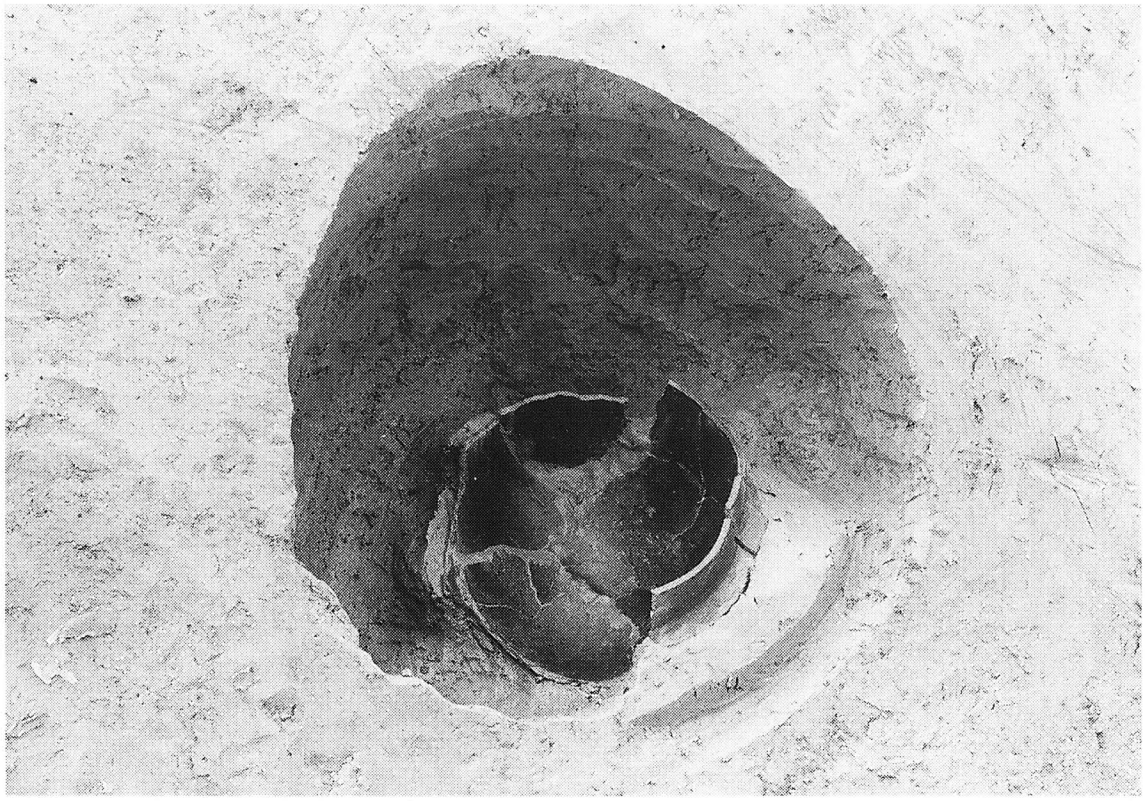
a．北調査区第2遺構面土坑1検出状況(南から)



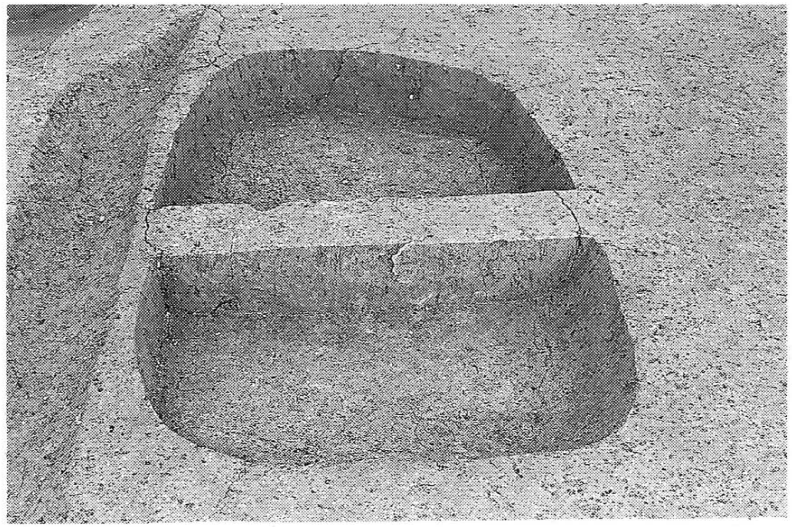
b．同遺構完掘状況(南から)



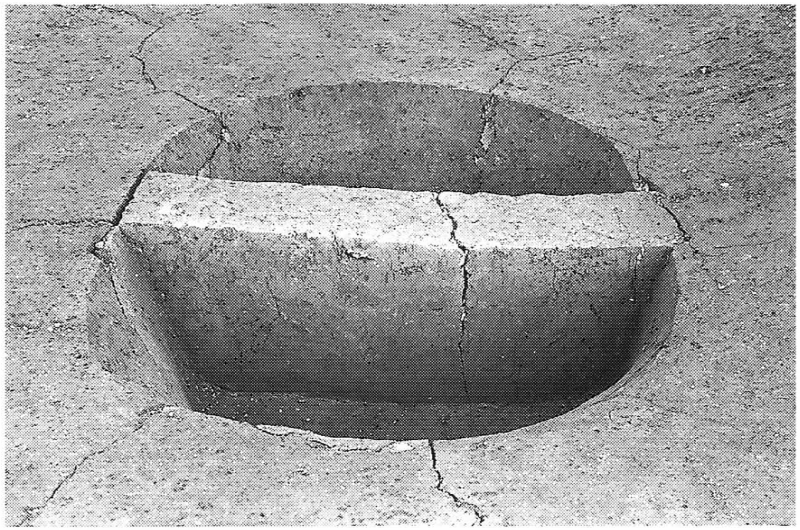
a．北調査区第2遺構面井戸2底部遺物出土状況



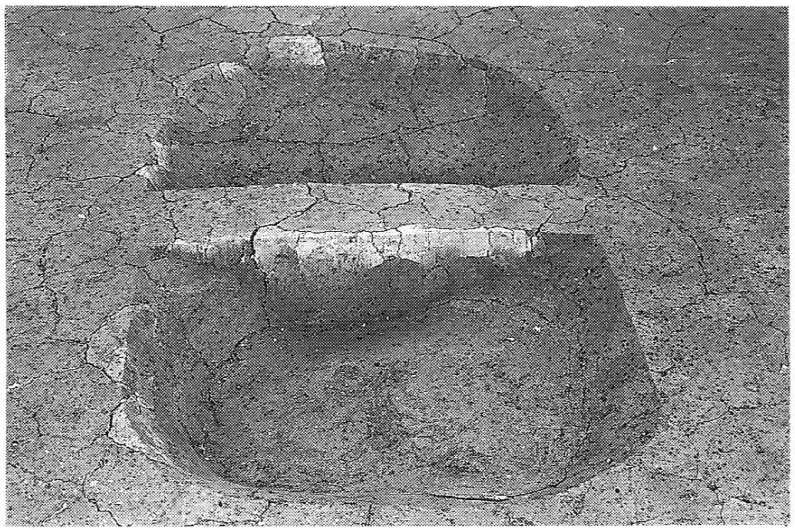
b．北調査区第2遺構面井戸1土師器羽釜出土状況(東から)



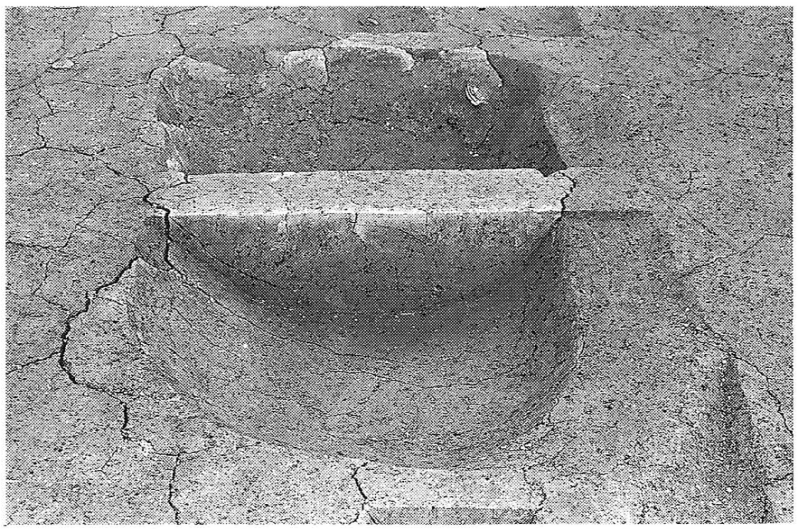
a．北調査区第2遺構面土坑7（西から）



b．同土坑3（西から）



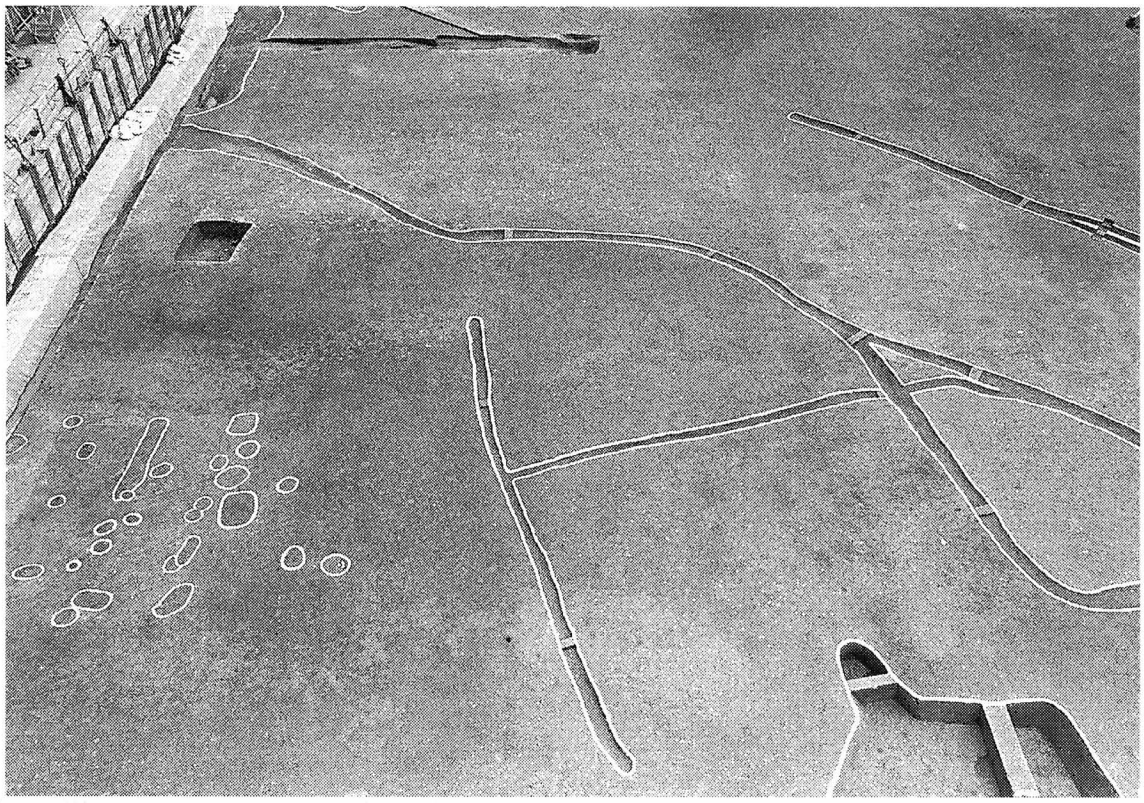
c．同土坑4（西から）



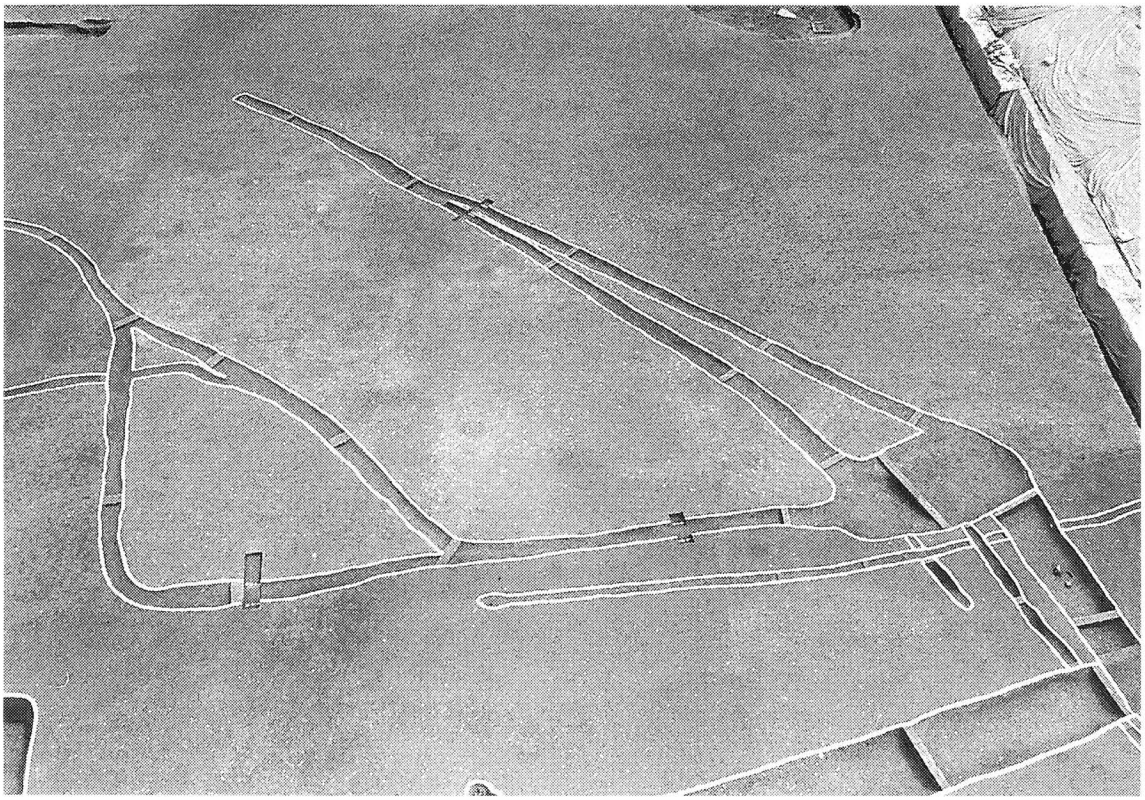
d．同土坑6（西から）

図版6　検出遺構

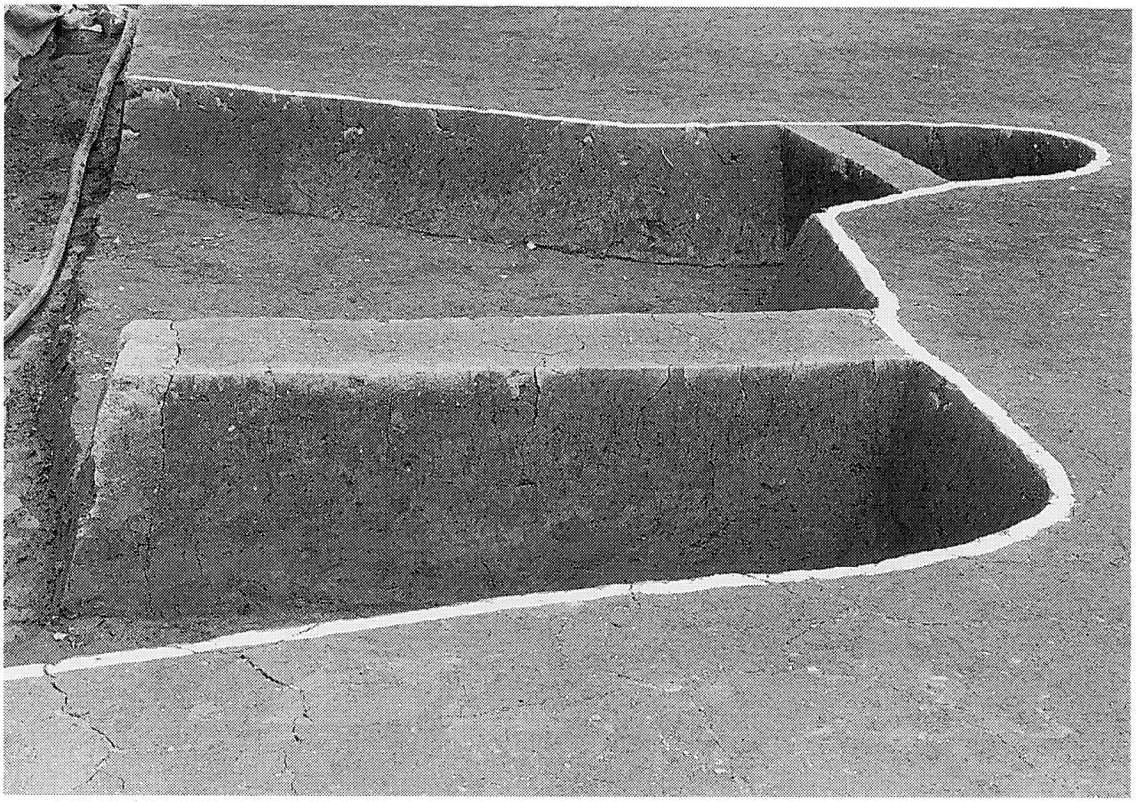
図版7　検出遺構



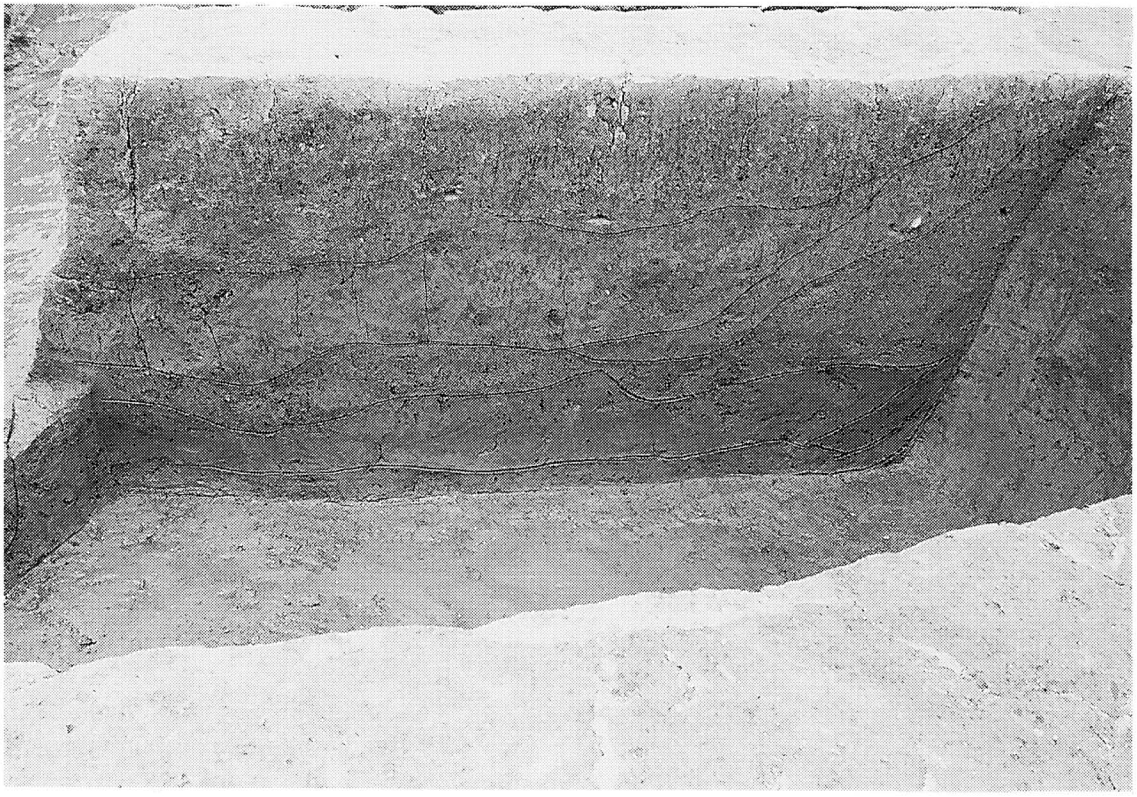
a．南調査区第2遺構面東側全景(北から)



b．同西側全景(北から)

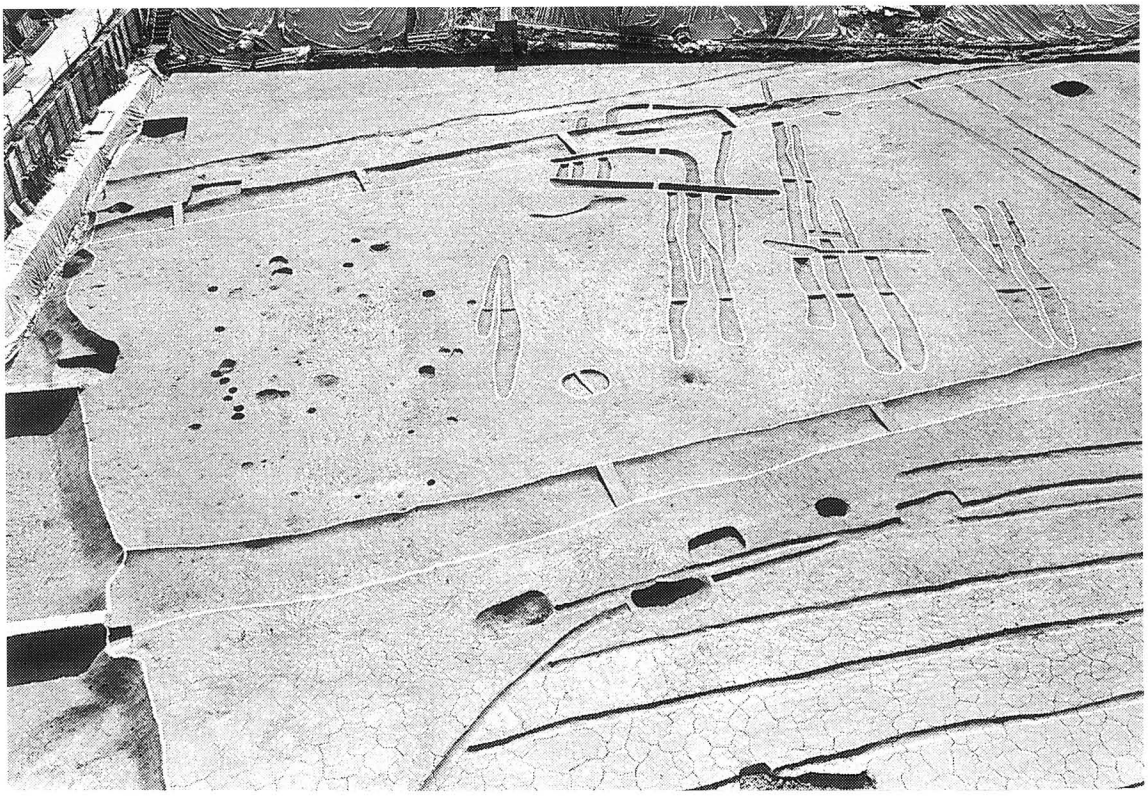


a．南調査区第2遺構面土坑1（西から）

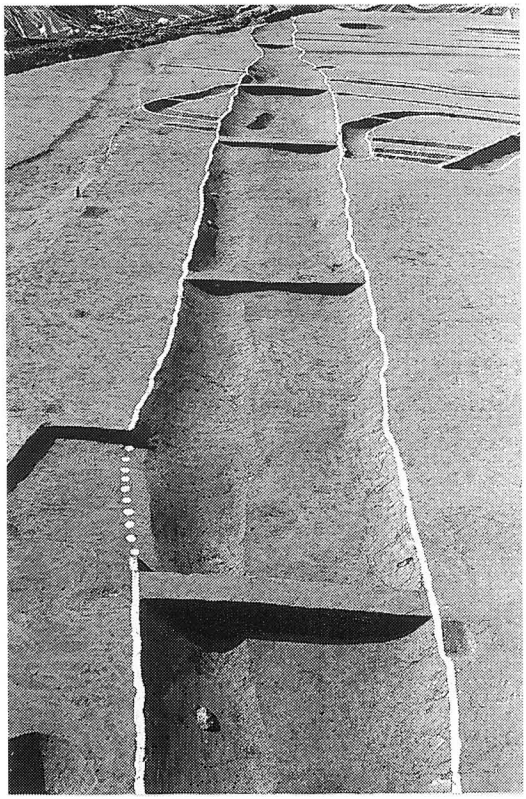


b．同遺構土層堆積状況

図版9　検出遺構



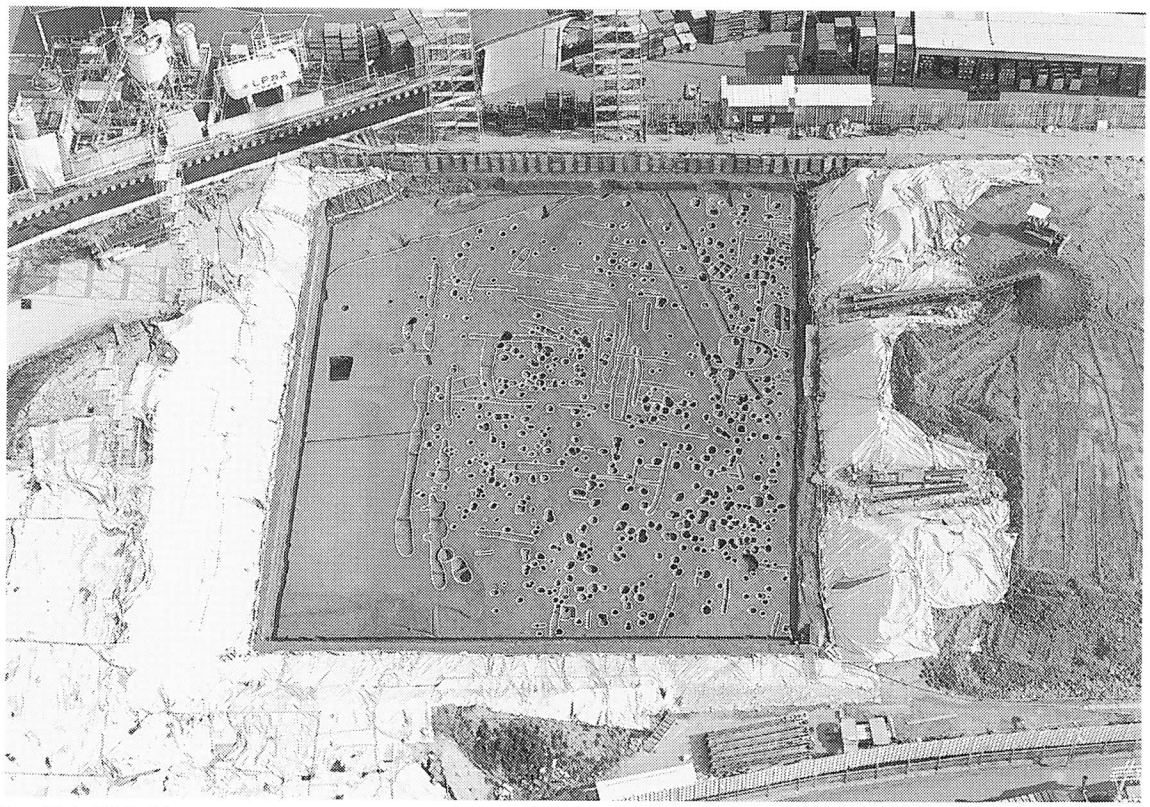
a．北調査区第3遺構面上層全景(北から)



b．同南大溝(東から)

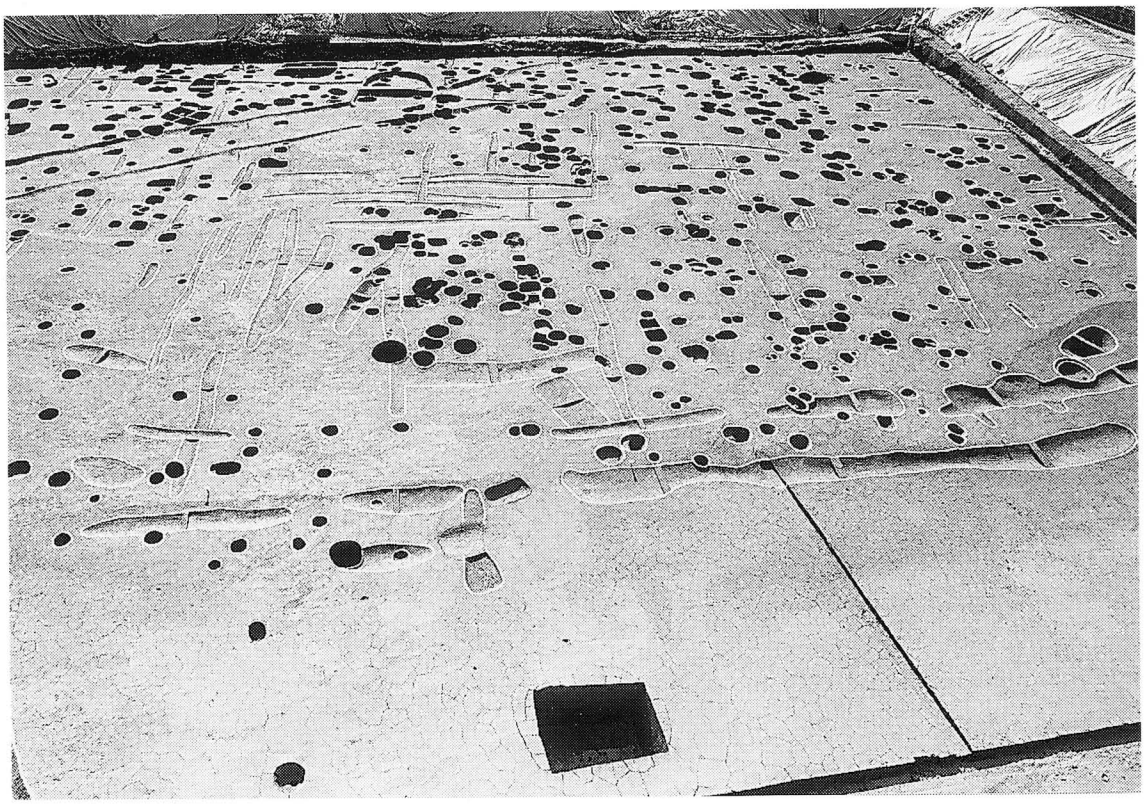
c．同北大溝(東から)

a．北調査区第3遺構面全景(南から)



b．同上(西から)

図版11　検出遺構



a．北調査区第3遺構面全景(北から)

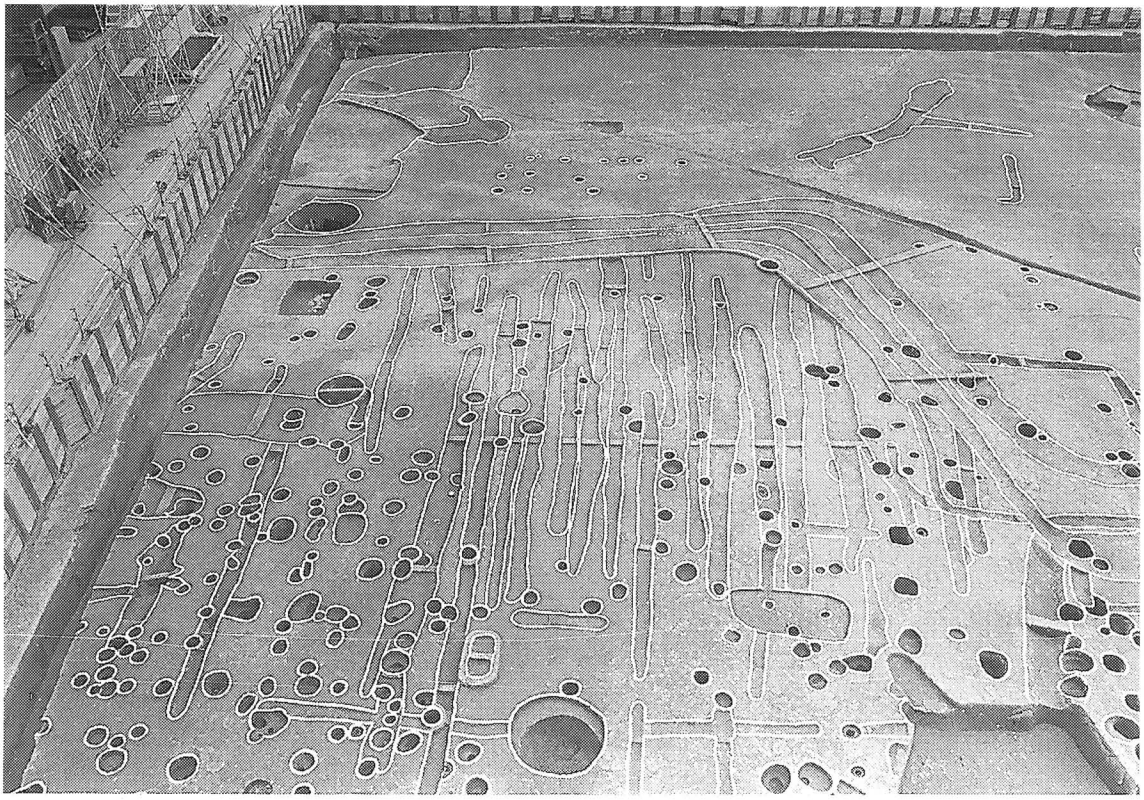
b．同上(東から)

図版12　検出遺構

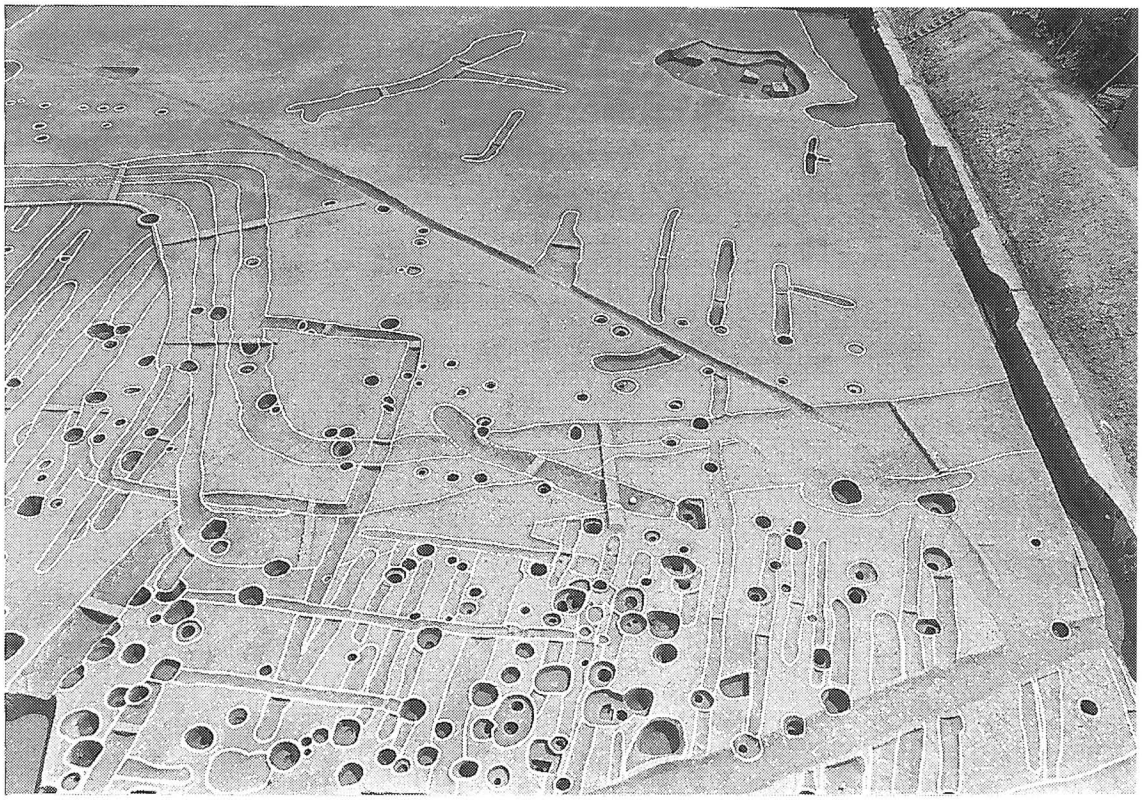
a．南調査区第3遺構面全景(西から)

b．同上(南から)

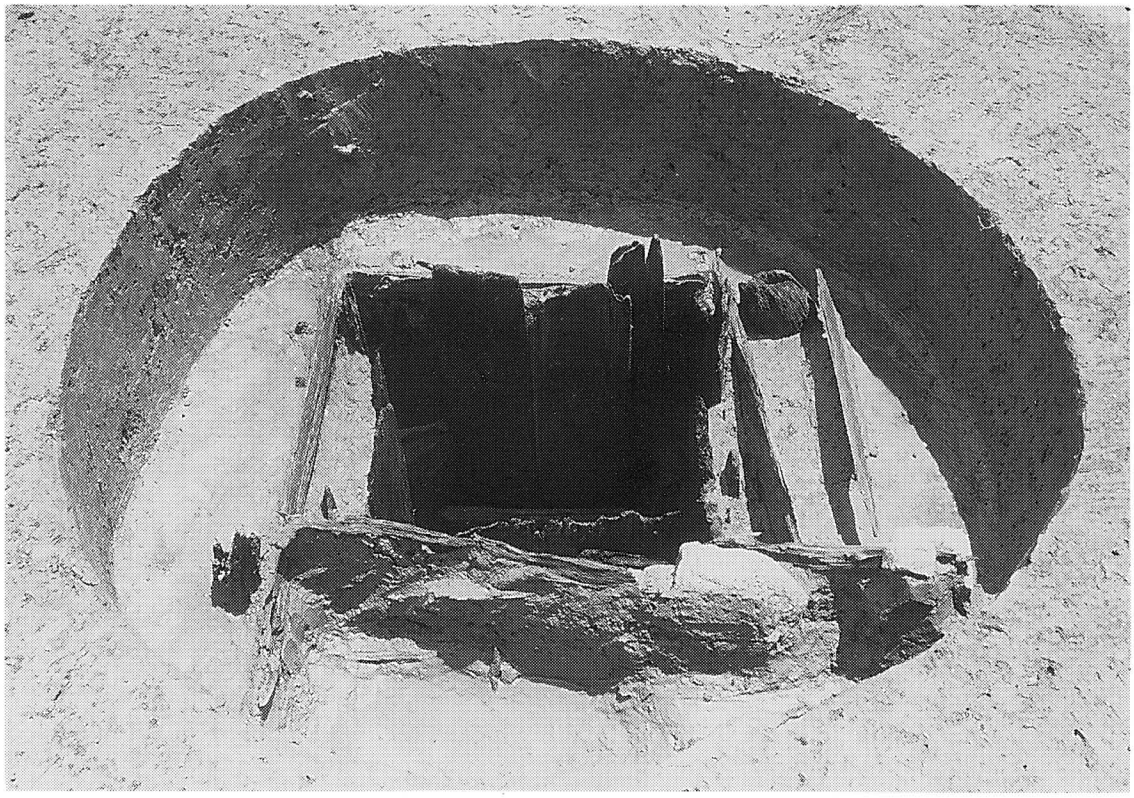
図版13　検出遺構



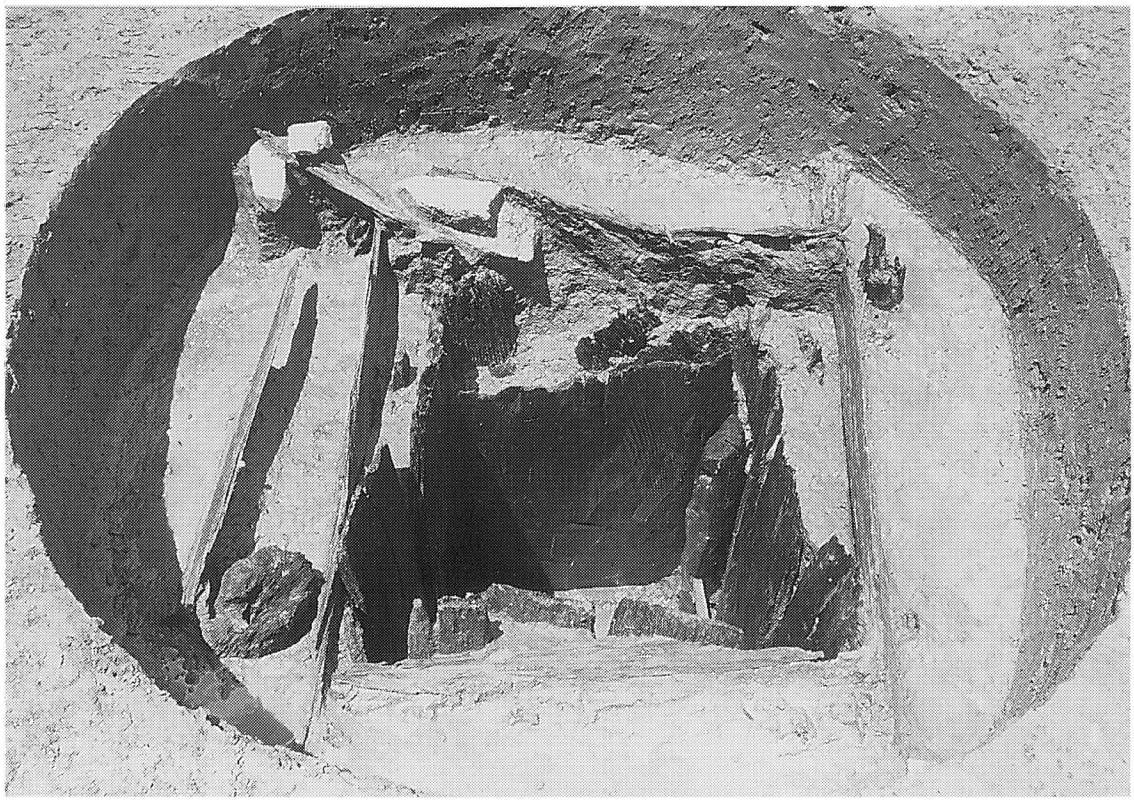
a．南調査区第3遺構面東側全景(北から)



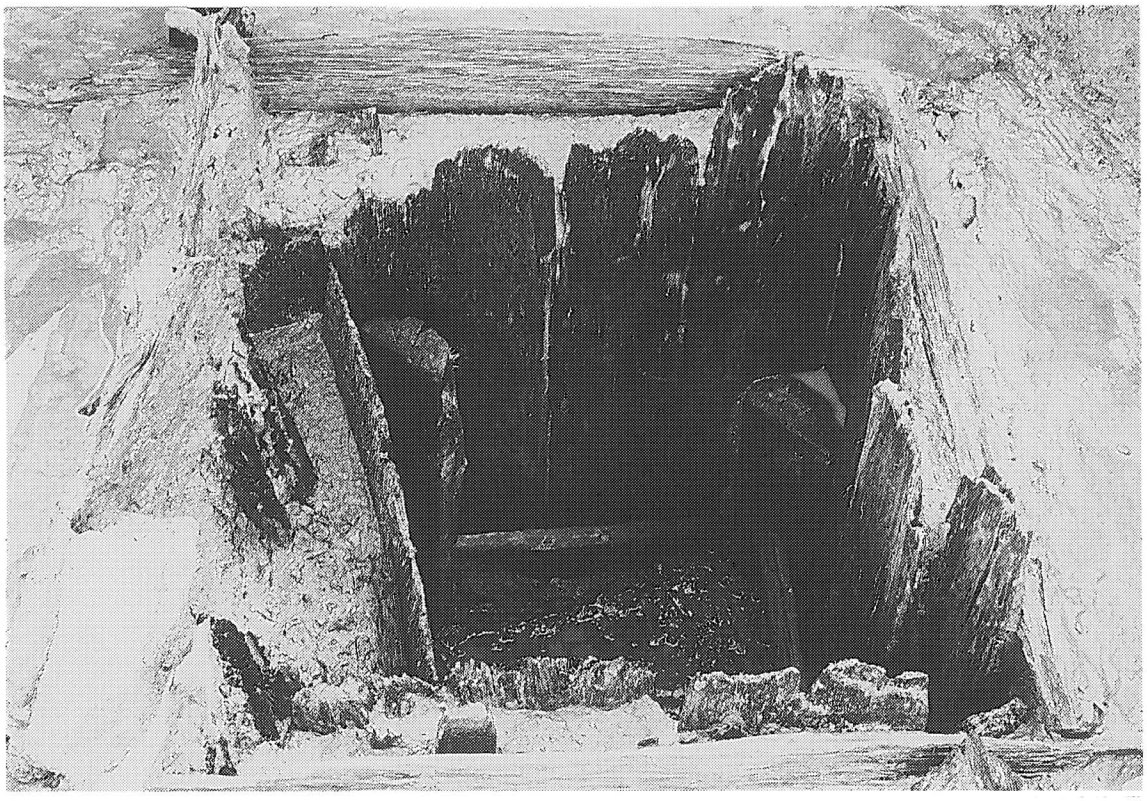
b．同西側全景(北から)



a．南調査区第3遺構面井戸1（南から）

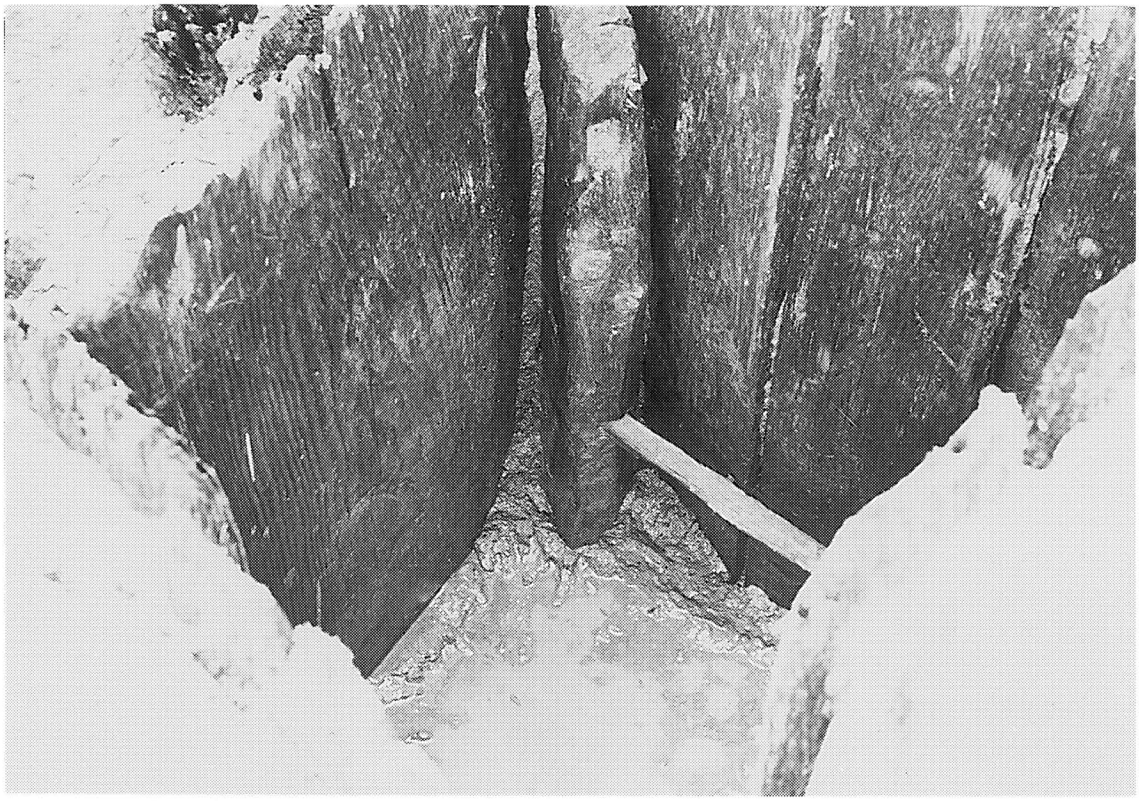


b．同上（東から）

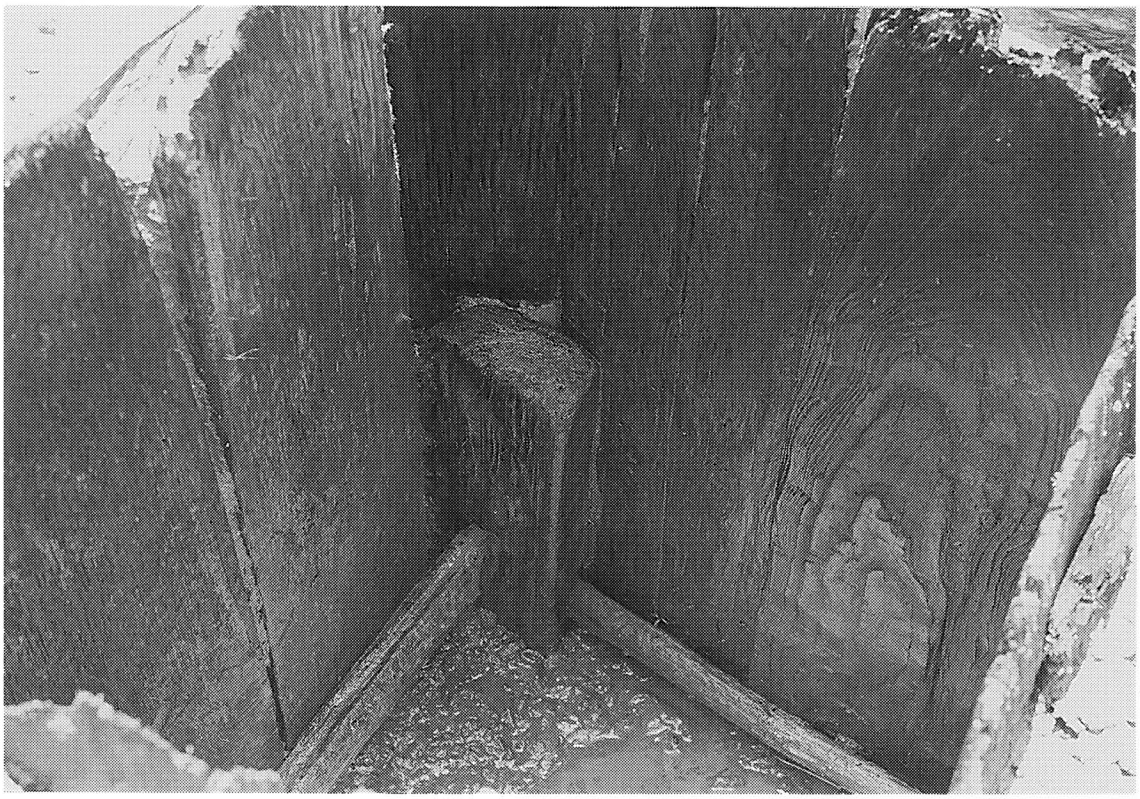


a．南調査区第3遺構面井戸1井戸枠(東から)

b．同上(北西から)



a．南調査区第3遺構面井戸1井戸枠(南東から)

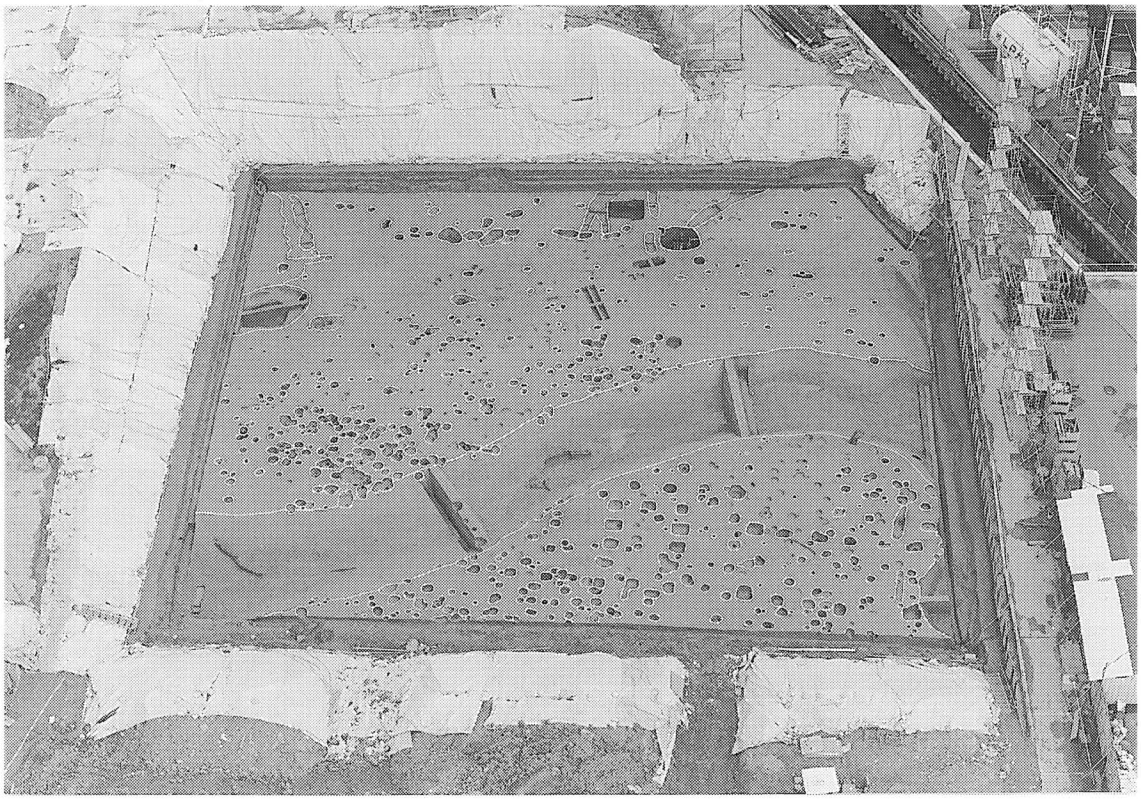


b．同上(北西から)

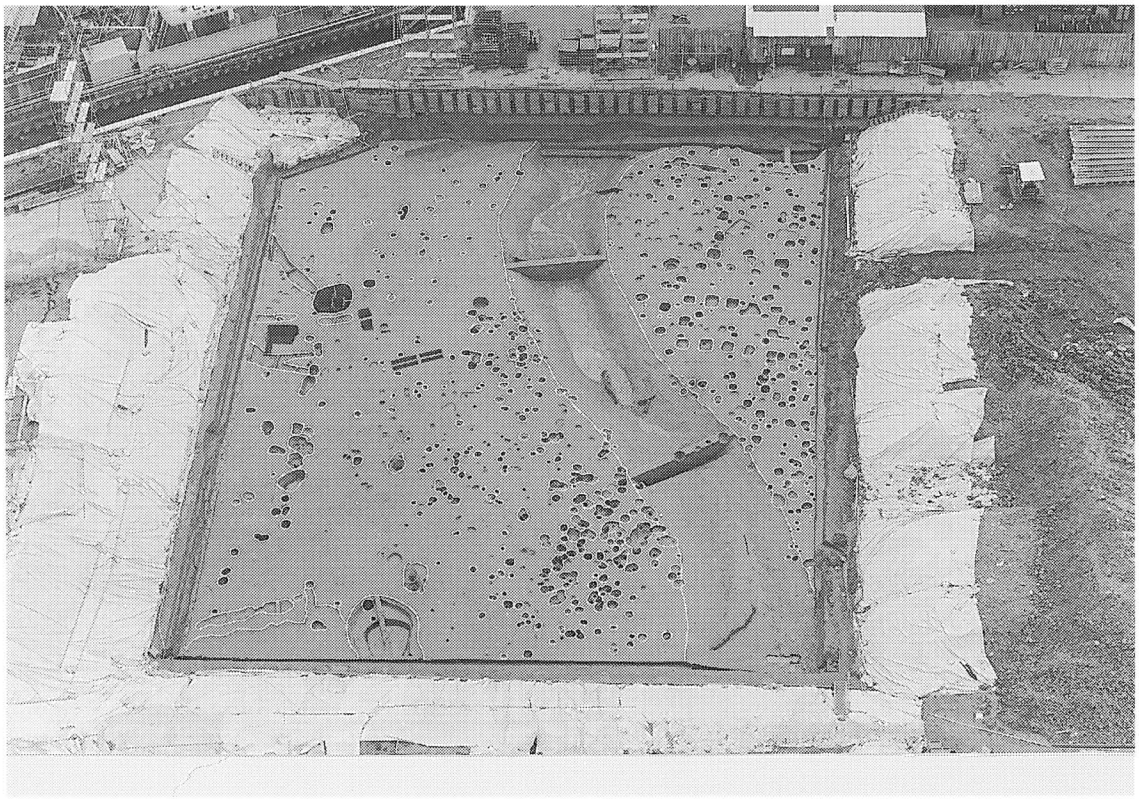
図版17　検出遺構

a．南調査区第3遺構面祭祀遺構土師器杯検出状況

b．同須恵器瓶子検出状況

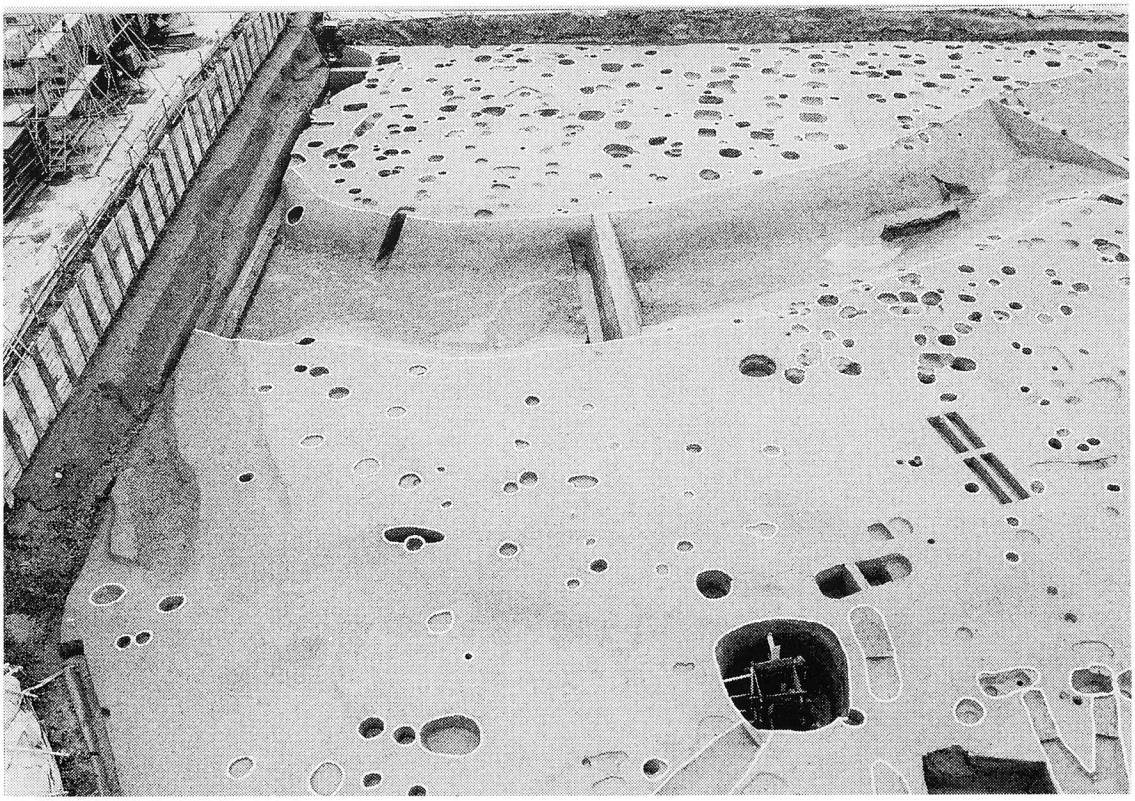


a．北調査区第4遺構面全景(南から)



b．同上(西から)

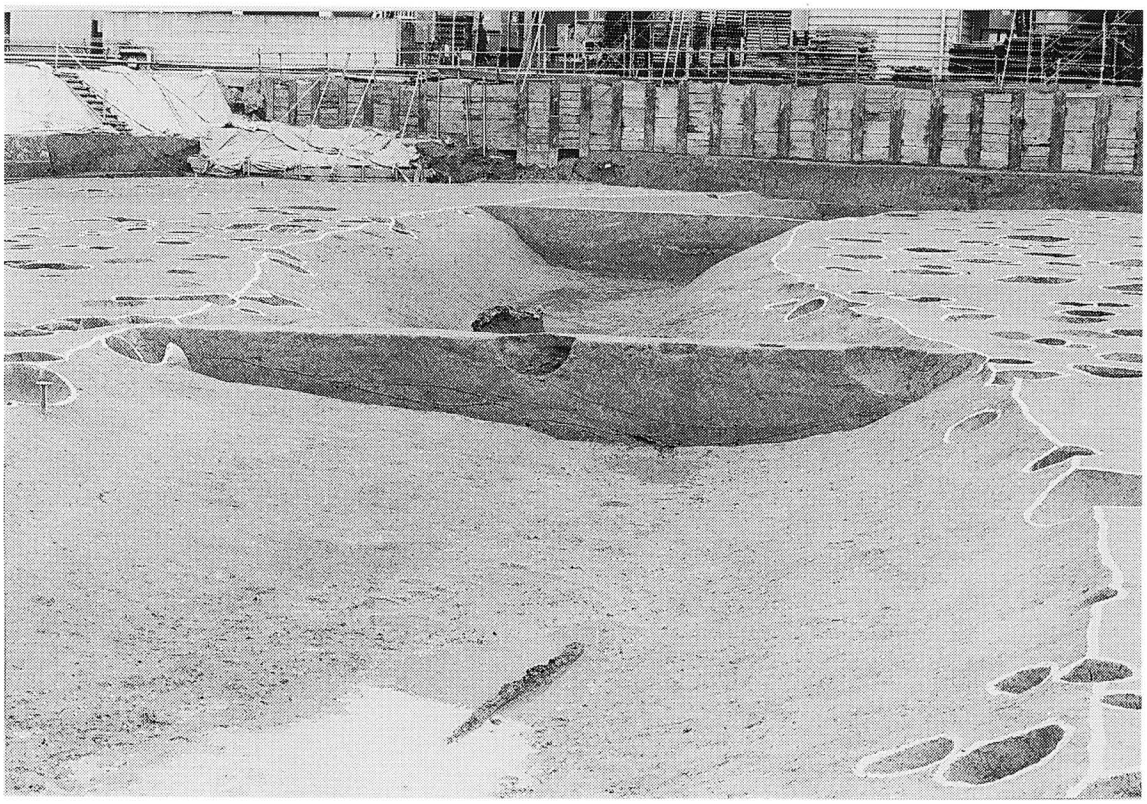
図版19　検出遺構



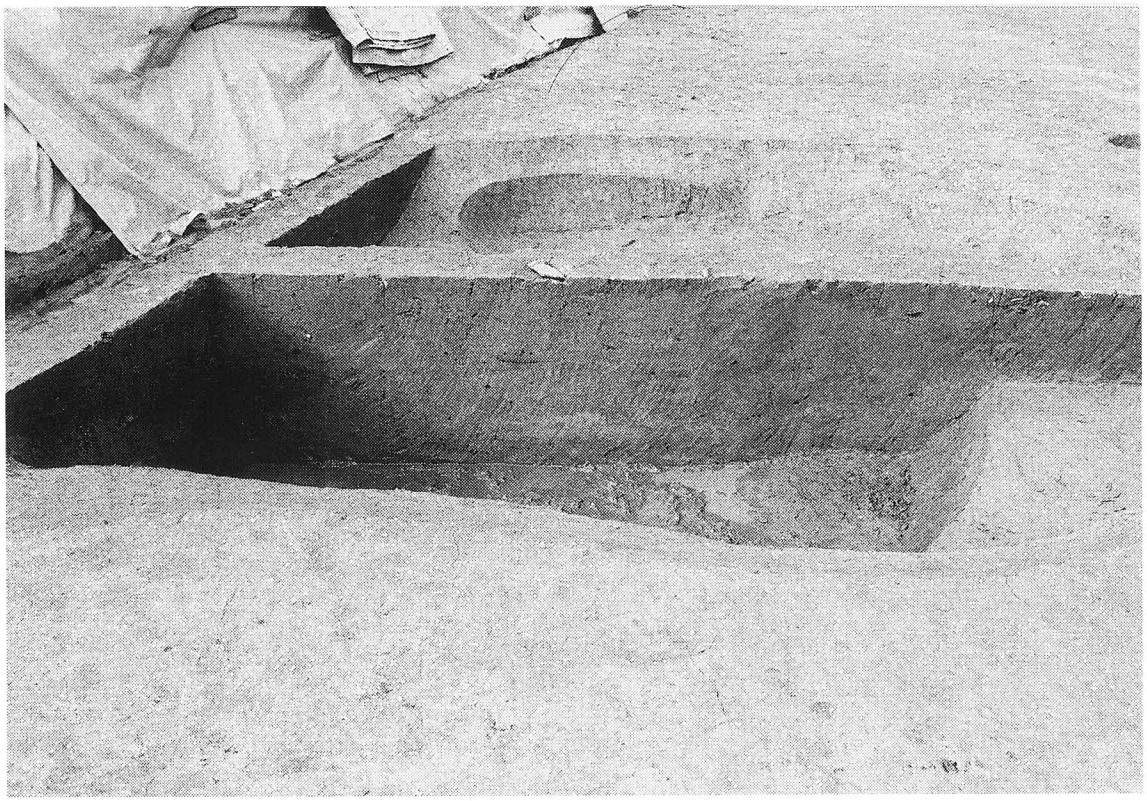
a．北調査区第4遺構面東側全景(北から)

b．同西側全景(北から)

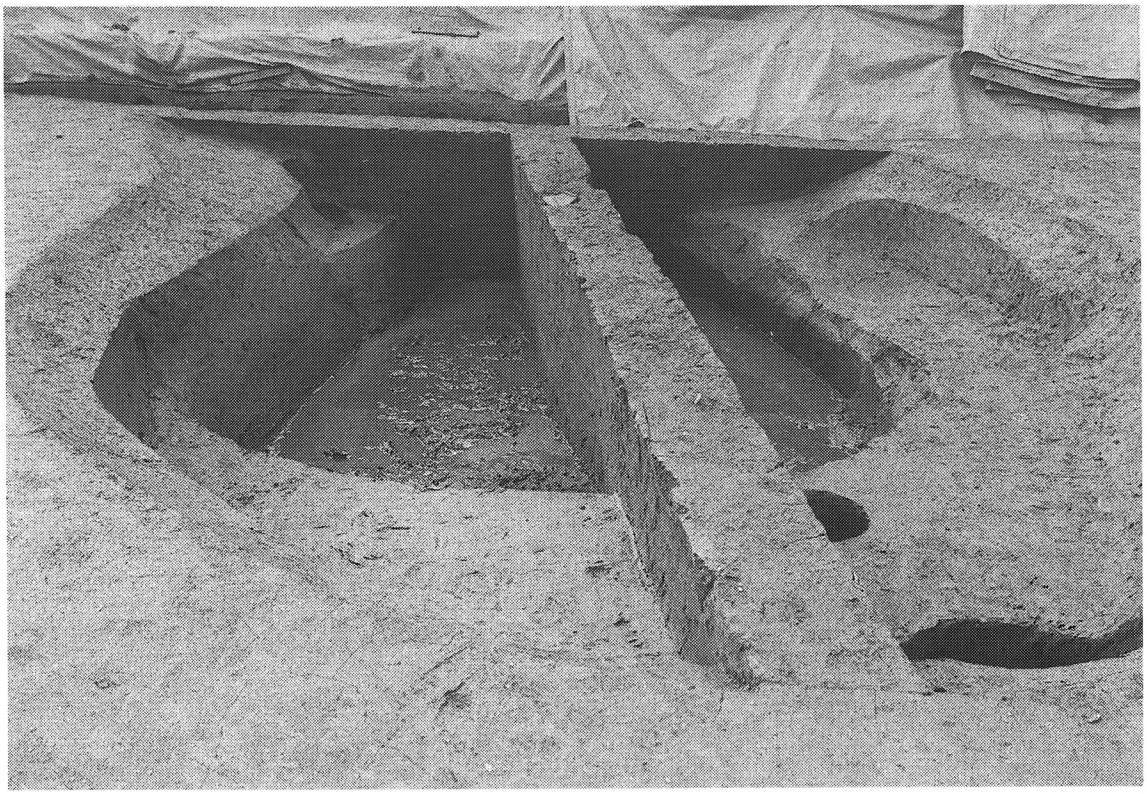
a．北調査区第4遺構面自然河川検出状況（東から）



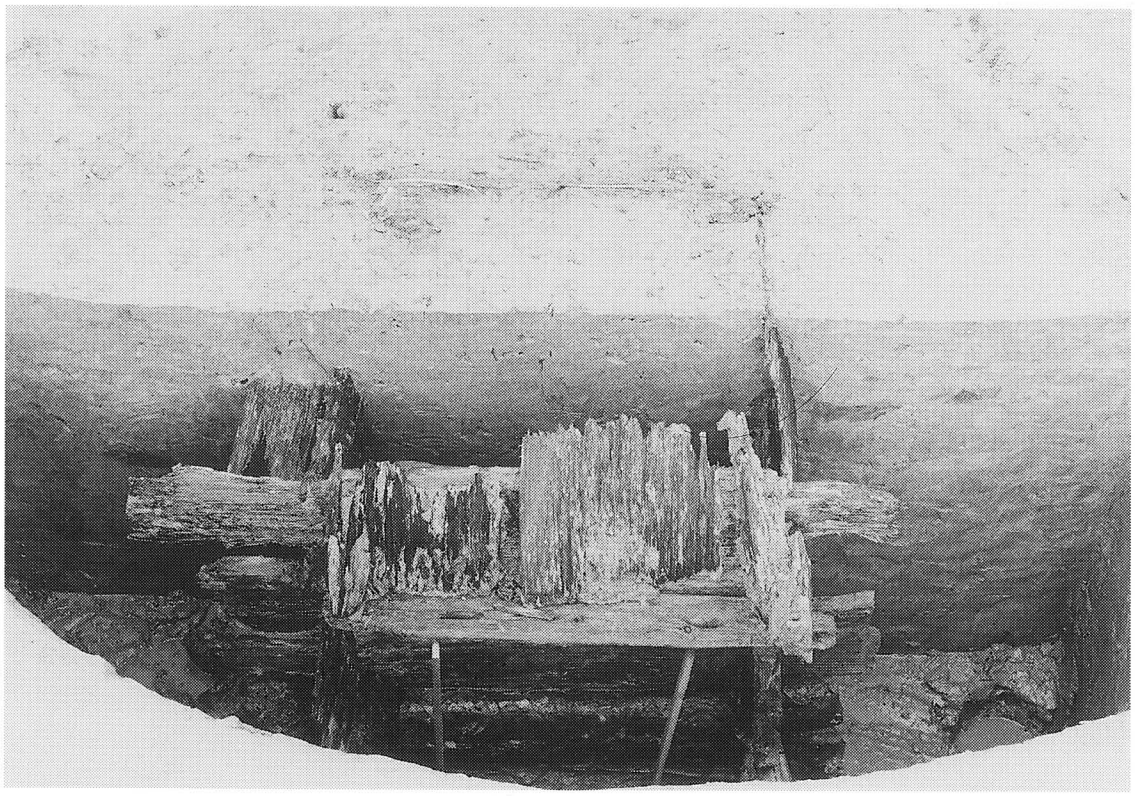
b．同上（西から）



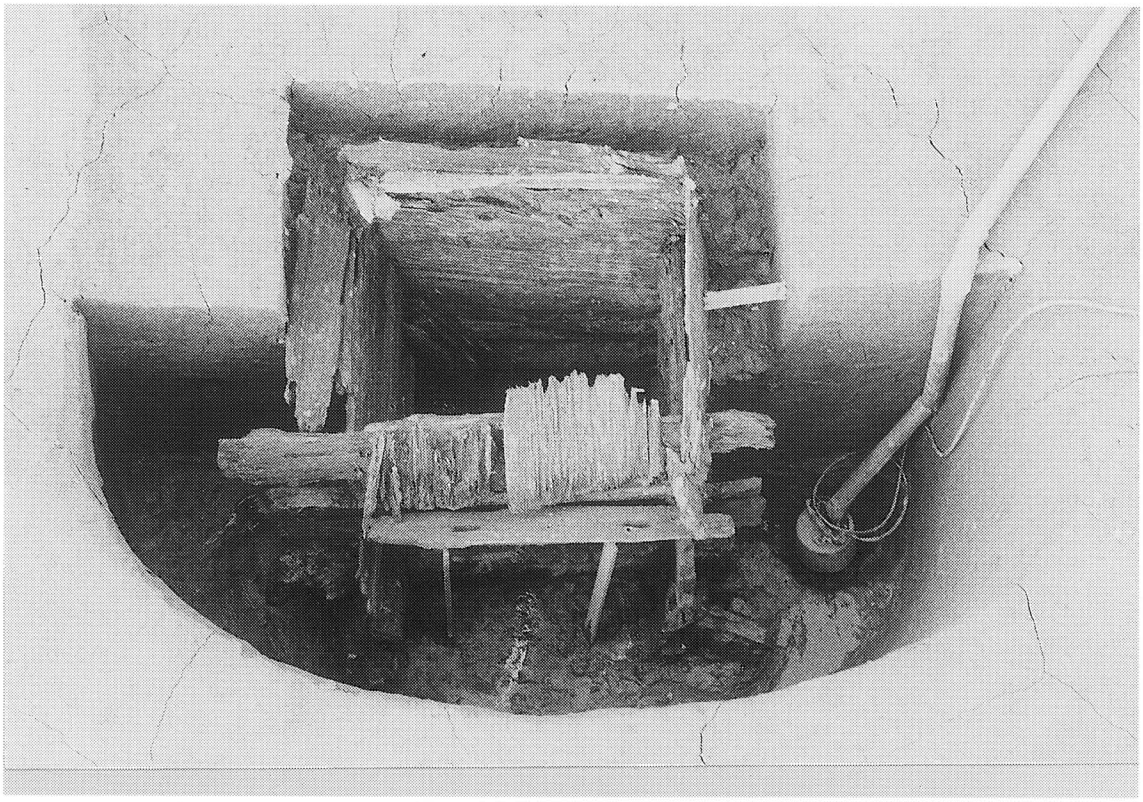
a．北調査区第4遺構面土坑1完掘状況(南から)



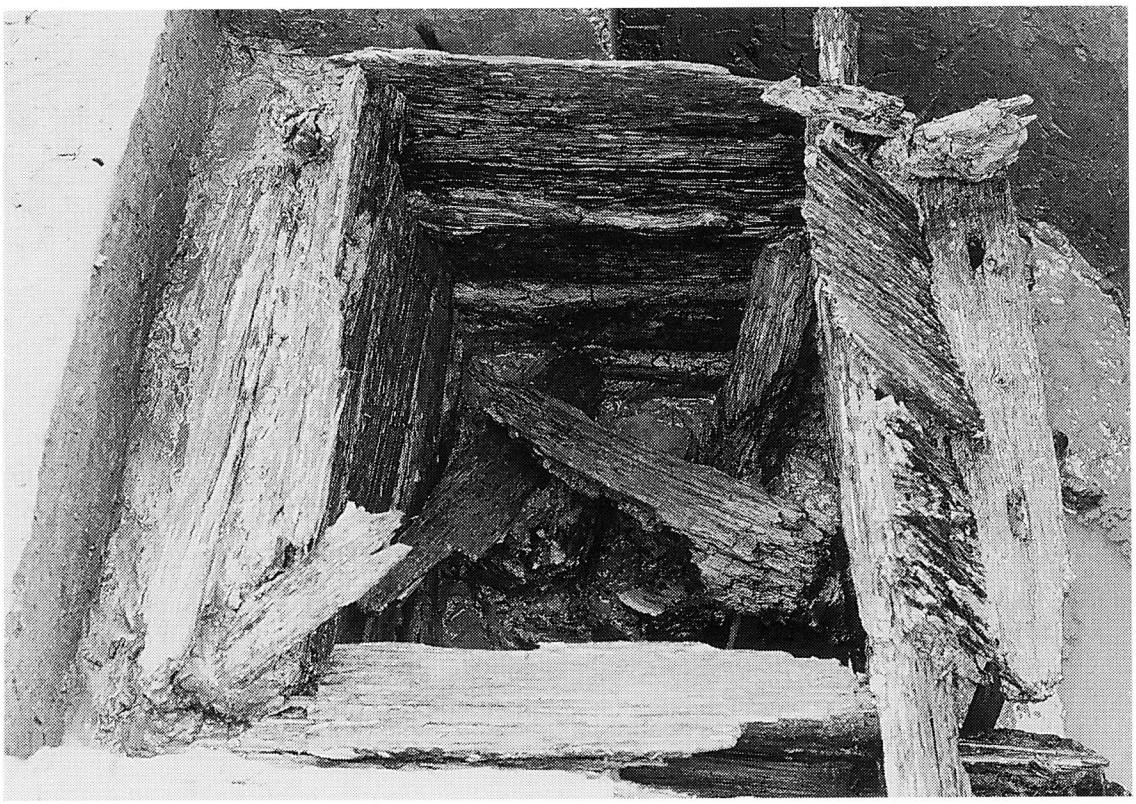
b．同上(東から)



a．北調査区第4遺構面井戸1南側掘削状況(南から)

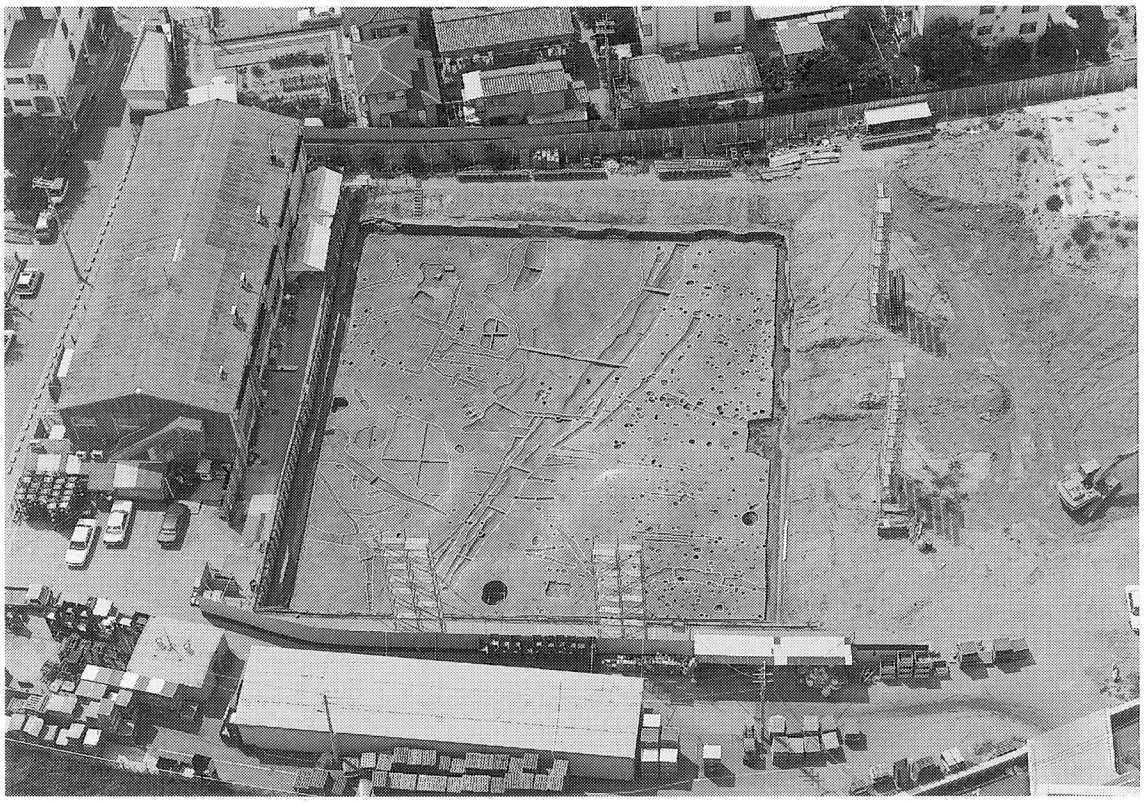


b．同井戸枠内掘削状況(南から)

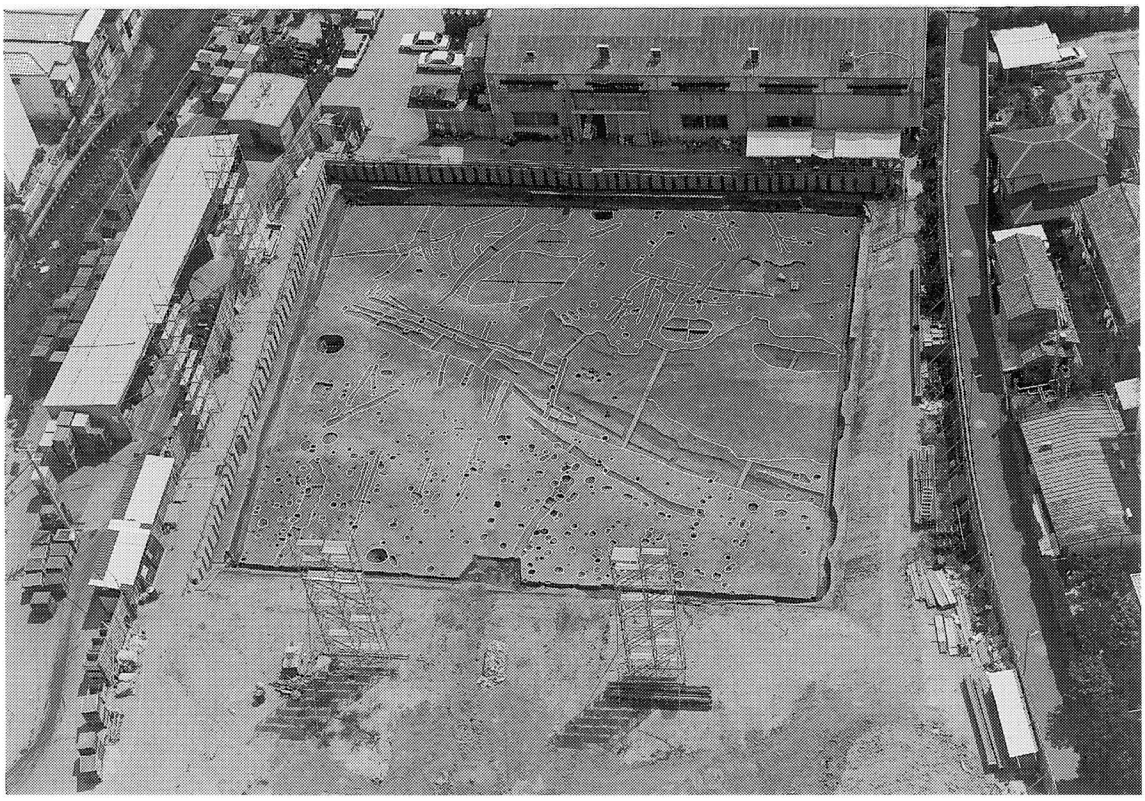


a．北調査区第4遺構面井戸1井戸枠内(西から)

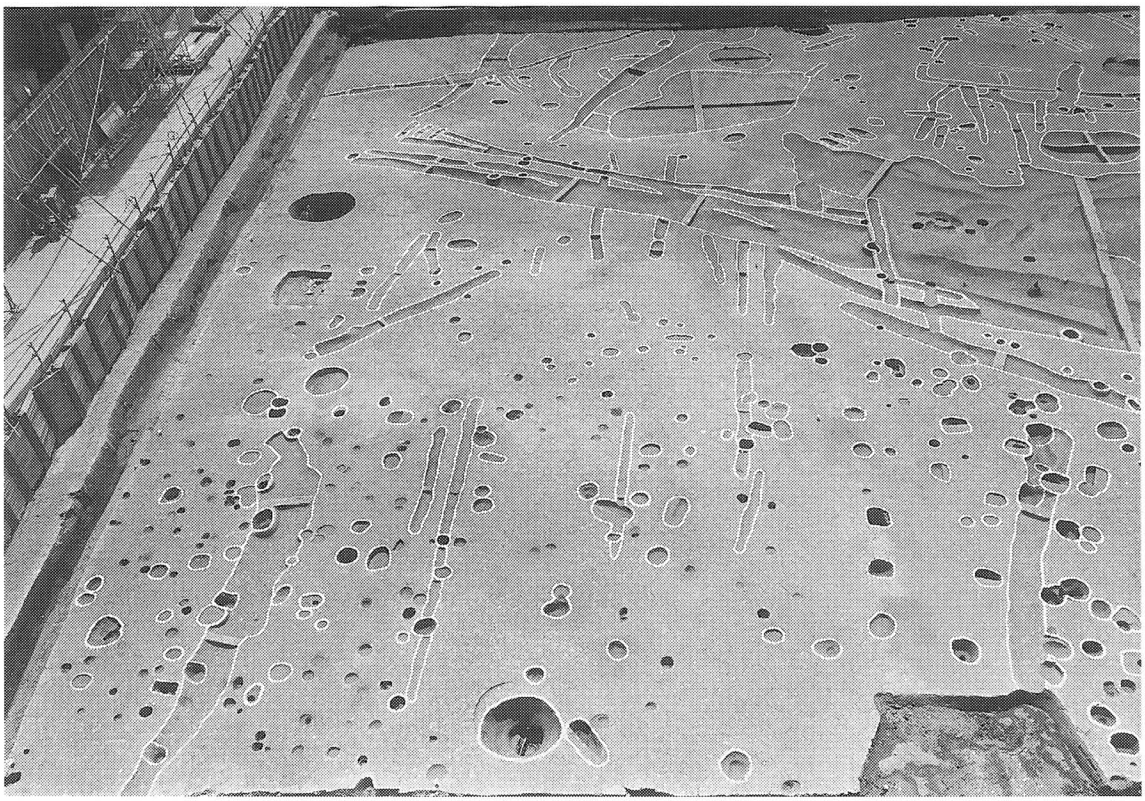
b．同井戸枠南東隅(東から)



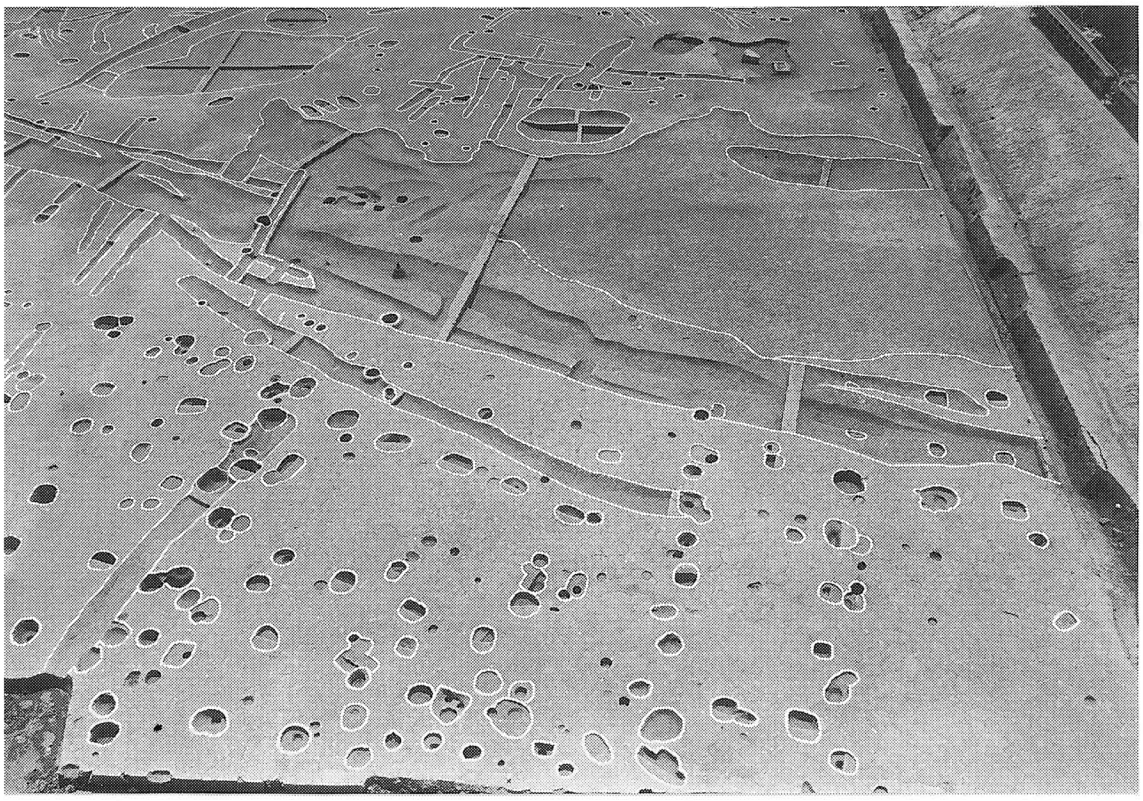
a．南調査区第4遺構面全景(東から)



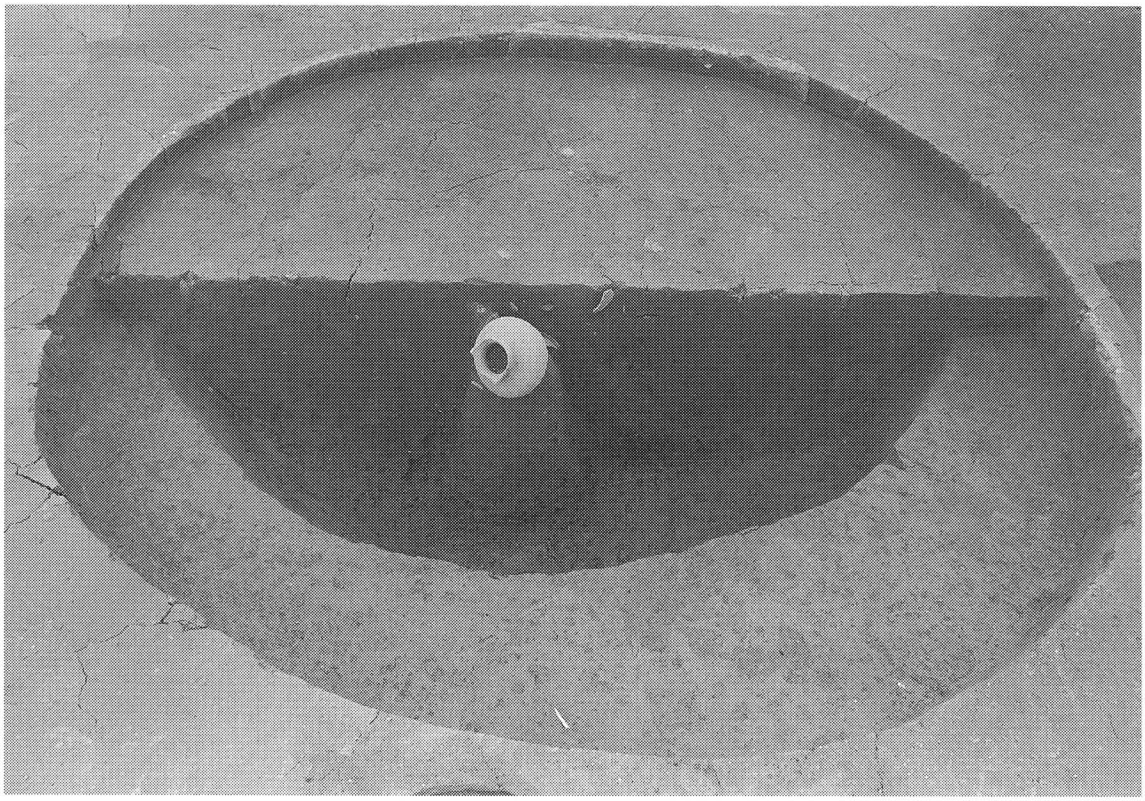
b．同上(北から)



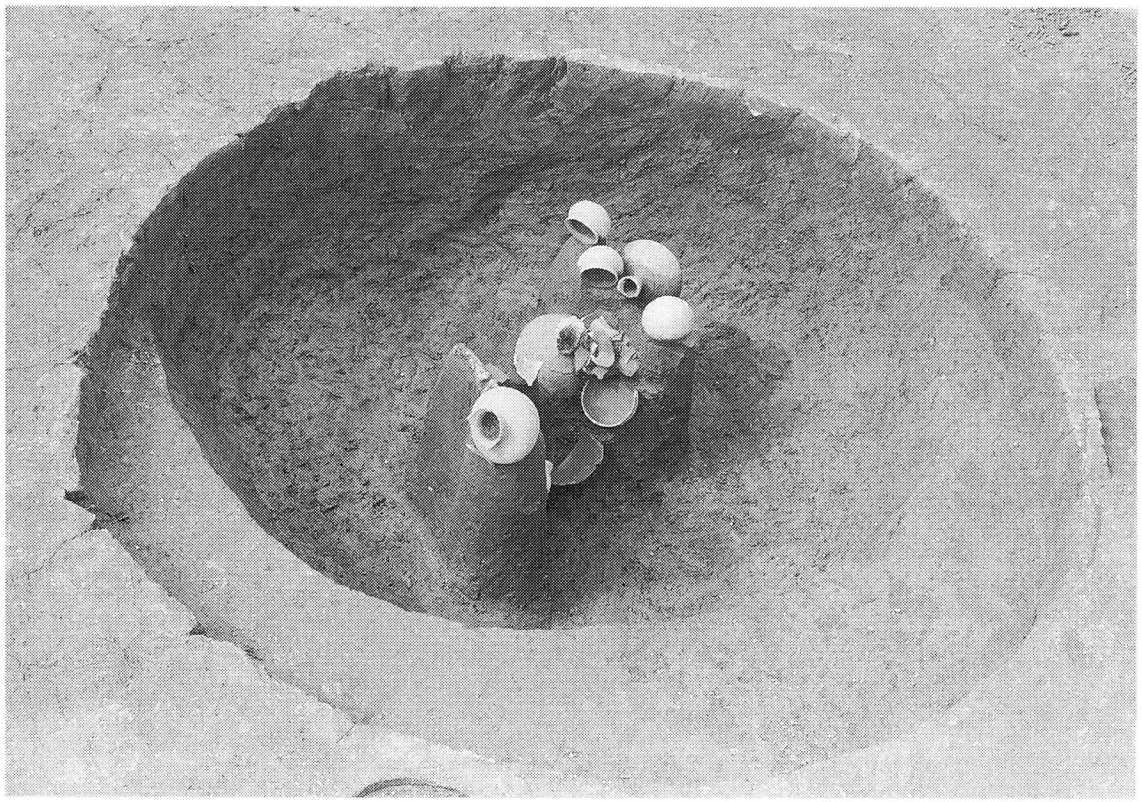
a．南調査区第4遺構面東側全景(北から)



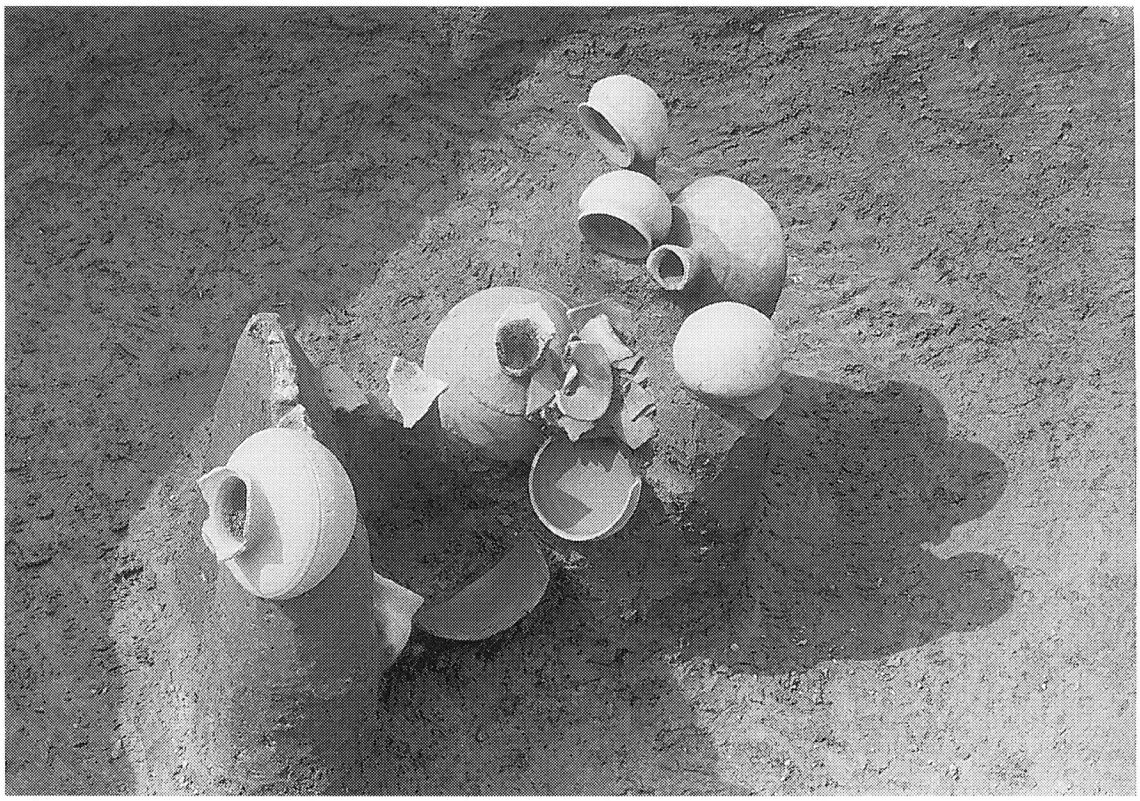
b．同西側全景(北から)



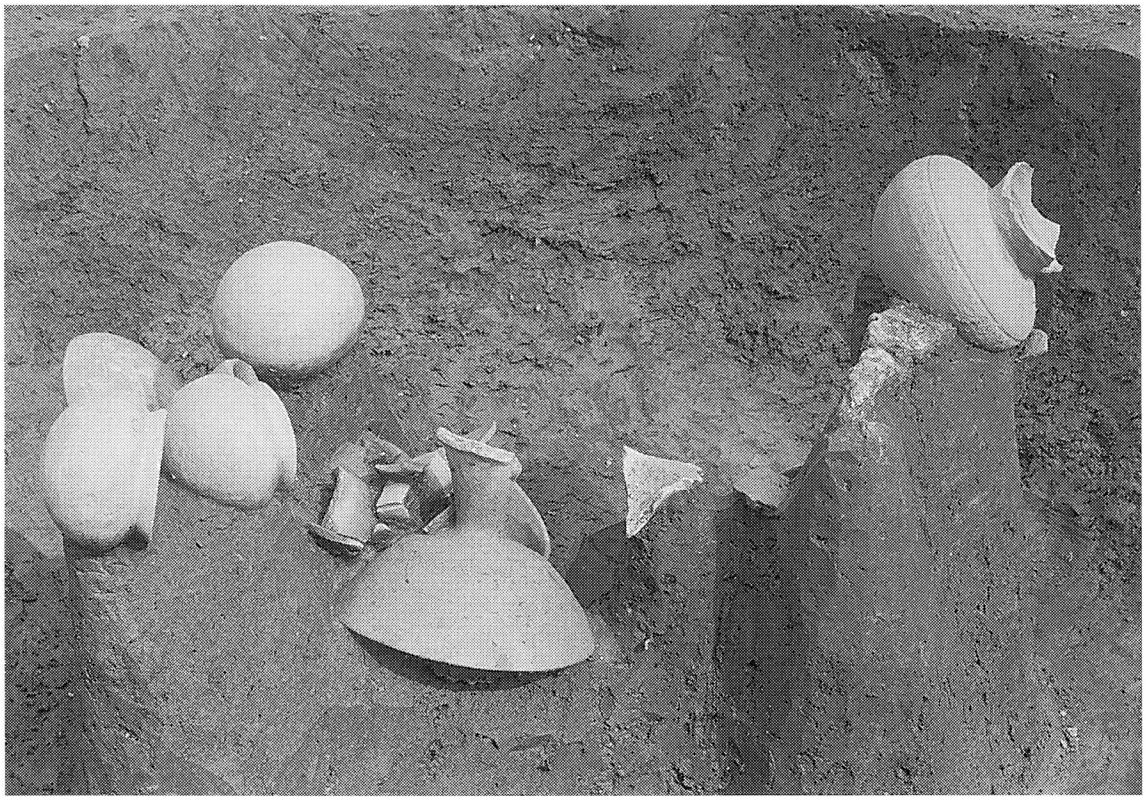
a．南調査区第4遺構面土坑3南側掘削状況(南から)



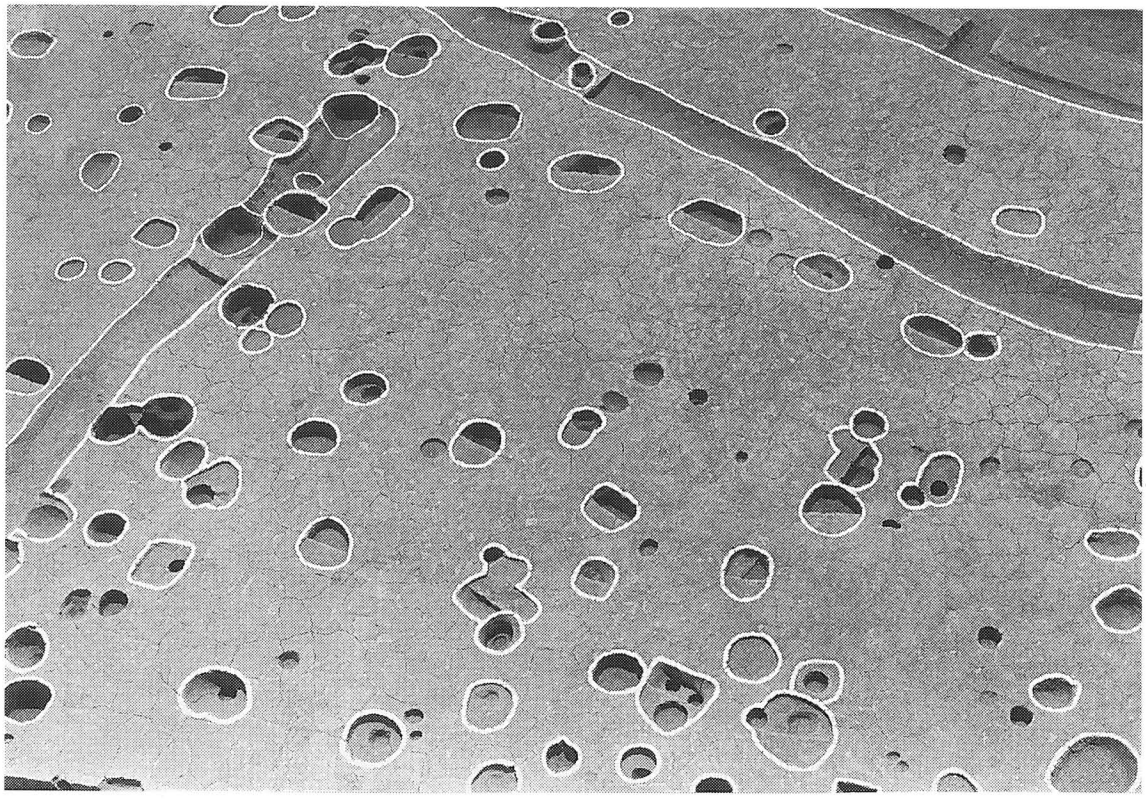
b．同遺物出土状況(南から)



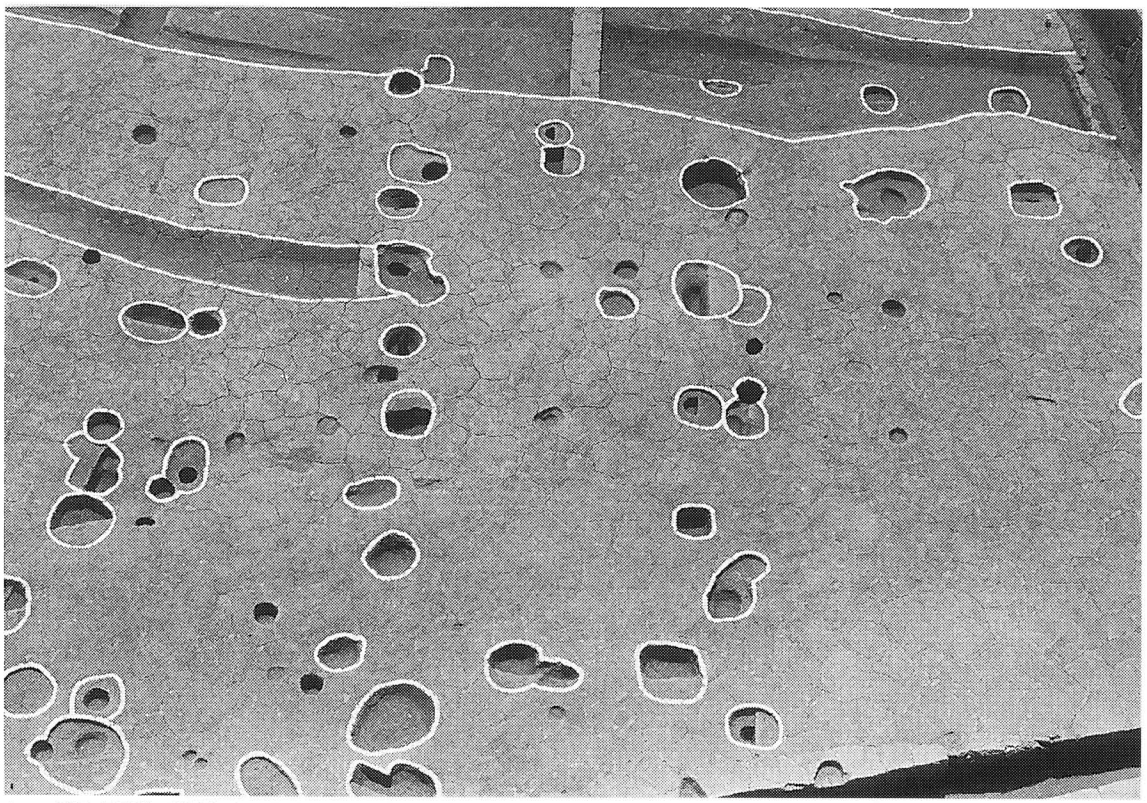
a．南調査区第4遺構面土坑3遺物出土状況(南から)



b．同上(西から)

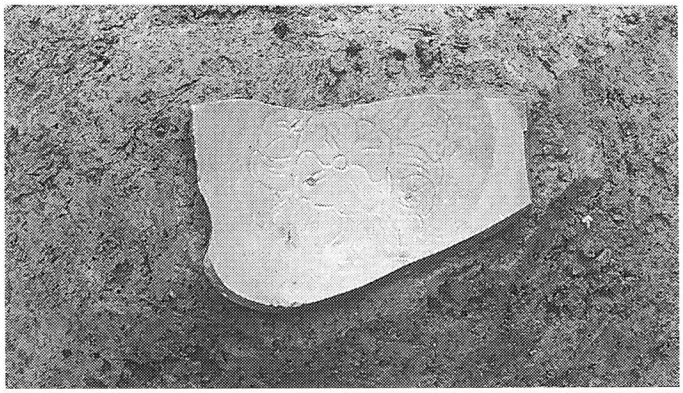


a．南調査区第4遺構面掘立柱建物(北から)

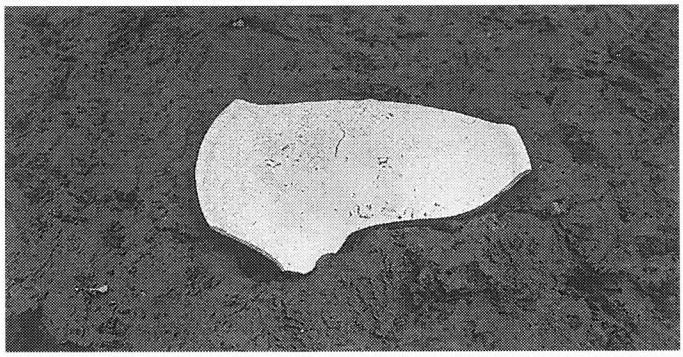


b．南調査区第4遺構面掘立柱建物(北から)

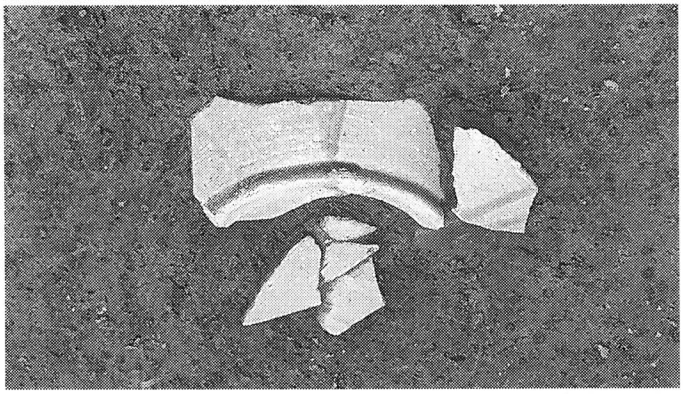
図版29　検出遺構



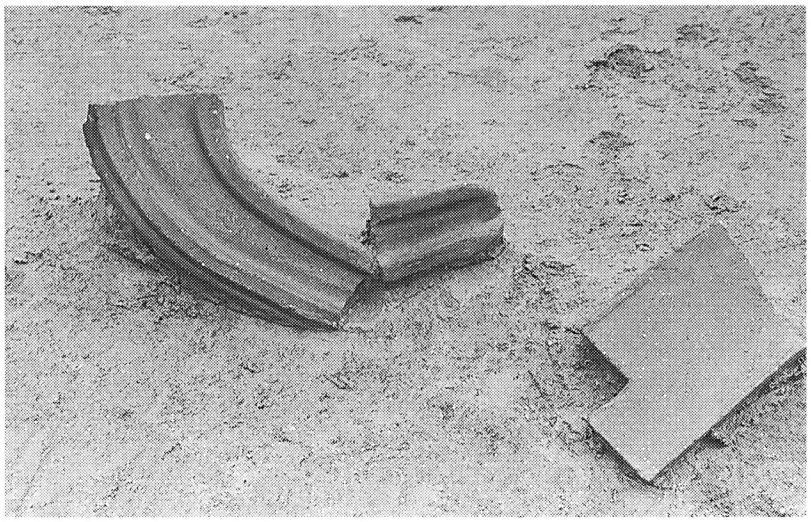
a．南調査区第Ⅳ層緑釉陶器花文椀出土状況



b．南調査区第Ⅳ層灰釉陶器皿出土状況

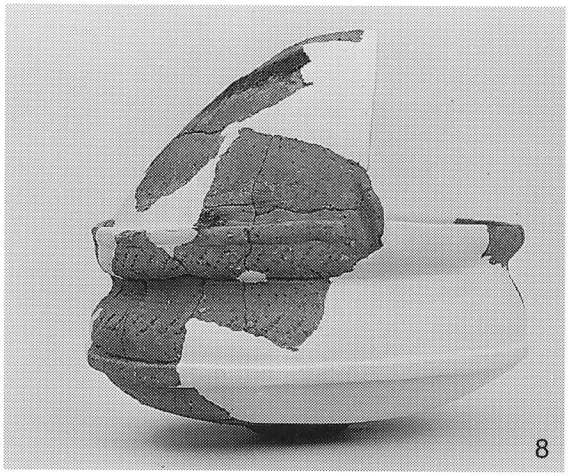


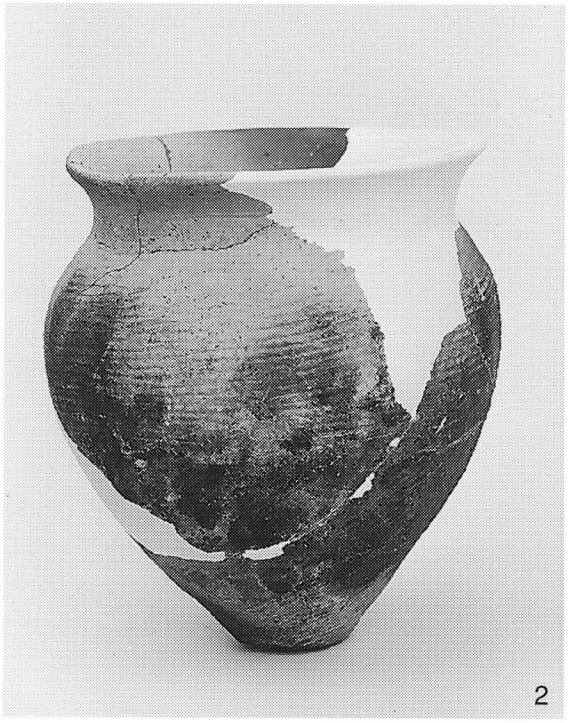
c．南調査区第Ⅳ層灰釉陶器壺出土状況

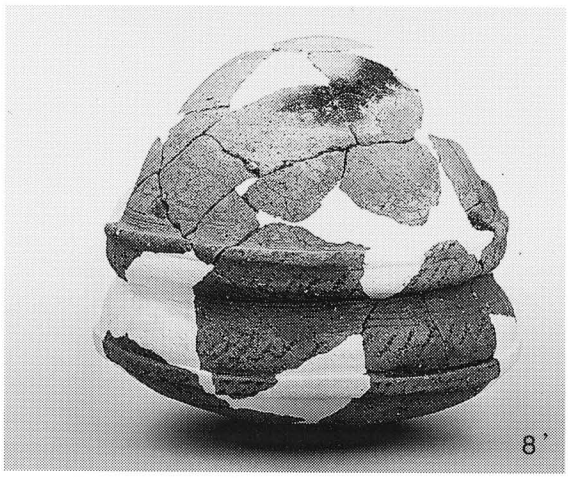


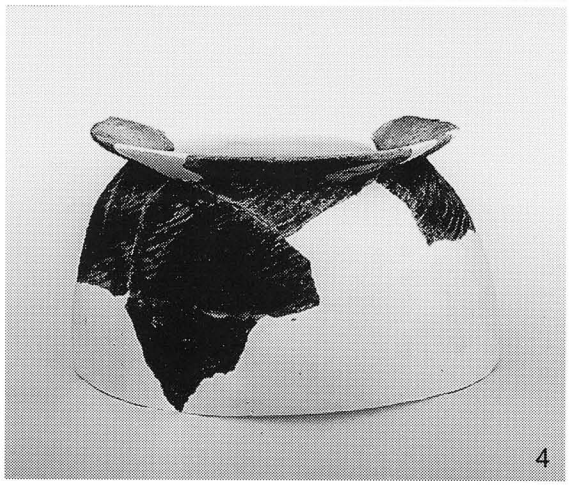
d．南調査区第Ⅴ層用途不明土製品出土状況

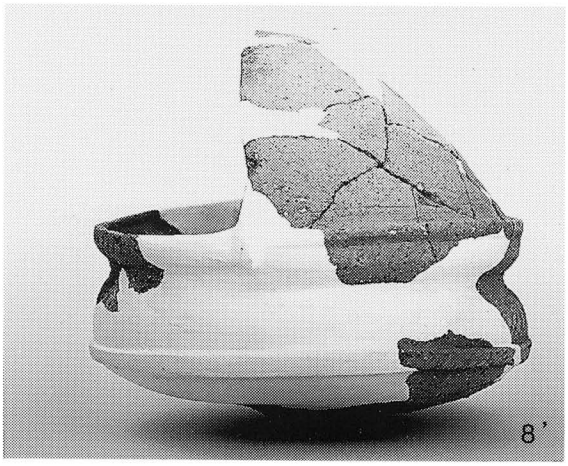
図版30　出土土器(1)

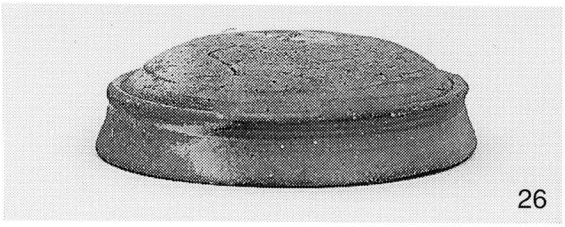






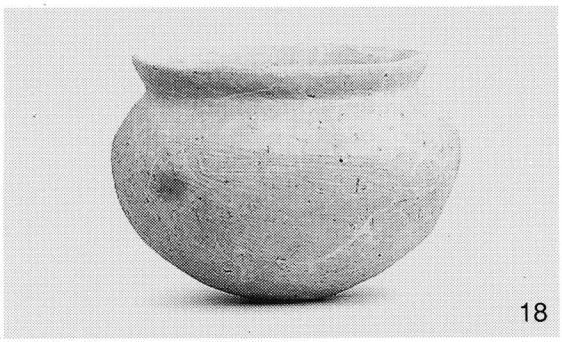


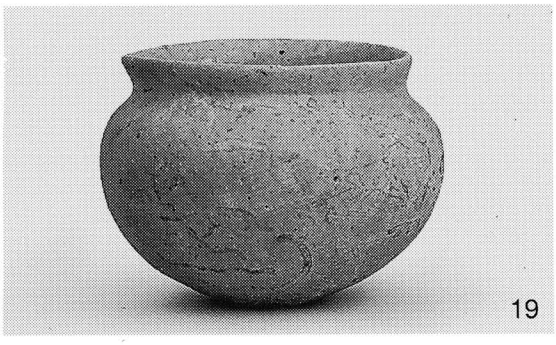


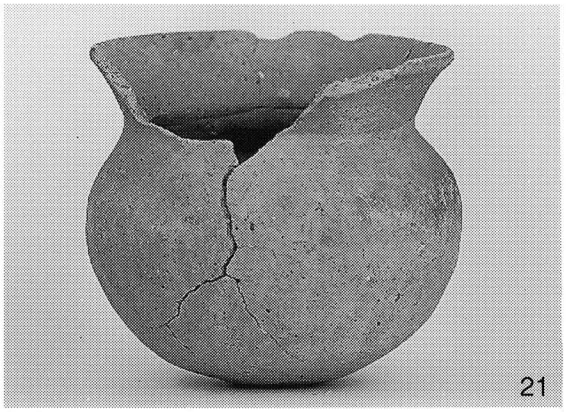


古墳時代初頭・中期

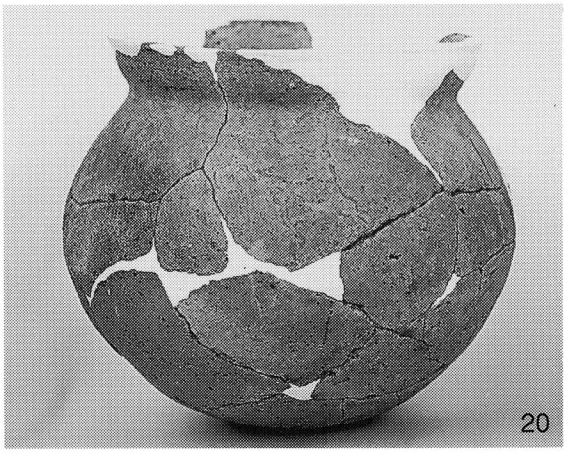
図版31　出土土器(2)

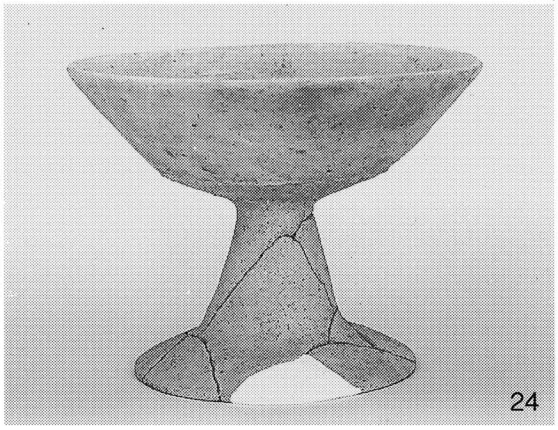

18


19

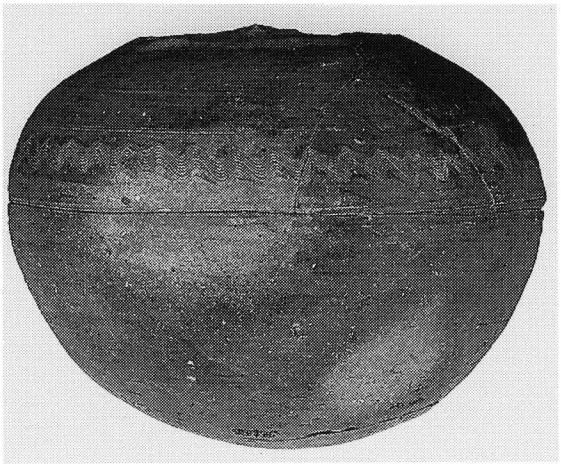

21

23

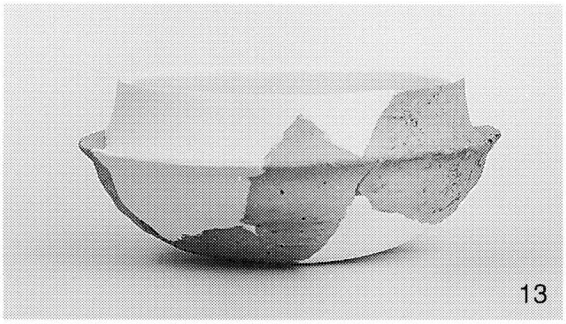

20

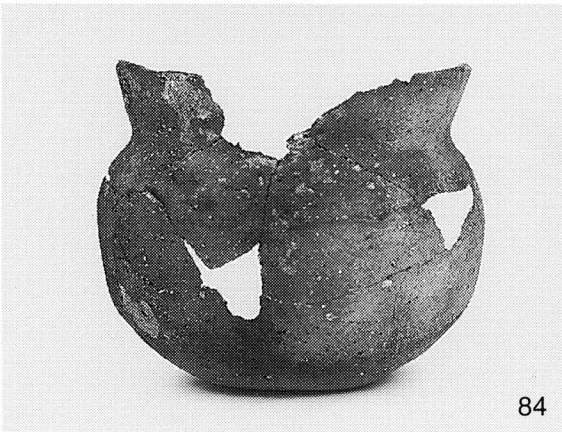

24

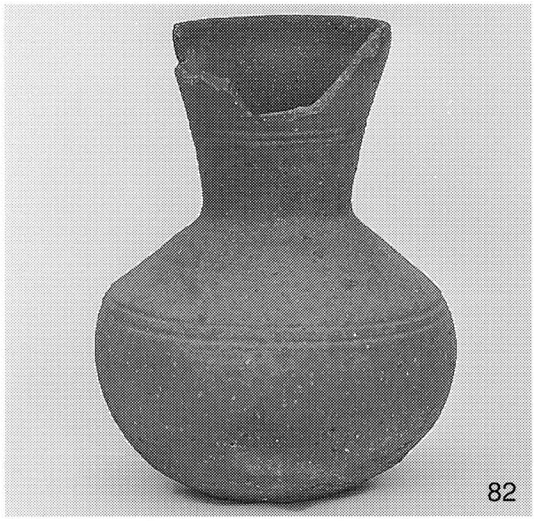
22

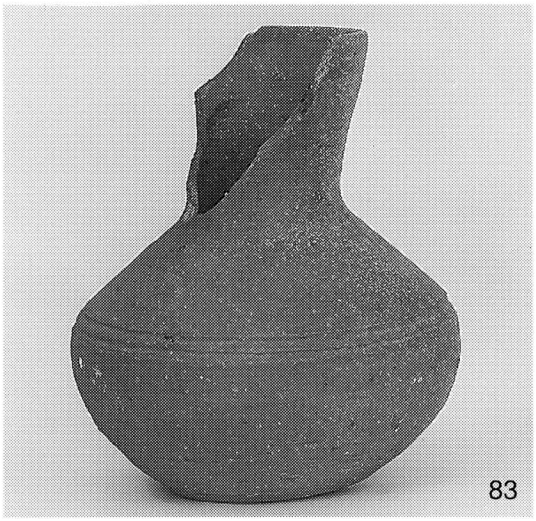


古墳時代中期



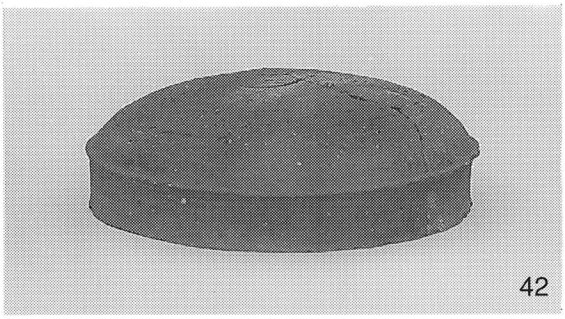




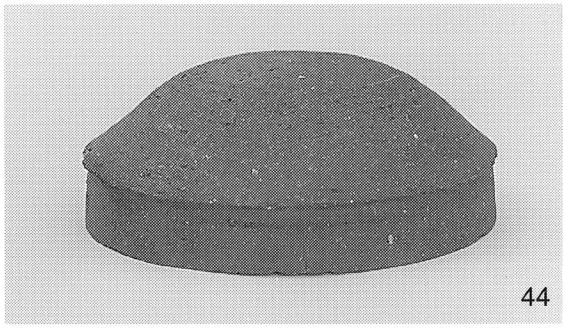


古墳時代中期・後期

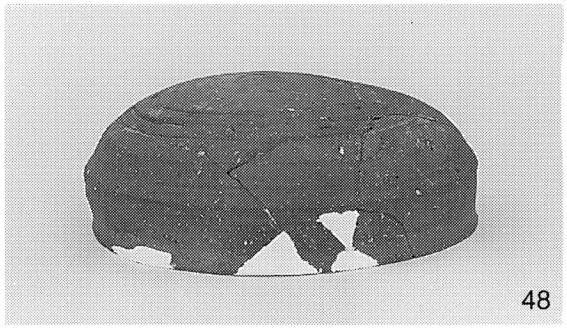
図版33　出土土器(4)

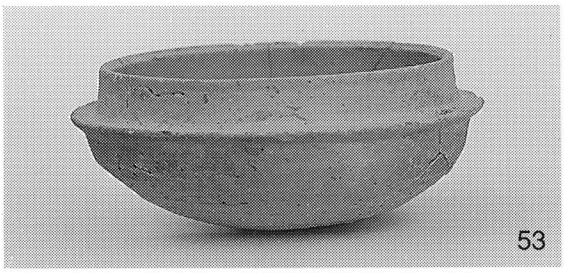

42

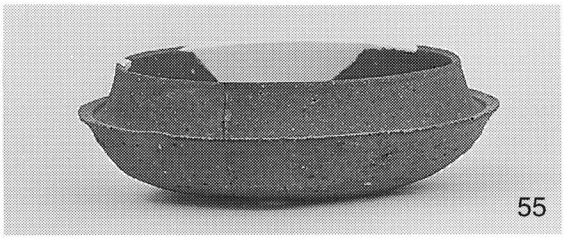
43

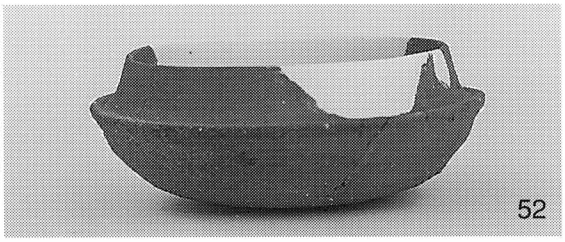

44

45

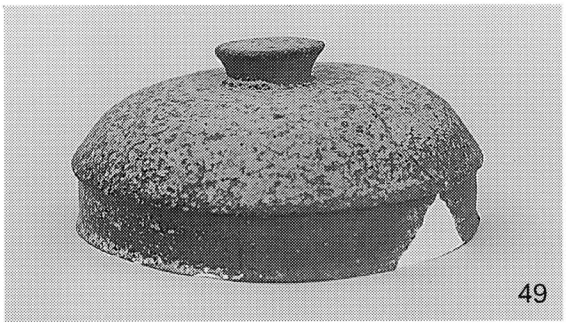

48

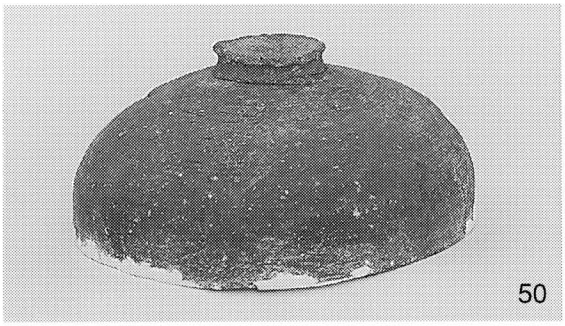

53


55


52

56

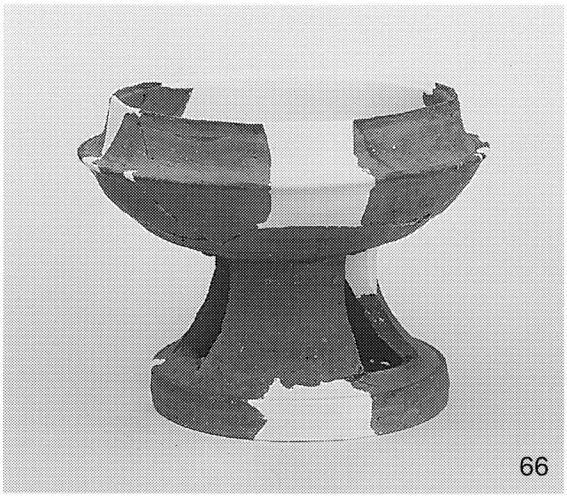

49

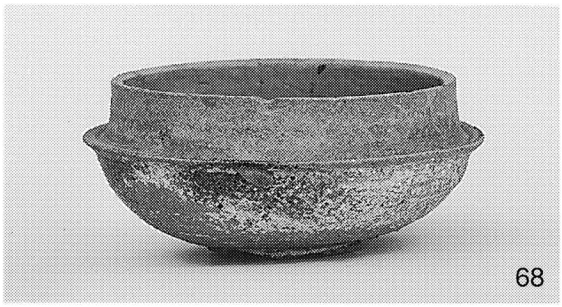

50

古墳時代中期

65

67


66


68

71

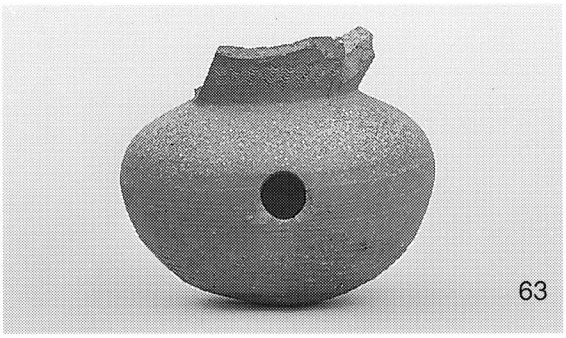
73

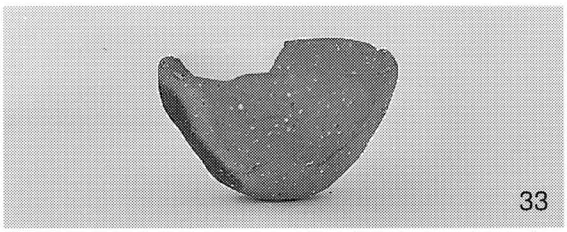
70

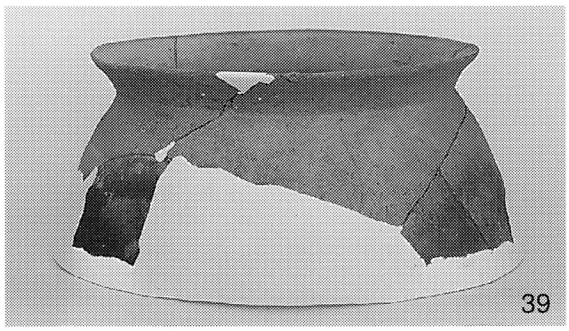
69

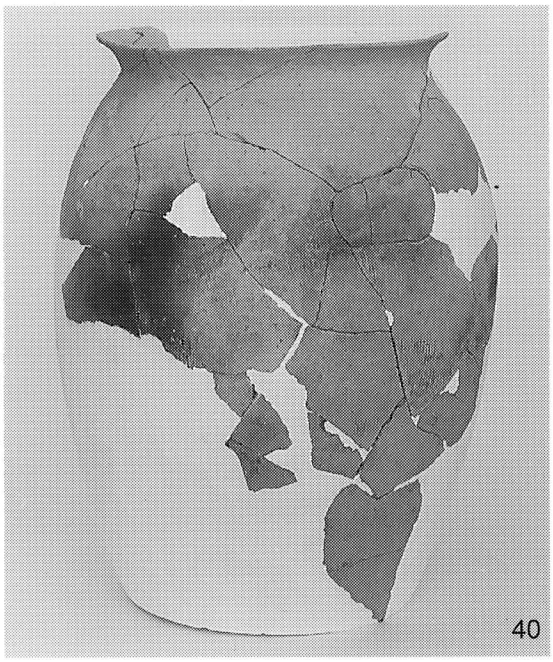
古墳時代中期

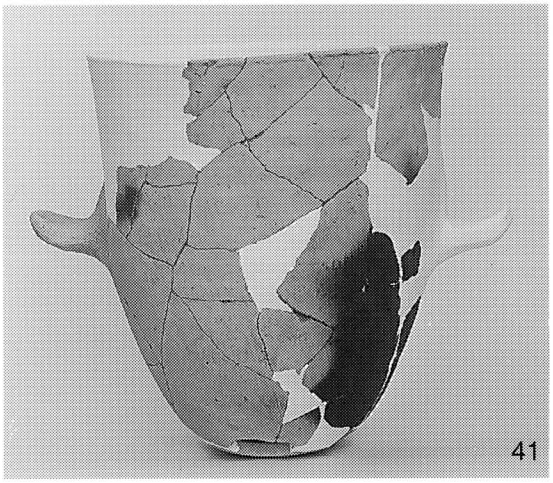
図版35　出土土器(6)

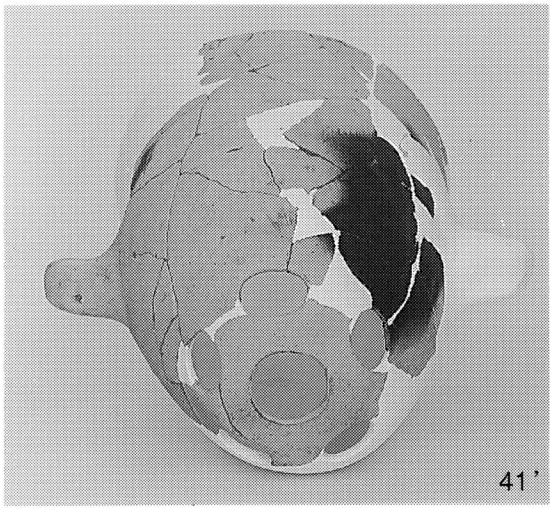






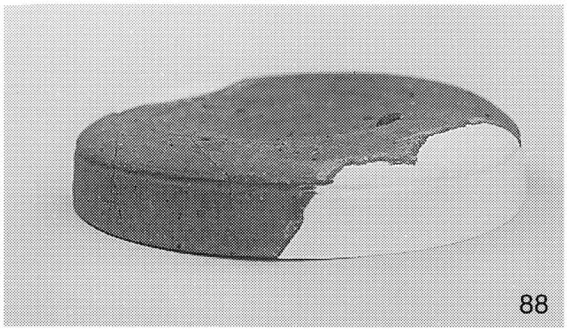


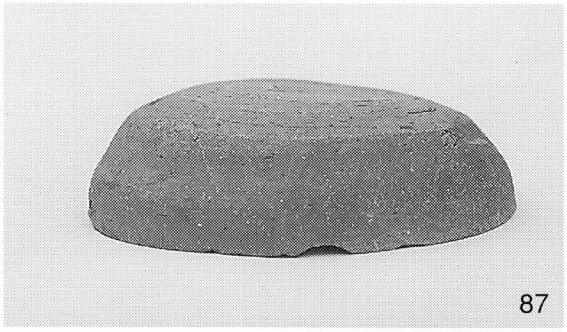


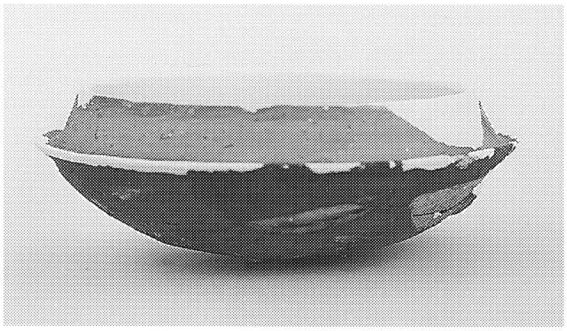


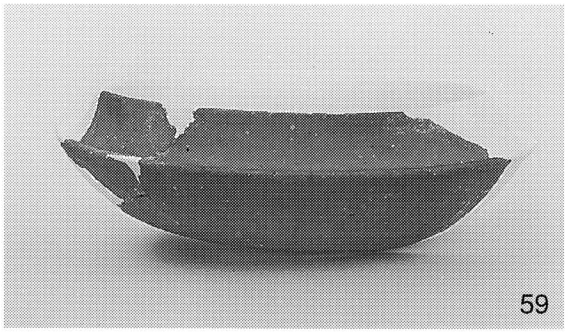
古墳時代中期

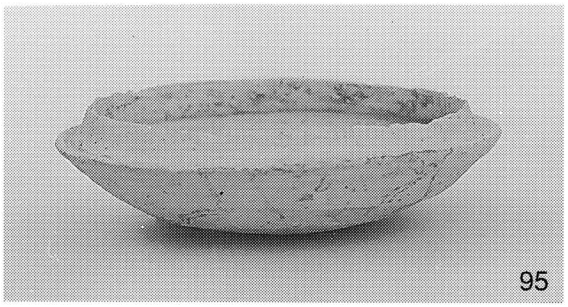
図版36　出土土器(7)

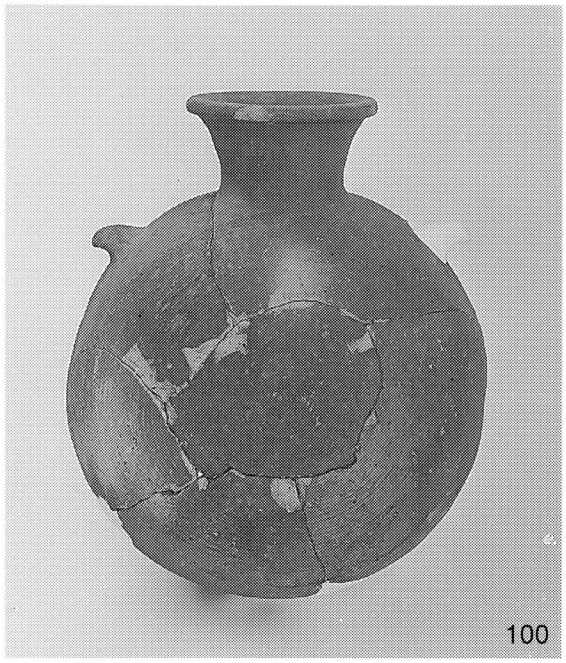






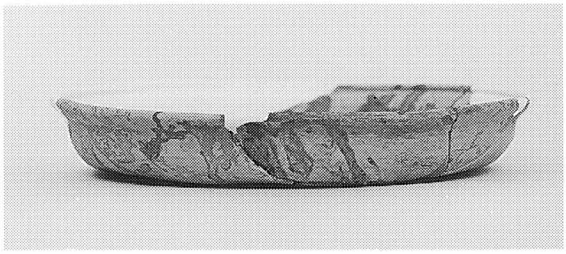


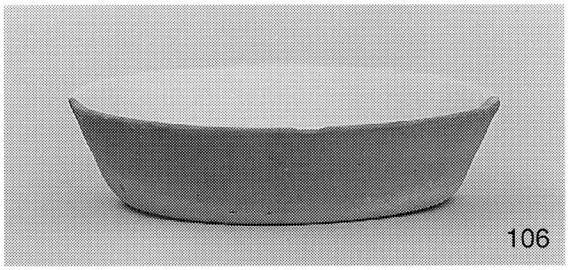


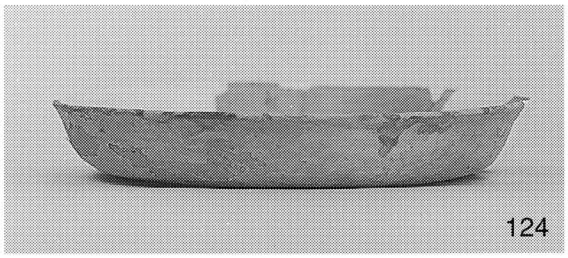


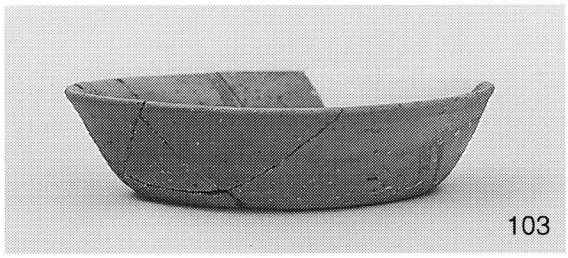
古墳時代後期

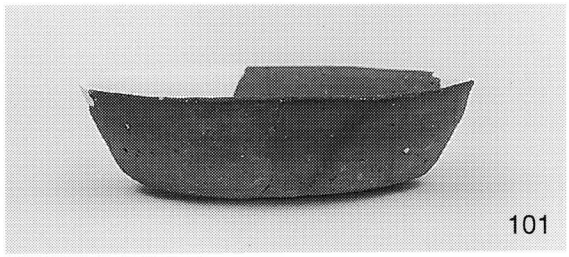
図版37　出土土器(8)

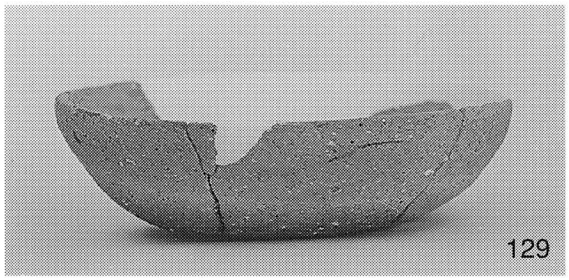


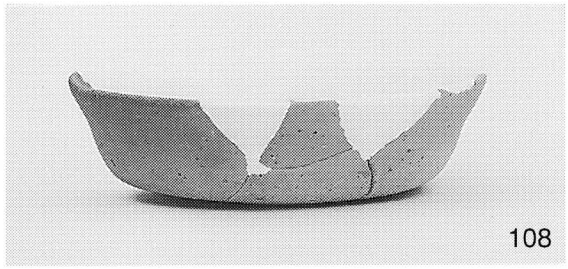


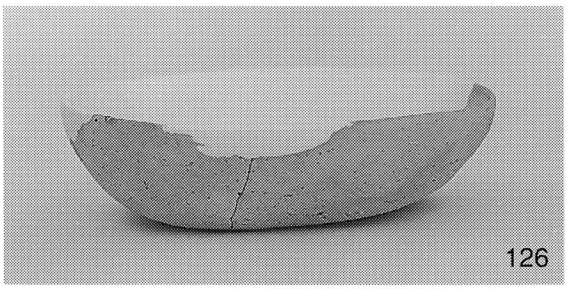


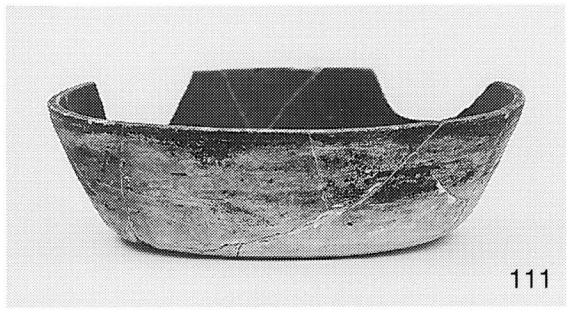


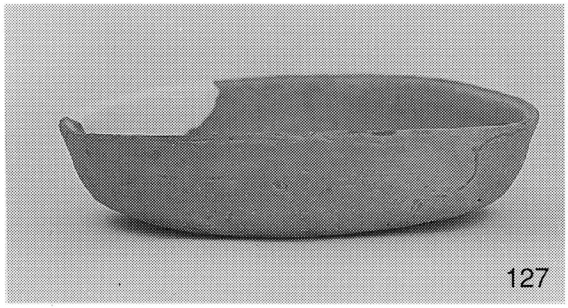


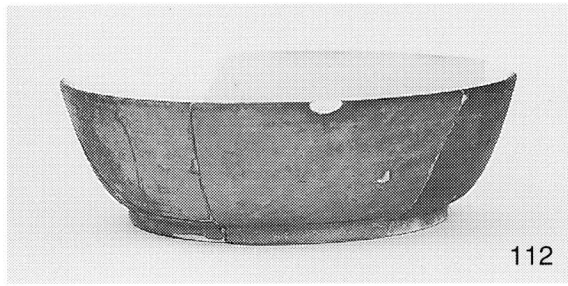




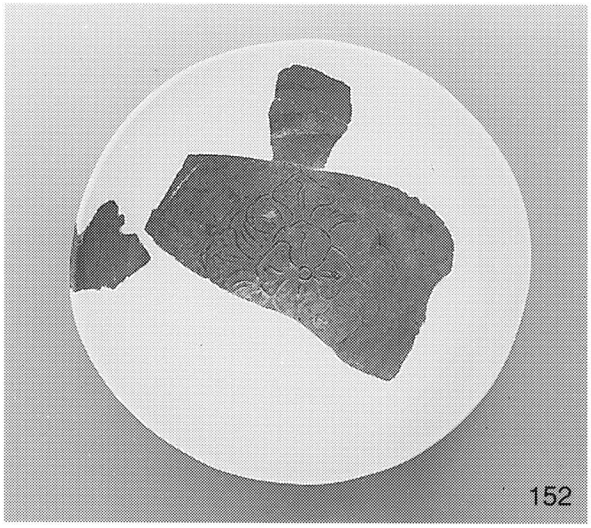


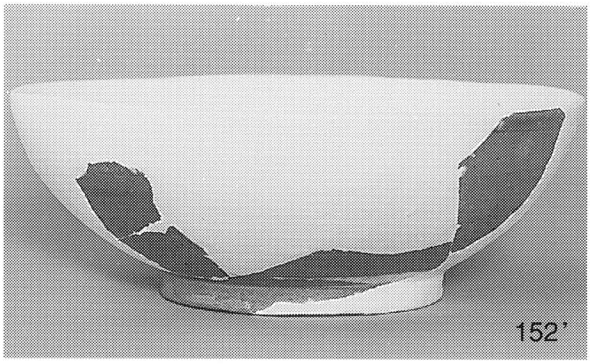


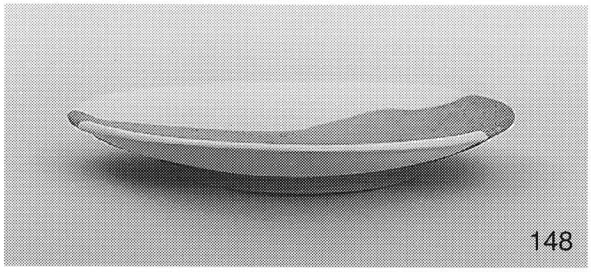




奈良時代


152

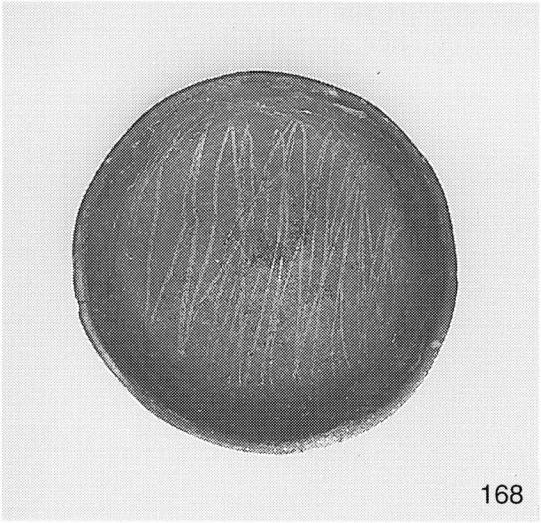

152'

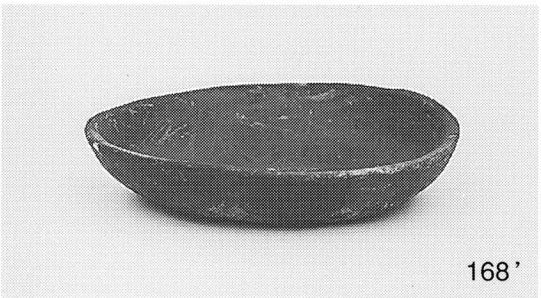

148

147

143

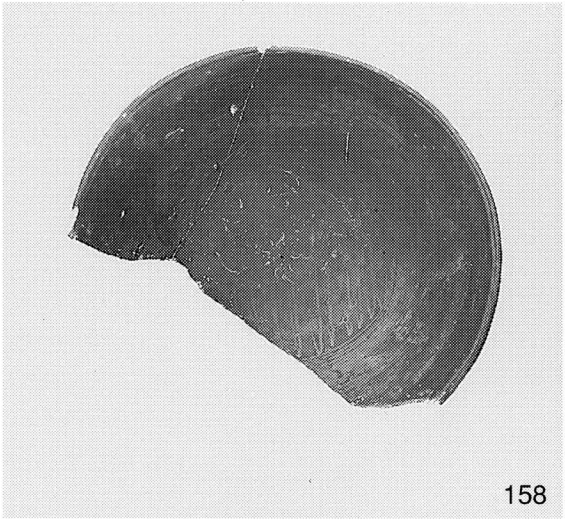
144

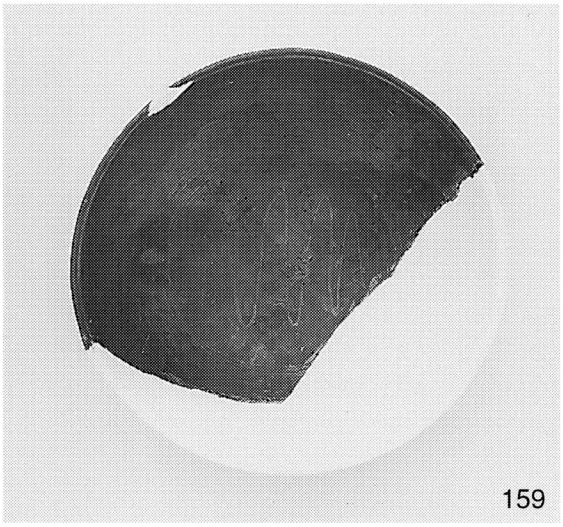

168

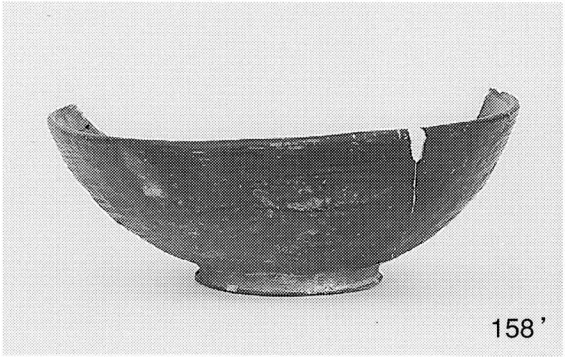

168'

平安時代・中世

図版39　出土土器(10)


158

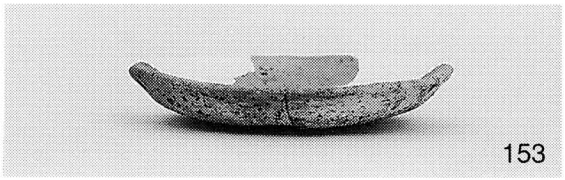

159

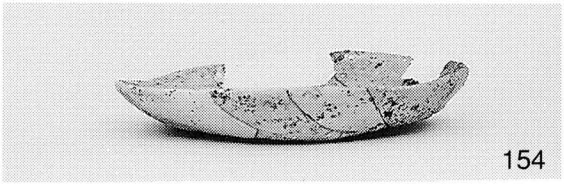

158'

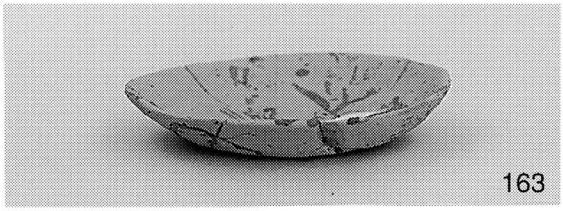
159'

155

170

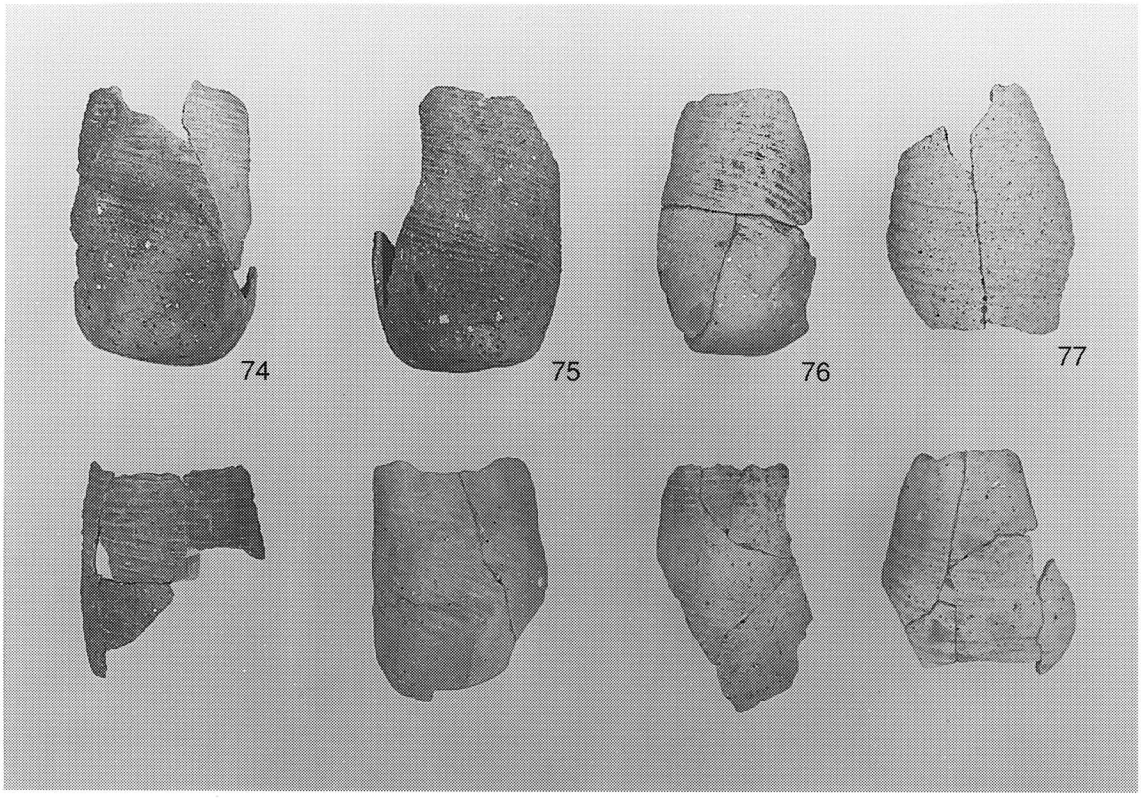

153


154

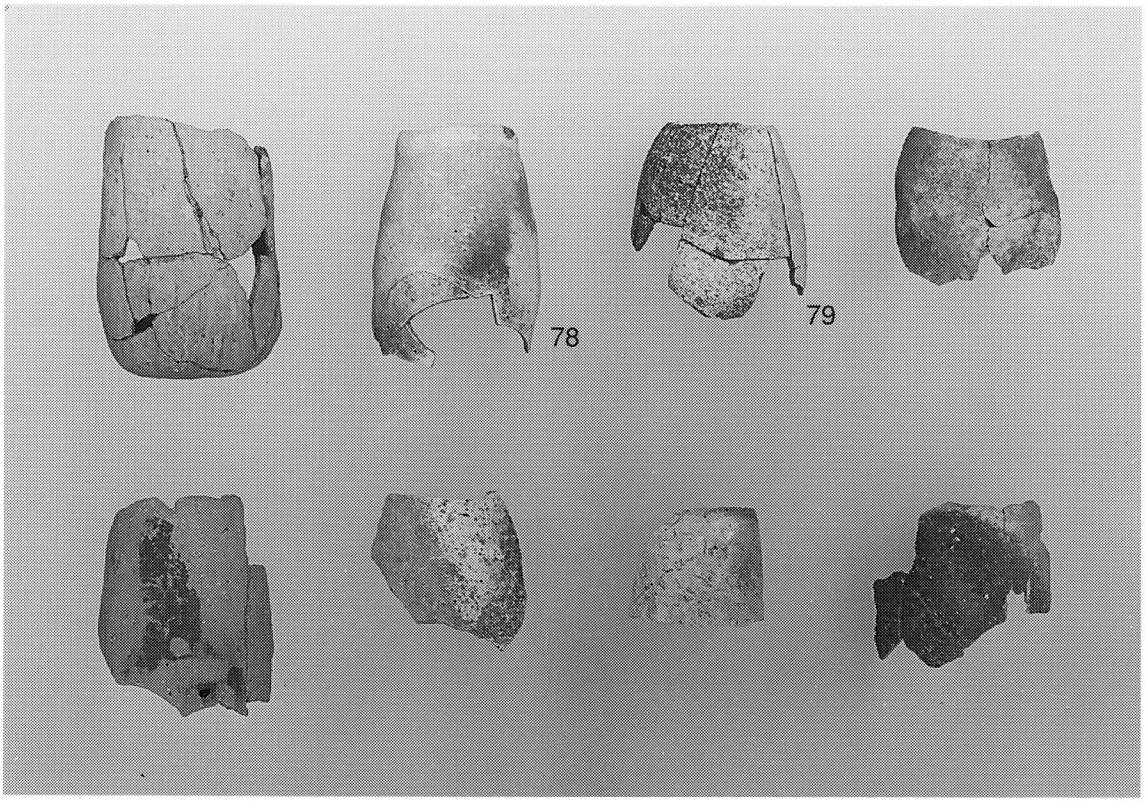

163

中世

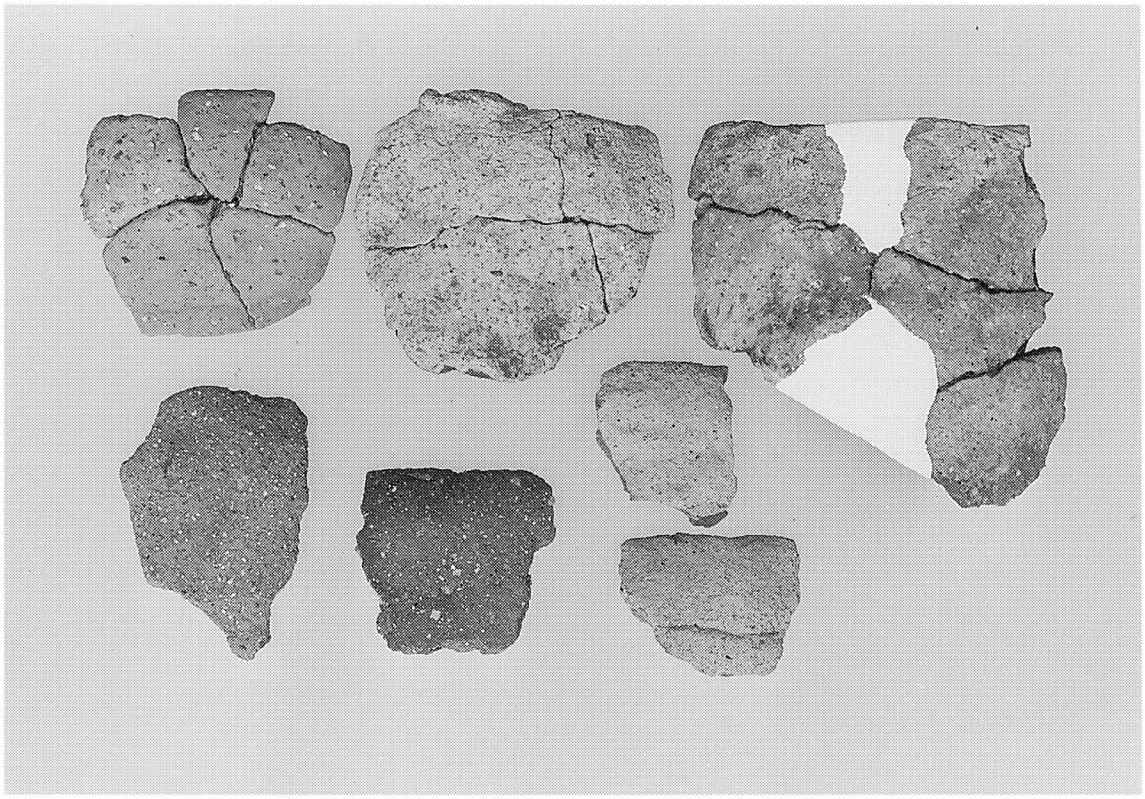
墨書土器



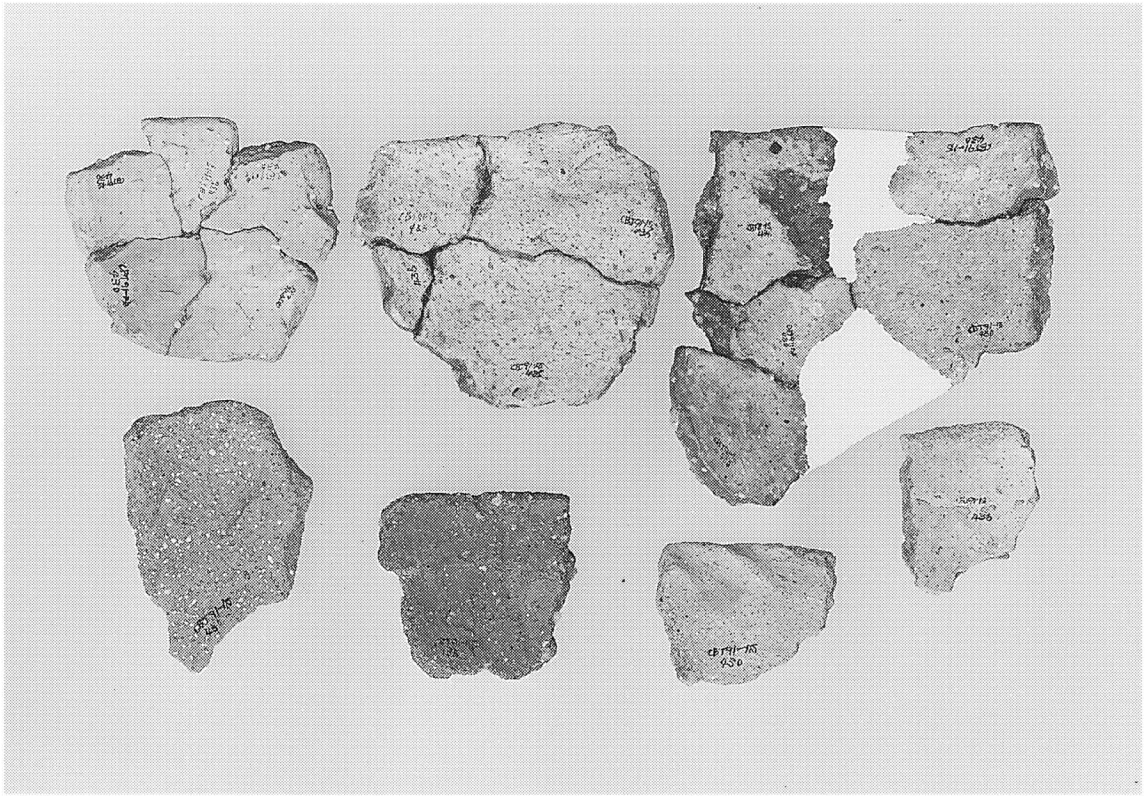
a．古墳時代製塩土器(外面タタキ目)



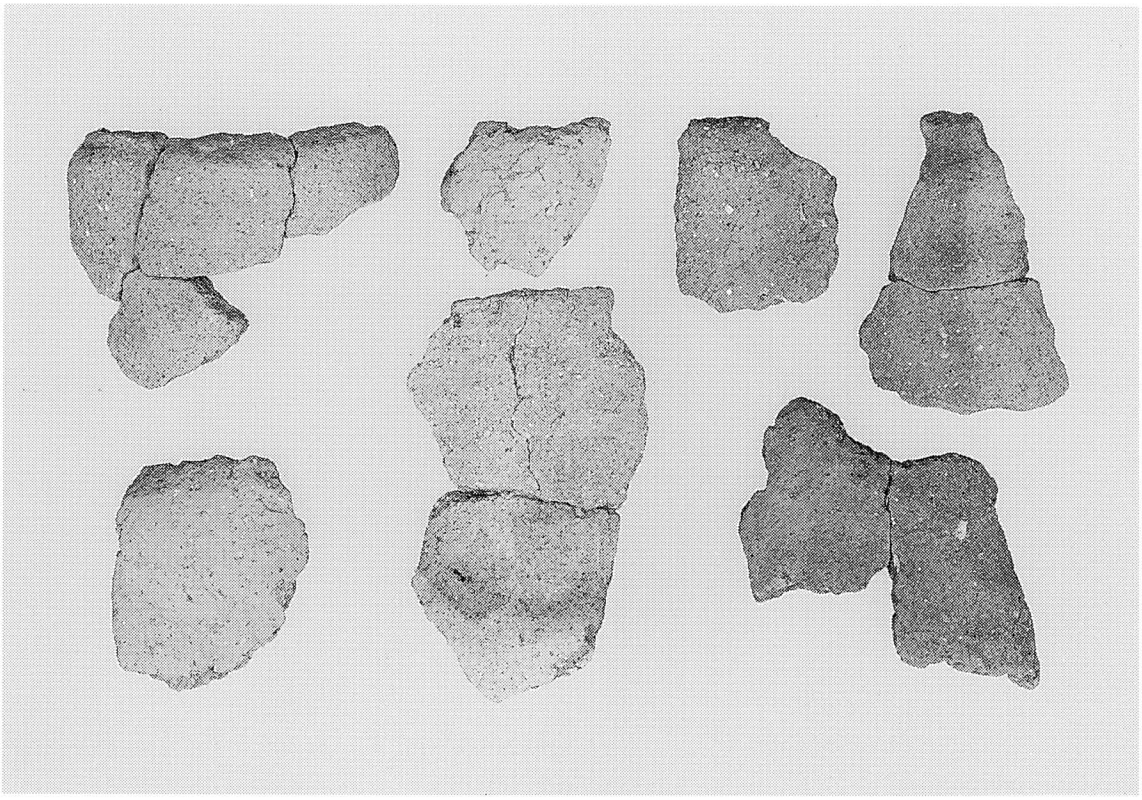
b．同上(外面ナデ調整)



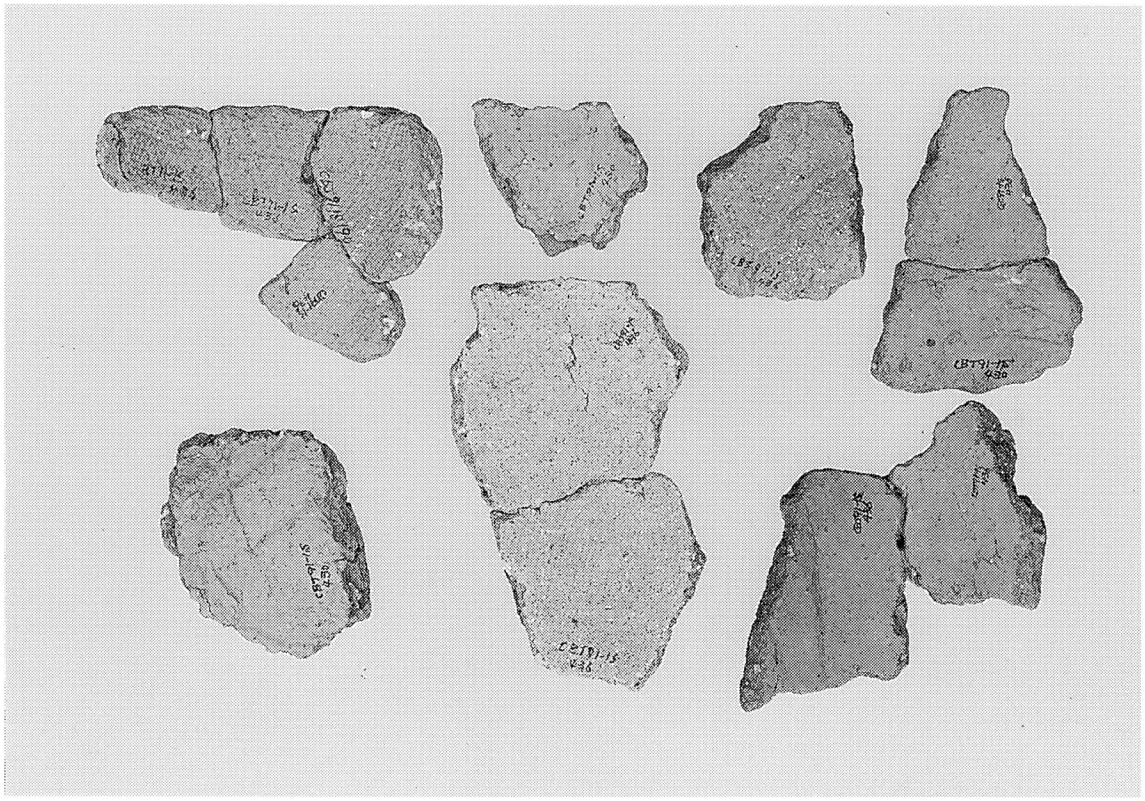
a．奈良時代製塩土器(南調査区第3遺構面自然河川肩部土器群出土)



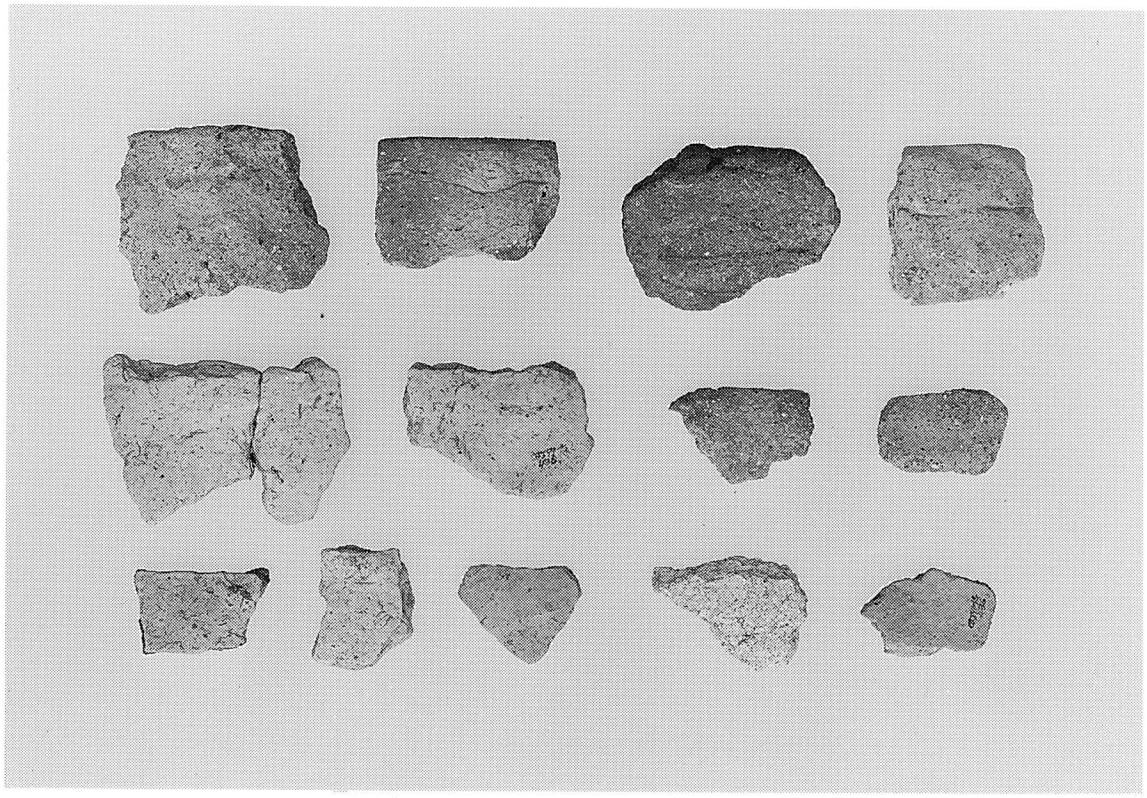
b．同上(内面)



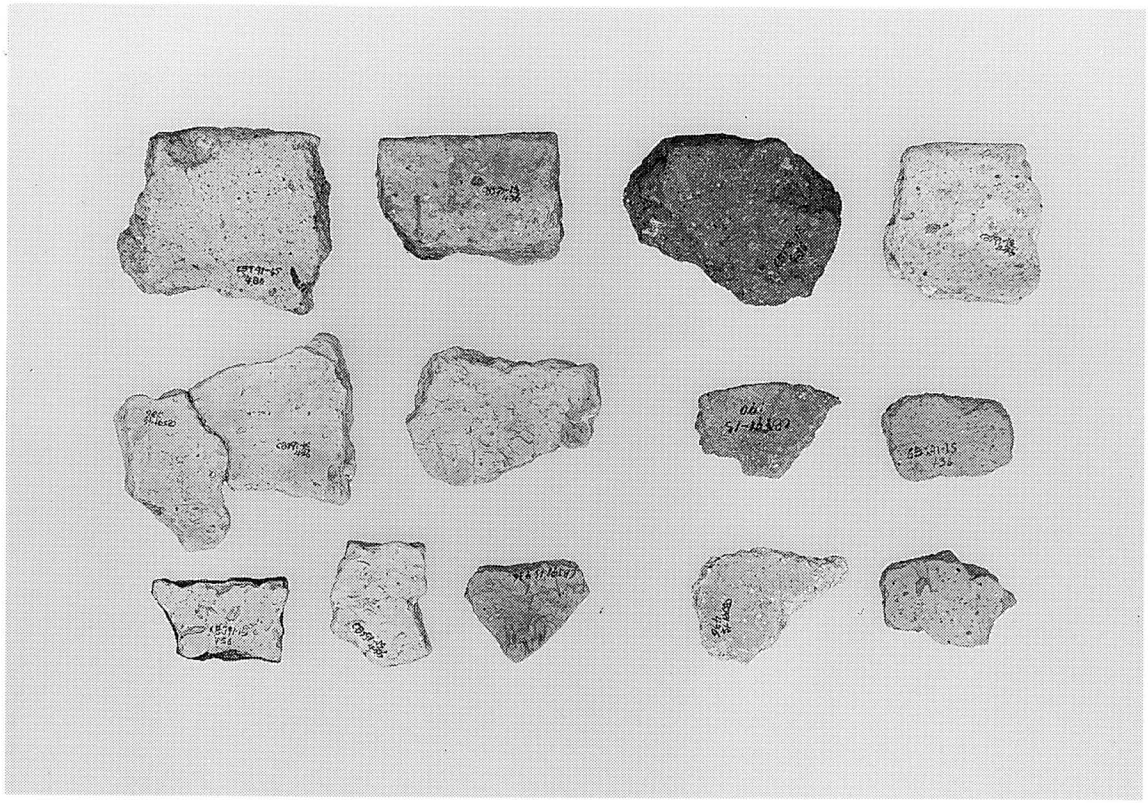
a．奈良時代製塩土器(南調査区第3遺構面自然河川肩部土器群出土、内面布圧痕)



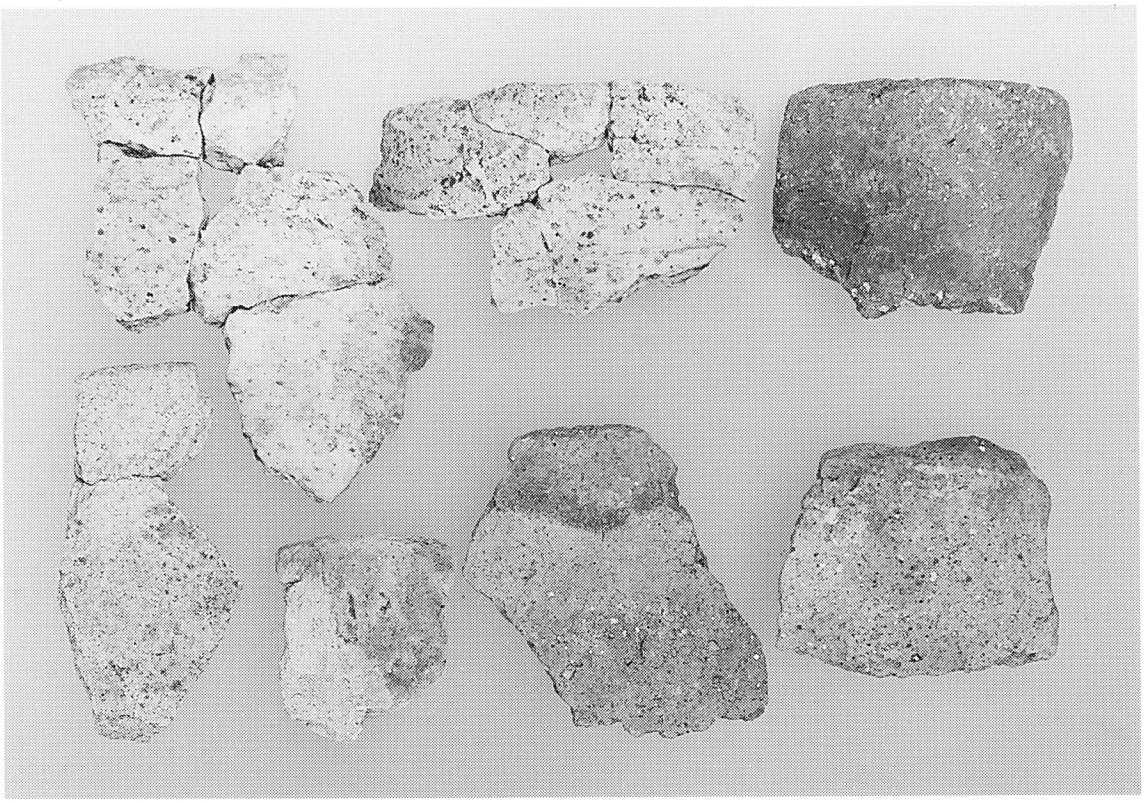
b．同上(内面)



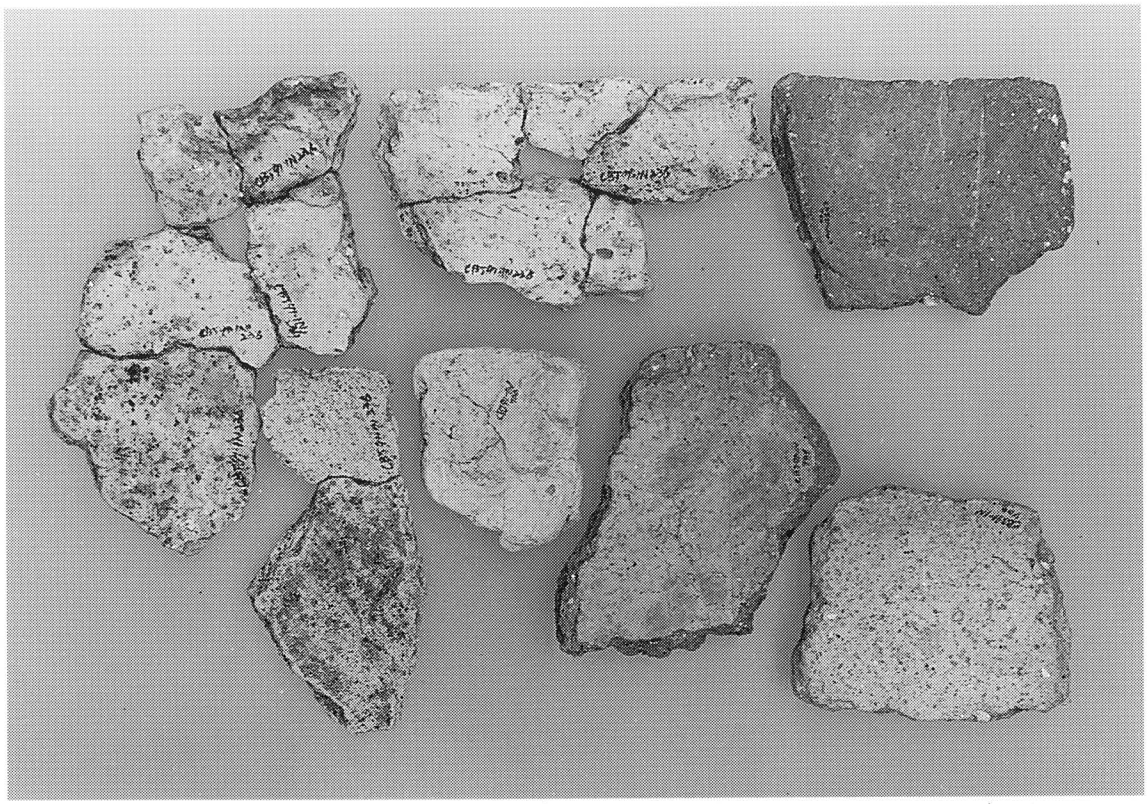
a．奈良時代製塩土器(南調査区第3遺構面自然河川肩部土器群出土)



b．同上(内面)

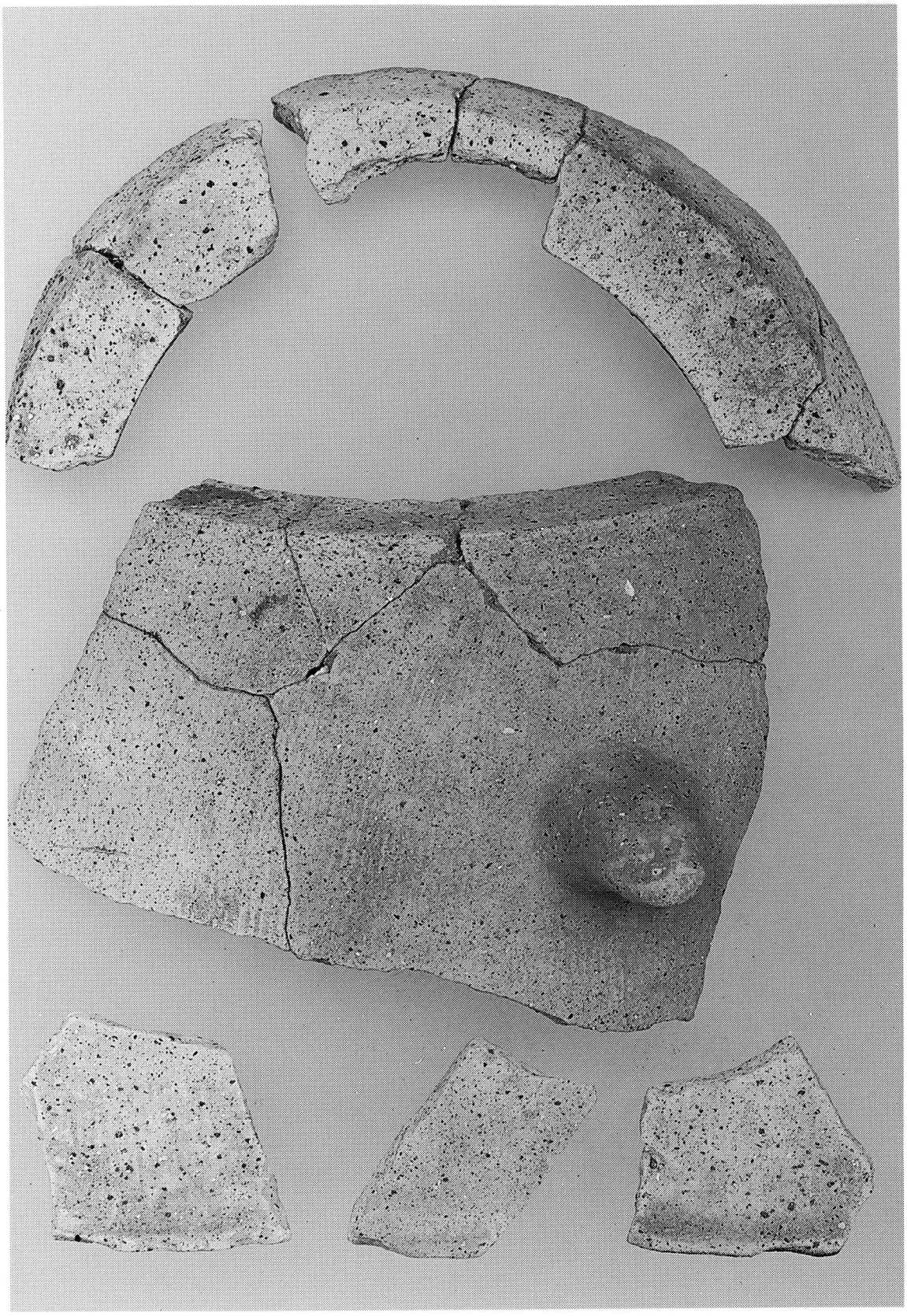


a．奈良時代製塩土器(北調査区出土)

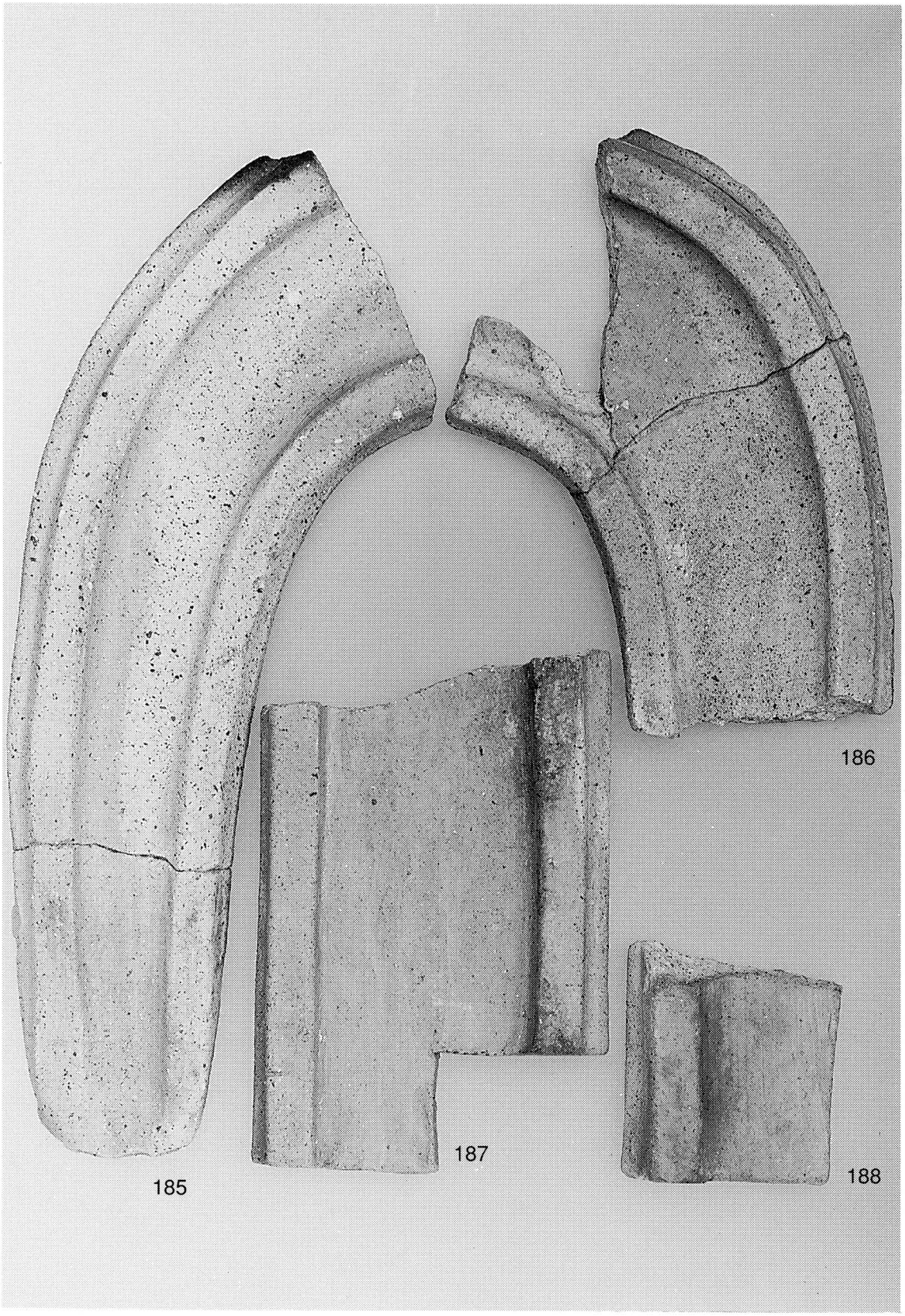


b．同上(内面)

移動式かまど

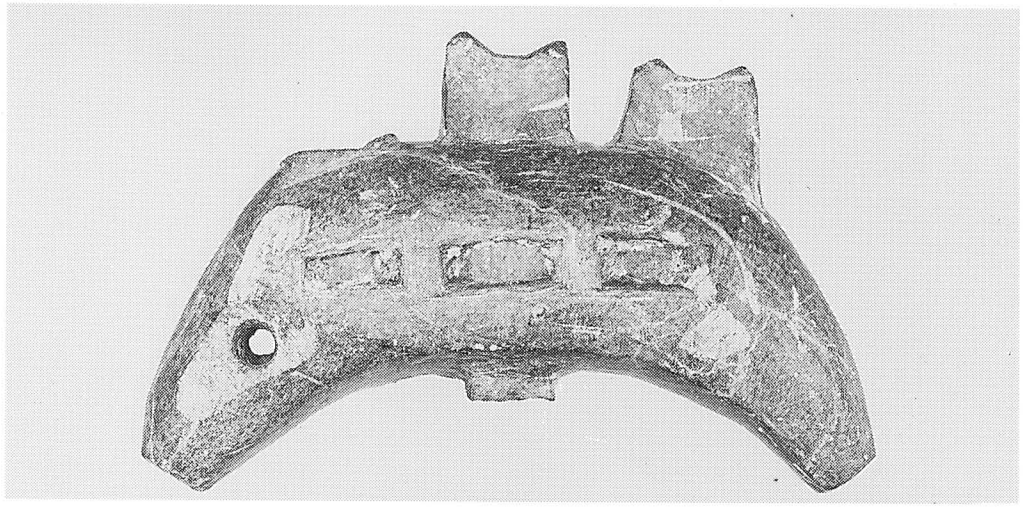


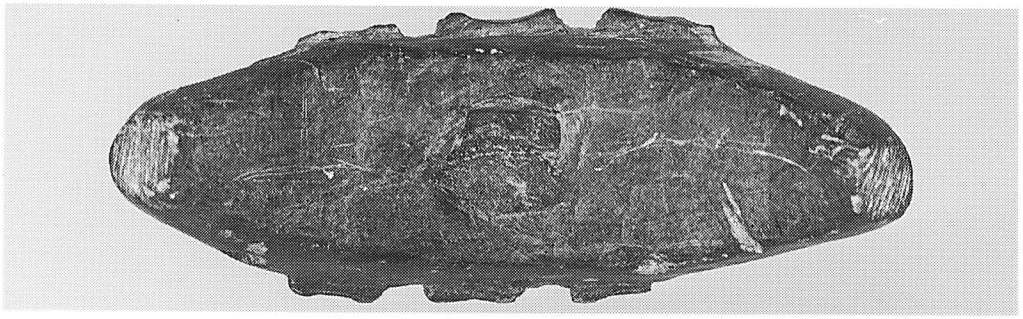
移動式かまど

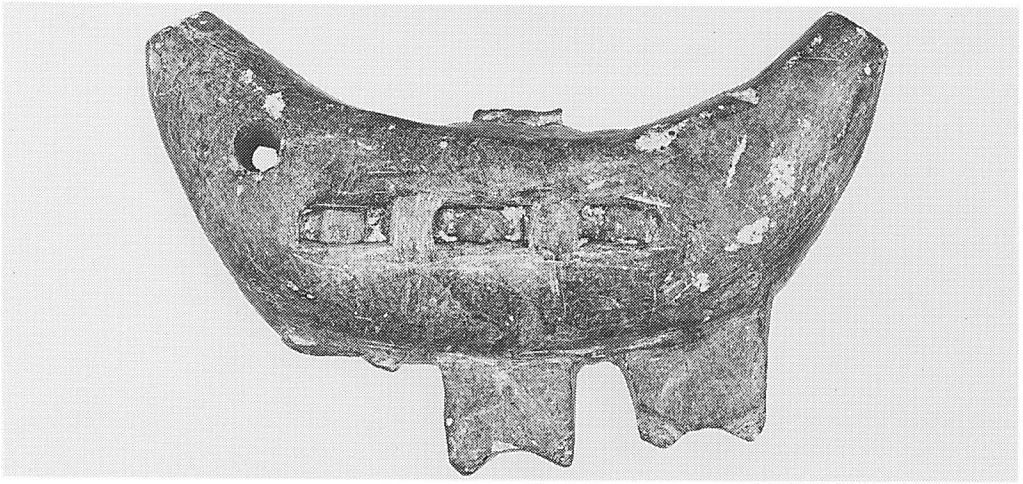


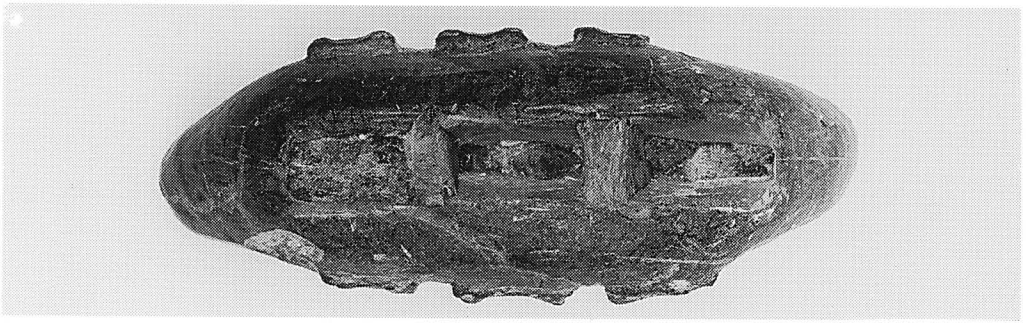
用途不明土製品

用途不明土製品



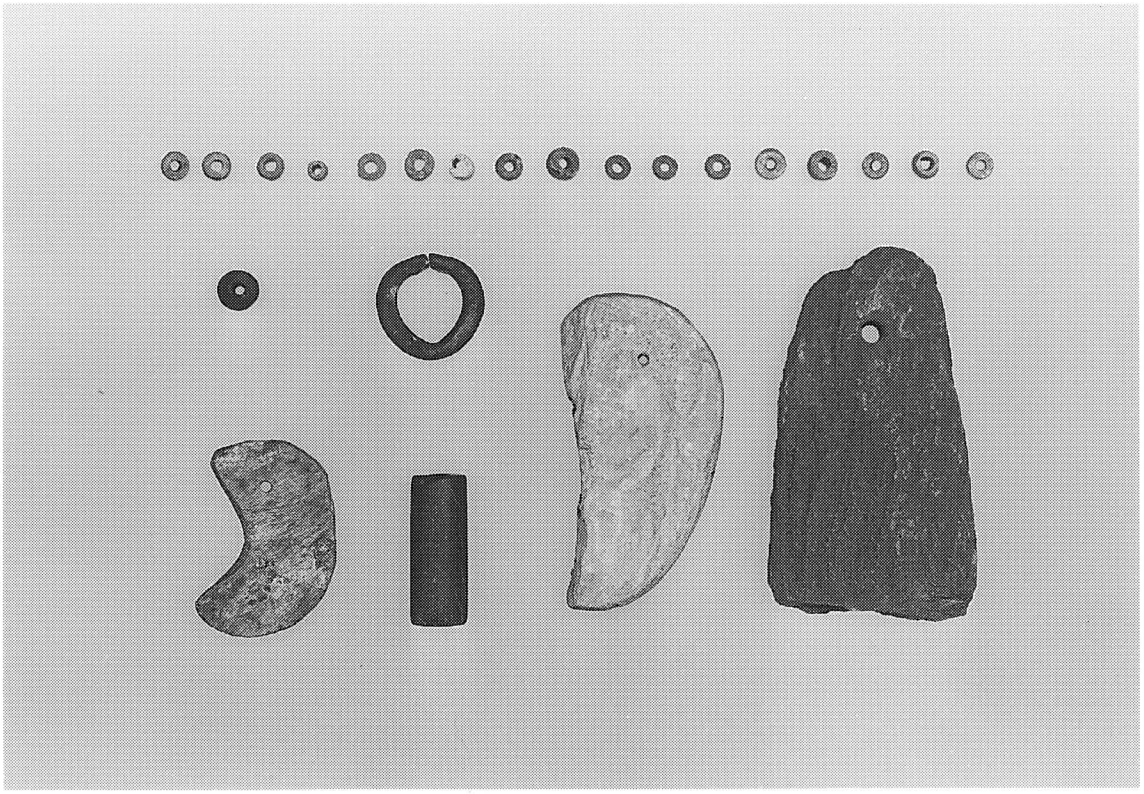




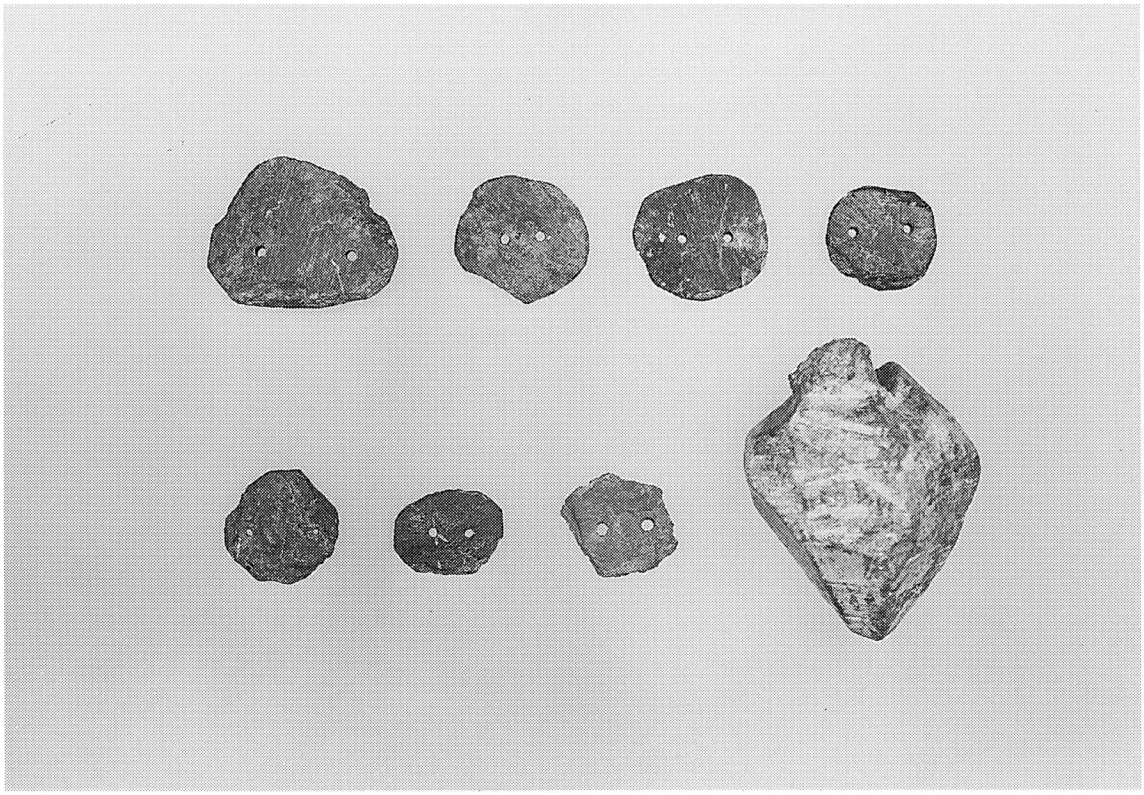


子持勾玉

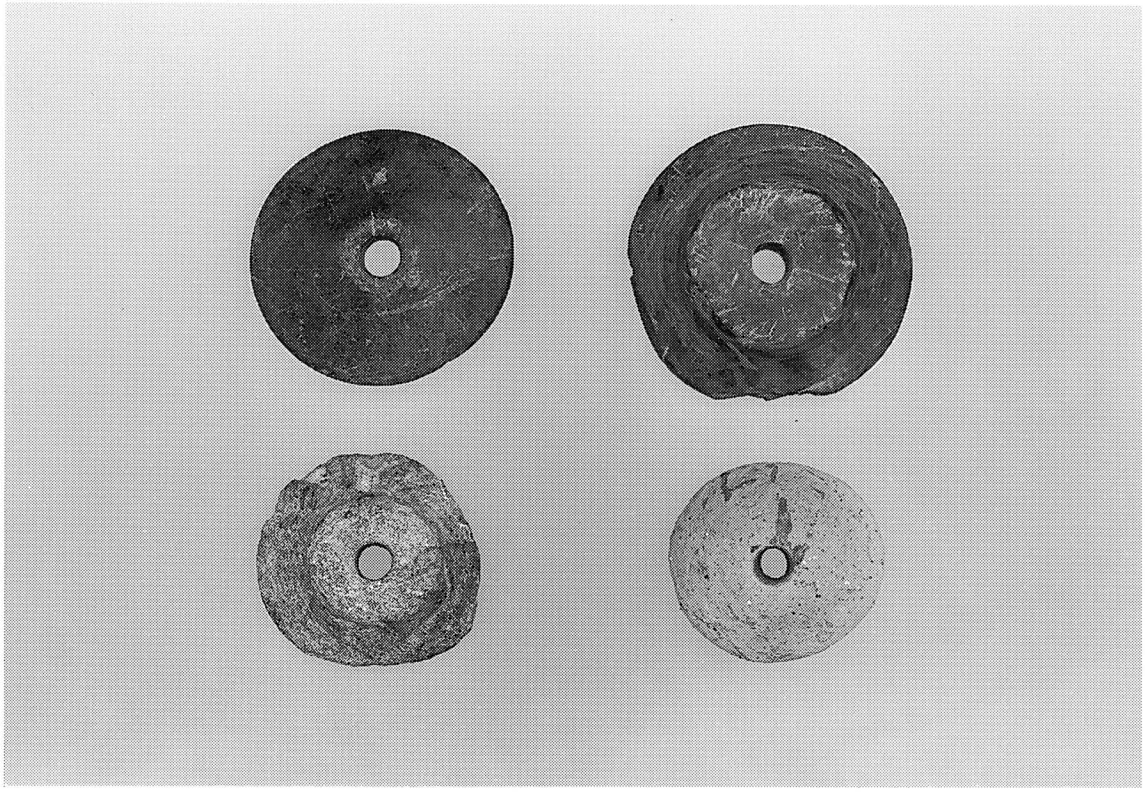
図版51　出土石製品ほか



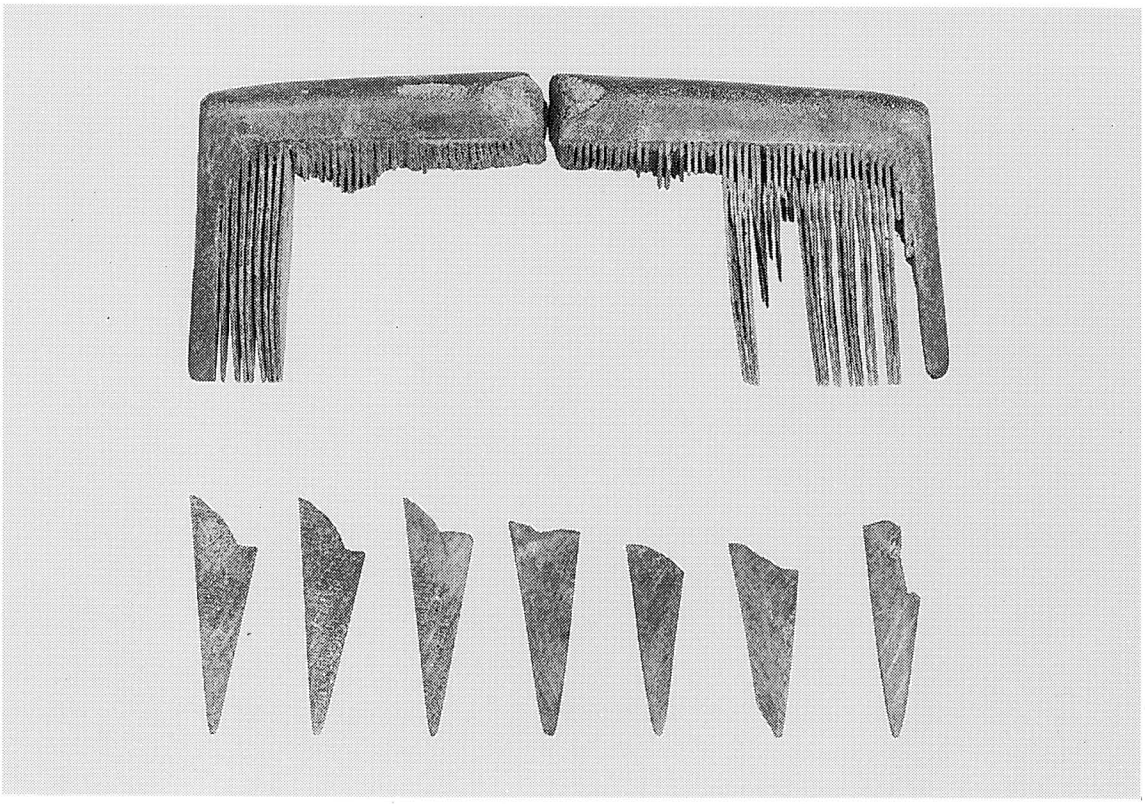
a．臼玉・土玉・金環・勾玉・管玉・用途不明石製品



b．有孔円盤・用途不明石製品

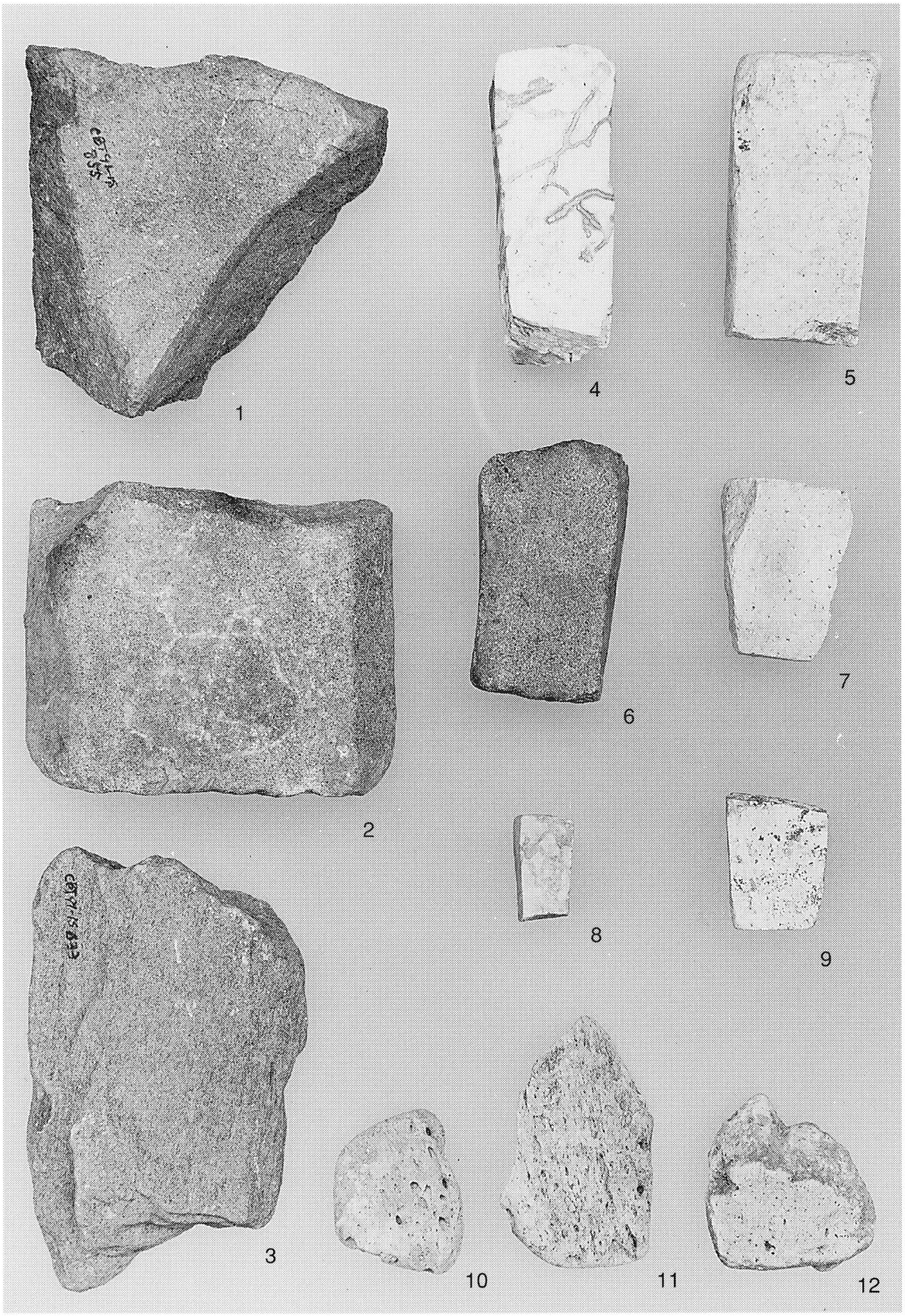


a．紡錘車



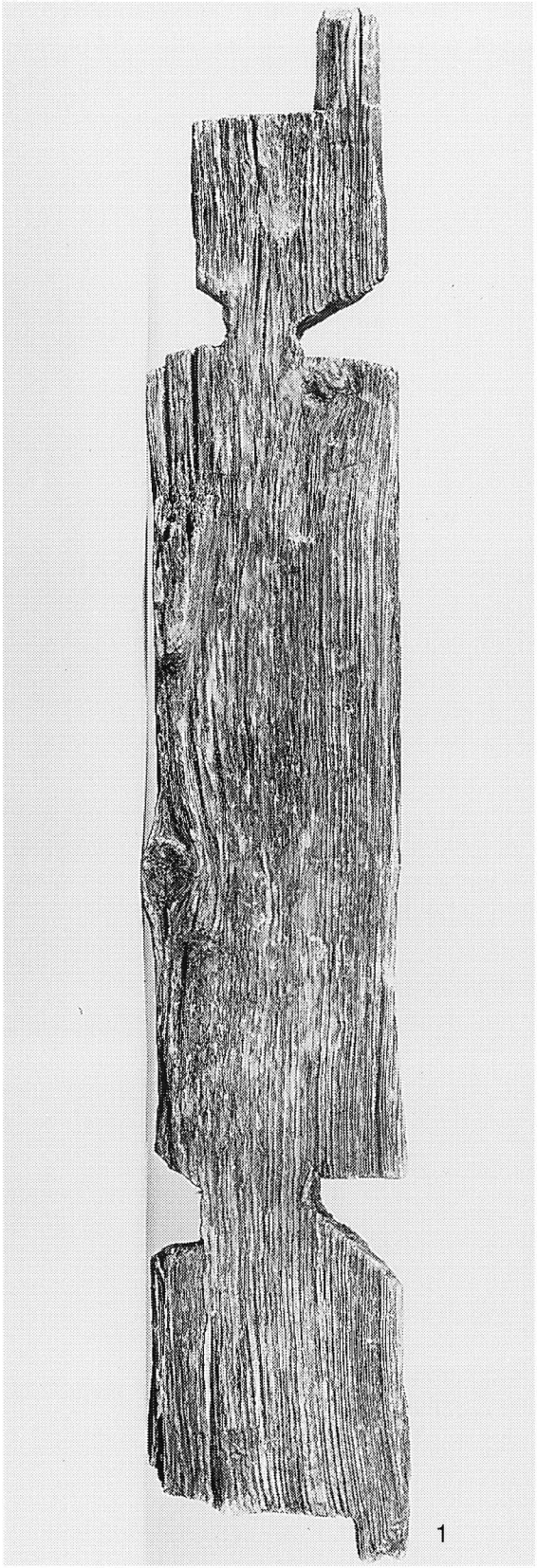
b．櫛

図版53　出土石製品



砥石・軽石

図版54　出土木製品

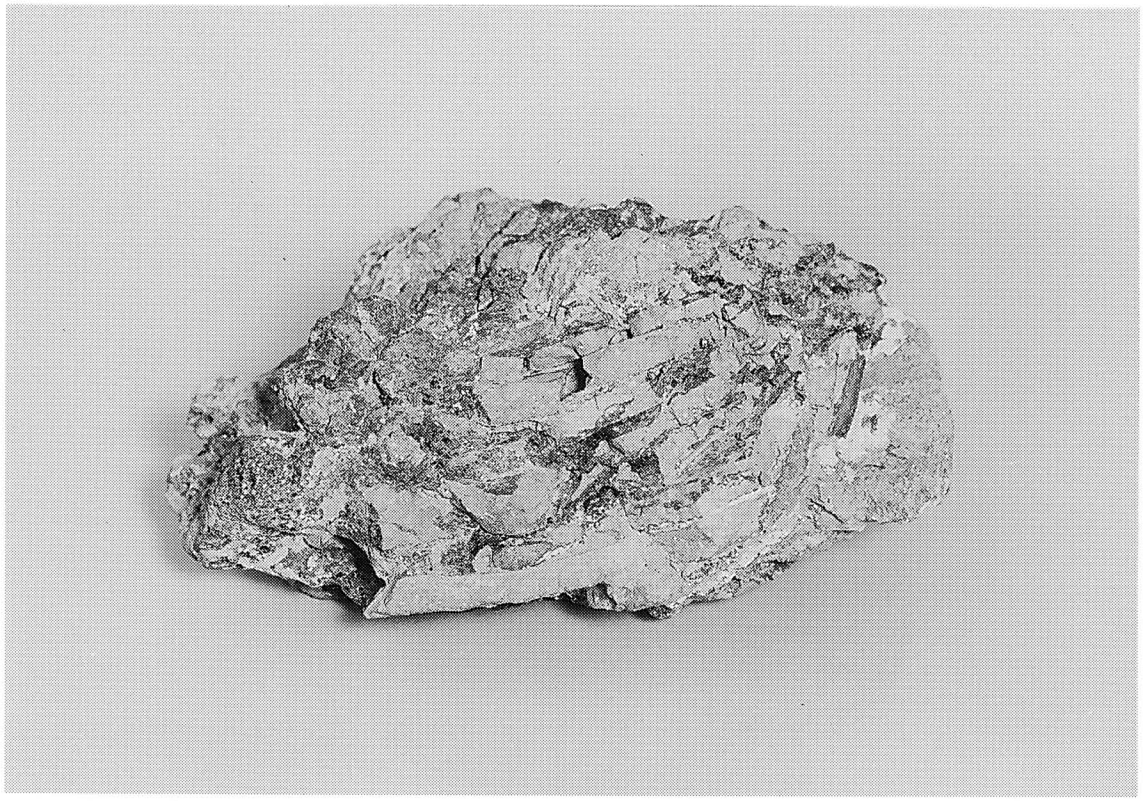


1

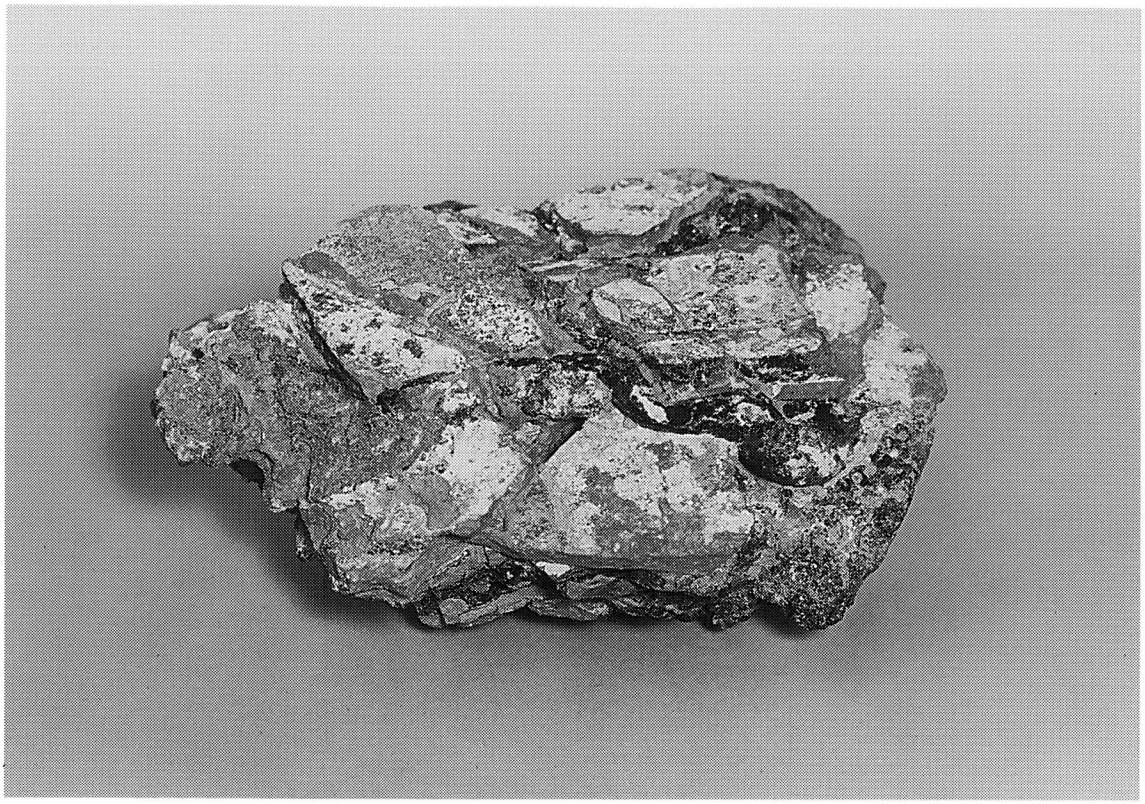
2

扉

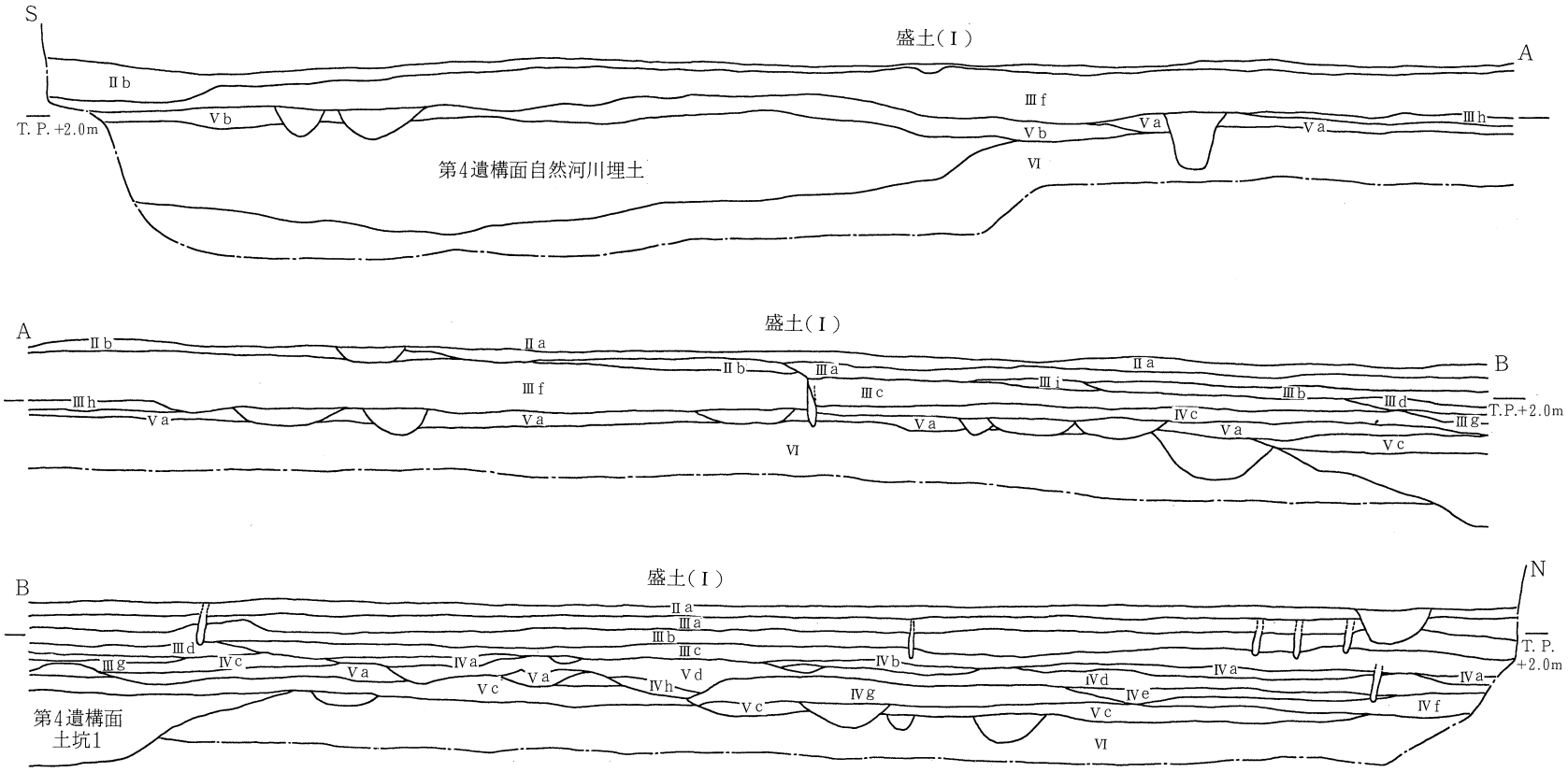
図版55　出土窯体片(?)



a．須恵器に付着した窯体片(？)



b．同上(裏面)



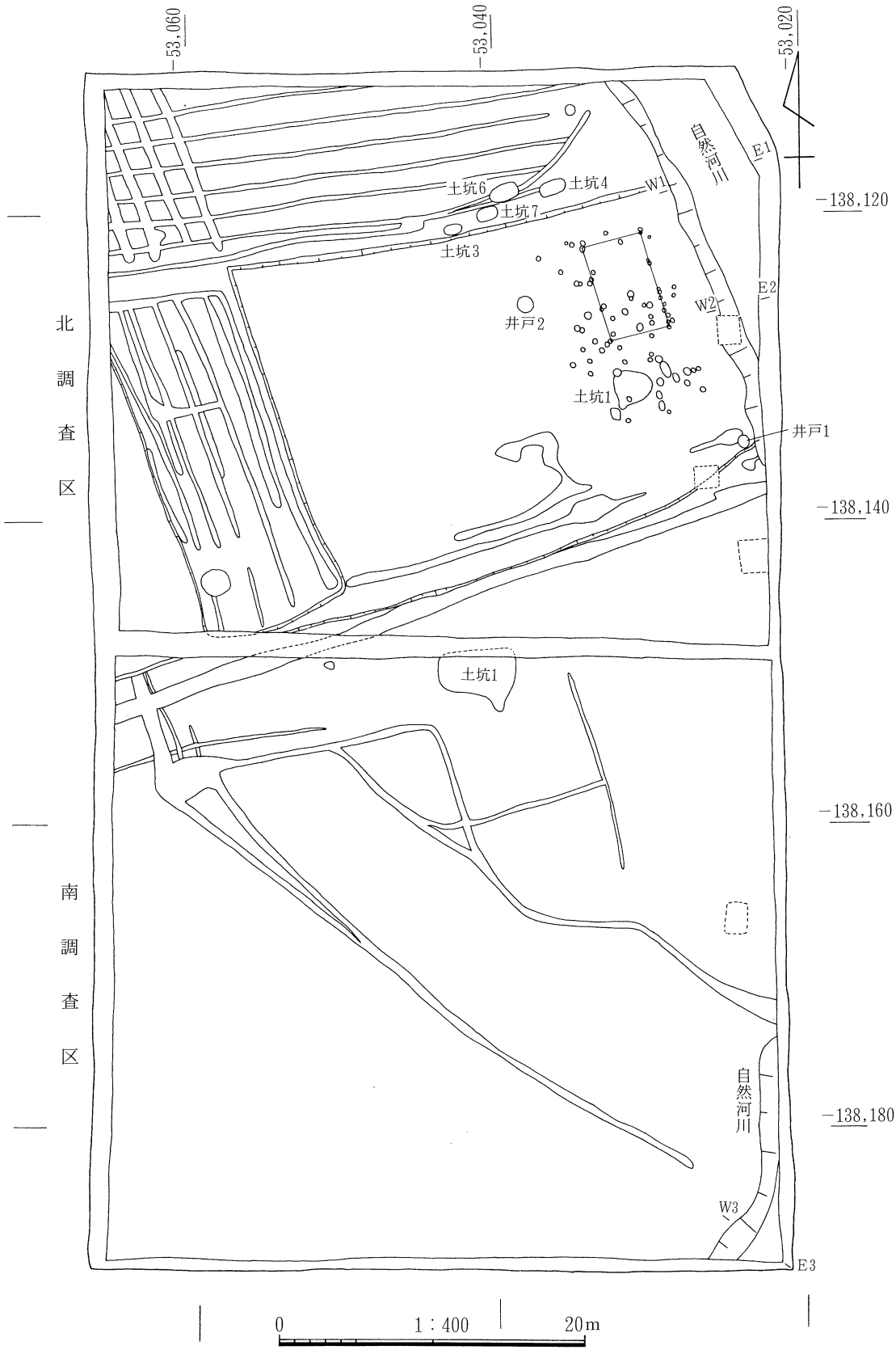
Ⅱa 緑灰色砂混り粘質土層
Ⅱb 緑灰色砂混り砂質土層
Ⅲa 青灰色粘土層(茶色チップを含む)
Ⅲb 灰色粘土層(黄色チップを含む)
Ⅲc 灰色粘土層(茶色チップを含む)
Ⅲd 灰褐色粘土層(茶色チップを含む)
Ⅲe 暗灰褐色粘土層(茶色チップを含む)
Ⅲf 暗褐色砂質土層(黄色チップを多く含む)
Ⅲg 灰褐色粘土混砂層(洪水層)
Ⅲh 明灰黄色シルト層
Ⅳa 明灰褐色粘土層(茶色チップを含む)
Ⅳb 明灰色粘土層(黒灰色粘土混り)
Ⅳc 暗黄灰褐色粘質土層
Ⅳd 暗灰褐色粘質土層(茶色チップ・炭を含む)
Ⅳe 黒灰色粘土層(茶色チップを含む)
Ⅳf 黒灰色粘土層(炭を含む)
Ⅳg 黒灰色粘土層
Ⅳh 黒灰色粘質土層
Ⅴa 暗黄灰褐色粘質土層
Ⅴb 明黄灰色細砂層
Ⅴc 緑灰色粘土層(黒色粘土をブロックに含む)

0　1：60　3m

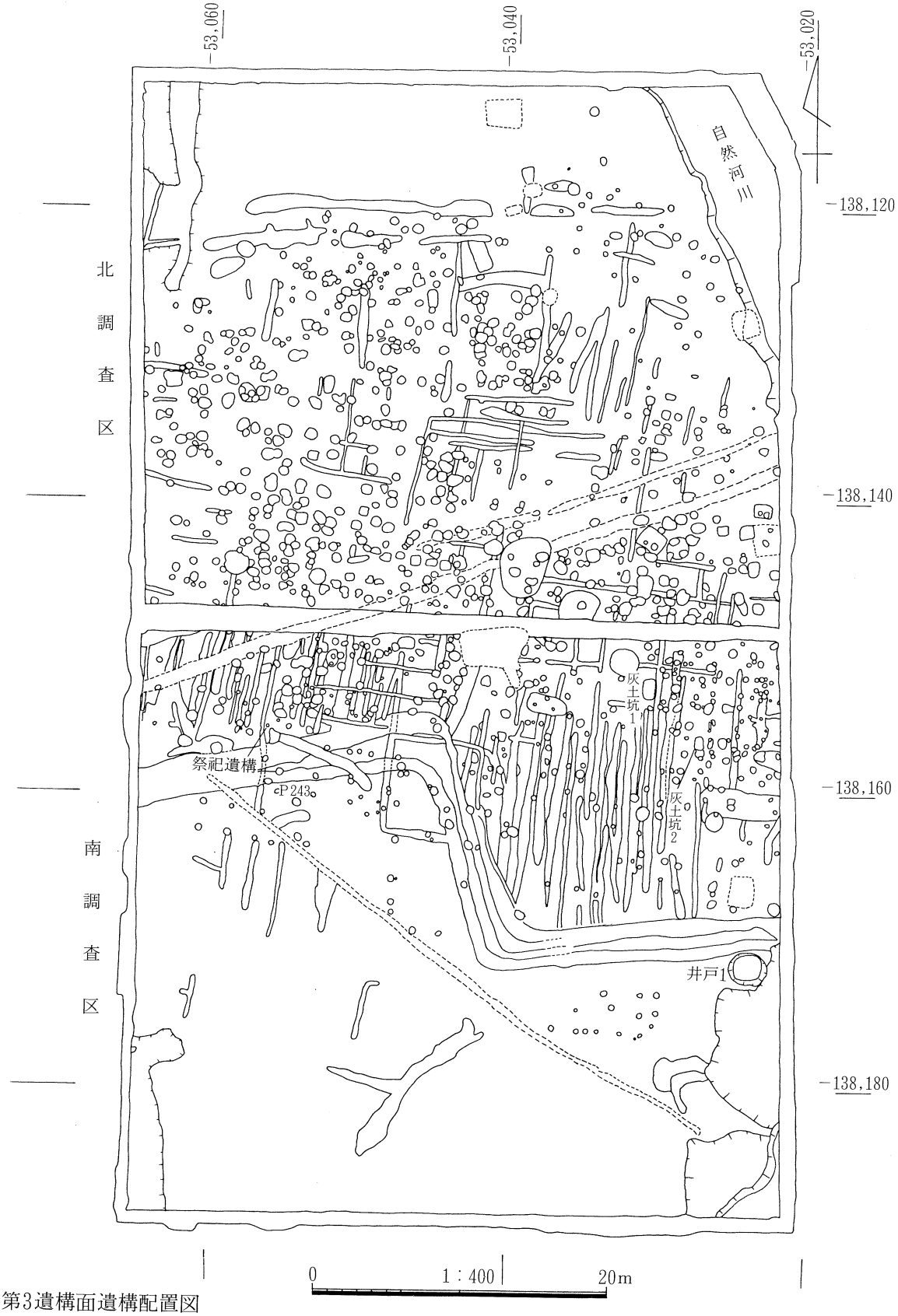
北調査区西壁断面実測図

図版56 検出遺構実測図(1)

図版57　検出遺構実測図(2)

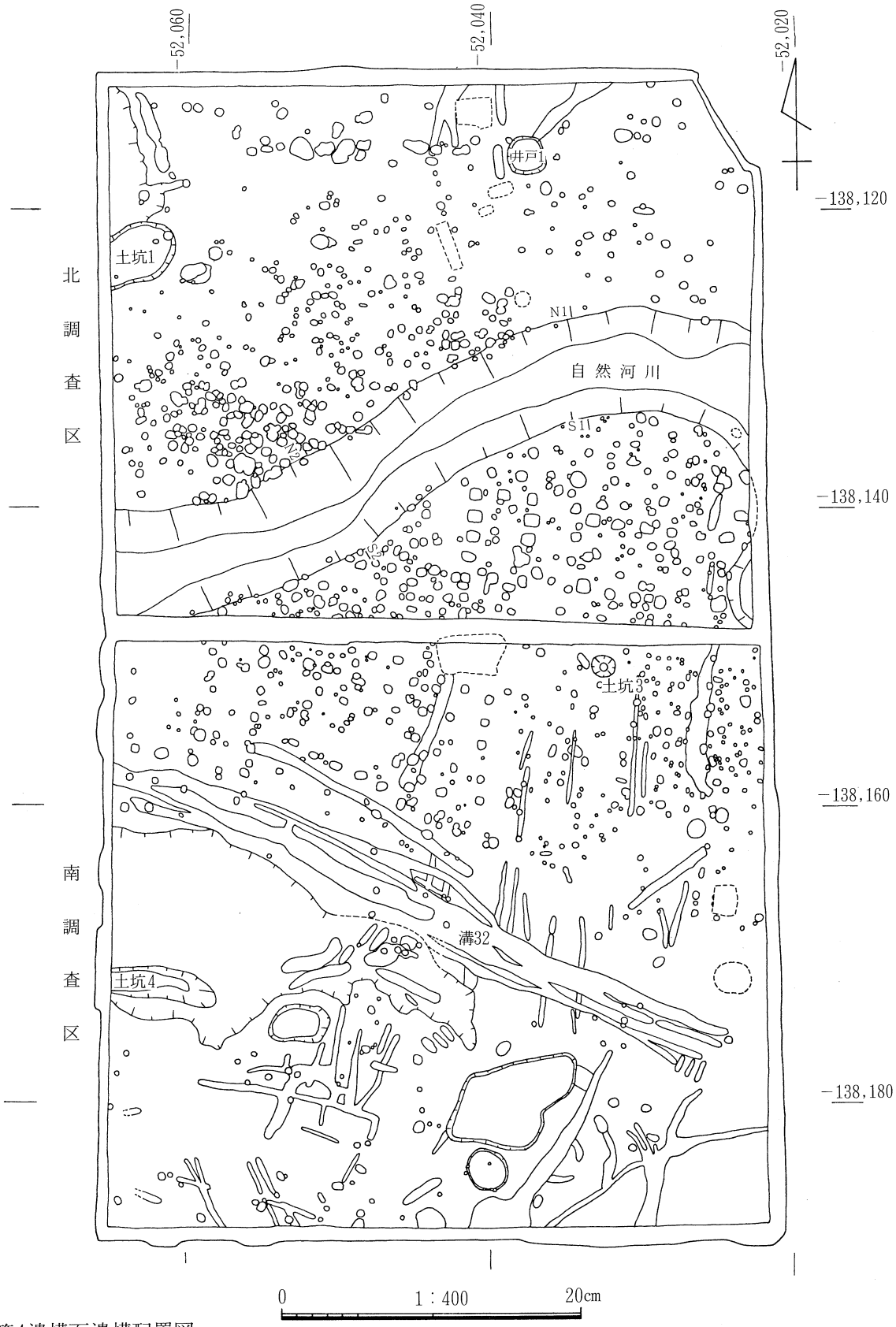


第2遺構面遺構配置図

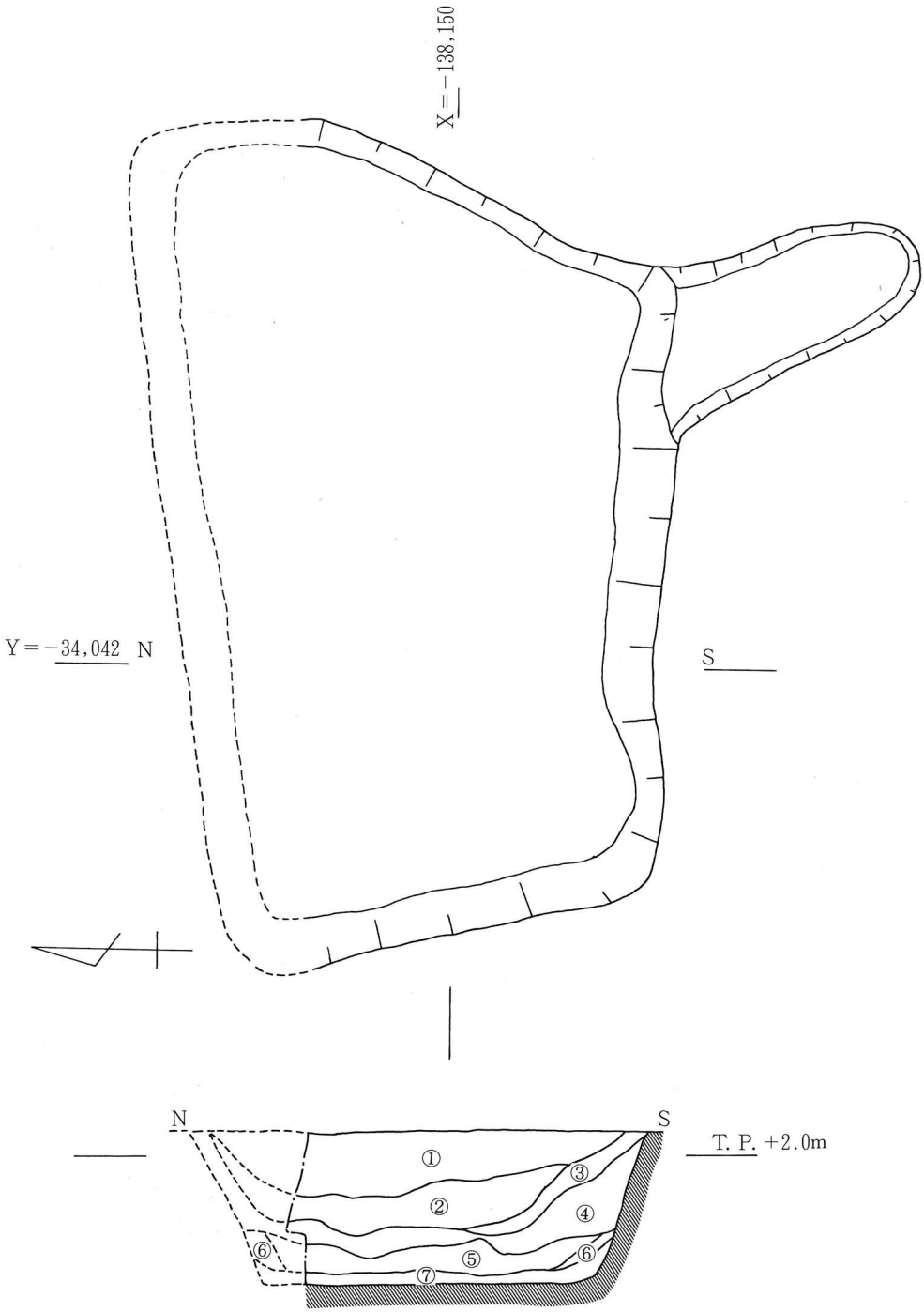

-53,060
-53,040
-53,020
-138,120
-138,140
-138,160
-138,180
北調査区
南調査区
自然河川
祭祀遺構
P243
灰土坑1
灰土坑2
井戸1
0
1：400
20m

第3遺構面遺構配置図

図版59　検出遺構実測図(4)



第4遺構面遺構配置図

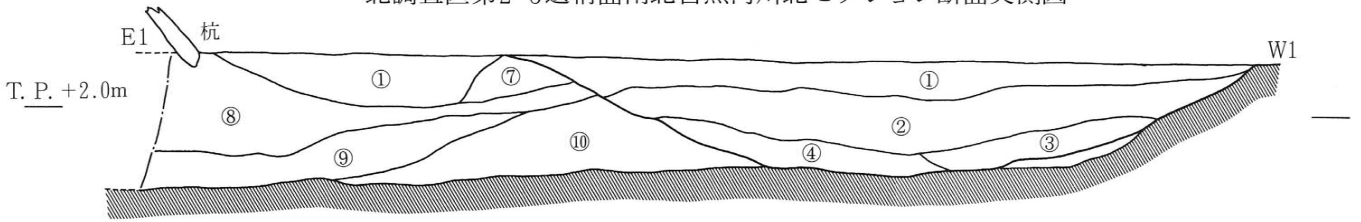


① 暗灰褐色砂混り粘質土層
② 灰色粘土層(黄灰色粘土・暗灰色粘土をブロックに含む)
③ 灰褐色粘質土層
④ 灰黄褐色砂質土層
⑤ 暗灰色粘土層(緑灰色粘土⑦を含む)
⑥ 黒灰色粘質土層
⑦ 緑灰色粘土層(黒灰色粘土をブロックに含む)

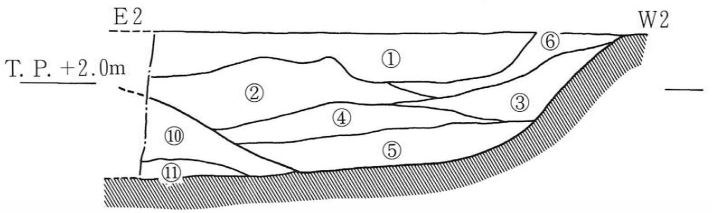
0　1：40　2m

南調査区第2遺構面土坑1

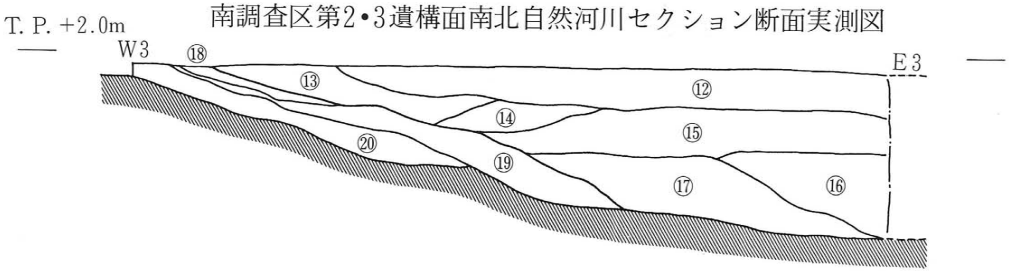
北調査区第2•3遺構面南北自然河川北セクション断面実測図



同上　南セクション断面実測図



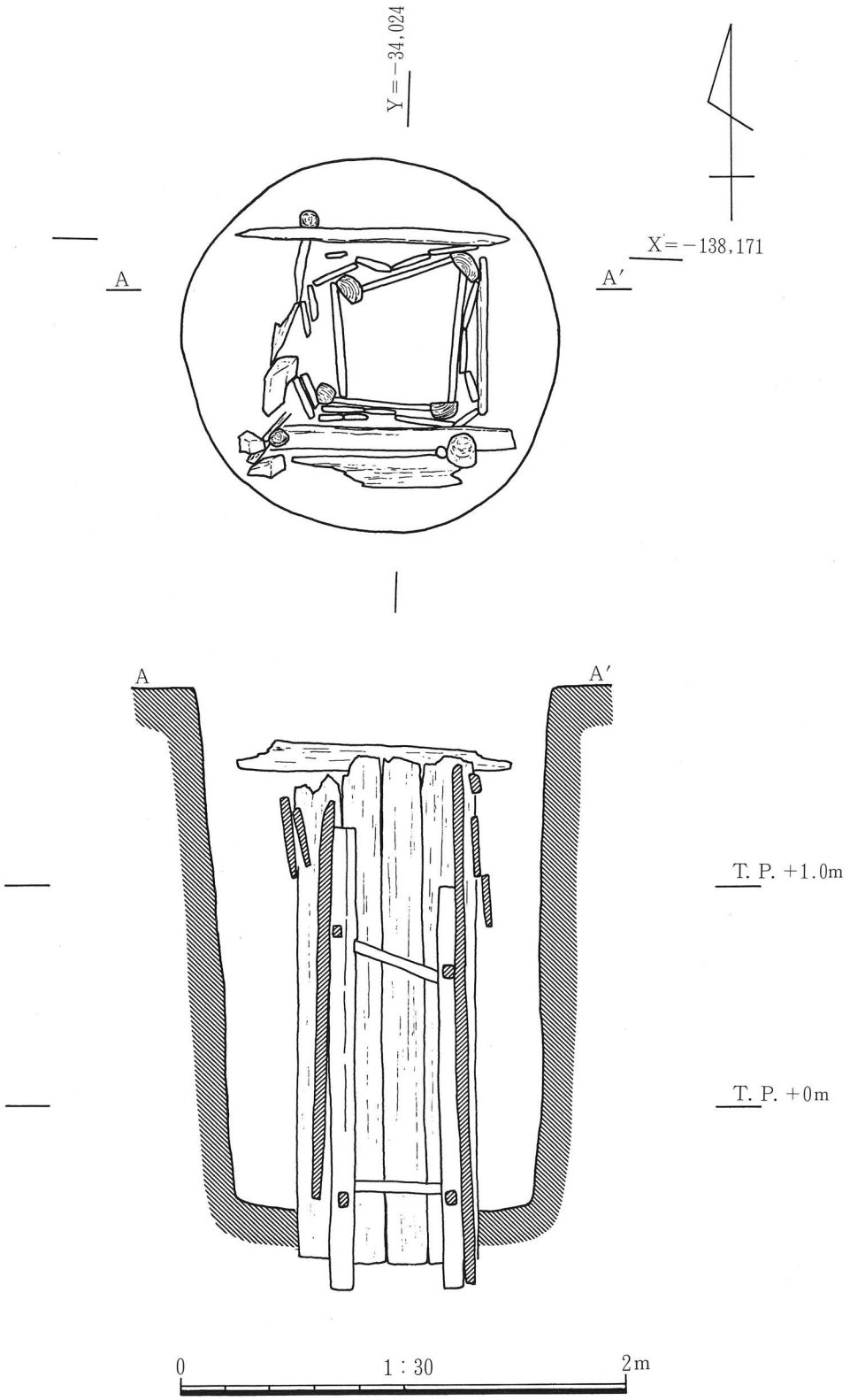
南調査区第2•3遺構面南北自然河川セクション断面実測図



① 灰褐色砂混り砂質土層(酸化鉄を含む)
② 暗灰色粗砂混り粘質土層
③ 暗灰色砂混り粘質土層
④ 暗灰色粘土層(青灰色粘土をブロックに含む)
⑤ 黒灰色シルト混り粘土層
⑥ 灰色粗砂混り砂質土層
⑦ 淡灰褐色粗砂層
⑧ 灰白色細砂層と暗灰色粗土層が交互に堆積
⑨ 暗灰褐色粘土層(植物質を多く含む)
⑩ 暗灰色粘土層
⑪ 暗青灰色粘土層
⑫ 黒灰色粘土層
⑬ 明灰色粗砂混り粘質土層(酸化鉄を含む、①に対応)
⑭ 灰黄褐色粗砂層
⑮ 暗灰色粘質土層
⑯ 暗灰色粘土層
⑰ 暗灰色粘土層(白色粘質土チップを含む)
⑱ 暗灰色砂混り粘土層
⑲ 黒灰色粘質土層(⑫に対応)
⑳ 暗灰色粘質土層

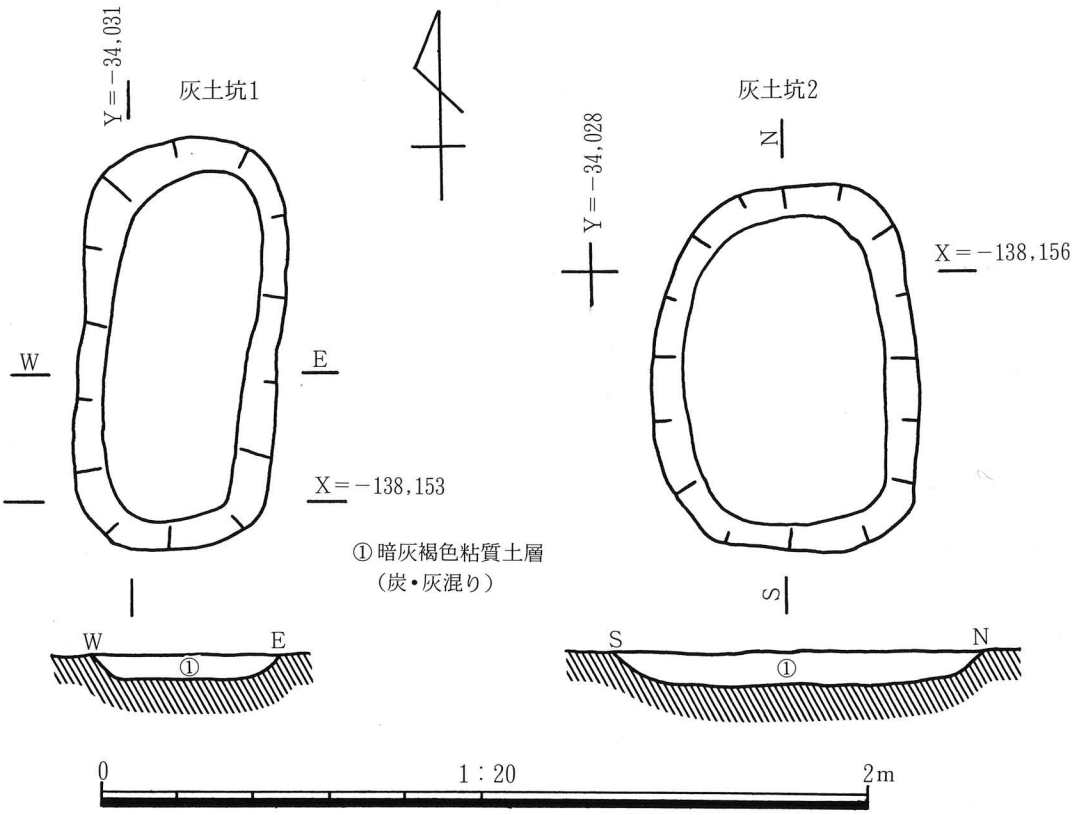
※①～⑥、⑬～⑰が平安～鎌倉期の自然河川

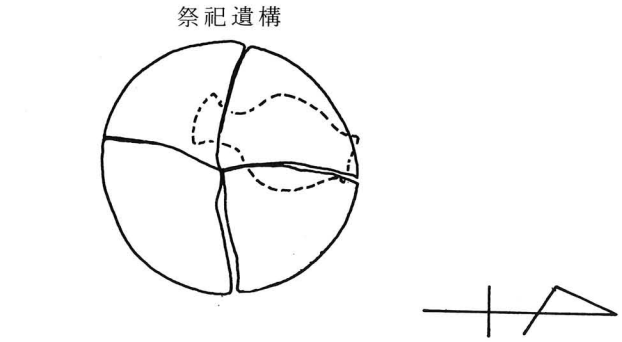
0　1：40　2m

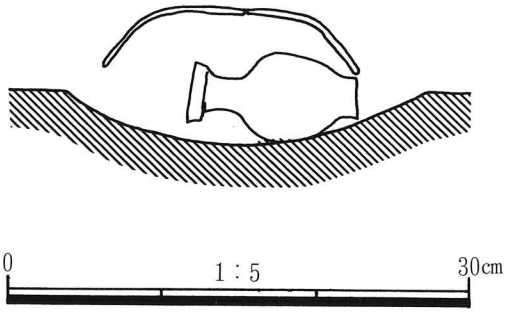


南調査区第3遺構面井戸1

図版63　検出遺構実測図(8)



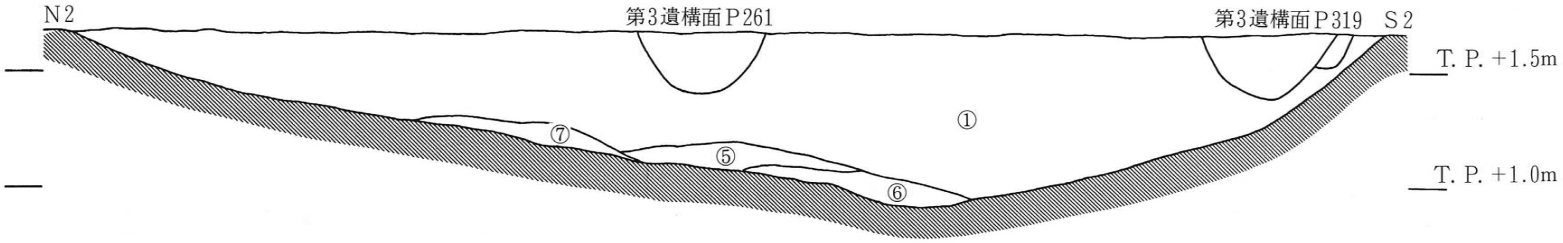




南調査区第3遺構面遺構実測図

東側セクション断面実測図

西側セクション断面実測図

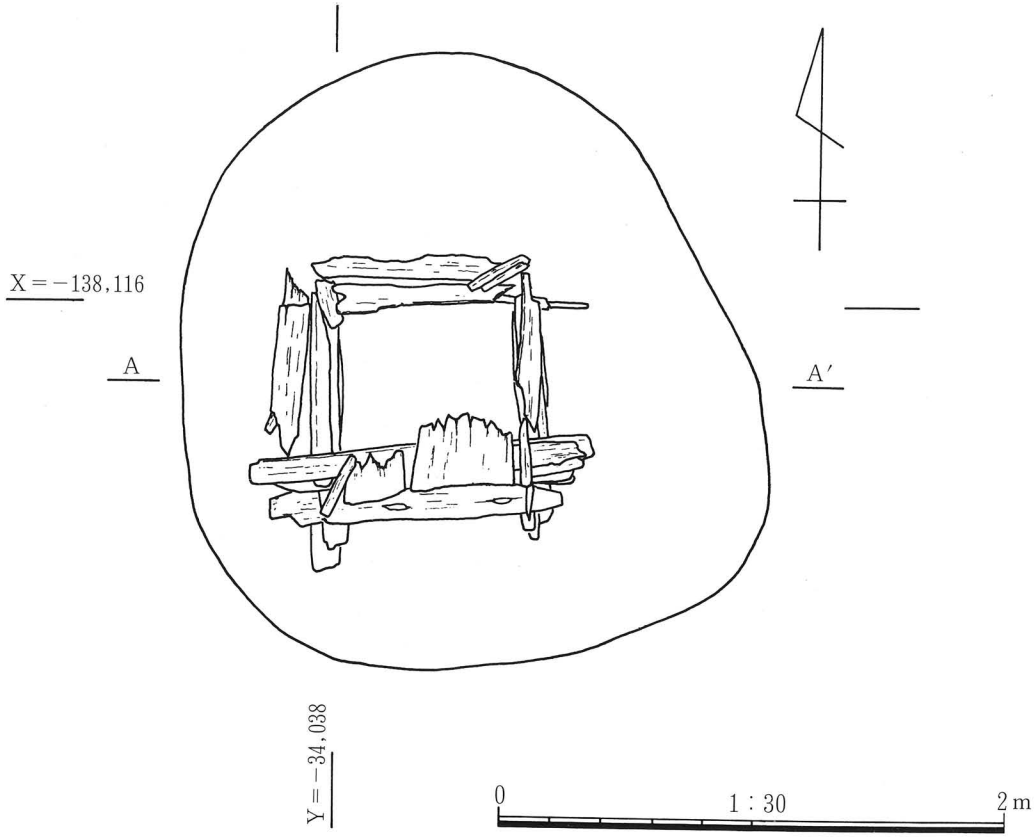


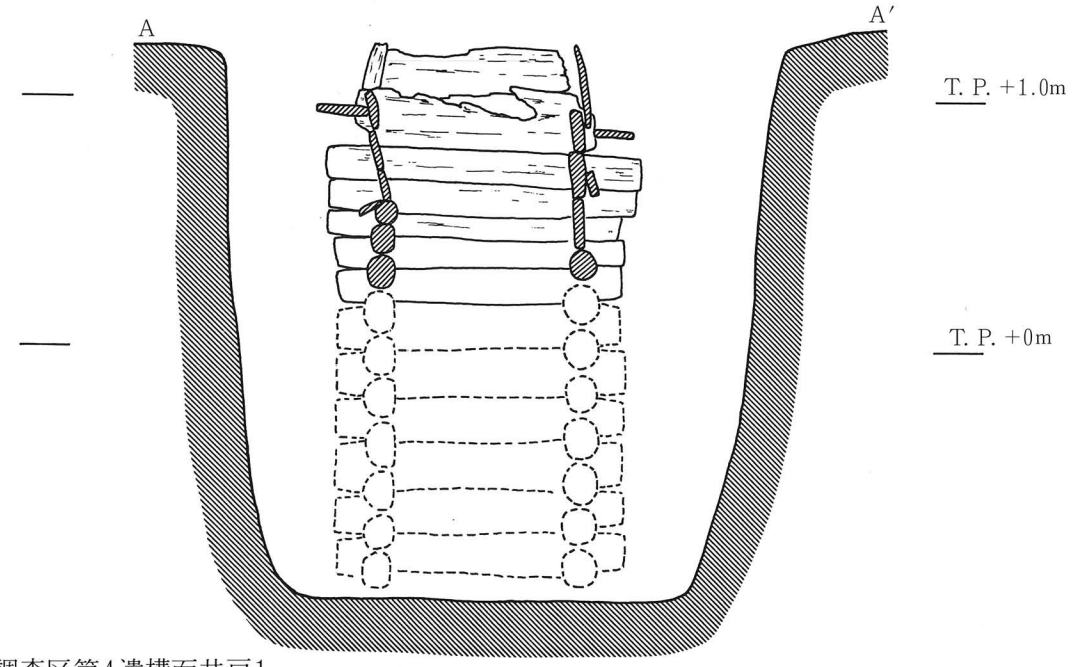
① 灰白色細砂層(青灰色シルトを筋状に含む)
② 灰色粘土層
③ 灰色粘土層(黄灰色細砂を筋状に含む)
④ 灰色細砂層(灰褐色粘土をブロックに含む)
⑤ 明灰色細砂層
⑥ 灰色粗砂層
⑦ 暗灰色細砂混り粘土層

0　1：40　2m

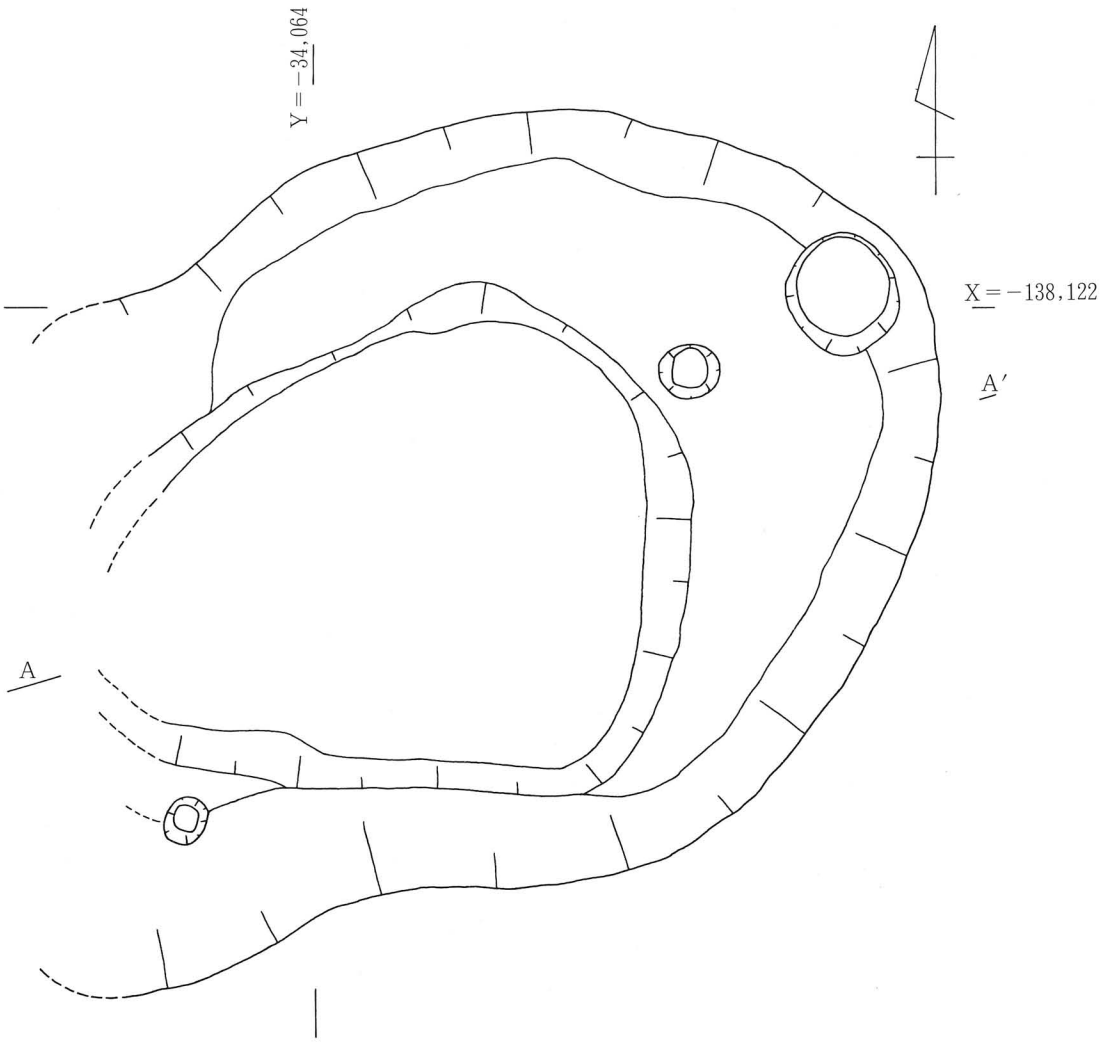
北調査区第4遺構面自然河川

図版64
検出遺構実測図(9)





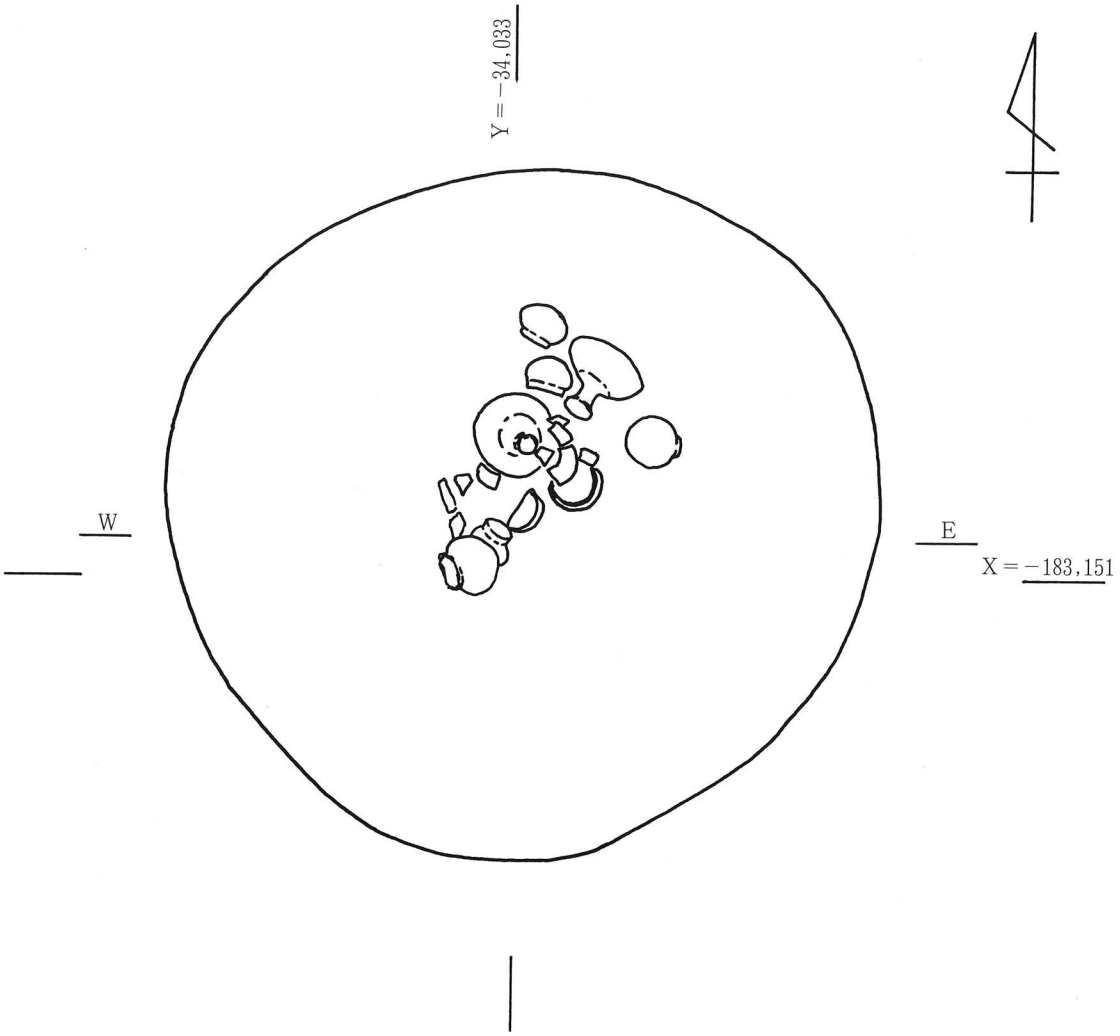
北調査区第4遺構面井戸1



① 黒灰褐色粘土層
② 暗灰色粘土層
③ 黒灰色細砂混り粘土層
（明青灰色粘土を含む）
④ 黒灰色粘土層
⑤ 黒灰色粘土層
（明青灰色粘土をブロックに含む）
⑥ 暗灰褐色粘土層
⑦ 灰色粘土層
（明青灰色粘土をブロックに含む）

0　1：40　2m

北調査区第4遺構面土坑1

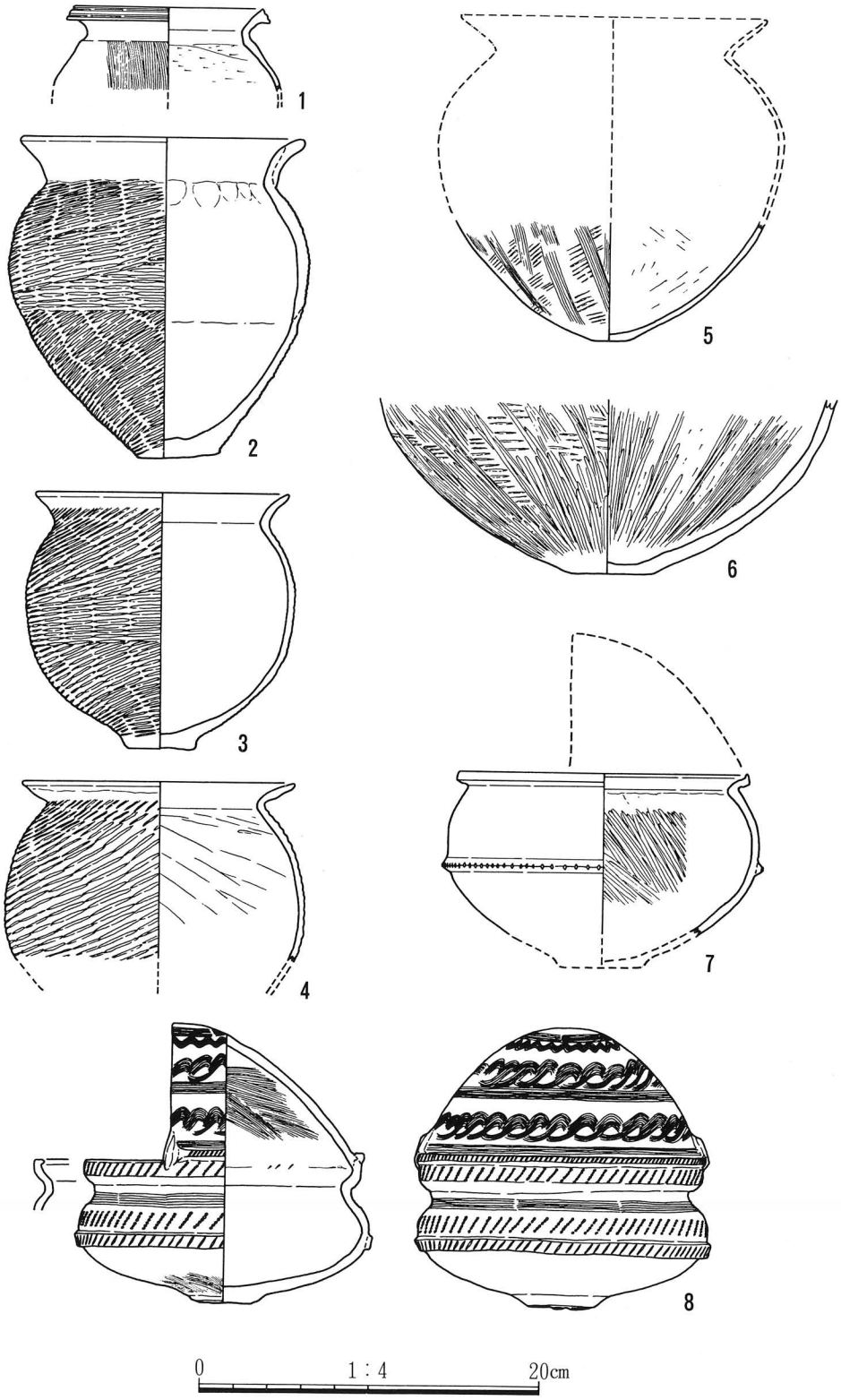


①黒色粘質土層　②黒色粘土層(緑灰色粘土混り)
③緑灰色砂混り粘土層　④緑灰色粘土層(黒色粘土混り)

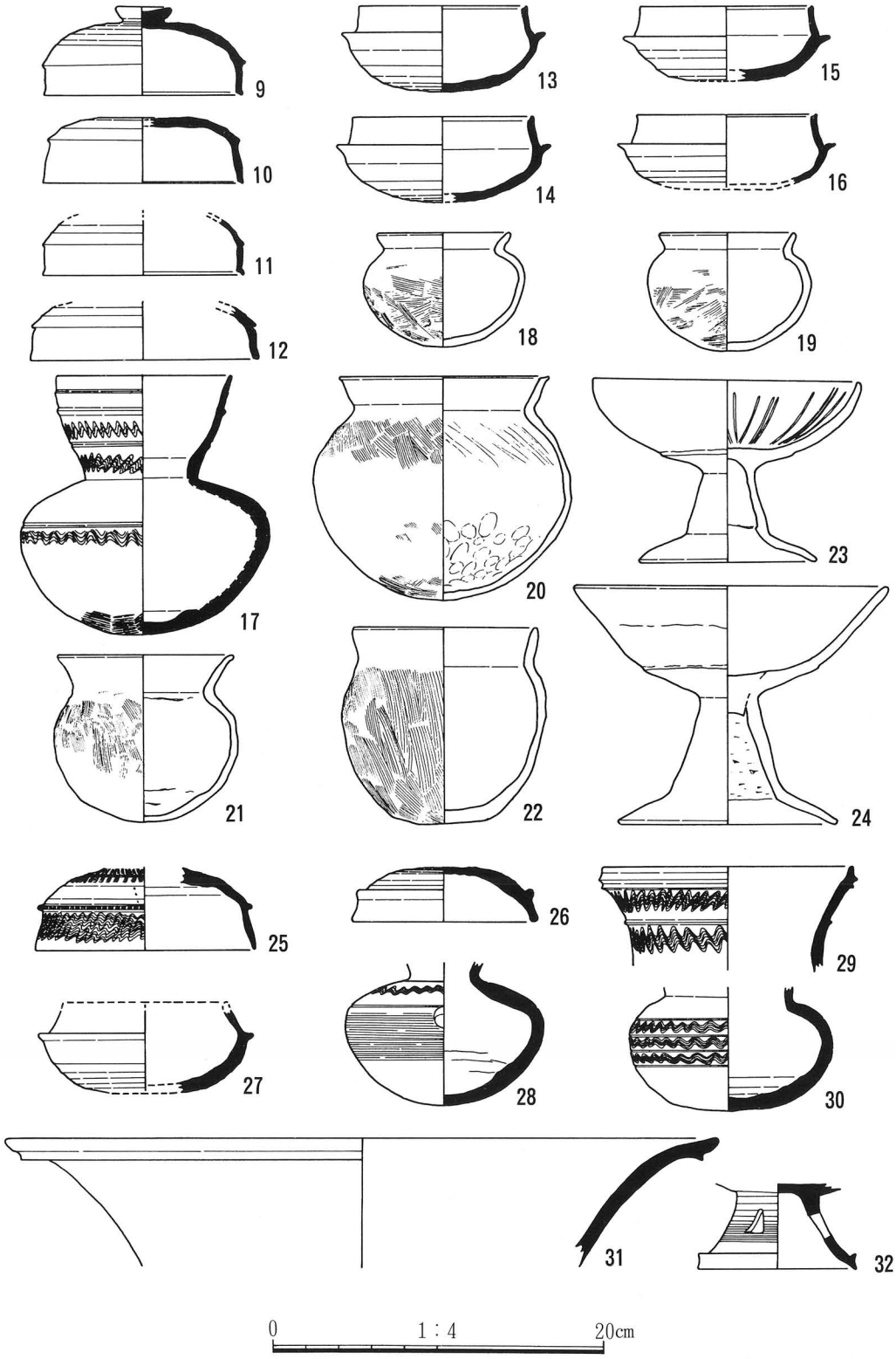
0　1：20　2m

南調査区第4遺構面土坑3

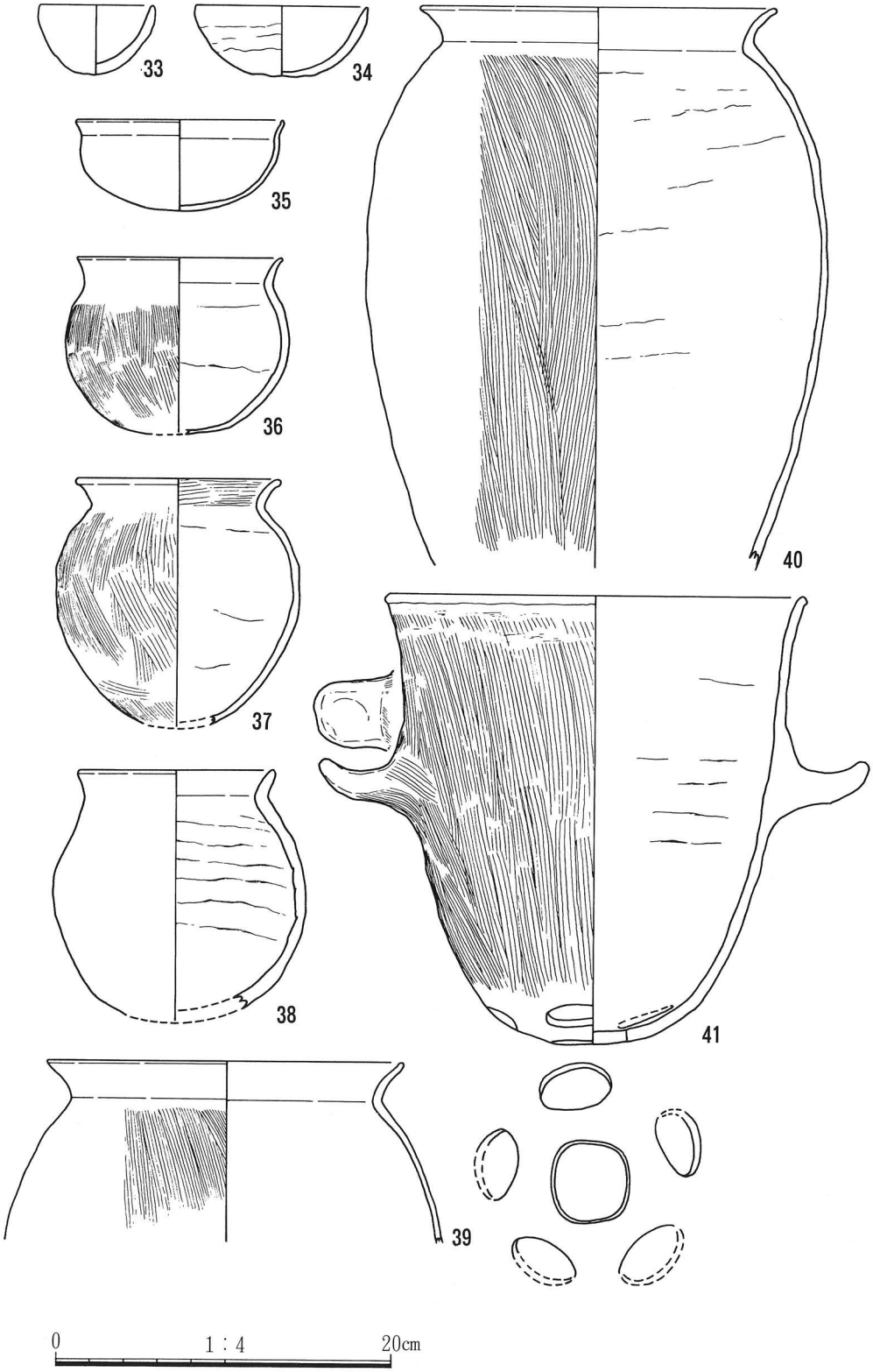
図版68　出土土器実測図(1)



図版69　出土土器実測図(2)

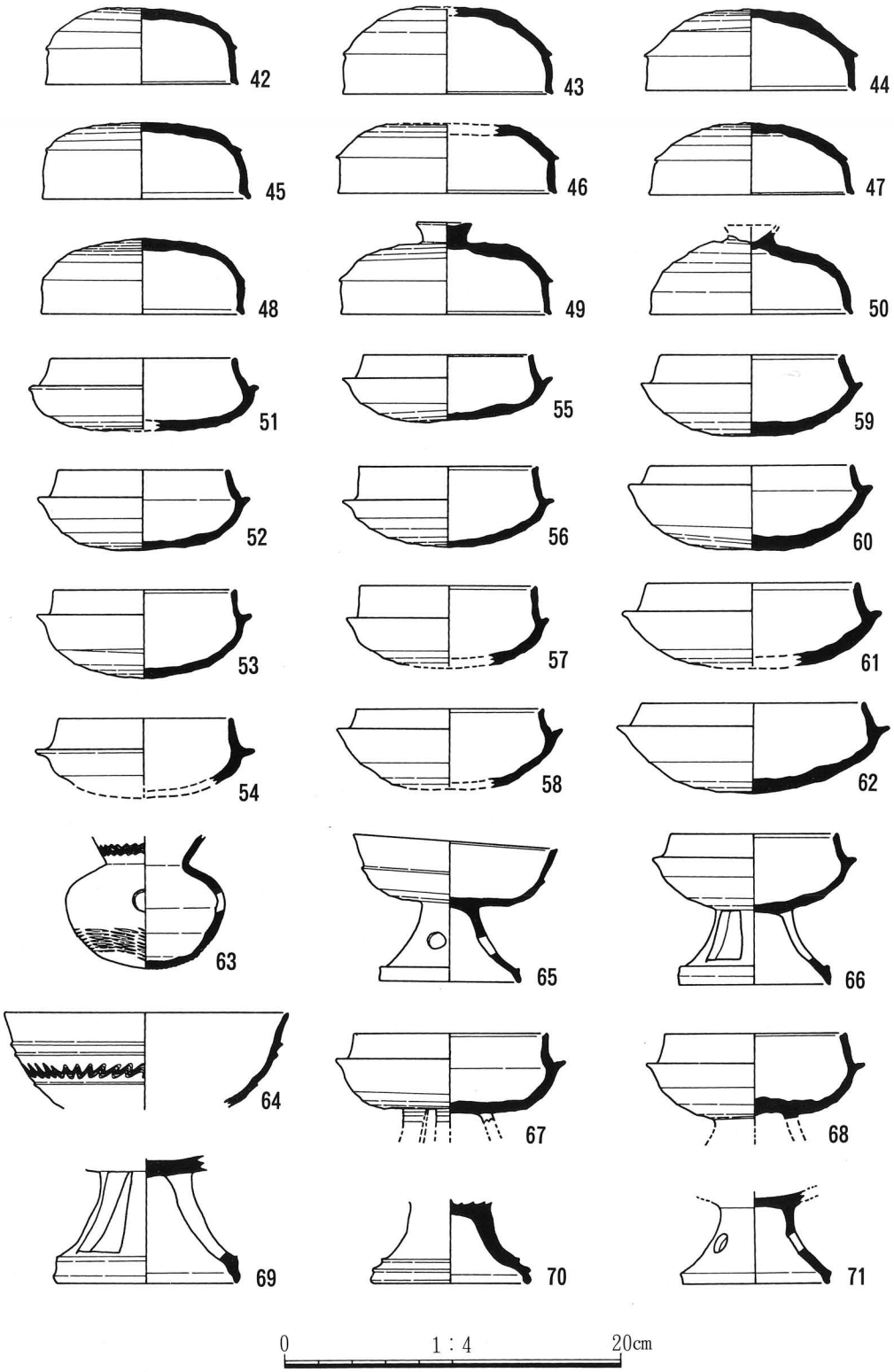


南調査区第4遺構面土坑3(9～24)、包含層ほか(25～32)

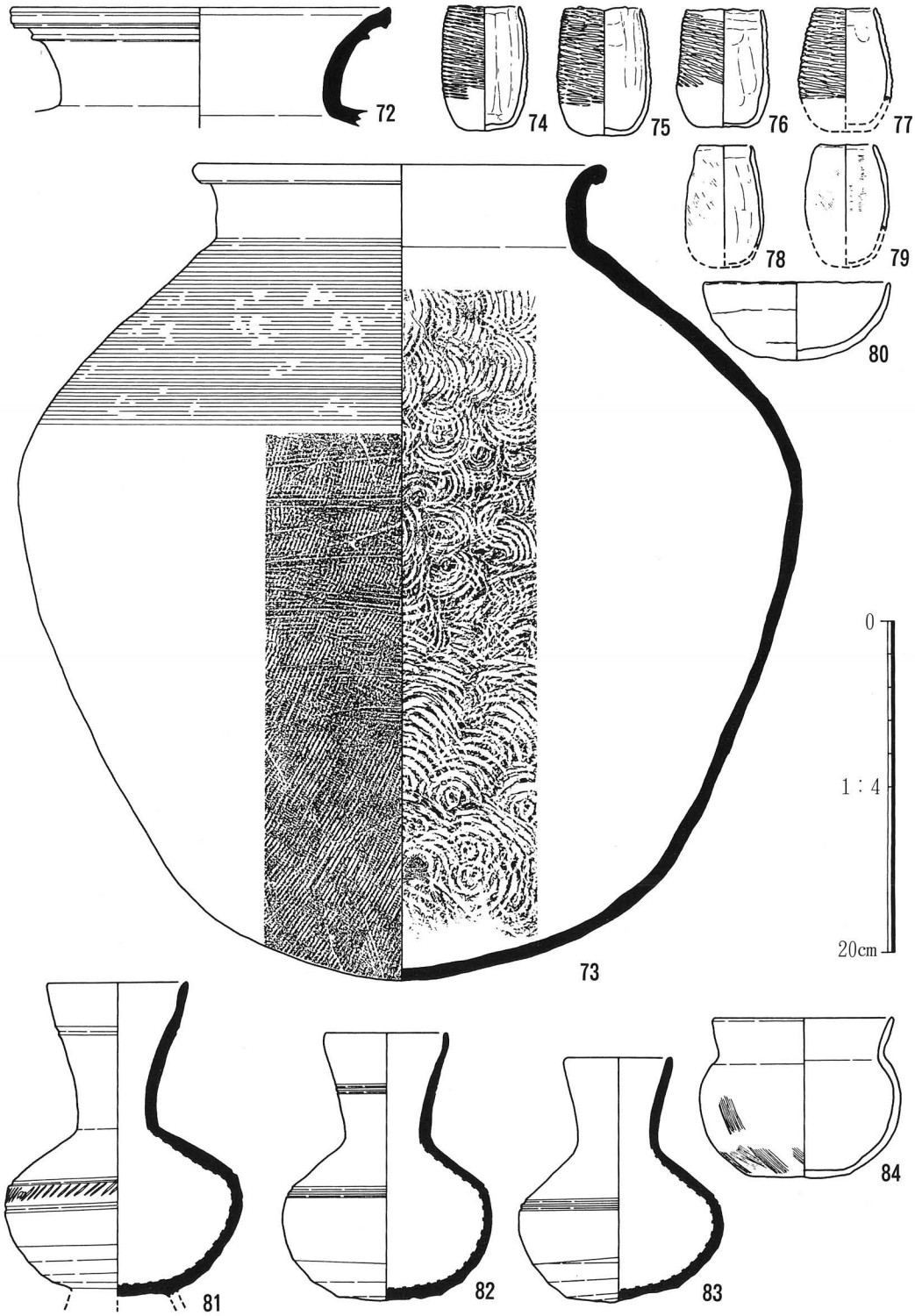


北調査区第4遺構面土坑1

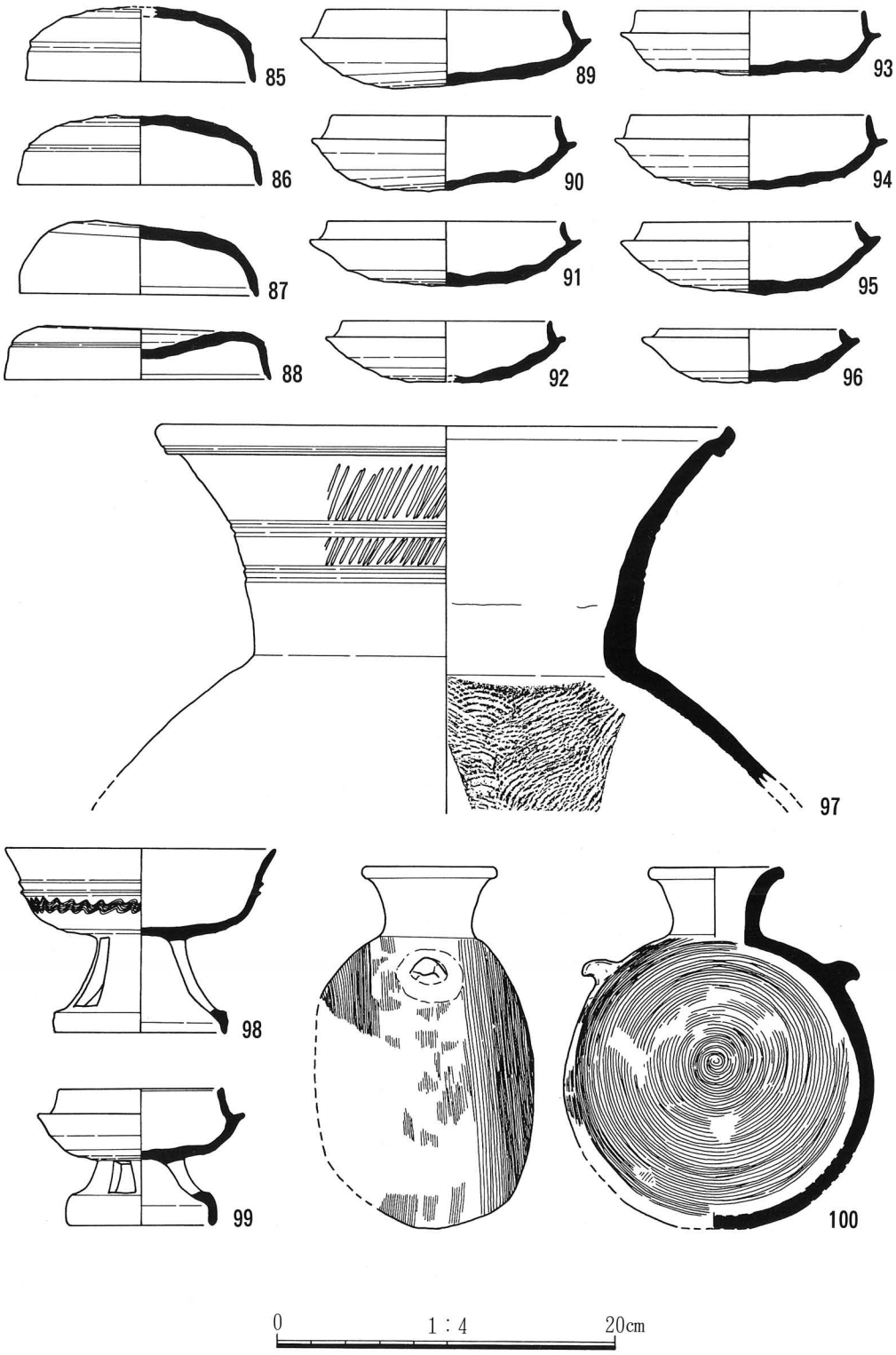
図版71　出土土器実測図(4)



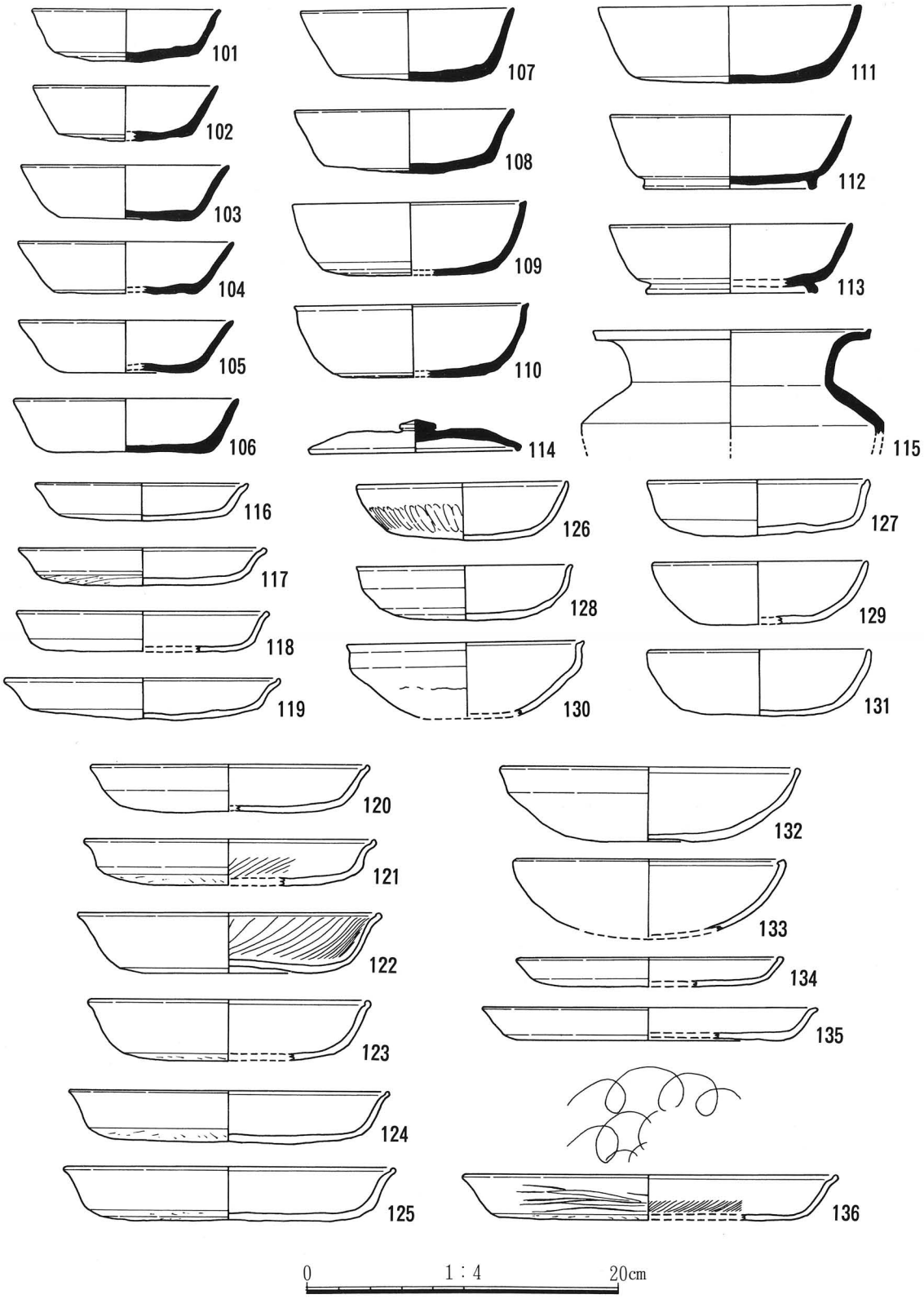
北調査区第4遺構面土坑1



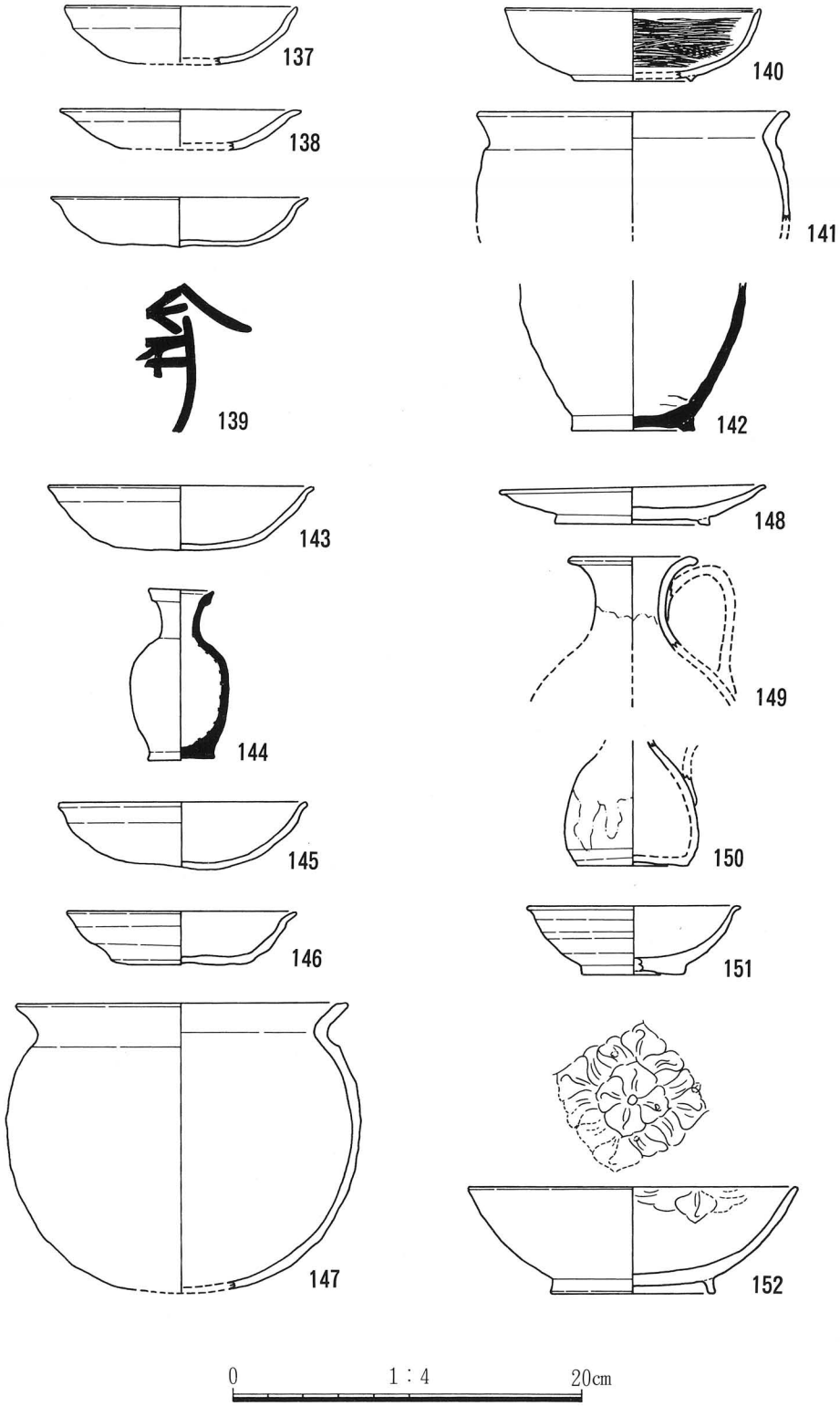
北調査区第4遺構面土坑1(72～80)、井戸1(81～84)



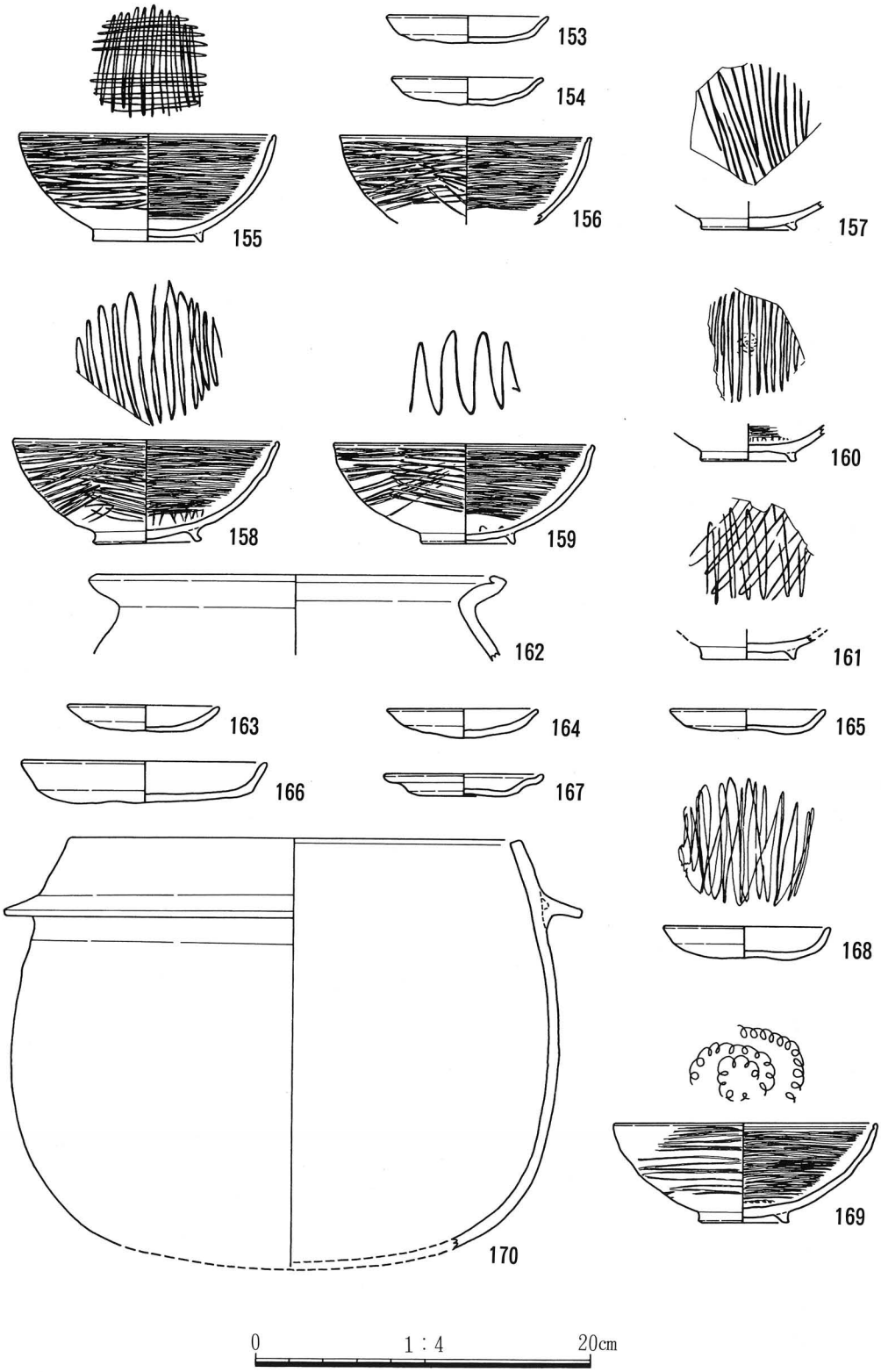
北調査区第4遺構面土坑1上面土器群(85～97)、包含層(98～100)



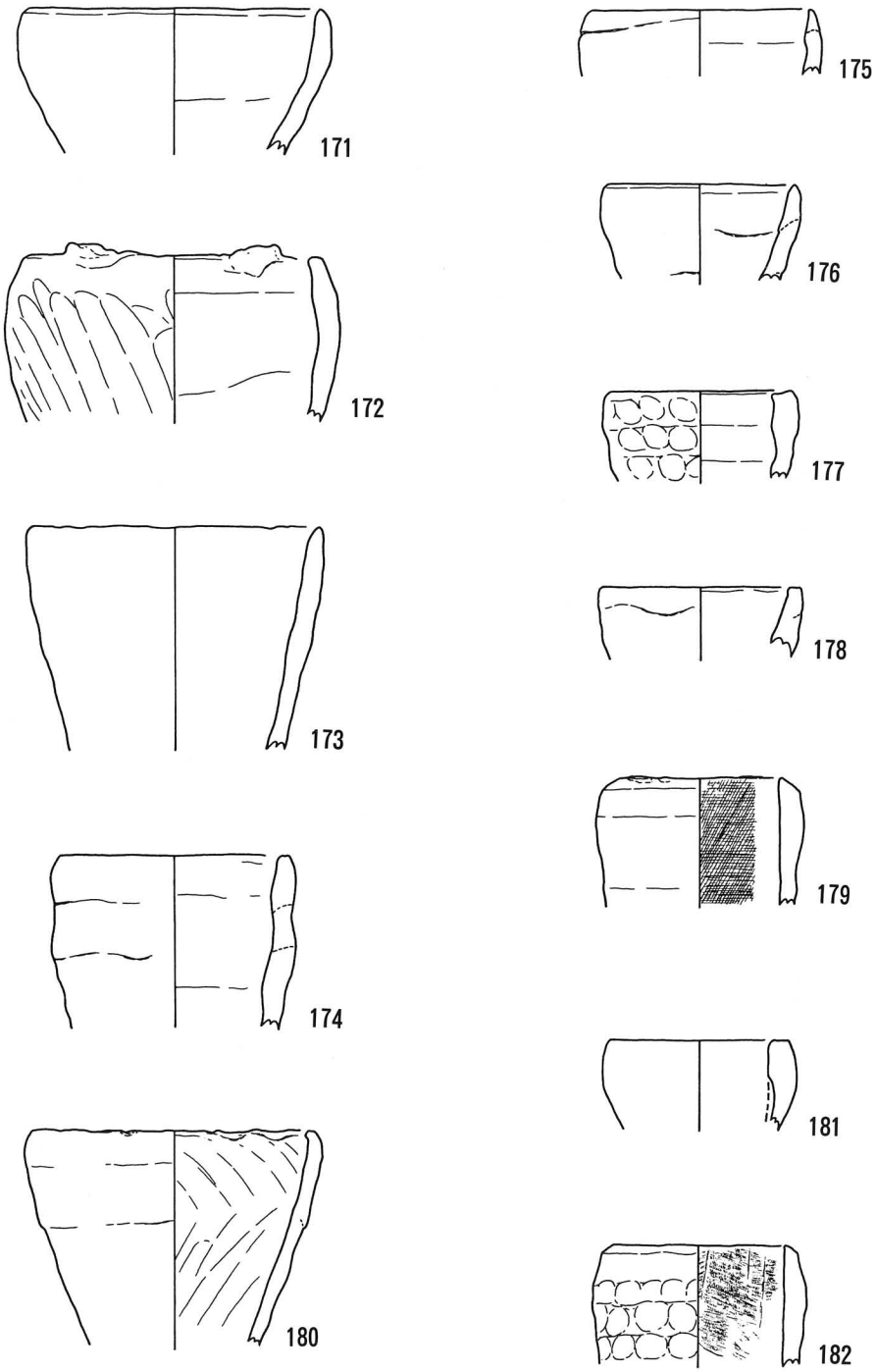
南調査区第3遺構面奈良時代自然河川肩部土器群



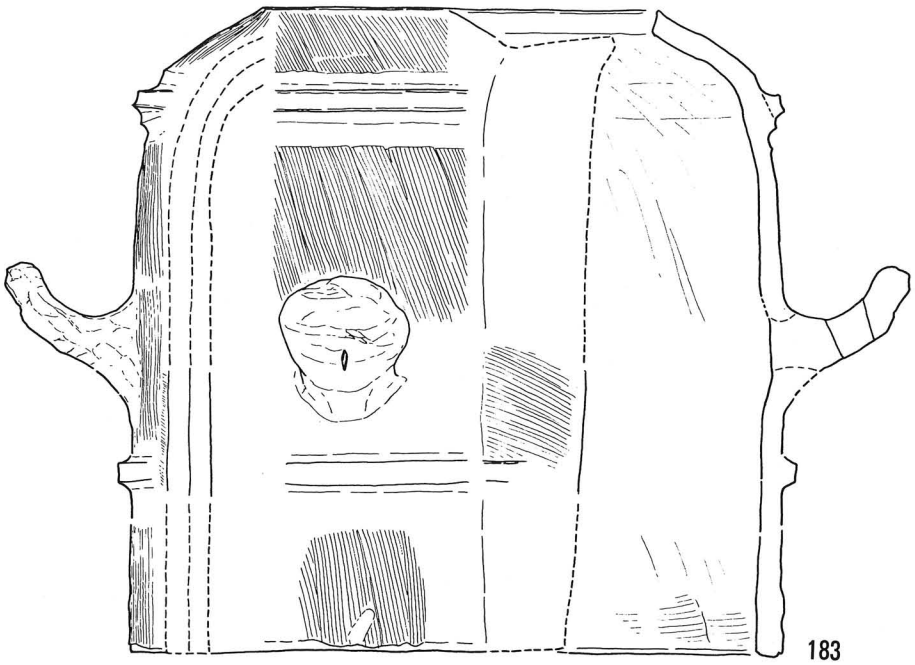
南調査区第3遺構面井戸1(137～142)、祭祀遺構(143•144)、包含層(145～152)

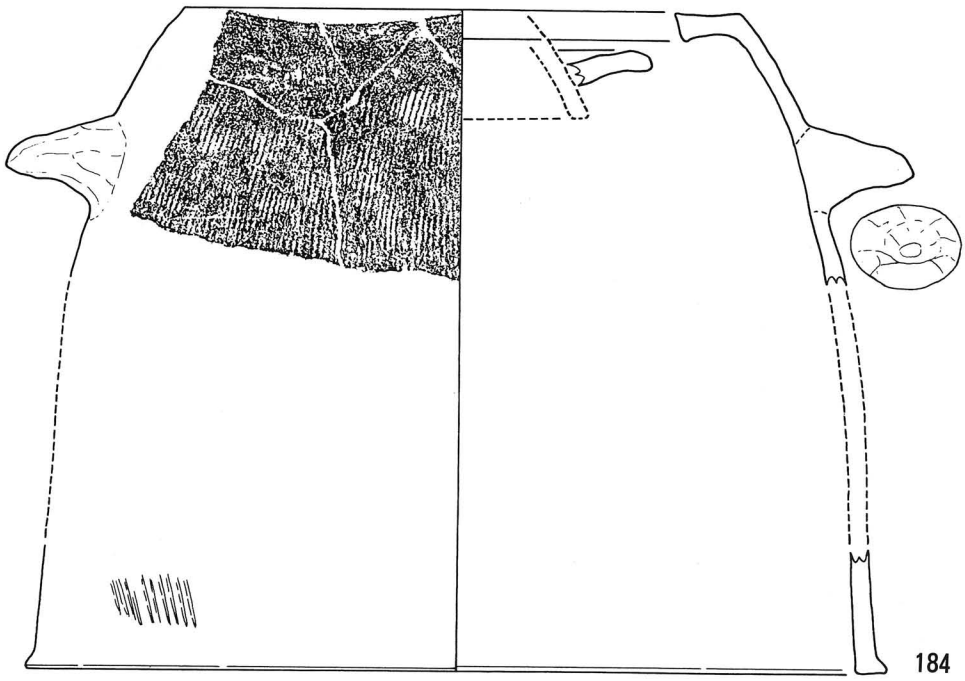


北調査区第2遺構面土坑1(153～157)、井戸2(158～162)、その他(163～170)



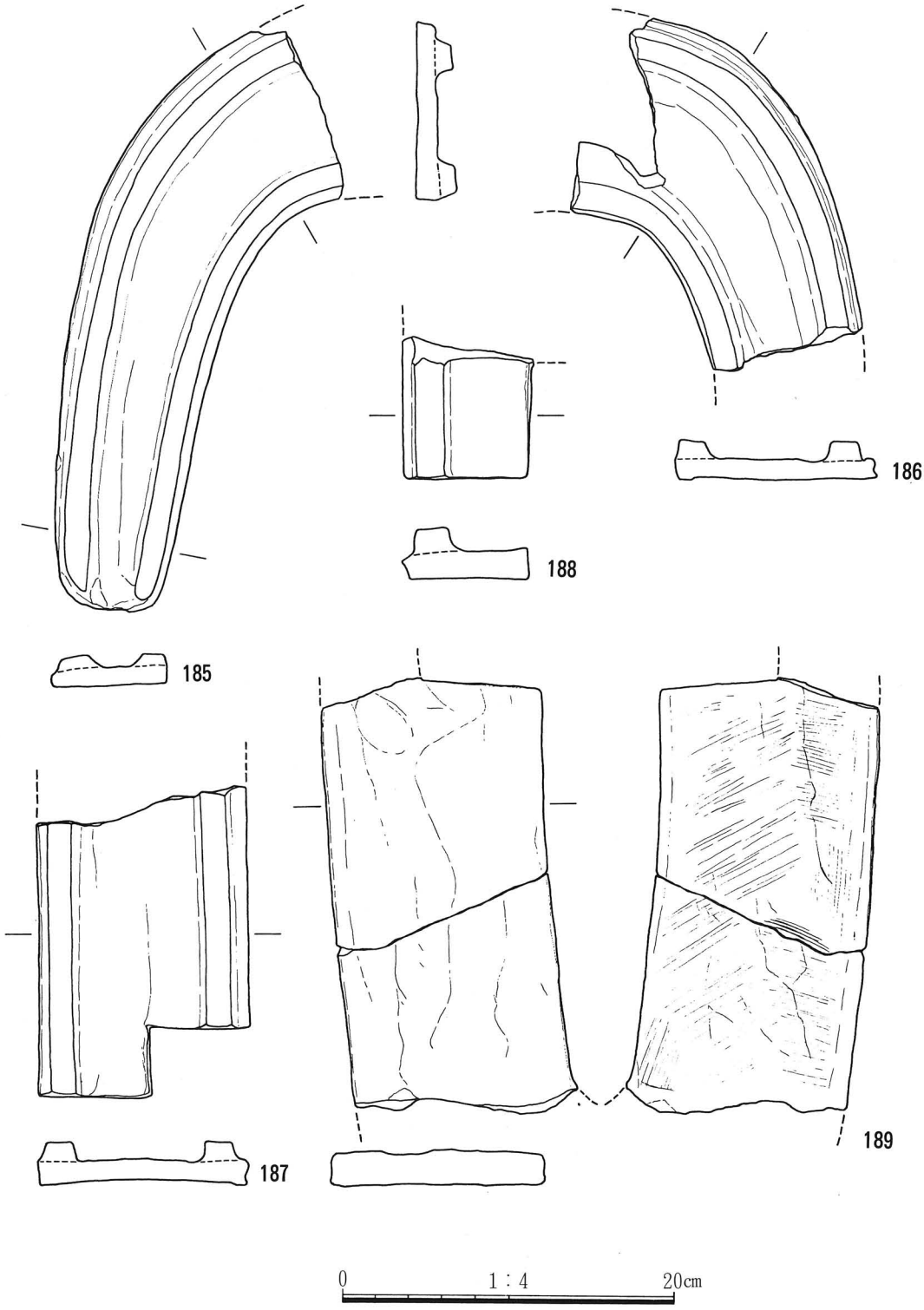
奈良時代製塩土器



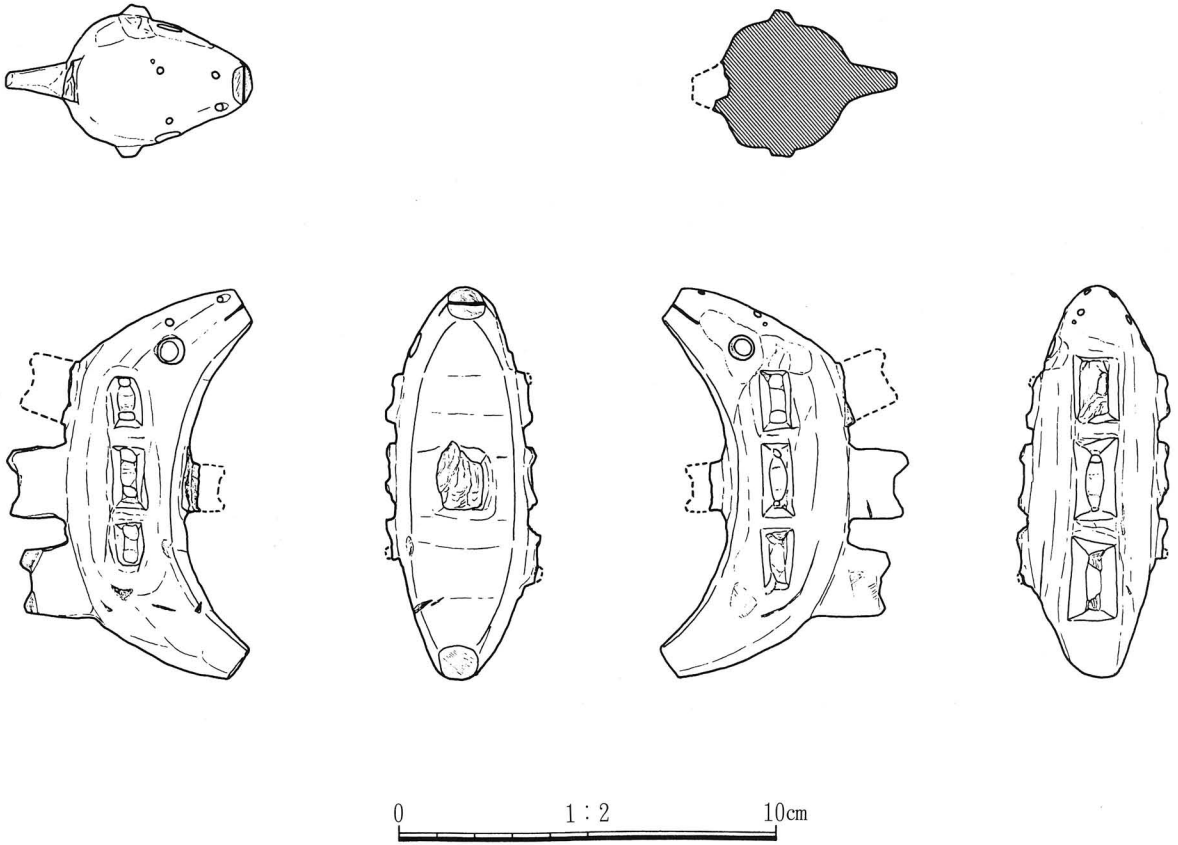


0　1：4　20cm

移動式かまど



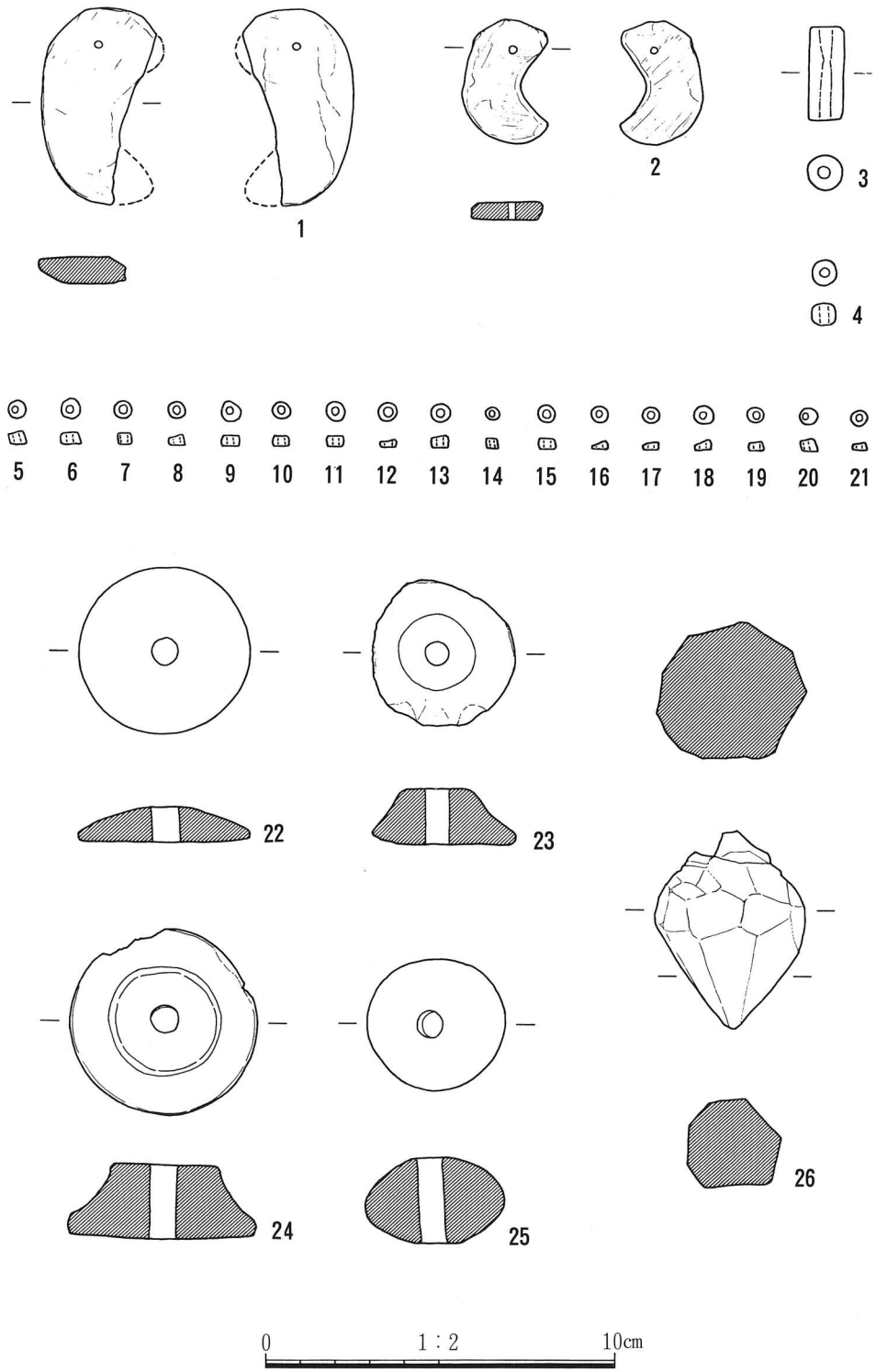
用途不明土製品



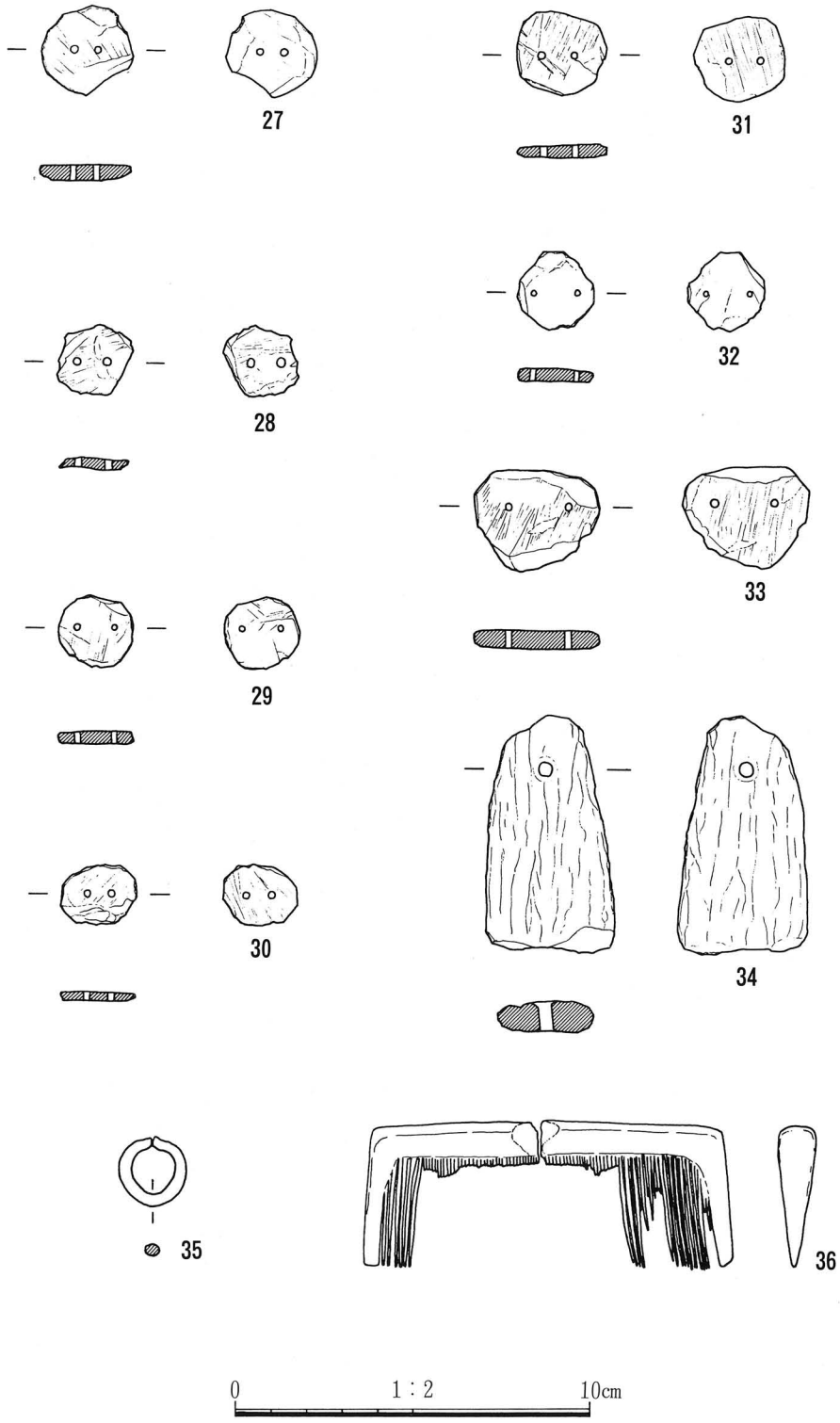
子持勾玉

図版80　出土石製品実測図(1)

図版81　出土石製品ほか実測図(2)

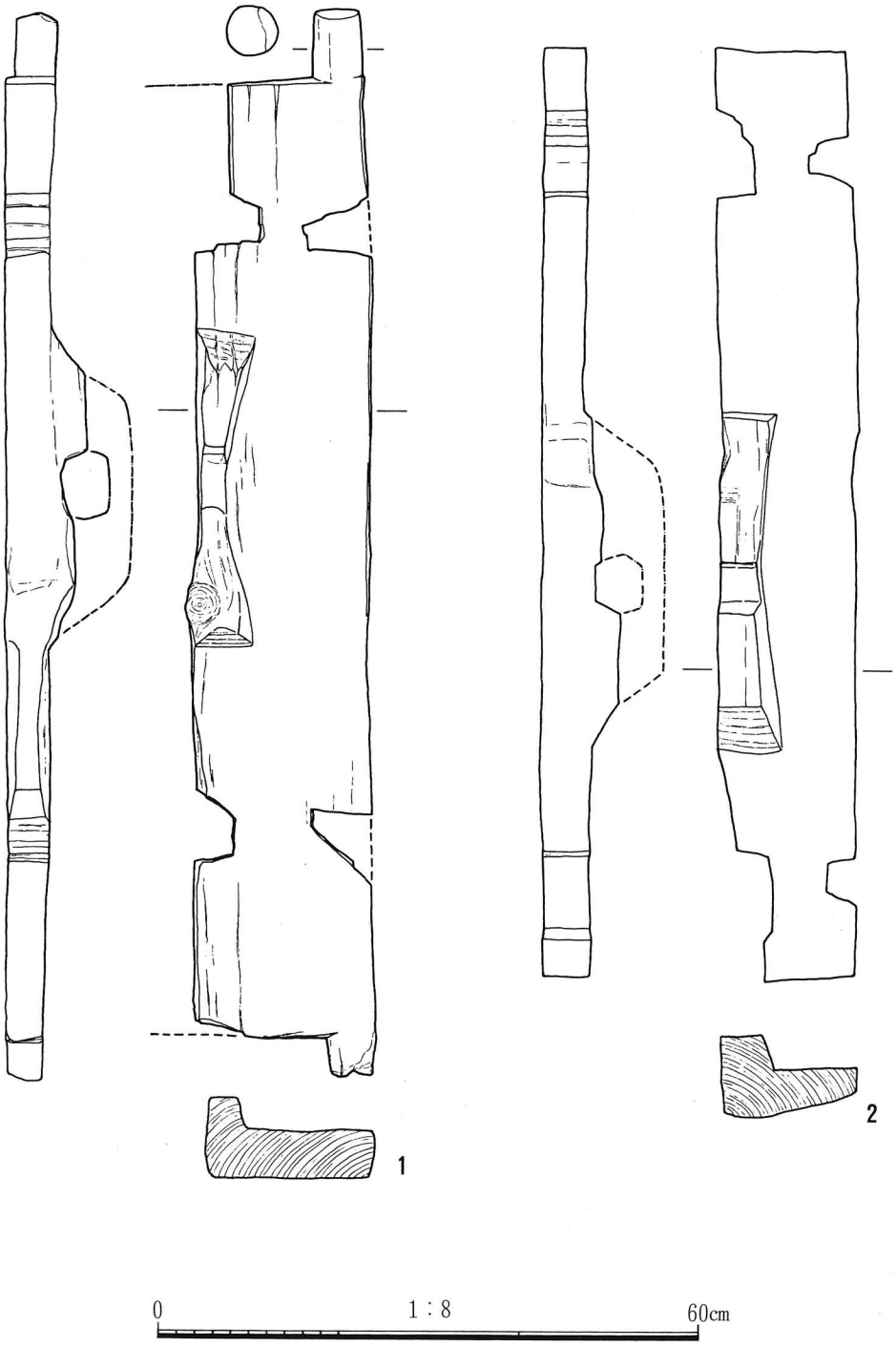


勾玉(1•2)、管玉(3)、土玉(4)、臼玉(5～21)、紡錘車(22～25)、用途不明石製品(26)



有孔円盤(27～33)、用途不明石製品(34)、金環(35)、櫛(36)

図版83　出土木製品実測図



扉材

長　保　寺　遺　跡

――㈱伊藤喜工作所開発に伴う
埋蔵文化財発掘調査概要報告書――

平成5年3月

編集
発行　寝屋川市教育委員会
大阪府寝屋川市本町1番1号

印刷　サツキ印刷株式会社